
君は私で私は君で

サクラ咲く

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君は私で私は君で

【Nコード】

N4138R

【作者名】

サクラ咲く

【あらすじ】

私はずっと——みんなと一緒にいたかった。ずっと。ずっと。

NARUTOの二次創作小説。

主人公はサクラ（成り代わり？）。原作を変える為にサクラが頑張るお話です。恋愛要素は薄め。主人公のサクラは最強ではありません。

ちなみに愛され（？）状態、捏造（オリジナル設定）、独自解釈があるので、苦手な方はご注意を。

毎週日曜日に更新予定。

サクラには特殊な術や才能はありませんが、基本をしつかりすればかなり強くなれるはず、というコンセプトでいきます（追記）。

第四十四劇の後に間劇「同じものなど存在しない」を割り込み掲載（2011年 09月 21日）

感想での「原作批判」「原作のサクラ批判」はご遠慮願います。

注意しても直らない場合は即削除させていただきます。ご了承ください。

感想を書く際のお願い

原作批判、原作サクラ（他のキャラ）の批判はご遠慮ください。

そもそもこの物語は原作がなければ存在しません。私が原作を、サクラを好きだから誕生したものです。

なり代わりにしたのは、原作サクラを壊したくなかったのと、原作サクラ自身が幸せになる方法を模索するためです。チート（ずるな）能力をつけていないのは、サクラ自身で掴み取れる幸せがあるのだということを証明するためです。

私はサクラが大好きで、原作が大好きです。嫌いなキャラもいません。

また、感想のページはどなたでも見ることができる場所でもあります。以後はまず一言注意をし、それでも直らない場合は削除させていただきます。ご了承ください。

みんなで楽しく物語を楽しむためにも、ご協力お願いします。

第零劇「始まりの産声」

どうすれば追いつけるの？

声がして、私はそちらを見た。味気ない世界の中、異彩を放つ輝きがあった。

その子はどうか泣いているようだった。なんだか見ている私まで悲しくなってくるような泣き方だった。

どうしたの？　なんで泣いているの？

だ、誰っ？

いつまで経っても泣き止みそうにない様子に、私はついつい声をかけてしまった。

勢いよく顔を上げたその子は、きよるきよると世界を見回した。しかし、私を感知できなかったのだらう。不安そうに膝を抱く腕に力を込めた。

大丈夫。私は君を傷つけたりしないから。

ほんと？

うん、ほんとだよ。だから、私に話してごらん。

ひつく、ひつくとしゃくりあげたその子は、ポツリポツリと話し始めた。

大切な人たちがいるの。

うん。

守りたい人たちがいるの。

うん。

だけどいつも守られるのは私の方で。
うん。

彼らの方がずっとずっと強くて。

うん。

一生懸命修行しても、彼らは私以上に強くなってる。
うん。

私は彼らの背中を見ているだけなの。

うん。

それが辛い。

そっか。

世界に沈黙が下りた。

私はなんで声をかけてしまったのか、はっきりと理解した。この
子は――だ。

がんばったね。

……ううん。私なんかまだまだ。

そんなことないよ。君はよくがんばった。えらいよ。
ええっと。そ、そうかな？

うん。

そうだったら嬉しいな。

うん。だからね。

どうしたの？

私は自然と微笑むのを自覚した。

私が代わってあげる。

え？ でも……いいの？

いいよ。

今度はあなたが疲れちゃうわ。

んん？ ああ。そうかもしれないね。けど、きっとその時には君が元気になっているはずだから、バトンタッチしよう。だからね、今は。

ゆっくり、お休み。

うん。ありがとう。……お休みなさい。

第零劇「始まりの産声」（後書き）

私は決してサクラが嫌いなわけではありません。むしろ大好きです。

しかし、好きすぎるが故に衝動的に書いてしまいました。やつちまった感も反省もしています。サクラが自分の手で幸せを捕まえる手段はないのか、を模索したいと思います。

では、よろしければこのサクラともどもみまもってやってくださいますしえ。

少し改定（11・03・18）。後々に影響しますが、今は忘れていてオーケー！。

第一劇「入学式」

「おばさん。配達終わりました！」

まだ早い時間なためか、彼女は抑え気味に声をかけた。店の奥から恰幅の良い女性が出てきて、にっと笑った。女性もまた抑えた声を出す。

「お疲れ様。いつもながらサクラちゃんに任せると早くて間違いもないから助かるよ……はい、今週の分ね」
「ありがとうございます」

差し出された茶色い封筒を彼女、サクラはお辞儀をしてから大事そうに受け取った。その際に桜色の髪と赤いリボンがピョコピョコ動き、女性は笑いを堪えるために握った拳を口元に当てた。堪えきれない笑いが合間からこぼれている。

「こつちこそありがとね……ほら、今日は入学式だろ？ 準備しておいで」
「はい！」

女性の様子に気づかず、最後にもう一度ペコリと頭を下げたサクラは店の外へと駆け出していった。外はまだ日が昇り始めた頃合で暗かったが、彼女の顔は反対に明るい。

「今日はいいい日になりそう！」

つい大きな声を出してしまったサクラに、壁の上で寝ていたネコ

が迷惑そうな顔をした。サクラは「あ。ごめんね」と可愛らしく舌を出して猫に謝った。猫はしょうがないと言わんばかりに長い息を吐き出して、また目をつむった。猫の様子にサクラは苦笑を浮かべ、しかしすぐにまた楽しそうにスキップしつつ家に向かった。

アカデミー
待ちに待った忍者学校の入学式の準備のために。

* * *

ここは忍者の存在が当たり前の世界だ。

そして、浮かれている先ほどの少女は春野サクラという。髪の色は名前が主張するように、色鮮やかな桜色で、大きな瞳は綺麗な翡翠色の中々可愛らしい少女だ。年は八つになる。

サクラが生まれ育ったのは、火の国にある忍びの隠れ里（隠れ里とはいっても、別段隠しているわけではない）木ノ葉隠れで、彼女は忍びになるために今まで生きてきた。木の葉で忍者になるためにはこのアカデミー卒業するしかないのだから、喜ぶのも無理はないかもしれない。

「サクラーこっちこっち！」

「お、おはよう。サクラちゃん」

「イノ、ヒナタ！ おはよう」

アカデミーへの途中で、サクラは二人の少女と合流した。金髪ショートヘアで気の強そうな少女は山中イノ。青紫色のおかつぱ頭の大人しそうな少女は日向ヒナタ^{ひゅうが}。三人はお互いを親友と言い合えるほどの仲だった。

サクラの満面の笑みを見たイノは呆れた顔をした。

「予想はしてたけど、ほんとにあんた嬉しそうね」

「えへへ」

「サクラちゃんはずっと楽しみにしてたから」

楽しそうに盛り上がっている彼女たちはそれぞれが違った意味での美少女で、なんとも華があった。

そんな華を離れたところから見つめている一人の少年がいた。

ツンツン尖った金髪の少年の名は、うずまきナルトという。サクラたちと同じ年頃だろう。オレンジ色を基調とした上下、という目立つ格好の彼はアカデミーの正門付近に立っていた。

親と子供たちでわいわいと賑わっている中、なぜか彼の周りには不自然に人がいない。ぽっかりと空いたそこだけ別空間のようだった。

「ちょっとあの子……」

「まったく。なんであんな奴がアカデミーにいるなんて」

「まあ、あんなところに立って、邪魔よねえ」

ひそひそと子供をつれた親たちが、ナルトを見ながら会話する。彼を見つめる大人の目は、まるで道端に落ちているゴミを見るような、あまりにも冷たいものだった。

「……………」

ナルトは、小さく口を開けた。

しかし、結局何もいわずにその場を立ち去った。

期待に胸を膨らませるもの、不安そうにするもの、一人で式を迎えるもの…… 各々の思いを胸に、少年少女たちの忍者生活は、幕を

開
け
た
。

第一劇「入学式」（後書き）

いきなり原作と違ってすみません。女の子三人はもっと仲良いの
がいいなあという願望の現われです。

中身が違ったため、人物の相関図もかなり違っております。

あと原作が手元に無いため、原作と違う設定も出てくるかと思
います。ゆるい感じでみていただけると幸いです。

アカデミーが何才からか分からなかったのでこの小説内では七歳
（八歳？）からの五年間としています。

修正（11・03・28）

修正。改行を入れました（11・04・05）

修正（11・04・16）

修正（11・06・11）

第二劇「また明日の約束」

アカデミーの授業はほとんど男女合同で行う。

しかし科目によつては男と女に分かれることもあった。今、サクラが受けている授業も女の忍び——くのいちだけで行う『花をいける』という一見忍者に関係ないものだった。

忍者、と一口に言つてもその役割というのは実に幅広い。

具体例を挙げるならば、盗賊退治や暗殺、潜入に情報収集というものから、子供のお守りや草抜きにおつかい、畑の収穫など「こんなの忍びに任せる仕事か」と疑うようなものである。なんでも屋、というのが一番しつくり来る。

今彼女たちが行っているのは主に潜入（情報収集）や、良家の息女の身代わりを行う際などに必要となるスキルである。

潜入任務は基本女性の方が警戒されにくいいため、くのいちに潜入任務が回ってくることは多く、どこにでも違和感なく潜入するため様々な知識は必要不可欠となる。

身代わりに関しても、教養ある女性の身代わりをするにはやはり教養は必要だ。そうでなければボロが出てしまう。

「まずは好きな花を摘んできなさい。花を数本選んだら先生のことを持つてくるように。道具を渡します」

先生の言葉に、女の子たちは仲の良いグループに分かれて花を摘みに行った。きゃっきゃつと騒ぎながら花を積んでいる姿からは、とても忍びの授業中とは思えず、微笑ましい。

サクラもまた、イノやヒナタと花を摘もうとしていた。

イノは家が花屋なだけあってすいすいと花を選んでいる。彩りはさすが花屋の娘と感心するほど綺麗で、時折考えるそぶりを見せて

いるので、花言葉も考えて摘んでいるのかもしれない。

ヒナタは迷いつつも、気に入った花を手にとっている。ヒナタの日向家は由緒正しい家系で、彼女は跡取りだ。そのせいだろうか。彼女の手にある落ち着いた花たちには、どこか気品があるように見えた。

一方のサクラは、というと一本だけ……淡い紫色のその花をじっと見て、何事か考えている。しばらくしてからため息をつき、周りをキョロキョロと見て、また手の中にある花を見て、を何度も繰り返す。眉が情けなく垂れ下がっていることから、何を摘んだから良いのか分かっていないのかもしれない。

「サクラ？ 何してって、あんたフジバカマしか摘んでないじゃない」

大体摘み終わったのだろう。手に鮮やかな花を抱えたイノが呆れた声を上げた。サクラは手に持った、淡い紫色の花を見下ろした。へえっと声を出した。

「フジバカマっていうんだ。これ」

「あんた、それすら知らなかったの？ いつもあんなに難しい本読んでるくせに？」

「う」

「……サクラちゃん」

「ヒナタ、言いたいことは分かるけどその目はヤメて」

呆れたような顔と声と仕草に、はつきり「呆れた」と言われたサクラは、ぐうの音も出ない。どうやら花には詳しくないらしい。普段あまり自己主張しないヒナタからも、なんともいえない目線をもらってしまったサクラは、肩をがっくりと落とした。

イノは腰に手を当ててサクラに言い聞かせる。その姿はしっかり

もののお姉さんそのもの。

「あのねえサクラ。私たちがなるのは忍者は忍者でもくのいちなんだから。こういう知識も必要なのよ。分かった？」

「はい」

「よろしい。じゃあ、今回は特別にこのアタシがコツを教えてあげるから、感謝しなさいよ」

「うん！　ありがとうイノ！」

ぱあつと顔を輝かせて真っ直ぐ礼を言うサクラに、イノは声を詰まらせた。頬が少し赤い。ヒナタがそんなイノを見てくすくすと笑い、イノはヒナタを軽く睨んだ。サクラは不思議そうに二人のやり取りを見ていた。

咳払いをしたイノは、改めてマジメな顔を作った。

「うつ……ご、ごほん！　じゃあまずはメインになる花を決めて……こういう風に」

「うん」

「ええっそ、そうだったんだ。やっぱりイノちゃんはすごいなあ」

その後はヒナタもサクラと一緒にイノの生花講座を聞き、そうしてサクラはなんとか初めてのくのいち授業を乗り越えたのだった。

* * *

「絶対あの子は変よ」

それは、イノが初めてサクラと会った時から言い続けている言葉

だった。

サクラはイノと同じ年だったがいつも遊ぶ子供たちを遠くから眺めるだけで、決して自分から混じろうとしなかった。誘う声があれば笑顔で応えて遊びに加わるものの、サクラの存在は浮いていた。なんといつても子供たちを見つめる翡翠の瞳があまりにも穏やかで優しすぎた。まるで親が子を見るかのような目に、子供たちの誰もが照れたのだ。

いつしかサクラを誘う子はいなくなっていた。

だがそれは決して嫌っているだというわけではない。そもそもサクラは遊びよりも勉強や忍びになるために修行に時間を費やしており、子供たちと会うことが少なかったのだ。

当然、そんなサクラに友達と呼べるような相手がいるわけもなかった。

「ちょっとあんた」

イノに話しかけられたサクラは話しかけられたことにびっくりしたようで、翡翠色の大きな目をさらに大きくしてイノを見た。サクラ色の前髪は長いため、イノにその瞳は見えなかったが。

「えっ？ わ、私？」

「あんた以外に誰がいるのよ」

「ご、ごめんなさい」

うつむいて謝るサクラにイノは拳を突き出した。もちろん殴ったわけではない。握り締めた赤い布紐を差し出したのだ。サクラはそれをじつと見て、またイノを見て、顔を横に傾けた。

「リボン？」

「そうよ。あんた折角可愛い顔してるんだから、こういうのつけて

少しはおしゃれしなさい」

「かわいっ？ い、え、っと」

赤面したり慌てたりと忙しいサクラの手にリボンが無理やり握らせ、イノはじゃあねと走り去った。

なんでそんなことをしたのか、本人も良く分かっていない。走りながらしきりと「なんとなくよ、なんとなく。うん。そんな気分だっただけ」と呟いた。

次の日、町を歩いていた桜色の頭には赤いリボンがちょこんと存在した。前髪が上げられ、さらされた少し広いおでこと大きな瞳はなんとも可愛らしい。初めてまともに見たサクラの素顔に、

「なんか騙された気分がする」

呆然と呟いたイノの青い目と、翡翠の目がかち合った。翡翠の瞳が嬉しげに細められ、ふつくらした唇が動く。

「ありがとう」

微笑んだサクラは、やはりイノと同じ年の女の子には見えなかった。ただ、全身で嬉しいのだと表しているサクラに居心地の悪さを感じ、明後日の方向を向いた。

よほど気に入ったのか。サクラは毎日のように赤いリボンを身に着けていた。あの日以来ほとんどサクラと会話していなかったイノがまた、彼女の前に立つ。手には青いリボンを持っていた。

「あんだね。毎日毎日同じのばっかつけるんじゃないの。ったくもう」

反論は聞かずにリボンを押し付けたイノは、走って友達の待つ場所へと駆けた。相当慌てていたのか。運動神経のよい彼女らしくな

く、足をもつれさせていた。イノの頬は、やや赤い。

「何してんだろ、あたし」

「どうしたのイノちゃん。顔赤いよ、風邪？」

「ちよつと走ったからじゃない？」

友達に問われたイノは、なんでもないような顔をして少し手で顔を仰いだ。

それからまた数日が経った。青いリボンをつけたサクラが緊張した面持ちでイノの前にいた。まるで今から告白でもされるかのようなピンとした空気に、イノの顔つきは自然と硬くなった。

「い、いのちゃん！ こ、これ」

サクラが両手で差し出したのは、手のひらに収まりそうな大きさの四角い何かだった。中身は白い包装紙に包まれていて分からない。震える手を見ながらイノは断る理由もないので「ありがとう」と受け取った。声がガラにもなくかすれてしまい、彼女は顔を赤くした。

「ありがとう！」

イノの手に収まった包みを見たサクラは、それはもう嬉しいと満面の笑みを浮かべた。まるでオウム返しのような言葉に、イノは奇妙な顔をした。呆れているような、嬉しいような、怒っているような。

「あんたが礼を言っただけだよ」

「だって。だって本当に嬉しかったから」

怒った口調のイノに対し、サクラはどこまでも嬉しそうな笑顔で貫いた。それは、いつもの大人びたものではなく、年相応な笑顔であった。

「サクラー、そろそろ帰るわよ」

少し離れた場所からサクラと同じ髪色、似た顔立ちの女性が手を振っていた。彼女の母親なのだろう。彼女は母親に「今行くー」と返事をして、イノに言った。あまりにも自然と言った。

「じゃあイノちゃん。また明日！」

「ああ、うん。また明日」

だから自然とイノはそう返していた。

イノがそのことに気づいたのは、サクラと彼女の母親が仲良く夕日の中を歩いているのを見送って、しばらくのこと。

「また、明日って」

腕を組んで悩んでから、イノは「やられた」と小さく呟いた。

* * *

「サクラって詐欺師の才能あるよね」

「うわ、イノひどいっ」

しみじみと呟くイノと、怒るサクラの図が見れるようになるのは、もう少し未来の話。

第二劇「また明日の約束」（後書き）

授業について。

くのいちクラスがあるのは確かですが、同時に全員で授業受けている気もしたので、この小説内では時折男女別の授業があることにしました。

任務について。

女性や子供が警戒されにくいのは当然のこと。潜入するのに男でも変化すればいい、というものではないだろうな、という考えからこうなりました。術の場合はまずチャクラを使う。消費は少ないでしょうが、常に変化しっぱなしというのはつらそう（集中力もあるし）。&明らかに無教養だと変化しても行動でばれてしまう。

修正（11・03・28）

修正。改行を入れました（11・04・05）

修正（11・04・16）

修正（11・06・11）

第三劇「女の子失格？」

入学式から早1週間が経過した。

「このままだと、無理だ」

サクラは焦りを感じていた。彼女が思っていた以上にアカデミーの授業内容は生ぬるかった。サクラは忍者を目指しているが、そこはただの通過点に過ぎない。目的達成のために必要な強さには、このままだと到底たどり着けそうになかった。

ならば自分で更に修行を課すしかない。今までもサクラは自己流の鍛錬を積んできたが、果たしてやり方があっているのか、成果が出ているのか。自分では判断できないため不安は尽きない。

先生に自己鍛錬の方法を教えてもらおうとサクラが聞いても、全員が「遊ぶのも修行だ」と教えてくれない。他に教えてもらえる人はいない。自分でどうにかするしかないのだ。

「えつと足にチャクラを集中……こうかな？」

なので今サクラは、図書館で探した修行法を試していた。

チャクラとは身体エネルギーと精神エネルギーのことをいう。忍術を使う際はこれらを用途に合わせて練り上げる。最初はチャクラという存在を感知するのも大変だったが、練ることはできるようになった。

身体エネルギーは『体を構成する細胞の1つ1つから取り出したエネルギー』のことで、生まれ持った量は各々で違っている。成長とともに増えるが、年を取ると減っていく。

対して精神エネルギーは『修行や経験から得られるエネルギー』を意味し、修行次第で増えていく。

これら、チャクラの量をスタミナという。割合としては身体エネルギーの方が多し。スタミナがあればあるほどたくさんの術を使うことができ、戦闘を有利に運びやすい。逆にスタミナが少ないことはそれだけで不利となるが、コントロール（扱い方）次第では不利を覆すことも十分可能となる。

行おうとしているのは、このチャクラをコントロールするための基礎的な鍛錬法であった。

体内にあるチャクラを足の裏に集中させ、一定のチャクラを維持したまま『手を使わずに』木を登る。実行できるかはさておき、文にすると至って簡潔だ。

半信半疑ながらサクラが右足を木の幹にかけると、幹と足が引っぱり合うようにくっついた。

「なるほどねえ。チャクラってこういうこともできるんだ。便利」

しばらく感触を確かめるように何度か足を動かし、放出するチャクラ量を調節していく。どうも多すぎると木から足が弾かれるようだ。

「うん。よし」

感覚を掴んだサクラは、恐る恐る左足を上げる——地面と木の幹は当たり前だがほぼ垂直で、地面につけている足まで上げてしまつては、体は重力に従って落ちるしかない。

「え、うそっ？」

しかしサクラの体は、浮いていた。

「やっ！」

喜ばうとしたのもつかの間、集中が乱れたらしく足が滑ってサクラは落下した。……まだ1歩目だったのが幸いだった。ぶつけた腰が痛いものの、特に怪我はない。むくつと起き上がって腰をさすった。

「いたたた」

チャクラの量は少なければ吸着力を生まず、体重を支えきれなくなる。が、強すぎれば弾かれる。第一、スタミナの無駄遣いにしかない。サクラは体力にはそこそこ自信があるものの、チャクラのスタミナに関してはない。

なので、自身の体重を維持できるぎりぎりのチャクラ量を常に足の裏に送り続けなければならぬのだが、どうも必要なチャクラはごくごくわずかのようで、調整するだけで難しい。そもそも足裏に集めるのもかなり集中しなければならない。

「道のりは長いなあ」

木の天辺を見上げたサクラは、言葉通り、長いため息をついた。

* * *

日向^{ひゅうが}とは、木の葉の隠れ里で最強と謳^{うた}われる優秀な忍びの一族だ。ヒナタはそんな日向宗家（本家）の嫡子（跡取り）として生を受けた。

そんな彼女は物心ついた時から修行に明け暮れていた。宗家を継ぐものとして強くなければいけなかったのだ。当主である彼女の父

も厳しく指導した。

だがヒナタには、残念ながら才能がなかった。

父親は彼女へため息をたくさん吐くようになった。失望の表情を浮かべる父親に、ヒナタはそれでも認めてもらおうと必死に修行した。

期待通りの結果を出すことは、いつだってできなかった。

「ひつくえぐ」

秘密の修行場で今日もまたヒナタは1人、膝を抱えて泣いていた。修行に明け暮れていたことと、何より名門一族であるがために友達と呼べる者はいなかった。引つ込み思案な性格も関係しているのだろうが、涙する時、ヒナタはいつも1人だった。

この日までは。

「どうしたの？」

間近でした声に、驚きすぎてヒナタは一瞬泣き止んだ。近づかれたことにまったく気づいていなかった。ヒナタは勢いよく顔を上げた。

白いハンカチを差し出して微笑んでいる少女がいた。ヒナタと年は変わらないだろうに、桜色の髪と翡翠色の瞳が放つ穏やかな光は、優しい母親と酷似していた。ヒナタの中で何かがはじけた。

その子が誰かも分からないまま、目の前にある細い腰に抱きついてヒナタは泣いた。少女はバランスを崩して後ろに倒れこんだが、文句は何一つ言わなかった。ヒナタの背中を少女は優しく叩く。

「うええええっ ひつつぐっ」

「大丈夫。大丈夫」

春野サクラと名乗った彼女はヒナタの話を真剣に聞いた。日向の名をオドオドと告げても、サクラの態度はまったく変わらない。どころか、

「じゃあさ、一緒に修行しない？」

話を聞き終わったサクラの第一声は、それだった。ヒナタはポカッと翡翠の瞳を見た。サクラは恥ずかしそうに笑って舌を出す。

「実はね。私も強くなりたくて修行しているんだけど全然で、落ち込んでたの」

「サクラちゃんも？」

「そ。だから一緒にやらない？ 絶対1人より2人でやる方がいいと思うんだ。あ！ で、でも無理にっわけじゃなくて……いきなりこんな話してごめ」

「お」

慌てて胸の前で両手を振る彼女に、ヒナタは精一杯の勇気を出した。

「お願いします！」

* * *

「あんたたちの出会って変よ。絶対」

「え、そ、そうなの、かな？」

「別にそんなことないと思うけど」

「いいえ。絶対変よ。おしやれするより修行だなんて女の子失格！」

「ええええっ そうなんだ」

「ちよっとイノ。ヒナタが信じちゃうってば」

彼女たちがそんな話をするのもまた、もう少し未来の話。

第三劇「女の子失格？」（後書き）

チャクラに関してはNARUTOウィキを参考に自己解釈的なものも入ってます。精神チャクラよりも身体チャクラの比率が大きそうなんです、どうなのでしょう。

とりあえずしばらくはこんな感じ（サクラ視点↓他キャラ視点）に進みます。

修正（11・03・28）

修正。改行を入れました（11・04・05）

修正（11・04・16）

修正（11・06・12）

第四劇「頬の痛みが熱に変わった」

サクラの朝は早い。

日が登るよりも早く起き、顔を洗う。さっぱり目が覚めたところで着替えて牛乳を1杯飲み、カバンを掴んで家を出る。まだ外は日が昇っておらず暗いが、サクラは慣れた様子で静かな街を駆けていった。

「おはようございます」

向かったのは『木の葉新聞』と書かれた看板を掲げる店だ。半分だけ開いているシャッターを慣れた様子でぐり、挨拶をする。声は朝早いため、押さえ気味だ。中にいた中年の男がサクラを見てニコリと笑った。男もまた抑えた声で言う。

「ああ、サクラちゃん。おはよう。そこに置いてある分頼んでいいかい？」

「分かりました」

男が指差した場所には新聞の束があった。返事を返したサクラは重いだろっソレを抱えて、愛用の白いカバンに入れた。新聞配達用のカバンはパンパンで、彼女の小さい身体が一瞬バランスを崩した。

「今日はいつても以上に広告が入ってね。いけそう？」

「つとと、大丈夫です」

「じゃ、頼んだよ」

「はい」

元気の良い返事に満足そうに頷いた男は、サクラの倍の量をバイ

クに積みこんだ。走り去ったバイクを見送ってから、サクラは男の去った方角とは逆へ駆け出して行く。最初こそふらついたものの、すぐに慣れたのか。軽快に走って新聞をポストに入れていく姿は普段ならどこか微笑ましい光景なのだが、

「ええっと、足にチャクラ、チャクラ」

呪文を呟いているサクラは、たいそう怪しかった。

* * *

サクラは1人暮らしをしていて、生活費を自分で稼いでいる。さすがに子供の給料だけでは生活費のすべては稼げないので両親に頼っている部分もあるが、彼女はなるべく自分の手で稼いでいた。

新聞配達を終えると一端家に帰り、朝食を作るついでに弁当もこしらえる。手際はなかなか良い。だが、なぜか弁当は2つあった。ピンク色の小さいお弁当箱と、オレンジ色の派手な弁当箱におかずが詰められていき、おにぎりを最後に入れて弁当は完成した。中々彩りもよく、おいしそうだ。うんうんと彼女は1人で満足そうに頷いた。

「いただきます」

彼女は行儀正しく一礼をしてからようやく朝食を食べ始める。テーブルの上には、玉子焼きと野菜炒めに、ウインナーと味噌汁、白ご飯。どうやらサクラはご飯派らしい。

「今日は、卵が安いんだよね。帰りに買ってこなきゃ」

入っていたチラシやテレビで特売情報や天気予報を確認し、口をもぐもぐさせながら頷いている姿は主婦そのもの。見た目は完全に子供なため、どうにもちぐはぐだった。

手早く朝食を食べ終えたサクラは洗濯物を干し始めた。やはり手馴れている。最後にピンとタオルを伸ばし、うん、と満足そうに笑顔を見せるも、時計を見て「やばっ」と声を上げた。

「遅刻する！」

学校用力バンの中身を軽くチェックし、鏡の前で身だしなみを軽く整え、少し散らかった部屋を振り返り顔をゆがめた。掃除をする余裕はない。諦めのため息が小さな口から出た。

「お父さん、お母さん、行つて来ます」

それでもサクラはすぐに笑顔を浮かべて棚の上で笑っている2人に声をかけ、勢いよく部屋を飛び出ていった。

* * *

気づけば彼は1人だった。

周りの大人は彼を見ると嫌そうに眉間にシワを寄せ、ボソボソと何かを呟く。同い年の子供にしても、大人の態度が乗り移り、彼をあざける目線しか向けてこない。

なぜそこまで嫌われるのか。

彼は理由を知らない。悪いことをしたのなら言ってくれれば謝るし直そうとも彼は思っているのだが、誰も彼に教えてはくれない。

どころか誰も彼の名前を言わない。誰も彼自身を見ない。

だから、なのかもしれない。

いつしか彼の夢が里のみんなを見返してやる、となり、里一番の忍者の称号『火影』^{ほかけ}を目指すようになったのは。

そんな彼が生活していけるのは、定期的にポストにいれられているお金があるからだった。

この日もまた入っていたお金を持ちスーパーに来ていた。慣れているのか。迷いなく店内を進み、カップラーメンのコーナーへ一直線に向かう。彼はラーメンが好きだ。料理があまりできないこともあって、カップラーメンばかりの毎日を送っている。どう考えても不健康だが、それを指摘して直させようとする人間など、彼の周りにはいないのだ。

カップラーメンは様々な種類があった。最初に新商品を手に取った彼は、迷いなく次から次へとカゴに放り込んでいく。と、中でもお気に入りのラーメンが1個だけ残っていた。自然と笑みがこぼれた。

「ラッキー」

いつも売切れになるそれに手を伸ばし、隣から伸びた別の手が見えて彼は手を止めた。向こうも同じく気づいたようでそれ以上手は伸びなかった。

「あ、ごめんなさい」

普通に謝られたことに驚いた彼——うずまきナルトは、相手を見た。鮮やかなピンク色が揺れ、穏やかな輝きを帯びた翡翠色の瞳が真っ直ぐナルトを見つめていた。

その組み合わせには、見覚えがあった。

「あの？」

『どうしたの？』

「いっついや、こ、こっちこそゴメンだってばよ」

一瞬過去の映像が浮かんだナルトは、怪訝な声に我へと帰った。それから悲しいような、安堵したような複雑な表情をした。ナルトは目の前の少女を知っているのだが、少女はナルトのことを覚えていないらしいからだ。

「……ラーメン、好きなんですネ」

少女の視線はナルトから、彼の持つカゴへと移った。カゴの中には山積みになされたカップラーメンがあり、少女の目が厳しい光を帯びた。思わずナルトが1歩後ろに下がってしまうような迫力が、そこにはあった。

「ちゃんと野菜も食べてますか？」

ナルトは何も言えなかった。

* * *

結果とするならば、下手に反論しなくて良かったのだろう。おかげでほぼ毎日、ナルトはおいしい弁当にありつけるようになった。アカデミーに行くため彼が部屋を出ると、ドアノブにくくりつけられた風呂敷がドアとぶつかりカツンと音を立てた。ナルトは青い瞳をネコのように細める。わくわくしたように風呂敷を手にとると、ずっしり重たい。

「ん？」

そのままカバンに入れようとして、風呂敷に乗っていた白い紙に気づく。手紙のようだ。首を傾げたナルトは「なんだろう」と呟きながらそれを開いた。

『ピーマンもちちゃんと食べなさい。今度残したら、もう作らないからね』

書かれた文字を読んだナルトの顔が、さあっと彼の瞳の色に染まった。

手紙には絵も描かれていた。無駄に上手い絵はお弁当の絵で、おかずはピーマンづくしに見えた。と、いうことはおそらく今日の弁当の中身は、

「そ、そんなあ」

普段なら楽しみなはずの弁当が、ナルトには悪魔に見えたのだった。

* * *

「どうしたの？」

空が赤く染まり始めた、ナルトの1番嫌いな時間帯だった。顔を上げたナルトを見て、声の持ち主である少女は慌ててカバンから何かを取り出すと、ナルトの頬に問答無用で貼り付けた。

ピリツとした痛みが頬を走って、ナルトは少しだけ眉を動かすもすぐに元の表情に戻った。痛みには慣れている。

「ごめんね。今バンソーコーしかなくて」

申し訳なさそうな少女を、しかしナルトはぼけつと見た。こんな風に接してもらったことがなかったから、どう反応すればいいのか。彼にはまったく分からないのだ。

「サクラー。そろそろ帰るわよ」

「あ、はい」

母親らしき人に呼ばれた少女は、ピンク色の髪を揺らした。

「じゃあね」

最後まで声を発せられなかったナルトは、馬鹿みたいに少女の背中を見つめていた。

夕暮れは孤独をつれてくるから大嫌いだった。でもその時のナルトには、オレンジ色に染まった世界が、

「温かい」

頬に軽く触れたナルトは走る痛みを顔をゆがめながら、その温かさに身をゆだねた。

この日、彼の好きな色が増えた。

第四劇「頬の痛みが熱に変わった」（後書き）

ナルトがどうしてもあそこまでサクラを好きなのか。勝手に捏造しました。

こんなことがあるといい。

アニメでサクラは料理下手っぽかったのですが、この小説内では1人暮らし（自炊）しているのでそこそこ上手です（プロ並、とかではないです）。

関係ないですが、タイトルは結構お気に入り。

ナルトの1人暮らしはどうやってしていたのか。記述なかったためこれも捏造です。ナルトが1人暮らしできているのだからサクラにもできると主張^{したい}。

修正（11・03・15）

修正（11・03・28）

修正。改行を入れました（11・04・05）

修正（11・04・16）

修正（11・06・12）

第五劇「図書館での攻防」

図書館の端、あまり人目につかない場所に設置された机の窓際、もはや定位置と化したその席にサクラは座っていた。

「へえ。この花つて薬にもなるんだ」

時折関心の声を上げている彼女が読んでいるのは、いろいろな薬草が載っている本だった。それをイラストごとノートに写している。最初は下手だった絵も、慣れればそこそに見れたものになった。

コピー機を使わないのは全ページを写すためである。本を買う余裕などサクラになく、コピー代も馬鹿にはできない。また、修行の一環でもあった。

彼女の手に握られたシャープペンは、最大限まで芯が伸ばされていた。こんな状態で文字を書こうとすれば普通芯は折れるのだが、彼女はそんなシャープペンでスラスラと文字を書いている。芯にチャクラが流されているのだ。

細い芯の中を更に細く伸ばされたチャクラが通り、芯を補強している。それだけでも集中力があるというのに、本を詳細まで写しているのだからサクラの意識の中から世界が断絶されても、まあおかしくはない。

「お前もよく飽きねえよな」

ボキッ。

突如声をかけられてチャクラコントロールの乱れた芯は、見事に折れた。机を転がる芯を見たサクラの肩が震え、翡翠の瞳が怒りをまとって正面に向けられる。怒気を帯びつつ抑えられた声が声の主を呼んだ。

「しゝかゝまゝるゝ？」

黒い長髪を高い位置で1つにくくった彼、奈良シカマルは視線を気にした様子なく、あくびをした。目つきの悪い目は半分以上閉じていて、なんとも眠そうだ。

ちなみにシカマルの口癖は「だりい」で、彼はいつだって眠そうな顔をしている。

「んだよ」

「んだよっじゃなくて。あんたのせいで芯が折れちゃったじゃない」

「知るかよ。集中を勝手に乱したのはお前だろ」

「うっ。そ、それは、そう、だけど」

痛いところを突かれたサクラは静かになったが、不満なのだろう。頬を膨らませた。その様子をシカマルは眠そうなまま見ていた。

「でもシャー芯代だって馬鹿にならないんだからね」

「はいはい。気をつけますよっと」

「……気をつけられた覚えがないんだけど？」

いつもサクラがこうして頑張っているところを、シカマルは面倒くさそうな顔をして邪魔する。彼が面倒そうなのはいつものことだが、面倒なら放っておけとサクラは強く思う。唇を尖らせてサクラは不機嫌を表した。

「ふあゝあ。ねみい」

またあくびをして寝る体勢に入ったシカマルに、サクラはもう少して大声を出すところだった。が、寸前でここが図書館であること

を思い出し、慌てて口を手で塞ぐ。無理やり飲み込まれた言葉が指の間からもれ出た。

今度は小声で言うためにサクラは口を開き、すぐに閉じる。顔にはあきれ果てた表情が浮かんでいた。

「相変わらず寝るの早いし」

くうくう寝息を立てているシカマルにため息を1つこぼしたサクラの口元は、しかし弧を描いていた。文句を言いつつも、彼女はこんなやり取りが嫌いではなかった。

またシャー芯を伸ばしたサクラはノートに目を向けた。

* * *

初めてサクラと会ったのがいつだったか、シカマルは覚えていない。

確かイノに紹介されたのだったと記憶しているが、詳細もよく覚えていない。ちなみにイノとシカマルは、親同士が仲がよく、いわゆる幼馴染という奴だった。

つまりシカマルにとって、サクラは『イノの友だち』程度の認識でしかなかった。

のだが。

目の前で馬鹿みたいにシャー芯を伸ばしている彼女を見下ろして、シカマルは「めんどくせえ」と小さく不満をこぼす。サクラは彼の声に気づかない。

『たまにでいいからさ。サクラのこと、見てあげてくれない?』

ふと、イノに頼まれた時のことをシカマルは思い出す。

断ることは、簡単ではなくともできた。イノは強引なところはあ
るが、本当に嫌なことを押し付けたりはしない。断るのも面倒だっ
た彼は、適当に頷いた。サクラのよく通うという図書館がたまたま
シカマルの昼寝場所だったので、まあその時に様子を見るぐらいは
いいかと、気楽に考えていた。

そんな経緯の末にサクラを観察するようになったわけだが、なぜ
イノが頼んできたのかをシカマルはすぐ理解した。サクラは、休ま
ないのだ。

アカデミーでは真面目に授業を受け、時間があれば本を読み修行
に明け暮れる。今も勉強しながら修行するという、シカマルから見
れば馬鹿みたいなことをしている。

なぜそこまで強くなろうとしているのかを彼は知らない。イノは
少し知っているみたいだったが、聞こうとは思わなかった。イノも
何も言わなかった。

ただ、このままではいつか倒れるのは目に見えていて。さすがの
シカマル（面倒くさがり屋）も、目の前で倒れそうな彼女を見て見
ぬフリはできず、昼寝以外の理由で図書館に通っていた。

「お前もよく飽きねえよな」

ボキッ。

いい音が彼女の手元でしたのを聞きながら、あくびが1つ零れ落
ちる。翡翠の瞳がシカマルを睨んだ。

「しゝかゝまゝるゝ?」

「んだよ」

「んだよっじゃなくて。あんたのせいで芯折れちゃったじゃない」

「知るかよ。集中を勝手に乱したのはお前だろ」

「うつ。そ、それは、そう、だけど」

少しサクラと話してから、シカマルはいつものように寝る姿勢に入った。

「相変わらず寝るの早いし」

聞こえた声に、シカマルの口元は弧を描いていた。貴重な睡眠時間を削ってもいいかと思えるほどには、このやり取りを気に入っていたのだ。

第五劇「図書館での攻防」(後書き)

シャープペンシルは原作でなかった、気がしますが、このナルトの世界にはあるということをお願いします。

シカマルとは微妙な距離感あるのが好きです。

修正。改行を入れました(11・04・05)

修正(11・04・16)

修正(11・06・12)

第六劇「まるでプロポーズ」

修行は順調に、かどうかサクラには判断つかないが、とりあえず進んでいた。

手を使わない木登りはとりあえず頂上にたどり着けるようになった。……10回に2回ぐらいいは。修行を始めて2週間経ったが、まだ成功率が半分以下であることにサクラは苦笑しかできない。

「じ、地味な割りにしんどすぎる」

草地に全身を預けたサクラは、木の間から覗く空をなんとなく見た。鳥が数羽、気持ちよさそうに風に乗ってどこかへ飛んで行った。チャクラの修行でサクラが痛感したのは、スタミナ（チャクラ量）のなさだった。

平均値は知らない。少なくともサクラはそう判断した。今行っている修行メニューがきつい。木登りの成功率が低いことには、途中でスタミナが切れることが大きく関係していた。なので本当にギリギリのチャクラを練らなければならず、修行の難易度を上げていた。

「修行で増えるチャクラってどれぐらいなのかな」

アカデミーの教科書には増えるとはつきり書いてあるが、増える量には個人差があるとしが書かれていない。そこまで書けよ。何度そんな悪態をついただろう。サクラはふっと息を吸い込む。

「よしっと。休憩終わり」

勢いよく立ち上がった。

次は忍術の練習だ。アカデミーで習った基本忍術だが、基本故に

応用が利きやすい。

手で印を結ぶ。

この『印』とは忍術発動のために必要なもので、両手でとある形を作る。印の基本は12種類あり十二支の名前がつけられているが、これらを組み合わせさせて術を発動させる。難しい術ほど難解な組み合わせとなる。特殊な印もあるが、ここでは割愛する。

必要な分だけのチャクラを練り上げ、使いたい術の印を結ぶ。

「分身の術」

煙とともに現れたのは4人のサクラ。本体も含めると5人だ。分身は各々自由気ままに行動しており、見事な分身の術だった。アカデミーの教師がこの様子を見れば感嘆の息を吐いたはずだ。

「ん、まだまだ、か」

しかし本人は不満があるらしく、眉を中央に寄せた。

「もっと早く確実に印を結べないと」

戦闘中に『あ。今術使うからちょっとまって』など言って敵が待ってくれるわけはなく、また『術が発動できれば勝てました』など言い訳にもならない。どれだけ早く印が結べるかというのは、それだけ戦闘で有利になるのだ。

「もう1回」

分身を消したサクラは、また術の修行に戻った。

* * *

チヨウジは、首をひねった。駄菓子屋の前をうろろしている不審な影があつたのだ。

「あれ？ どうしたの、サクラ。こんなところで」

「あ。チヨウジ」

見覚えのある影は知り合いで、チヨウジは小さな目をサクラに向けた。チヨウジはややぼっちゃりした（ぼっちゃりであつて決してデ。ではない。）。ブは彼には禁句である（少年で、常にお菓子を持ち歩いている）。

今日チヨウジはお菓子の補充にやって来たのだ。

「入らないの？」

そわそわといつもと違う様子なサクラに声をかけて、チヨウジは中へと入っていく。

「あ、う、うん。入る」

戸惑い気味に返事をしたサクラも続いて入っていく。お邪魔します。そんな声を聞いてチヨウジは小さく笑ってしまった。サクラが恥かしそうに身体を縮めた。

店内では甘い匂いが充満していた。背の低い棚には、多種多様なお菓子が所狭しと置かれている。チヨウジは新作のお菓子に目を輝かせたり、お気に入りのお菓子をたくさん手に取ったりと忙しい。

「ねえ、チヨウジ」

引きつった声に、チヨウジは振り返った。サクラは無理やり貼り付けた笑みを浮かべ、チヨウジの腕に抱かれたお菓子の数々を指差した。

「もしかしくなくても、ソレ、全部食べるの？」

「え？ うん。そうだけど？」

「そ、そう」

首をかしげるチヨウジにサクラはなんでもないと首を振り、持つのを手伝うと言った。チヨウジはこれ幸いと腕の中の空いたスペースにいくつかお菓子を加え、それを見たサクラがさらに顔を引きつらせたのを不思議そうに見た。

「ありがと……サクラはお菓子買わないの？」

礼を言ってからチヨウジは彼女が手ぶらことに気がついた。たずねれば「もう買った」と返ってくる。それでも不思議そうな彼に、サクラはお菓子を片手で抱えなおして空いた手でポケットを探った。飴玉が1つ出てきた。

「これだけで、いいの？」

純粹に驚いたチヨウジに、サクラは苦笑した。チヨウジと同じ年のはずなのだが、この笑い方をするサクラはずっとずっと年上に見えた。そして、チヨウジはあまりこの笑い方が好きではなかった。

「飴が食べたかっただけなのよ」

チヨウジはなんだかこの日の出来事が妙に気になった。

気になったので、意識してサクラと話をするようになった。話をするうちに2人は仲良くなつて、お金がないからお菓子を買えないのだと、サクラは恥ずかしそうにチョウジへ教えた。

——なんだ。

チョウジは笑った。

「じゃ、一緒に食べようよ」

「え？ でも」

断ろうとしたサクラを遮り、

「お菓子は大勢で食べた方がおいしいから。あ。でも最後の一口は渡さないけどね」

チョウジは膝についてポテチの袋を彼女に向けた。

——決まった。

そう言わんばかりの格好つけた表情のまま、彼はちらつとサクラを見る。サクラはポカンと口を開けていた。

「ぶっあははははっ！ じゃ、じゃあ遠慮なくいただきます」

しばらく経った後、ポテチをかじったサクラは笑った。年相応の笑みだった。チョウジも楽しくなつて大きな声で笑った。サクラにはこっちの笑みの方が似合うなと彼は思った。彼もまたポテチを食べた。

「うん。おいしい」

この日から2人は一緒におやつを食べるようになった。そこに昼寝をしにきたシカマルや、サクラを追いかけてきたイノも混じり始

め、チョウジの周りは騒がしくなった。

「何っつーか、チョウジらしいな」

「ほんとよねえ」

話を聞いていたシカマルとイノは呆れた顔をした。サクラはポテチを口に放りこみ、

「でもあの時のチョウジ、カッコよかったよ。なんか、プロポーズみたいで」

「は、はあっ？」

言葉を失った周囲を放って、1人、満足そうに笑っていた。

第六劇「まるでプロポーズ」(後書き)

勘違いで第五劇をあげてました。すみませんでした。

チョウジとはお菓子友達だといひ。

木登り修行の難易度は、まだアカデミー入りたてにはかなり難しいという自己解釈のもともこういう表現になってます。

修正。改行を入れました(11・04・05)

修正。誤字：不振↓不審(11・04・06)

修正。誤字等(11・06・12)

第七劇「犬の恩返し」

「次！ 春野サクラ」

「は、はい」

かすれた返事に担任のうみのイルカは苦笑した。サクラは見ている方が心配になるほど緊張した面持ちで1歩前に進み出た。丸太につけられた的を見つめる目は、真剣そのもの。

「はじめ」

イルカの声に、サクラは素早く手裏剣のホルスターに手を伸ばし……。

* * *

「あんたってホント本番に弱いわよね」

「イ、イノちゃんもうちょっと優しく言ってあげないと。ほら、練習では百発百中なんだし」

「何よ、ヒナタもそう思ってたんじゃないの」

「えっ？ あ、その」

「練習では、練習では」

「あああっ！ ち、ちちち違っのサクラちゃん、今のは」

ズバズバと言ってきたイノよりも、むしろフォローしたヒナタの言葉にサクラはぐさつときて弱弱しく笑った。

「大丈夫よヒナタ。あなたの思いはちゃんと伝わったから」

「ああうつ、ごめんなさい」

「嫌味言う元気あるなら大丈夫ね」

カラカラとイノは笑った。

今日、学校で手裏剣のテストがあった。3人の中で1番手裏剣に自信があったサクラは大失敗こそしなかったものの、本来の実力を出せなかった。数少ない自信のあるものだけにだいぶん凹んでいた。先ほどの会話は帰る時間になっても落ち込んでいたサクラを2人が励ましてくれていたわけだ。逆効果ではあったが。

「じゃ、また明日ね、2人とも」

「また」

「元気出してねサクラちゃん！ 次はできるよ」

家の方角がバラバラな3人はいつものように別れた。最後のヒナタの言葉にサクラは苦笑し、

「ほんと、次はできたらいいのだけど」

無理だろうな。

誰にも聞こえないように囁いた。

* * *

ふと彼が思い立ってその場所に行くと、予想通りのピンク色があった。

「まーた落ちこんでんのかよ」

「う、うっさい。バカキバ」

「うおっ」

声をかけると彼、キバに返ってきたのは予想通り、ではなく予想以上に元気な声と手裏剣だった。キバの方を見ずに投げられた手裏剣は彼のすぐ横を通り過ぎ、木に突き刺さる。深々と突き刺さっている手裏剣を見てキバの頬が引きつるのは、仕方ないだろう。

「あつぶね！ いきなり何すんだよ、このバカ女」

「あら外れたの？ 刺さればよかったのに残念」

「てめえな」

当てる気はなかったのだろうが、サクラは随分荒れているようだ。ブチブチと何事が呟いている姿に、キバはフード越しに頭の後ろをかいてため息をついた。誰がどう見てもサクラは落ちこんでいた。

「大体てめえは合格したのになんで落ちこむんだか。俺なんか補習だっつ」

「ああ、あんた、ナルトの次に下手だったもんね」

「ばっ！ おまっ訂正しろ。ナルトと一緒にすんじゃねえっての」

「はいはい、ごめんなさい」

手を振って適当に対応する彼女を見て、こんなところに来るんじゃないかったとキバは心底思った。

「わっわうっわうん」

しかし頭上から聞こえた非難の声に、

『あ。もしかして——』

いつかの声を思い出した。

* * *

その日犬塚キバは、子犬を探して演習場の森に来ていた。

子犬といってもただの犬ではない。忍犬にんけんと言う訓練された犬で、キバの大事な相棒だ。——犬塚家は犬とともに戦う忍びの一族で、鼻が利くため、探索も得意とする。

そんな相棒がどこかに行つたまま返つてこない。赤丸と言う名の子犬はまだ訓練を始めたばかり。何かあつたのではないか。キバはいつもの勝気な表情をどこへやったのか。まるで『私は不安です』と書かれた紙を貼り付けているような顔をして、辺りを見回していた。

「わんわん」

「赤丸？」

相棒の声が聞こえたのはキバの思考が、「まさか誘拐されたんじやつ？」まで進んだ時だった。楽しそうな相棒の声にひとまずホッとして、キバは声の方へと向かった。

「ふふ、慰めてくれるの？　ありがとう」

しかし赤丸以外の声にキバはとっさに木の後ろに隠れた。隠れた後で、なんで隠れたんだと動揺し、足元でかさつと草が音を立てた。

「誰っ？」

「あーっと。わりい。邪魔するつもりは無かったんだが」

腹をくくってキバが姿を現すと、少女の膝に乗っかっていた赤丸が「やれやれ」と言いたげに「わん」と鳴いた。キバの頬が引きつった。

ピンク色の髪をした彼女は涙こそ無かったものの、翡翠の目は赤く、泣いていたのかもしれない。ますます気まずくて、キバは視線をさ迷わせた。彼女はキバをしばらく不思議そうな目で見て、声を上げた。

「あ。もしかしてこの子の家族の方ですか？」

飼い主だとかペットだとかではなく、自然に自分たちを『家族』と呼んだ。それが思いのほか嬉しかった。だから恩返しというわけではないが、彼女が落ち込んでいると放っておけずここに来てしまった。

きびすを返そうとしていたキバは、サクラの斜め後ろにどかっと座った。赤丸が嬉しそうにサクラの膝に乗った。

「で、どうしたって？」

第七劇「犬の恩返し」(後書き)

私の家には2匹の犬がいます。

そして私は彼らをペットだとか飼っているだとかは言いたくないんです。家族ですから。

でも誰かに説明する時は言わなきゃいけないくて……そんなジレンマをぶつけてみました。きつとキバ以上に赤丸はうれしいと思う、そんな話。

タイトルが思いつかず、テキトーになった。キバごめん。

後、決してヒナタがクライなわけではありません。むしろ大好きです。ただ、ここではイノッツツコミ、サクラッボケ、ヒナタットメ(！?)という役割でいきます。ヒナタ、超ごめん。

修正。改行を入れました(11・04・05)

修正(11・06・12)

第八劇「彼と彼女の趣味事情」

勘違いしている者もいるが、サクラは何も修行や勉強ばかりしているわけではない。たまには自分の好きなことをして気分転換もする。——まあ、その気分転換も修行の効率を上げるためとされていることは否めない。

その気分転換、とは植物採取・観察であつた。まったくもって女の子らしくない。

イノに言えば確実に呆れられるのが分かっているので、サクラがこのことを誰かに告げたことはなかった。

「あ、咲いてる咲いてる」

いつになく明るい声を出しながらサクラは大きな木の根元にしゃがみ込んだ。そこにあるのは彼女が先日ここへ来た時、ツボミを見かけて気になっていたタンポポだつた。黄色の花を観察しつつ、サクラは懷からノートと鉛筆を取り出した。

「根っこは確か胃や肝臓にいいんだよね。他にも効用があつたような……なんだっけ」

サクラは花のスケッチを始める。見たままを描いた絵は、中々上手い。色鉛筆も使いある程度描いたところで、今度は花の名前と効能、色や生息地など花の情報を書き込んでいく。このノートにはそうしていくつもの植物が描かれてあり、いわばサクラお手製の植物図鑑であつた。完全に趣味で作っている図鑑だが、実益も兼ねているところが彼女らしい。

最後に今日の日付を書き込んでサクラは立ち上がった。

「今日も始めますか」

木の葉の里周辺には豊かな自然が広がっている。温暖な気候が様々な生物の生長を促進しているのだろう。生息する動植物は実に多種多様だ。

なので何回来ても毎回新しい発見ばかり。そのうち未発見の植物も見つかりそうで、胸が躍る。歩いているだけでもサクラは楽しかった。

「サクラ」

鼻歌を歌いそうなほど機嫌のよい彼女に声かけられた。サクラは驚かない。声の主を彼女は知っていた。

「シノ、おはよう」

丸いサングラスをかけた少年がそこにいた。

* * *

シノという少年は、油女一族あぶらめに生まれた。

油女一族は蟲むし使いの一族で、昆虫採集・観察は修行の一環だった。それがいつしか習慣となり、木の葉周辺の昆虫をほとんど知り尽くした今では、ただの趣味として行っていた。知っていたと思うものでも観察していると知らない一面が見れることもある。発見した時はやはり嬉しい。発見できずとも森の空気は新鮮で歩くだけでも楽しいものだ。

「へえ、葉っぱの裏ってこうなってたんだあ」

いつものように森は静かだったのでその声はよく響き、シノはひどく驚いた。こんな朝早くから森を散策する者はほとんどいない。少なくとも彼は己自身以外に見たことがなかった。もともと、眉がかすかに動いただけなので、彼が驚いたことに気づけるのは親しいものだけだったろう。

草木が生い茂った森の中、シノの位置からは声の主は見えない。顔を少し下に向けたシノはゆっくり歩いてそちらへ近づいた。

「うー、描くの難しいな。んーっと。ここがこうなってるここにながって」

木と木の間から薄紅色の髪と赤いリボンが見えて、シノは声の主が誰だか悟った。春野サクラ。アカデミーの同級生だ。

シノは小さな丸いサングラスの向こうで数度まばたきした。サクラとは男女の差や、シノが同学年の子供とあまり遊ばないこともあったため、話したことはない。つまり、接点がない。

じゃあ放っておけばいいものだが、仮にも同級生である。無視するのはいかなものかと彼は悩んだ。声をかけるにしても彼は口下手で、普段あまりしゃべらない。何を話していいものかも分からない。

それに女子が虫を苦手とすることも彼は知っていた。……小さく頷いたシノは、そっときびすを返した。

「んっとこれでよし……って、わわっ！ シノ君、いつからそこに」
が、立ち去る前に見つかってしまった。こうなってしまうは仕方がない。

「……すまない。声をかけようかと思ったのだが邪魔になると思ってたな」

「なんだ。そんなこと気にせず声かけてくれて良かったのに」
「そうか」

立ち上がったサクラの手には鉛筆とノート。ノートの表紙にはスケッチブックと書かれてあった。シノの視線を察したのだろう。サクラは少し恥ずかしそうに笑った。

「たまに植物を見に来てるの。その際にちよつと絵を描いてたらしいのまにか習慣になっちゃって。あ、他の人には内緒にしてね」
「構わない」

シノは間をおかずに頷いた。サクラはありがとうと笑って、

「そういえばシノ君はどうしてここに？」

「ああ。俺も似たようなものだ」

「似たような？」

「昆虫採集と観察だ」

* * *

「シノ、おはよう」

「ああ、おはよう」

挨拶を済ませると、それきり無言で2人はそれぞれの作業を続けた。一見気まずそうだが、仲が悪いわけでも、喧嘩したわけでもない。2人はいつもこうだ。お互いが互いのことを気にせず好きなこ

とに没頭できる。それは、
シノが思っていたよりもずっと居心地の
良い空間だった。

第八劇「彼と彼女の趣味事情」(後書き)

キバとの出会いに似てるとか、そそそそんなことは！

ってか、シノむずかしすぎる。彼が同期と遊んでいる光景が思い浮かばないのは自分だけ？ 1番子供らしくない子ですね。この小説のサクラもたいがいですけど。

ちなみに私は虫が苦手です(聞いてない)。

作中に出てくる花は創作です。図鑑開かないように(笑)。

→花の箇所書き直しました。タンポポの根っこは本当に胃、肝臓にいいらしいです。肌も綺麗になるとか。お茶として飲みます。葉っぱも栄養あるみたいです。興味のある方は調べてみてください(11・03・15追記)。

修正 & 空白行入れました(11・04・05)

修正(11・06・12)

第九劇「何よりも強力な応援歌」

最近サクラは悩んでいた。

恋の悩み、などという年頃の女の子らしいものではなく、修行内容についてだった。

1人での修行にはやはり限界がある。基礎能力を上げるとは1人でも可能だが、実践練習となれば相手が必要だ。特にサクラは体術が苦手なのでなんとかしたかった。

イノやヒナタと修行することはもちろんある。しかしイノは修行よりも恋やファッションに余念がなく、ヒナタは家での修行もある。第一、2人はまだ子供なのだから遊んでいていい、とまでサクラは思っている。

「まあ、私も子供なんだけどね」

ため息1つ。

「とりあえずは体術の修行方法をどうにかしないと」

打ち込みならば1人でも可能だ。丸太人形相手に打ち込めばいいが、実際の相手は動き、攻撃もしてくる。イメージトレーニングも考えたものの、サクラにイメージできるほどの経験がないため不可能だ。

「先生も忙しそうだし、鼻肩するわけにも行かないもんね」

出した結論は1人で何とかするしかない、といういつもと代わり映えしないものだった。しばし考え、首を横に振った。

「とりあえずいつもの木登り行きますか」

サクラは立派な1本の木を見上げ、走るように幹を登って行った。木登りの成功率は7割に達していた。

* * *

カランっ。

「何の音でしょう？」

演習場へと向かう途中で聞こえてきた音に、彼はピタリと足を止めた。

長い黒髪を1つに編んで背中に流した少年だ。彼は特徴的な太い眉と丸い目で怪訝な表情をした。彼の名前はロック・リー。忍者アカデミーの2年生。サクラたちの1つ上である。

カランカラン。

音はずっと聞こえてくる。リーは困った。これから修行をしなければならぬ。しかし、音は非常に気になる。今まで聞いたことのない音なのだ。まん丸の黒目が音の方角と修行場所の方角を行き来する。何度も何度も何度も。

「……少しだけなら、いいです、よね」

少年は好奇心に負けた。

* * *

音の先には、他よりも一際大きな木があった。

「こ、れは」

リーは言葉を失う。

木の枝には長さの違う縄があちこちにくりつけられており、縄の先には30センチほどの竹筒がいくつもぶら下がっていた。リーが聞いたのは、これが揺れてぶつかり合う音だったらしい。

そして、中心には1人の少女がいた。

「ハアツふっ」

桜色の髪を揺らした少女は自身に向かってきた竹を手と足で弾き飛ばし、時には飛びのいて避けた。弾かれた竹、避けた竹はある程度揺れて、また彼女に向かっていく。少女はひたすらにそれらを弾き、避け続けた。その度に少女の桜色の髪が揺れた。

舞のようであった。

口をあけて呆然とリーは彼女を見つめていたのだが、舞はそう長く続かなかった。

「あ」

疲れた少女がふらつき体勢を崩した。そこに竹が迫る。最初の竹はなんとか手で弾かれたが、後ろからきた竹を少女は避けられなかった。

「いっつう」

痛みに顔をしかめ、少女は大きく飛びのいた。

カランカラン。

竹は先ほどまで少女がいた場所を通過していった。竹が届かない位置まで飛びのいた少女は、仰向けに倒れ込む。

カランカラン。

「あー、まだまだかあ」

少女の顔は、リーの位置からでは見えない。しかし、声はリーにもはつきりと聞こえた。

——修行が上手くいかなくて、ひたすらに悲しくて悔しい。

そんな思いが痛いほどに伝わってくる。

心配になって近づこうとしていた足を止めて、リーはぎゅっと拳を握り締めた。こういう声を出す姿は誰にも見られたくないものだと、彼はよく知っていた。

カランカラン。

邪魔者がいなくなった木の根元では、いくつもの竹筒が楽しそうに揺れていた。

* * *

「休憩は終わりです」

リーは文字通り飛び起きた。彼の目の前には太い丸太がふてぶてしく立ちはだかっていた。

「右ひざ蹴り100回！」

気合の入った声と同時に彼は丸太を蹴り始めた。重たい音が森の中に響く。

硬い丸太を思い切り蹴りつけるとズシンとした衝撃と共に痛みが体を駆け巡る。リーの顔がゆがんだ。歯を食いしばった彼は痛みを無視して蹴り続けた。ズキズキしていた痛みは麻痺して段々分からなくなっていく。少しホツと息を吐き出した彼だったが、今度は足が重くなり上げるのが辛くなった。今すぐ止めたくなり……どこからともなく、音が聞こえた。

カランカラン。

「っ！ まだまだ！ 5 6 っ 5 7 っ」

彼が諦めそうになると必ずその音は響いた。桜のように舞う少女を思い浮かべた。少女の姿はあの日以来見ていない。しかし、焼きついたあの光景は今でもはっきりと思い出せた。

カランカラン。

今日も彼は音に背を押され、夢へと近づいていく。

第九劇「何よりも強力な応援歌」（後書き）

同期組みだけにするはずが、なぜかリー登場。何か他に接点あればという願望が出ましたね。

木登りを作中のサクラは簡単にこなしてますが、今はまだ幼いことと、かなり大きな木の頂上までたどり着かなければ成功に数えていないためです。作中で語れなくてすみません。

修正 & 空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第十劇「交わる視線」

「キヤー、サスケくん」

朝の教室に響いた恒例ともいえる甲高い声に、サクラはピクリと反応した。億劫に視線を動かせば、黄色い声の発信地にはイノと女の子たちの群れがあった。彼女たちの目にはただ1人しか写っていない。

「ふん」

女の子たちの視線を独占している1人の少年は、女の子の歓声にまったく興味がなさそうだった。

黒い髪に紺色のシャツ。背にうちはの家紋を背負った彼は、随分整った顔立ちをしている。顔だけでなく成績もトップで性格はクール、とくれば女の子が騒ぐのも、まあ無理はない。

「いつもながらサスケ君すごい人気だね」

「そうね」

隣に座っているヒナタの声へサクラは短く返した。そっけない態度だった。いつものことなのか。ヒナタが気にしている様子はない。「うあゝ」唸ったサクラは机の上に顔を乗つけた。眠いのかまぶたが半分落ちかかっている。

そんな時、女の子たちに囲まれながら席へと向かっていたサスケが、ふと、目を動かした。

「っ」

一瞬。

サクラとサスケの視線は確かに交差した。他の誰かが気づく間もなくサクラは目を閉じ、サスケは席へと目を向けていたが。

『ウザいんだよ、お前』

どこからともなく聞こえてきた声に何かがかみ上げ、サクラはソレを無理やり飲み込んだ。

* * *

悲劇の少年。

里の大人たちにそう呼ばれる少年の名前はうちはサスケ。忍びの名門、うちは一族唯一の生き残りである。

うちは一族は木の葉の里の一角に住居を構えており、小さな町ほどの規模があった。当然その人数は多い。にも関わらず、彼らは一夜にして殺された。しかもたった1人の手によって。

うちは一族を殺した男の名はうちはイタチ。かつて天才と呼ばれたサスケの兄だった。

「愚かなる弟よ」

イタチは血溜まりに倒れている両親へ目もくれず、サスケを真っ直ぐに見ていた。サスケは何が起きているのか分からなかった。イタチは優しい兄だった。忙しい身の上にも関わらず、時折サスケの修行を見てくれた。落ち込んでいたら励ましてくれた。だからこそ、イタチから向けられている視線の冷たさを、理解したくはなかった。

「なんで……なんでだよ、兄さん」

「すべては己の器を図るためだ」

平坦な声で、考えるそぶりも見せずに返事は返ってきた。サスケは以前にもその言葉を聞いたことがあった。

あれは、イタチが殺害容疑をかけられた時のことだ。普段とても冷静な彼がひどく怒りを覚えていて、今のような声で「俺の器はこの一族に絶望している」と告げた。あの時は理解できなかった意味を、今ようやくサスケは理解した。

鍛錬所の床に座り込んだまま、サスケは首を何度も横に振った。

何度も。何度も。何度も。

すべてを否定するように、彼は首を振った。理解など、したくないのだ。

「分からないよ。だからってなんで、こんな」

じつとサスケを見ていたイタチの赤い目が、変わった。正確には目に浮かんでいる模様が。3羽の手裏剣のような黒い模様が、赤い瞳の中に浮いている。見てみると、心の底まで見透かされそうな不思議な目だった。

「う、うあああああああああああつやめてえええ」

サスケが唐突に頭を抱えて叫び出した。イタチは何もしていない。いや、違う。幻術をかけられたのだ。イタチが一族を殺していく映像が、サスケには見えていた。

何度も父が、母が、友だちが、おばさんが、おじさんが、知っている人たちが、イタチに、兄に殺されていく。あるものは首をかき切られた。あるものは火遁の術によって燃やされた。あるものは幻術により狂い殺された。またあるものは毒によって死んだ。イタチ

による虐殺をとめる方法などサスケにはなく、見せ付けられる映像にただ泣き叫ぶしかなかった。兄に「止めてくれ」とみつともなくすがり、頼んだ。

イタチはそんなサスケを見て、嫌悪したように眉間へシワを寄せた。ようやく幻術が解かれる。

「愚かなる弟よ、お前は殺す価値すらない」

映像から開放され呆然としているサスケの耳に、容赦ない兄の声が侵入してきた。

「しかしお前は俺と同じ目を開眼し得る者。俺を恨み、生にみつともなくしがみ付くといい。そして俺と同じ目を持って俺の前に来い」

兄の言葉を、サスケはまだ理解しなくなかった。力なく床に倒れ、涙を流しながら、

「ど、して、兄さん」

何度目か分からない問いをぶつけた。答えは短い。

「己の器を図るためだ」

* * *

サスケが目を覚ますとそこは病院だった。顔には包帯が巻かれ、白いベッドで寝かされていた。

『聞いた？　うちは一族の話』

『ええ。生き残ったあの子だけなんですよ。かわいいそうに』

聞こえた会話に彼は思わず駆け出していた。

うちはの家々があった場所には黄色いテープが張られ、立ち入り禁止と書かれてあった。サスケは呆然としたままテープを潜り抜けた。

いつも学校帰りに通った道を歩いていく。

『サスケちゃん、おかえり』

「っ！　おばさ」

聞きなれた声にサスケは振り返った。……誰もいない。いつも道を掃除していたせんべい屋のおばさんも、散歩をしているおじいさんもいない。がらんとした通りが広がるだけだった。我慢できなくなつてサスケは走り出した。

「あんなの、ただの夢に決まつてる。父さんは強いし、兄さんが、あんな」

本当は彼にも答えは出ていた。夢ではなく現実なのだと。

しかしそれでも受け入れがたくて、一縷の望みを持って自宅へと急いだ。玄関で靴を脱ぐのも待てずそのまま上がり込む。

「父さん！　母さん！　いるんだろう？」

今、書斎、台所と周り、鍛錬所に着いた。やはり誰もいない。視界に入った床に広がる黒いシミは、否応無く悪い想像をサスケに抱かせ、足から力が抜けていく。

「そんなんっ…… かあさんっ？」

膝をつきそうになった時、玄関でかすかな音がした。少し笑顔の戻ったサスケは玄関へと急ぎ、

「母さん！ おか、え」

元気よく言葉を続けることはできなかった。玄関にいたのは母ではなく、鮮やかな髪の少女だった。サスケと同じくらいだろう。どこか見覚えのある少女だったが、今のサスケに思い出す余裕はなかった。指先が凍えたように震えていた。

「あ、あの」

「なんだよ」

心配をまとわせた声に、

『あの子もかわいそうにねえ』

病院で聞いた声が頭によぎり、自然とサスケの口調は固くなって少女は肩を震わせた。俯いていたサスケにそんな少女の様子は伝わらない。……いや、伝わったとしてもきつと結果は変わらなかっただろう。握り締めた彼の両手が、ぎしりと音を立てた。

「俺を哀れみにでも来たのか？」

「ち、ちがつ！ 私、ただ心配で」

「心配？ それが哀れみだって言ってるんだ！」

「ごめっごめんなさい」

前髪の間からサスケは少女を睨んだ。だが不思議と、少女の顔が

はつきりと彼には見えなかった。彼は自分の中にあるやり場のない感情を、もてあましていたそれらの感情を、すべてぶつけるように少女を睨んでいた。

「ウザいんだよ、お前」

* * *

少女がクラスメートであり、あの時の女の子だとサスケが気づいたのは事件後、大分経ってからのことだった。気になって時折視線を向けるも、翡翠の瞳と目が合うとサスケはどうしても逸らしてしまう。

何かを彼女に言いたい気がしていた。だが、何を言いたいのか彼自身よく分からない。謝りたいのか。もっと攻め立てたいのか。…感謝を述べたいのか。どれでもあってどれでもない気がした。

事件の後、サスケを心配して彼の元を訪れてきたのは、三代目火影を除けば彼女だけだった。火影にしても事件から3日後だったことを考えれば、本当に心配したのだろう。

あれ以来彼女とサスケは話をしていない。

ひどいことを言った。謝りたいし感謝もしたい、のだとサスケは思う。あの時吐き出せたから少し楽になれたことを、落ち着いた今、彼は痛感していた。

でも口を開けばまたひどいことを言ってしまいそうで、結局サスケは彼女に声をかけられない。事件の悲しみも、兄への憎しみも、弱い自分への怒りも、決して消えたわけではなく、彼女を見るとその時のことを思い出してしまうからだ。

「くそつ。だせえ」

今日もまた、サスケの1日が終わる。

第十劇「交わる視線」（後書き）

このままでいくと、原作のあの名言（？）が聞けないため、こうなりました。

ひとまず、同期キャラ遭遇編は終了です。とりあえず、さっさと卒業させて原作に入りたいところ。

修正&空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第十一劇「彼らの距離」

サクラの目の前には弁当が3つ並んでいた。ピンク色の小さく可愛らしい弁当箱と、オレンジ色の派手な弁当箱、それから紺色のシンプルな弁当箱。ほとんど中身は同じなのだが、やたらと紺色の弁当に気合が入っているように見えた。

「うん。大丈夫。味も確認したし、焦げてるのはナルトのにしたし」

中々ひどい発言をしながら、サクラは箸と一緒に弁当箱を包んでいく。紺色のを包む時は手が震えていた。翡翠の瞳からは不安の色が消えない。

「お礼だけは、言わなくちゃ」

重たい弁当を抱えて、サクラはいつもより早く家を出た。

まず最初にナルトの家に向かう。

慣れた様子でアパートの階段を登り、サクラはドアに風呂敷をくくりつけた。毎朝届けていれば慣れもする。本当は学校で弁当を渡すのが手っ取り早いのだが、ナルトが嫌がるためこうなった。

嫌がるのは、照れ、などという単純なものではない。

里の大人たちはナルトにとても冷たい。忌み嫌っていると言い切ってもいい。ナルトを見る視線の冷たさは、視線を向けられていないサクラをも震え上がらせるほど。

ナルトはサクラにもその視線が行くのではないかと心配していて、人目がつくところでサクラに話しかけることはない。無理に話しかけようとすればナルトがひどく怯えるので、サクラはあまり話しかけないようにしていた。

そもそもナルトに弁当を作っているのは自分と同じく1人だった

彼への同情、だったのかもしれないなど考えてしまい、サクラは答えの出ない迷路に飲み込まれて動けなくなる。こんなことでどうするんだと自分を叱咤しても、寂しそうに去っていくナルトの背中を追いかけるれない。きつかけが欲しいと思っている自分がなさけなくて、サクラは口を開いた。

「……っ」

しかし声はそこから出てはくれず、サクラは手を握り締めて立ち去った。

* * *

目の前にある立派な屋敷を見上げ、サクラはうつむいた。ナルトに対してもそうだが、今から自分がする行為は果たして正しいのか。

『ウザいんだよ、お前』

どうしてもあの一言がサクラの耳から離れない。

上手な励まし方なんて彼女は知らない。ただ、手伝いをしていた病院で看護師が話しているのを聞いてしまつて。気がついた時には走っていた。何を言えがいいのか。何をすればいいのか。何も考えられぬまま走った。

その結果、彼を苦しめることしかできなかった。自分はなんて無神経だったのだろう。今ならソレが分かる。だから、接触はこれで最後にしよう。サクラは決めていた。

「あ、あのー！」

第十一劇「彼らの距離」(後書き)

今回は短めで、途切れ途切れに。前後編っぽいです。

チームの中ではナルトとサスケの関係ははつきりしていて強いものがありますが、サクラだけ置いてけぼりな感じがしていたので、ここら辺も大分変えました。

加筆修正(11・03・15)

修正&空白行入れました(11・04・05)

修正(11・06・12)

第十二劇「お弁当がみつ」

サクラにとって昼休みがこれほど待ち遠しく、またこれほど来なければいいと願ったことは今までない。

「はあ」

「ちよつとサクラ！ あんた今日どうしたの？ 朝からずっと辛気臭い顔して」

「い、イノちゃんもう少し優しく」

チャイムの音と同時にため息をついたサクラへ、親友から辛らつな声がかけられる。相変わらずヒナタの言葉はフォローしているようにトドメの一言だ。

「ヒナタ。そこは否定して欲しかったな」

「あつご、ごめんなさい」

「で。何かあ」

「ねえねえサスケくん。一緒にご飯食べない？」

イノの声をさえぎる黄色い媚びた声に、青い瞳が不愉快そうに細まった。イノの目線がサクラから外れ、サスケに向かう。サクラも内心ドキドキしながらそちらを見た。

「断る」

いつものように女の子を一刀両断したサスケは、手ぶらで教室を出て行った。ホッと息をつくイノの横で、サクラは仕方がないと肩をすくめた。初対面同然の相手から突然弁当を渡されても困るだろう。自分がサスケの立場でも気持ち悪いと思う……サクラは額を押

さえた。

「どうしたの？」

「ちよつと頭が痛くて」

「まあた難しい本でも読んでたんでしょ」

ははは。

軽く2人に笑い返ししながら、サクラは自身につくづく呆れた。

ずつとお礼を言いたくて、謝りたくて。でも自分の顔なんて彼は見たくないだろうと思えば一步を踏み出せなかった。なんとかしようと思死に考えた結果がお弁当である。

なぜ弁当？

冷静になれば手紙で感謝と謝罪を伝えれば良かったはずだ。直接顔を見せずにいたかったのに弁当を手渡すなど本末転倒すぎる。：

いや、そもそもなぜに弁当？ 考えれば考えるほど、変だった。どうもサクラは必死に考えると変な方向に思考が進むらしい。

「とりあえずお弁当食べよっか」

「え？ 頭は大丈夫なの？」

「ヒナタ。あんたその言い方だとサクラの頭が変みたいじゃない。ま、変だとは思っけど」

「うっ、どうせ私は変人ですよー」

「ああああっ！ サクラちゃん、今のは本当に違っくて」

必死に違うのだというヒナタを見ながら、自分は心底彼女に嫌われているのではないかと思うサクラだった。

* * *

珍しく、サスケは呆然としていた。手には紺色の風呂敷。

『以前は助けただいてありがとうございます。……それから、あの時はすいませんでした。』

今更、ですけど、お礼とお詫びにお弁当作りました。良かったら食べてください。いらなかったら捨ててください。では』

最初から最後まで堅苦しいしゃべり方を通した彼女は、サスケの目を真っ直ぐ見て微笑んでいた。悲しげで、それでいて慈しむような瞳からサスケは目を逸らせなかった。そのまま何も言えずにいる間に無理やり渡された風呂敷は、ずっしりと重たい。

『ほらサスケ。お弁当』

ふと笑顔で紺色の風呂敷を差し出す母の姿がサスケの頭に浮かび、冷たく黒い感情が湧いた。しかし、それ以上に温かいものも感じて、彼はしばらくの間たたずんでいた。

「変わった奴だ」

サスケは少し、笑った。

そして今、空になった紺色の弁当箱を見下ろし、彼は腕を組んでいた。渡された弁当は少し覚悟していたものの、普通に美味かった。彼もある程度自炊はするが、ここまでの腕はない。だから、そのこと自体はいい。問題は、

「これをどうするか」

これ、とは紺色の弁当箱のことだった。中身は空なのでもちろん

軽い。

「返すべきだよな」

自信なさ気にサスケは呟く。捨ててもいいとは言われたものの、食べたのだから空になった箱は返すべきだ。返す際にあの時のことを謝るチャンスでもある。しかし。サスケはグダグダと考え込んだ。いつ返すべきか。学校、は無理だ。校内では女子がうるさい。揶揄されるのが嫌でわざわざ中庭に弁当を隠した意味がない。家に直接届けるのが1番だったが、サスケはサクラの家を知らない。

「放課後待ち伏せてってストーカーか俺は」

普段冷静なサスケには珍しく随分と混乱しているようだった。

* * *

いつも楽しみな昼休み。誰にも邪魔されないようにとナルトは木の上で弁当箱を開けた。いつも以上に多種多様なおかずが見え、自然と頬が緩む。今日は随分と豪勢だった。

「へへんっおいしそうだってばよ。いっただっきま……！」

ニヤつく顔を抑えもせずにナルトは両手を合わせ、息を潜めた。普段人が来ないその場所に誰かが来たのだ。

あ、あいつ。

透かした顔をした少年を見て、ご機嫌だったナルトは唇を尖らせた。ナルトは少年、サスケが好きではなかった。

早くどっか行けつてばよ。じゃないとサクラちゃんのお弁当が食べれないー！

そわそわしながらサスケが立ち去るのを待っていると、あろうことか。サスケはナルトが座っている木の真下に座り込んだ。どうやらこの場で昼を食べるらしいと悟ってナルトは「キーンっ」となっていました。

なんで今日はここで食べるんだってばよ。

ナルトは毎日この場で昼食をとっているが、サスケの姿は今まで見たことがない。仕方がない。移動するかと彼が思った時、サスケが弁当を開けた。

慌てて口を手で塞がなければきつと声を漏らしていたらう。ナルトは呆然とした。サスケの弁当に入っている料理は、今ナルトの前にあるものと酷似していた。

ああ、そうか。

中身の配置や彩などには若干の違いがあるものの、ナルトにはあの弁当を誰が作ったのか分かった。他にもどうして今日は豪勢なのか、とか。彼女が妙に落ち着きなかったのはどうしてなのか、とか分かってしまうと急に体が冷え、移動しようとした体勢のまま、ナルトは動けなくなった。

時折サクラがサスケのことを見ているのは知っていた。サスケもまたサクラを見ている事にも気づいていた。

だが2人の視線はどこか申し訳なさそうな。罪悪感を伴った視線で。2人の間に何かあったのだと察しても、あまり気にしたことはなかった。

ナルトは視線を自分の弁当箱に向けた。サスケの弁当を見た後では明らかに見劣りがした。自分にとって特別なのはサクラだが、サクラにとって特別なのは自分ではない。目の前に突きつけられた現実、彼は少し肩を落とす。しかしすぐに立ち上がり、

「サスケエー！」

叫びながら飛び降りた。

* * *

突如降ってきたオレンジ色の塊に、サスケは間抜けにもぽかんと口を開けてまいった。

「サスケエ！」

金髪に青い瞳の少年には見覚えがある。うずまきナルト。アカデミーの同級生で、そして自分と同じ、孤独を知る者。

「なんのようだ。ウスラトンカチ」

とりあえず動揺を隠し、いつもの声を出した。ウスラトンカチと呼ばれたナルトはムカツとした顔をした。忍びがそんな分かりやすくてどうする。思ったものの、サスケは口には出さなかった。

「お前にはぜってえ負けねーってばよ！」

ナルトは指を突きつけてそれだけ言うと、オレンジ色の包みを抱えて去って行った。

「なんなんだ、あいつは」

意味不明な行動に呆れた。

行動の意味をサスケが悟ったのは、その日の夕方だった。

弁当箱を返す方法を考えながら帰宅していたサスケの目の前に、見慣れた色が見えた。そういえば途中まで帰り道は同じだったと思ひ出す。まだ友達らしき2人と一緒にいるが、他に同級生は見えない。家まで尾行するわけにもいかないので、今が返す絶好のチャンスだった。そして一言謝って、このもやもやとオサラバすればいい。

「サークーラちゃん」

意を決してサスケが声をかけようとした時、能天気な声が響いた。

「ナルトっ？」

「へへっ。今日の一段と美味かったってばよ」

「それは良かった、けど……どうしたの、突然？」

自然と話す2人は仲がよさそうだ。サスケの記憶には2人が学校で話していた覚えはないが、ナルトがオレンジ色の包みをサクラに渡したのを見て、そういうことかと理解した。ポケットに入れた手を痛いほど握り締める。そうでもないかと、また怒りをぶつけてしまいそうな気がした。

表面上は何事もなかったようにサスケは彼らの横を通り過ぎた。

* * *

突然話しかけてきたナルトにサクラが驚きつつも喜んでいると、彼が通り過ぎるのが見えた。

「あ、サスケ君。またね」

イノが目をハートに変えて声をかけ、一瞬サスケと目があつた。ようにサクラは思った。結局サスケは何も言わずに立ち去ったが、イノは「やっぱりカッコいい」とうつとりしていて、挨拶が返つてこなくても良いなんて変わつてゐる。サクラは何度目か分からない感想を抱いた。

「ねえねえサクラちゃん。明日は俺も一緒に昼飯食つていい？」
「えっ？」

ナルトが大きめの声を出した。サクラはまた驚く。本当に今日のナルトはどうしたんだろうか。少し心配になった。

「何あんだ。女の子の空間に割つて入ろうつて言つのか？」

サクラの沈黙をどう受け取ったのか。イノがからかうように言う。ナルトはちげーよと向きになって反論した。

「なんだよ。シカマルだつて入つてゐるじゃねーか」

「ああ、あれね。いいのよ、あれは数に入らないから」

「……えーっと。いつもこんな感じなの？ サクラちゃん」

「まあ、概ね」

「なんかシカマルが可哀そうなヤツに見えてきたつてばよ」

「とりあえず、あたしは構わないわよ。ナルト1人ぐらい増えたつて」

「そう。ヒナタはど……あれ？ ヒナタは？」

振り返つても、ヒナタがいたはずの場所には空気しかなかった。サクラが首をかしげると、イノがニヤニヤしながら「あそこあそこ」と指を刺す。不気味な笑顔にサクラが顔をしかめながら指差された

方角を見ると、10メートルほど離れた電柱の影に隠れたヒナタがいた。

イノがあのだ笑顔のままヒナタに近寄っていく。ビクリと肩を震わせたヒナタだったが、イノに何事か囁かれ、サクラに向かって頷いた。イノが戻ってくる。

「オーケーだつて」

「おっしゃ！ ヒナター、ありがとな」

「（こくこく）」

「ちよつとナルト。あたしには感謝の一言もないの？」

「あー、イノもありがとうだつてだよ。……じゃ、サクラちゃん明日もよろしく」

手を振つて上機嫌で去っていくナルトをよく分からぬままサクラは見送った。ヒナタが戻ってきたのはナルトが角を曲がつて姿を消した後だ。何やら興奮した様子でサクラに詰め寄ってきた。

「さつさくつちゃ！ いいいいいまのっなんっおべんとうが、たべ」

「はいはいはい。ヒナタ、とりあえず深呼吸しなさい。はい、すつてえはいてえ」

すーはーすーはー。何度か深呼吸をして落ち着いたらしいヒナタを見て、イノがサクラに向き直った。楽しそうな笑みに、サクラは思わず1歩下がった。

「さ。吐くもの吐いてもらいましょうか」

「吐くもの吐いて、サクラちゃん！」

別に隠すことでもないのでサクラはナルトとのことを2人に話し

た。この時初めてサクラはヒナタが恋をしていたこと、その相手が誰であるのかを知った。

「ええええっ！ そうだったんだ。全然気づかなかった」

「あんた鈍いもんね」

「言わなくてごめんね、サクラちゃん。その、は、恥ずかしくて」

「ううん。私こそ気づかずゴメン。知ってたらもっと前からお昼ご飯ぐらい引っ張ってきたのに」

「ってかあんた。他にもいろいろ隠してるでしょ？ この際だから吐いてしまいなさいよ」

「サクラちゃんはサスケ君が好きなんだよね」

「へっ？」

「あ！ やっぱりヒナタもそう思う？ ま、負ける気はないけど」
「えっと？」

「自覚ないの？ サクラちゃん、サスケ君のことよく見てるよね」

「自分で気づいてないとか、ほんとにつぶいわね、あんた。ほらほら、お姉さんに話してみなさい」

2人から詰め寄せられたサクラは、彼女たちに語らざるを得なくな
った。

女の子って怖い。

サクラは実感した。

第十二劇「お弁当がみつ」(後書き)

複雑な関係カモン！(笑)

ナルトは落ち込むよりこんな感じで前向きなのが良いですね。サスケは変なプライドがあつて素直になれなさそう。このサクラは原作ほど押し押せなタイプじゃないので、もどかしい感じ。まだこの時点ではつきりラブなのはナルト↓サクラぐらいですね。サスケとサクラは罪悪感でもやややっているだけです。

あと女の子同士のコイバナってやつぱいいですね、という話。今回やたらと長くてすみません。一話一話の量の違いに愕然とします。

第一章は十五劇までの予定(は未定)。

修正&空白行入れました(11・04・05)

修正(11・06・12)

第十三劇「せなか」

生まれてからずっと見る夢があった。だからサクラは今見ているものがいつもの夢だと知っていた。

『待つて』

夢の中で、サクラはずっと誰かを追いかけている。ありったけの声を出して精一杯手を伸ばすのに、誰かは振り返ることなく背中だけをサクラに見せ続ける。走っても走っても、歩いているだけの『彼』との距離は開いていった。

『待つて、待つて……君！ 置いていかないで』

その背中が見えなくなったところでサクラはいつも目が覚める。ぼやけた視界の中、伸ばされた自分の小さな手が、ひどく頼りない存在に見えた。

夢を見た日はいつも以上に修行に没頭した。没頭せざるを得なかった。他の事を考えたくないのだ。

無心になってクナイの素振り를續けていたサクラだったが、一端休憩しようと呼吸を整えてがくりと膝を地面に落とした。

「あれ？」

口からのんきな声が漏れ出た。サクラは足に力を入れようとするが、力の入れ方を忘れたように足は言う事を聞かない。身体を見下ろすと手も震えていた。いや、全身が震えていた。そこで気づいた。ああ、アレか。

時折やってきてはサクラを悩ませているものがきたのだ。

「はっ」

呼吸が乱れる。震える手で口元を押さえようとしたが上手くいかず、苦しくてその場に倒れ込んだ。短い呼吸が何度も繰り返され、心臓は文句を言うように激しい音を立てた。

「う」

目がカバンをとらえ、ぼんやりした頭でもあれを使えばと手を伸ばす。カバンまでは少し距離があった。手は届かない。誰かを呼ぶうにも声が満足に出せない。声が出たとしても演習場付近は人が少ないので、助けはなかったろうが。

「おっおい！ どうしたっ？」

しかし聞こえた甲高い他者の声に、叫びたくなるほどの安堵をサクラは感じた。口調からすると男の子だろうか。顔は視界がはつきりしなかったので見えなかった。

「はあっはあ、か、ばん」

「カバン？ あっ待ってろ」

途切れ途切れの言葉を拾ってくれた男の子は、サクラのカバンを持って傍にしゃがみ込んだ。サクラはありがとうを言う前にカバンを開けて顔を中に突っ込んだ。背後で驚いた気配を察したが、気にしている場合ではなかった。……ただ、背中をそつとさすってくれたのが心地よかった。

しばらくそうしていると呼吸が落ち着き、心臓も静かになったのでサクラはカバンから顔を出した。まだ身体は震えていた。立てる

ようになるまでは時間がかかるだろう。

「大丈夫か？」

心配そうな声を出し、男の子が顔を覗き込んできた。だが、サクラの視界は酸欠と涙でぐにやぐにやしており、やっぱり彼の顔は分からなかった。

「う、はっだいじょ」

「ぶじやなさそうだな。ちょっとここで大人しくしてろ。誰か呼んで来る」

「あ」

男の子はサクラが止める前に走り出していた。――走り去る彼の背にはうちの紋様。その背が、夢と被った。

『待つて、待つて……君！ 置いていかないで』

サクラが手を伸ばした時には、すでに彼の姿は見えなくなっていた。

その後、駆けつけてきた里の大人に病院へ連れて行かれたサクラは、そこであの男の子の名前を知った。

お礼を言いに家へ行ったものの生憎とサスケは留守で、彼の兄に伝言を頼んだ。

何度か直接言おうとサクラは足を運んだが、サスケの姿を見ると夢のことを思い出して声が出なくなった。最近ではそんなこともなくなったので、改めて礼を言おうと弁当を渡した。

* * *

「ちょっといきなりお弁当って！ 抜け駆けはなはだしいわ」

しみりしそうになった時、イノがいきり立った事でそんな空気が吹っ飛んだ。心の中でイノに感謝しつつ、サクラは苦笑した。

「抜け駆けって、別に私はお礼がしたかっただけで。たしかになんでお弁当だったのか自分でも分からないけど」

「ふうん。ま、今のところはそういうことにして置いてあげる。けど、負けないんだからね」

気合を入れているイノに更なる訂正はいれなかった。こうなったイノにいくら言っても無駄なのだ。だてに彼女の親友はしていない。

「でもサクラちゃん、本当に料理上手だもんね……いいなあ」

「上手って言うかまあ、毎日作ってたら自然にね」

「そうだ。サクラ！ 今度あたしたちに料理教えなさいよ」

「い、イノちゃん？」

「別に良いけど、どうして」

「あんたばっか料理上手アピールはズルイじゃない！ あたしもお、サスケ君にお弁当作ってえ、はいアーン、なんちゃってキヤー！」

「ズルイって言われても……聞いてないし。はあ。で、ヒナタはどうするの？」

「よかつたら教えてもらってもいい？」

「もっちゃんよ。ナルトの好物とかも教えてあげるから安心して」

「ささささくらちゃん！」

真っ赤になったヒナタにハハハとサクラは明るい声を出した。サスケとの関係修復はできなかったが、2人とさらに友情を深められ

たから、結果的には良かったと思った。

「2人とも大好きよ」

サクラは笑顔で2人に抱きついた。

第十三劇「せなか」（後書き）

イノの一人称はWIKIによると「私」らしいのですが、勘違いしていました。当方ではこのまま「あたし」でいきます。

サクラがなっているのはいわゆる過呼吸。字のごとく呼吸し過ぎでなります。対処法は自分の吐いた息を吸わせること。袋なんかを口元に当ててあげるのがよいらしいです。

サスケとの出会いは特にご都合主義になっているかもしれませんが、最初の方から構想としてありました。なぜ彼がそこにいたかは同期の中で1番演習場を使っているのがサクラとサスケだったからなんですけどね。描写をどこにいれたらよいか分かりませんでした。いつか、書けたら良いな。

このサクラがどういう存在なのかは後々。

原発、作業員・周辺住民の方は大丈夫なんでしょうか。心配です。こちらの連載はちよつとどうなの？ な、内容にならない限り投稿を続けます。

修正&空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第十四劇「妨げるもの」

アカデミーの教育は5年間で、卒業試験に合格したものだけが忍びとなれる。5年が長いか短いかは各々の取り方次第だが、サクラには月日があつという間に流れている気がしてならない。入学してからもう3度めの春を迎えていた。

サクラの修行は、入学当初とは比べものにならないほど質、量ともに向上していた。今も木登り修行の次のステップ、水面歩行をしている。

水面歩行とは名の通り水面を歩く修行だ。足の裏から一定量のチャクラを放出し続けて身体を支え、水面に浮かす。木や壁と違い水面は不安定でコントロールは難しく、チャクラも木登り以上に多くのチャクラを使う。いっばしの忍びなら当たり前にできることだが、まだ忍びにすらなっていないものにはかなり難しい。

しかし、サクラはわざわざ足に意識を集中させずとも平然と川の上に立っていた。何か考えているのか、眉間には年に不相応なシワが寄っている。

「はあー。ホントに基礎しかやってないんだけど、これ以上はどうしたらいいんだろ」

ほとほと困り果てていた。

書物は一般に貸し出されているものなら片っ端から読んだものの、今サクラがやっている以上のことは載っていない。忍びとは存在こそ公になっているが、内情はあまり知られていないのだ。忍びの技術は便利である一方、扱い方を誤れば危険極まりないものであるから仕方がないことではある。だからこそその学校で、誰もが忍びになれるわけではないのだ。

では誰かに教わろう、としたところで下忍（下っ端の忍び）です

らないサクラに教えてくれるわけはなく、教わる相手もない。イノやヒナタは忍びの一族なので親に特殊な術を教わっているが、サクラの家は一般家庭だ。第一、忍びの家系にはそれぞれ秘伝の技があり、同じ里のものでも教えてはくれない。もつとも、教えてもらったとしても、一族の血を引いていないものには扱えないことがほとんどだ。

もちろんアカデミーには親が忍びでないものも大勢いる。だが、なぜだかサクラと仲が良いものはほとんどが忍びの一族の血を引いていた。イノ、ヒナタ、シカマル、チョウジ、キバ、シノ、サスケ……ナルトは、分らない。彼の親をサクラは知らないから。

「私、本当に強くなってるのかな」

両手のひらを見下ろす。小さな手は、マメや怪我だらけで全然女の子らしくなかった。サクラは少しそれが悲しく、それ以上に誇らしい。つぶれたマメの上にマメができてまたつぶれ、を繰り返した手はごつごつと硬くかさついていた。痛くて悲鳴を上げながらも修行を続けた自分の誇りである。

翡翠の瞳が潤んだ。

誰よりも修行したとは言わない。それでも、どうしてここまで成果が出ないのか。手裏剣をなげれば適度に当たり、適度に外れる。術を使えば成功はするものの、思った結果はいつだって出ない。試験の時はいつも重力が増したような錯覚を覚えた。

「このままだと、私はまた」

——サクラっ！

「っ！」

頭の中で呼ばれた自分の名前。目の前には広くて力強い背中。背中は徐々に小さくなり、やがて紺色をまとう。手を握り締めた。

「分かってるよ。分かってる。諦めたり、しない」

力強く言い切った彼女はいつものメニューをこなし始めた。

第十四劇「妨げるもの」(後書き)

忍びについての記述は捏造です。誰もが簡単に忍者になれるなら誰も忍者に依頼しないだろうという判断から。第一危ないしね。

サクラの成績について質問をいただきましたがちゃんと理由があります。後々明らかになる、と、思います。お楽しみに。

訂正(11・03・28)

修正&空白行入れました(11・04・05)

修正(11・06・12)

第十五劇「懺悔」

サクラに兄弟はいない。親戚という親戚もほとんどいない。祖母は母方父方両方ともすでに亡くなっていたし、近しい者は叔父が1人いるだけ。しかし叔父は行方不明。他にも探せばもしかしたらいるかもしれないが、そこまでしなければ分からない親戚を、果たして親戚と呼べるのかは疑問だ。

まあ。何が言いたいかというと、サクラには身元引受人がいない、ということであった。

事が起きた時、サクラは五歳だった。本人からしたら『もう』五歳ではあったものの、世間一般的に言えば『まだ』5歳の子供ではない。いくら治安がよく連帯感の強い木の葉の里と言えども、1人暮らしするには早い。……前例はあるが。

しかしサクラは1人で暮らすこととなった。彼女自身が強く望んだからだ。

当時から仲が良かったイノには大反対され、イノの両親からは一緒に暮らすことも提案されていたが、サクラは家売り払い、小さなアパートに引っ越した。両親の遺産にはなるべく手をつけず、新聞配達をして生活費を稼ぐようになった。

両親と過ごした家はすでにない。数年の間は空き地になっていたが、今ではまた新しい家が建っている。こうしてあの記憶は薄れ、新たな記憶を積み上げているのだろう。周囲は確実に時を進め、変化している。

「じゃあ私は？」

サクラは問いかける。

「私は進んでる？」

手を伸ばし、硬い樹皮に触れた。サクラと同じ名前のその木は、誕生日に父が買ってきたものだ。小さかった背はあつという間に抜かされ、今では見上げなければならぬほど立派に育った。この木ほどではないが、この体も大きくなった。だということになぜなのだろう。時が止まっている気がしてならない。

顔を上げれば枝が好き勝手に伸びているのが見える。だが、花は見えない。花どころかつぼみすらそこにはない。里には桜色が溢れているというのに。この木は、1度も花を咲かせたことがない。

「お父さん、お母さん。私ね、私……卒業したよ、アカデミー」

木の枝が少し風に揺れた。

「卒業試験は分身の術だったよ。それで明日は説明会があつて、あつて」

言葉が出てこなくなった。

もうすぐ、自分の役目が終わることを理解していた。彼女が目を覚まそうとしている。そうしたら、自分は――。

「ねえ、サクラのお父さん、お母さん。怒ってますか？ 憎んでますか？ あなたたちから娘との時間を奪った私を」

翡翠の目がゆっくりと閉じられた。

「もう少しだけ待ってください。後少しで私は――消えますから」

第十五劇「懺悔」(後書き)

謎な話ですみません。今は軽く流していただいていてかまいません。

あと、今回で第一章完結。第二章に入ります。

もっと修行編も考えていたんですが強くなりすぎて困るし、何と言っても原作に入らないとつまらない(爆)。

それから第零劇をちょびつと改定。ほんとしただけですが、関係してくるのは最後の方なので気にしなくても大丈夫です。

叔父はオリキャラになります。登場予定は未定。迷った末に出したい時に出せるようにとこのようにしました。ちなみに父親の弟です。

修正&空白行入れました(11・04・05)

第十六劇「前途多難なスリーマンセル」

忍びの証である真新しい額当てをつけた子供たちが教室に集まっていた。今日はアカデミー卒業生の説明会である。

どの子供たちも……大抵の子供たちが期待に満ち溢れた顔をしている中、ものすごくしんどそうな顔をしているものがいた。

「ぐふう」

机に突っ伏しているのは、リボンの代わりに額当てで髪をまとめたサクラだ。説明会はこれからだというのにすでに疲れきっている。

「大丈夫？ サクラちゃん」

そんなサクラを心配するヒナタは首元に額当てを緩んだ状態でつけていた。イノは呆れた顔をしている。彼女の額当ては腰だ。どうやら額当てといえど、つける場所は自由らしい。

「最後になるからって頑張りすぎるからよ。馬鹿じゃないの？ あんた」

「うう。返す言葉ありません」

今日で忍びになるわけだが、忍びには任務が与えられ、任務に応じた給金が与えられる。今までよりも忙しくなることもあり、新聞配達は続けられない。なので今までお世話になった恩返しのもつりで、まあ、張り切りすぎたのだ。いつもの2倍配達すれば、ソレは疲れるというもの。

「ふふ。でもそういう間抜けなところがサクラちゃんのいいところ

だよな」

というフロアなのか。トドメなのか。相変わらず分からない一言をサクラがもらった所で、サスケくーんと黄色い声が教室中に響き始めた。見ると、いつの間にか隣からいなくなっていたイノが、窓際に座っているサスケの席を巡って他の女子生徒と争っている。

——朝から元気だなあ。

いつもなら気にしないサクラだが、疲れきった現状で黄色い声は耳に痛い。頭まで痛くなりそうだったので耳を塞いだ。

のだが、隣にいるヒナタの様子がおかしくなったので、サクラは目線を追いかけた。そこには相変わらずドハデなオレンジの服を着たナルトと、紺色のシャツを着たサスケがいたわけだが、2人の距離はありえないほど近かった。というよりも、2人の距離はゼロで……つまり、何がどうなったのかは不明だが彼らはキスをしていた。ちなみに位置関係は、サスケが席に座っていてナルトが机に乗っている状態だった。

あまりにも衝撃的な場面を目撃して数秒。

「はっ？」

思わず耳から手を離してしまったサクラだが、気にせず2人を凝視した。

一瞬そういう関係なのかと思ったが、気持ち悪そうにしている様子を見る限り、違うらしい。前の席の男子が「え？ 俺のせい？」と言っていることから、彼が意図せずナルトを押してしまい、ああいうことになった、と思われる。

「ちょっとナルト、アンタねえ」

「よくもサスケ君の」

「えええっ俺のせいじゃねーってばよ」

女子に詰め寄られているナルトは視線を彷徨わせ、こちらを見た。ナルトと目があつたサクラは、口だけを動かした。

「（バーカ）」

「（そんな、サクラちゃん、助けてつてばよ）」

ナルトの言葉を理解してはいたものの、先ほどまでのしんどそうな顔はどこへ行ったのか、サクラは面白そうな笑顔を浮かべるだけだった。

「さ、サクラちゃん。いいの？ 助けなくて」

服の裾を引っ張ってきたヒナタが控えめに言ってくる。しかし、

「ん〜？ ヒナタがいけばいいんじゃない？」

「えっええっ？」

含んだ笑みを向けると途端に顔を赤くした友を、サクラは微笑ましく思いながら説明会が始まるまでからかった。……決していつもの仕返しがしたかったのだとか、そういうことではない。違つたら違つ。

そうこうしているうちに担任であるうみのイルカが教室に入ってきた。途端に教室が静まり返る。

「君たちは1人前の忍者になったわけだが、まだまだ新米の下忍だ。本当に大変なのはこれからだということを決して忘れるな。」

今後、君たちは三人一組スリーマンセルの班を組んで、担当の先生のもと、任務をこなしていくことになる」

スリーマンセル。

イルカの言葉に反応して教室がざわついた。イノもヒナタもそわそわとしている。イノはサスケと、ヒナタはナルトと組みたいとも思っただろう。

そんな2人の間でサクラは「誰とも組みたくないな」と思った。特にサスケ。どう接すればいいか分からないし、他のメンバーにせよ。誰かがいると頼りきりになってしまいそうで嫌だった。まあ、そんなことを言っても仕方がない。3人という数字が任務遂行の上で適切なことは以前読んだ本で理解していた。

「力のバランスが均等になるよう、班分けはこっちで決めた。発表するぞ」

緊張して呼吸がどこおかしいヒナタ。サスケ君と組めますようにと何度も呪文のように呟いているイノ。憂鬱なため息をついているサクラ。と、まさしく三者三様の反応を見せながら名前が呼ばれていく。6班まで呼ばれたが、3人はまだ呼ばれない。

「次、7班。うずまきナルト」

ヒナタが面白いほど肩を震わせた。

「春野サクラ」

ナルトが立ち上がり、ガッツポーズをした。

「うちはサスケ」

イノとヒナタがぐっぐと肩を落とした。

「次、8班。日向ヒナタ。犬塚キバ。油女シノ」

「えっあ、はい！」

聞こえてくる他の班組みを右から左へと流しながら、サクラは少し茫然としている。どうしてよりによってこの2人なのか。サクラは今日1番の憂鬱な息を吐き出した。

「ちょっとサクラ！ サスケ君と組めるなんて羨ましいのになんのため息ついてんのよ」

が、隣のイノに怒られた。しまった。口を塞ぐがすでに遅し。

「まったく。なんであんなやつがいいのかね、女ってやつは」

ダルそうな声にイノの矛先がそちらへ向く。黒髪を高い位置で1つにくくった少年、シカマルは、今日も相変わらずやる気がなさそうだ。彼の隣ではチョウジがポテチを食べまくっている。

「そんなことも分からないの？ だからあんたはモテないのよ。まったく、あんたみたいなのとは組みたくないものだわ」

「へいへい。そうかよ」

自分から話しかけたわりにシカマルはどうでもよさそうだ。サクラはハハハと笑い、「ほんとそうだね。イノちゃんの言う通りだよ、サクラちゃん」という声に、笑顔のまま固まった。どうしよう、振り向きたくない。

「次、10班。山中イノ。奈良シカマル。秋道チョウジ」

「うぐっ」

「組むことになったみたいだな」

何事か言い合う2人をよそに、サクラは泣く泣くヒナタの方を向いた。そこには満面の笑みを浮かべたヒナタがいて、気合を入れていなければ確実に悲鳴を上げていただろう。ヒナタははにかむことはあれど、あまり満面の笑みは浮かべないのだ。

「ほ、ほらあれよ。先生に直談判すれば変わってもら」

「イルカ先生ってばよ！」

必死になだめようとするサクラの声は、ナルトの大声でかき消された。教室中の視線がそちらに向かう。

「優秀なこの俺が、なんでサスケなんかと組まなきゃならないんだってばよ」

「あんのヤロー！ ナルトの分際でサスケ君になんてことを」

「いつイノ！ ちょっと落ち着いて」

睨み殺さんとしているイノをなだめるサクラは、両手に花、ではなく……深く考えるのはよそう。

イルカが、はあと腰に両手を当ててため息を吐いた。

「あんなナルト。サスケはアカデミートップの成績。ナルト、お前はドベ！ 班の能力を均等にするとどうしてもそうなるんだ。分かったかつ？」

ドベのところで教室が笑いに包まれる。サクラも一緒に笑いたいが笑えなかった。右からの圧力が半端ない。

「班、変わらないみたいだね」

「アハハハハ……ごめんなさい」

別にサクラが決めたことではないのだが、謝る以外の選択肢は思いつかない。

「フン。精々足を引つ張るなよ。ドベ」
「なんだとおっ」

サスケとナルトは早速いがみ合っているし、親友からはこの通り。せめて友との関係を修復しようとサクラは言葉を探すも、ふさわしい言葉が見つからない。あたふたと無意味に手を動かす。

「くすくす。冗談だよ、サクラちゃん」
「え？」

「一緒に班になっちゃったら、私、緊張して何も話せなくなってしまう。だから、これでいいの」
「んゝそうね。サスケ君は押しても反応ないから、押して駄目なら引いてみる作戦よ」

サクラはパチパチと数度まばたきをした。

「2人とも前向きだね」
「あんたが後ろ向き過ぎるのよ。ってかいつも考えすぎなの、サクラは」
「サクラちゃん、がんばろう？」

2人から言われ、考える。確かに同じ班になれたのならサスケとの関係修復にちょうどいい。誰かと組むと頼りそうになるのなら、頼らないよう心身ともに強くなればいい。

考えれば、そう悪いことばかりではない、か？

「うん、そうする……けど」

頷きながら、サクラは冷や汗をかいた。

「あの目線はものすごく痛いんですけど？」

あの目線とは他の女子たち（サスケファンクラブ）のあつゝゝゝい目線のことだ。ヒナタはついと目をサクラから逸らし、イノは、

「まあ、諦めなさい」

「やっぱり？」

肩をぽんと叩いてきた。サクラはがっくりと肩を落とす。——前途多難だ。

第十六劇「前途多難なスリーマンセル」(後書き)

ようやく動く感じですね。第二幕開演。サクラの運命やいかにつ？

修正&空白行入れました(11・04・05)

修正(11・06・12)

間劇「まるで檻のよう」

ナルトにサスケ、ね。あいつも大変そうなところに入れられたものだ。

視界の隅でイノとヒナタを宥めているサクラを捉え、シカマルはそんなことを思った。

シカマルはナルトやサスケと特別親しいわけではないが、特別嫌ったり避けたりしているわけでもない。道端で会えば挨拶はする。その程度だが知っている事もある。

先ほどイル力が言った通り、サスケはトップの成績でナルトはドベ。それだけでも窮屈だろうに、この2人はどうも相性が悪いらしい。何度も衝突する場面を見てきた。一見ナルトが一方的にサスケをライバル視しているように思えるが、そうじゃないことは観察していれば分かる。そんな2人に囲まれば、ただでさえいろんなものを抱え込んでいるサクラの負担になるのは、確実だった。

あいつ、最近吐き出さねーからなあ。

出会った当初は、シカマルが上手く誘導すればそれだけでポロつとこぼしていた。しかし最近そうそう引かからなくなった。日ごろの勉強の成果かもしれない。こんなところで発揮するなと思っても、これが中々に手ごわい。単純に知恵がついたこともある。だが、それだけじゃない。もっとも厄介なのは、

「シカマル、一緒のチームになったね」

「ああそうだな。これからも頼むぜ」

「うん」

駆け寄ってきたチヨウジと軽く言葉を交わす。チヨウジは後ろを振り返ってイノやサクラにも声をかけていた。

「イノもよろしく！」

「はあ。まったく代わり映えしないメンバーよね」

翡翠色の目がチョウジに向けられた。シカマルの位置からだと、その瞳はよく見えた。

「いいじゃない。気兼ねない相手でさ」

「ムキー！ サクラには慰められたくないわよ！」

「ヒドイなあ」

怒り出したイノにサクラは呆れて苦笑している。シカマルは会話をなんとなく聞きながら、サクラの目を見ていた。翡翠の奥に、彼は時折『渦』を見た。グルグルと回る『渦』を見ていると奥へ奥へと吸い込まれて、最後はいつだって身動きが取れなくなってしまう。図書館で敗北し続けているのは、つまりこのせいだった。

チョウジやイノにさりげなく聞いても見えないというその『渦』は、気のせいかと思うシカマルをあざ笑うように消えては現れる。今もかすかに見え、捕らわれる。

「ん？ シカマル、お弁当食べないの？」

「……食べる」

いつの間にか隣で弁当のフタを開けていたチョウジの声で我に返った。シカマルは心の中で彼に礼を言う。あの状態になると自分では解けないのだ。だからなるべく見ないようにと自分を戒めているのだが。

カバンから母親が準備してくれた弁当を取り出す。

「まったく、俺は馬鹿か。」

見るな見るなとシカマルがどれだけ言い聞かせても、目は勝手に翡翠を追いかけて、身体は嬉々として『渦』に呑み込まれる。

「相変わらずすごい量ね」

「はは。あまり食べ過ぎると身体に毒だよ」

「大丈夫！ 父ちゃんも母ちゃんももつと食べてるけど健康だし」

「そ、そうなんだ」

横から聞こえる会話に、振り返りたくなって、シカマルはため息を吐いた。

間劇「まるで檻のよう」(後書き)

結構謎なお話。徐々に明らかに出来たらいいなあ。
しかし、シカマルは書きやすい。

修正&空白行入れました(11・04・05)

修正(11・06・12)

第十七劇「怪しい男」

新米下忍の第7班は、教室に取り残されていた。

昼休憩の後、他の班はそれぞれ担当上忍につれられてどこかへ行つたが、7班だけまだ来ていない。

「おっせえなあ」

サスケは無言、サクラは読書をする中、ナルトはドアから廊下を覗いていた。廊下は静かなもので、担当の忍びが来る気配は皆無だ。教師の姿すらない。

「……はあ。ナルト、少しは落ち着いたら？」

「だってよおサクラちゃん。なんで俺たち7班の先生だけこんなに遅いんだってばよ。他の班はとくにいつちまったのに」

仕方がなくサクラが声をかけると、ナルトは若干嬉しそうな顔をしてから不満をこぼした。サクラはナルトから再び本へと目を落とす。

「私を知るわけないでしょ。でも来ないものはしょうがないんだから、おとなしくしてなさい」

それきりまた本に意識を集中した。ちなみに今サクラが読んでいるのは『木の葉の歴史』だ。アカデミーの教材とは違う、事細かに書かれた分厚い専門書である。決して12歳の子供が読むようなものではない。

また相手にされなくなったナルトは手持ち無沙汰に視線を彷徨わせ、サスケと目が合った。2人の間に静かな火花が散る。

「ふんっ」

しばらくの後、ほぼ同時に視線は逸らされた。

移り変わった視界の中で、ナルトは黒板消しに目を留めた。ぽかんとしてから、すぐに何か思いついたらしく「にひひ」と笑い、黒板消しと椅子を持ってドアまで移動した。サスケが訝しげにナルトを目で追いかけた。

ナルトは置いた椅子に乗り、黒板消しをドアの1番上に挟む。ドアを開けると黒板消しがドアを開いた者の頭に落ちる、という簡単な罠の完成だ。

「上忍がそんなブービートラップにひっかかるかよ、ドベ」
「なんだとてめっ」

小馬鹿にしたようなサスケの声にナルトがいきりたったその時、ドアの隙間から手が見えた。喧嘩するのも忘れた2人は、緊張の面持ちでドアを見つめた。ドアが横に動く。

がらがらっポン！

文字にするならこんな感じだろうか。入ってきた銀髪の男の頭に黒板消しは見事命中し、チョークの粉が宙を舞った。ナルトが腹を抱えて笑う。

「だははははっひっかつた。ひっかつたってばよ。ほらよ、サスケ。ひっかつたじゃねーか」

サスケはナルトの言葉に無言だったが、こんな上忍で大丈夫かという顔をし、サクラはナルトの大声で本から顔を上げたものの、きょとんとしている。状況が分からないのだろう。

入ってきた男は——わざとなのか、自然となったのか——だらし

なく斜めに額当てをつけており、左目が隠れて見えない。更には黒い布で鼻の上までスッポリ隠しているため、見えているのは右目周辺だけ、というかなり怪しい見た目である。

服装は落ち着いた深緑のベストを身に着けていた。このベストは中忍以上の忍びだけに着用を許されたもので、ベストの下に着ている紺の上着とズボンは多くの忍びが着用しているものだ。顔を知らない以上アカデミーの教師ではない。十中八九、彼が第7班の担当上忍だろう。

男は床に落ちた黒板消しを拾い、笑顔で言った。

「なんていうのかな。お前らの第一印象はあ……ま！ 嫌いだ」

* * *

最悪な印象をお互いに持った第7班は、外に場所を移していた。建物の屋上で、男はてすりに腰掛け、3人は男の前へ適当に座った。

「そつだな、とりあえず自己紹介でもしてもらおうか」

第7班を受け持つことになった上忍の男は、面倒そうに言った。
やる気あるのか問いたしたい。

「自己紹介、ですか。えっとどんなことを言えばいいんですか？」

戸惑いがちに声を発したのは班の紅一点、春野サクラ。まだ子供なのに礼儀がなっているなあ。最近の若い子は礼儀を知らないというのに。まだ20代と思われる男はそんなジジくさいことを思い、思ってしまった自分に密かに衝撃を受けた。

とはいえ、そんなことは表に出さず、男は自己紹介について適当に語る。

「そりゃ好きなものとか嫌いなもの、将来の夢とか趣味とか。ま！そんなだ」

「あのさあ、あのさあ？ 俺らのことよりまず先生が自己紹介してくれってばよ」

「んん？ 俺か？」

先生ちよーあやししいさあ。と、遠慮なくズケズケと言ってきたのはうずまきナルト。男は自分を指差して、少し面倒そうに頬をかいた。

「そうだな。俺ははたけカカシって名前だ。好き嫌いをお前らに教える気はない。将来の夢って言われてもなあ。……趣味はまあ、いろいろだ」

カカシは自己紹介をした。サクラやナルトが顔を引きつらせ、小声でささやきあう。

「結局分かったの名前だけじゃない？」

「うん」

「じゃ、次はお前らだ」

生徒たちの声は聞こえていただろうに意に介した様子なく、カカシは淡々と続ける。最初に自己紹介を当てられたのはナルトだった。額に装着した木の葉の額当てをいじりながら、彼は元気良く喋りはじめる。大きすぎる声量に、隣のサクラが少し迷惑そうな顔をした。

「俺の名前はうずまきナルト。好きなものはカップラーメン。もっ

と好きなものはイルカ先生におごってもらった一樂のラーメン。嫌いなものはお湯を入れてからの3分間。趣味はカップラーメン食べ比べ！」

ラーメンばっか。

聞いていた者全員の心が1つになった。が、周りの反応など気にせずナルトは夢を語る。青い目はキラキラと輝いていた。

「んで、将来の夢は火影を越す！ んでもって里の奴ら全員に俺の存在を認めさせてやるんだ」

おそらくここがアカデミーの教室なら笑い声が響いていただろう。火影を越すなんてお前には無理だ、と騒ぎ立てるものもいただろう。その場にいるものは、誰も笑わずナルトの夢を聞いていた。カカシは面白い成長をしたものだとなルトを見ながら、残り2人の反応も観察した。サスケは興味なさそうだが、サクラは真剣に聞いているようだ。少し興味が湧く。

「なるほどね。じゃ、次。女の子……ああ、敬語は使わなくていいから」

これからチームとして任務をこなすかは彼ら次第だが、ひとまずそう言っただけを促した。

「えっと、名前は春野サクラ。好きなもの、というか宝物は2本のリボン。嫌いなものは、ちょっとすぐに思いつかないから多分ないと思う。趣味は……森の散策と植物観察。将来の夢、か。夢って言うより目的は」

サクラは、そこで一端区切り、息を整えた。

「ある人を救うこと」

真つ直ぐ前を向いたサクラは力強く言い切り、「それぐらいかな」と照れくさそうな笑みで締めくくった。

カカシは相槌を打ちながら軽く目を伏せた。担当上忍の元には各下忍の情報があらかじめ伝えられている。名前や顔写真、身長、体重、年齢、成績だけでなく、家族構成や経歴も。サクラの経歴の中にはこんな文章があった。

『エイノ事件被害者の娘であり、本人もまた現場にいた関係者である』

あれからもう7年も経つのか。どおりで年を食う訳だ。

またもやジジくさいことを考えながら、カカシはサクラを見た。

第十七劇「怪しい男」（後書き）

さて、次は原作から離れ、この小説のサクラの過去話になります。
よろしければお付き合ってください。

修正 & 空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第十八劇「エイノ事件」

サクラの家は、父親は医者で母親は元看護師、という医療一家だ。父親は医者という職業に誇りを持っていた。そんな父をサクラはとても尊敬していた。だから朝早くに起きて仕事に行く父親を必ず見送った。彼の背中を見送るのが大好きだった。

そんなサクラであるから、医者というものに関心を持つのは当然の流れだったろう。幼いながらも医者について調べた。人の命を救う尊い仕事だと分かった時は、忍びではなく医者を目指してもいいかもしれないと思ったほど。

勉強に力を入れ始めたのは、おそらくその頃からだ。

「サクラもおとうさんみたいにだれかをすくえるおとなになるの！」

「そうか！　じゃあ勉強頑張らないといけないね」

「うんっがんばるよ」

「はいはい。勉強は分かったから、二人とも好き嫌いせずに全部食べなさい？」

「うっ……はい」

「ううっはあい」

母親は勉強ばかりのサクラを心配していたが、それでも止めたりはしなかった。父親は嬉しいのか、時折サクラを病院につれていつて医療の現場を見学させたりもしていた。

遊ぶより勉強が好きとは変わった子供であっただろうが、それでも両親がいて、いつも笑顔が絶えない。ごく普通の家庭で彼女は育った。

事が起きたのは夕食の時間。

サクラは母親を手伝って食器を運び、父親はテレビを見ていた。

なんら変わらない食卓に、

「春野……お前のせいで姉貴は死んだんだ」

突如響いた声があった。驚いて振り返れば若い男が立っている。いつ、どこから入ってきたか分からないその男に、サクラは見覚えがなかった。しかし父親にはあったらしい。驚いていた。

「エイノさんっ？ 一体な」

「姉貴を殺しておいてお前はなんで笑ってるんだ。なんでお前は、俺は一人で」

サクラは男の言葉を理解できない。父親が顔をしかめたのが見えた。

「エイノさん、落ち着いてください」

「うるさいっ！ お前にも俺と同じ苦しみを与えてやる！ 孤独を知れえっ」

ギョロリとした男の目がサクラを見た。男の手には黒く光るクナイが握られていた。

「——サクラっ！」

何がおきているか分からぬうちに、サクラの前には見慣れた背中があった。

「ちいっくそっ放せ！」

「ごぼっさっ、ら、逃げ」

「どけえ」

父親の身体がゆっくりと崩れ落ちていった。理解が追いつかない男に蹴られた父親が床を転がっていく。床やカーペットには赤いものが付着していた。赤は見ている間にも侵食して周りをどんどん染めていく。

あんなところにペンキ置いてあったけ？

「くそつくそつくそつ！ 勝手に死にやがって。殺してやる殺してやる。お前も同罪だ！」

真つ赤になった目がサクラを再び捉え、すぐに逸らされた。男の腹にピンク色がまわりついていた。

「逃げなさいっサクラあ！」

母親が男の腰に抱きついて叫んでいた。男が忌々しげに舌打ちする。男はクナイを振り回し、母親の目元を切り裂いた。赤色が母親の髪を染めた。それでも母親は男を放さなかった。

「てめえらのせいで姉貴は死んだ、てめえらのせいで！　死ぬつ死ぬつ死ぬええええええ」

クナイの持ち方を変え、男は母親めがけて振り下ろそうとしていた。……ふと、棚の上においてあるハサミがサクラの目に留まった。気づいた時、サクラはハサミを握っていて。

- *
*
*

エイノ事件。

とある家に刃物をもった男が侵入し、その家に住む夫婦を殺害。夫婦の子供は無傷で保護。

犯人の名は影乃ハクト^{エイノ}。姉が一人いたが、病死。その死を担当医であった被害者のせいと逆恨みしての犯行と思われる。犯人は自害。

以上が一般に公表された内容である。以下に詳細を載せる。尚、この情報は把握次第処分すること。

犯人の影乃ハクトは一般人ではなく、暗部の者である。この事実が与える影響を考え非公開となった。また、自害ではなく何者かに刺殺されたと見られているが、現場には他に夫婦の子供（当時五歳）しかいなかったことが確認されている。

凶器はハサミ。子供が握っていたものと傷口が一致。影乃の血を大量に浴びていたことから、子供が殺したと見られるが、仮にも暗部をただの子供が殺せるのか。子供に逆行催眠をかけたが、ハサミを握った以後の記憶が途切れている。

他にも家にはまるで竜巻が起こったような跡もあり、実際に近所の住民が竜巻を目撃している。この事件については不明な点が多々あり、疑問は尽きない。

三代目火影の命により、子供の殺害容疑については不問となった。

第十八劇「エイノ事件」(後書き)

サクラの両親について。

原作では特にサクラの両親については描かれておりません。が、弟子入りの際までに医療に関して特別知識があつたわけでもなさそうなので、おそらく本当に一般人だったと思われます。そしてサクラの性格などを考えても両親は共に健在でしょう。

本小説内では上記の仮定を元に進行します。矛盾していますが後々判明します。

ちなみに、エイノ ハクトは、影乃薄人と書きます。思いついた時ははっと笑った。影の薄い人はもちろんオリキャラです。

修正 & 空白行入れました(11・04・05)

修正(11・06・12)

第十九劇「真逆の夢」

『将来の夢、か。夢って言うより目的は……ある人を救うこと。それぐらいかな』

カカシは意識をサクラに戻し、言葉を反芻した。ある人というのがひっかかったが、彼女は医者の子供だ。不特定多数の、という意味なのかもしれない。

しかしナルトに続いて、この子もまた随分と真っ直ぐ成長したもんだな。カカシは少し感慨深く思いながら、最後の少年を目で促した。彼の夢には想像がついたが。

「名はうちはサスケ。嫌いなものはたくさんあるが、好きなものは別がない」

サスケは平坦な声で淡々と語り、夢の段階でその目に暗い光が宿った。十二歳の子供には不釣り合いな光だ。

「夢なんて言葉で終わらす気はないが、野望はある。一族の復興とある男を必ず、殺す、ことだ」

しんとその場が静まり返った。——やはり、か。

先ほどのサクラとは真逆の目標に、彼女が少し目を伏せたのが見えた。ナルトは、自分じゃなかるうかとビビッているみたいだった。安心しろ。お前じゃないから。

カカシは心の中でナルトを励ました。もちろん伝わることはない。

「よし、三人とも個性豊かで面白い。明日から任務やるぞ」

場の雰囲気など関係ない！ とばかりに能天気な声でカカシは言った。すぐさま元氣を取り戻したのはナルトだ。ワクワクした表情でどんな任務なのかと聞いている。良くも悪くもムードメーカーな少年だ。

「まずはこの四人だけでできることをやる。……サバイバル演習だ」
「さばいばる、演習？」

カカシの一言一言に大きく反応するナルトを余所に、サクラもサスケもかすかに眉を寄せただけで、随分と落ち着いていた。

「もちろん、ただの演習じゃない」

「んん？ じゃあさじゃあさ。どんな演習なの？」

* * *

ナルトが尋ねるとカカシは突然笑い出した。

「何がおかしいんだってばよ、先生」

「くくくくついや。俺がこれ言ったらお前ら絶対引くからさ」

前置きしたカカシは笑いをまた突然止めて、言った。

「卒業生二十七名中、下忍として認められるものはたった九名。残りは全員アカデミーに帰される。つまりこの演習は脱落率六十六%以上の超難関テストって訳だ」

ナルトが大口を開けていた。サスケの表情に変化はあまり見えない。サクラは、少し驚いたものの、むしろ納得していた。卒業試験が分身の術だけでできれば合格、というのは簡単すぎると思っていたのだ。あれで忍びになれるのならほとんど誰にでもなれる。だが、現実には忍びにならない者の方が圧倒的に多いのである。

大きく反応したのがナルトだけだったからか、カカシはちよつと残念そうな顔をした。もっと驚いて欲しかったらしい。

「そんな馬鹿な！ あれだけ苦労したつてのに。じゃあ、何のための卒業試験だつてばよ」

叫ぶナルトをサクラはちらつと見た。ナルトは分身の術が大の苦手なのだ。……全体的に成績は低い、のだが。

そういえばどうやって卒業したんだろ、ナルト。

依然サクラが見たナルトの分身の術は、何やらペラペラの白っぽい言われればナルトかもしれないあたぶん、という物体を生み出していた。さすがにあの状態で合格した訳ではないだろう。どんな特訓したんだか。

「んあ？ ああ、あれは下忍になる可能性のある者を選抜するだけ。ま！ そういうことで明日は演習場でお前らの合否判定をする。

忍び道具一式持って朝五時集合。あ、それと朝飯は抜いて来い。吐くぞ。じゃ、解散」

最後に物騒な言葉を残し、謎の上忍は姿を消した。

第十九劇「真逆の夢」(後書き)

忍者になる難易度について。

忍者が一般人より少ないとしたのは、誰でもなれるなら学校がいらないことや、皆が忍者なら忍者に依頼する必要もなくなり里の維持ができない等が上げられます。他に、戦えない者を避難させるシーンもあるのでこうしました。

まだ演習に入ってません。が、自己紹介のところは結構大事な話なので飛ばしませんでした。

次回はいいよ演習です。かなり気合入ってまして、長めです。戦闘シーンは難しい。

サクラがどう活躍するのかお楽しみに！

あと気になってるんですが、卒業生二十七名なのに十班あるんですよね。一班めが再試験生徒だから一緒に数えていないだけなのか。うーん。謎だ。

修正 & 空白行入れました(11・04・05)

修正(11・06・12)

第二十劇「サバイバル演習の謎」

朝五時、演習場。

まだ日も昇っていない時間ではあるが、元々早起きであるサクラは普段と変わらぬ表情でその場に着いた。

「おはよう、ナルト……サスケ君」

「サクラちゃん、おはあおう」

「……ああ」

眠そうに目をこすったままのナルトと、こちらもいつも通りのサスケに挨拶をした。サスケの名前を呼ぶ時は緊張を押し隠すのに必死だったが、返事が返ってきたことにサクラはホッとする。話しかけるのはあのお弁当事件以来だ。

他には特に話題がなく、騒がしいナルトもオネムなため三人の間には沈黙が降りた。

やがて日が昇り辺りが明るくなった。カカシの姿はどこにもない。疲れたサクラはとうとう座り込んだ。ナルトはいびきを上げている。サスケは黙っているが、機嫌が悪くなっているのが一目で分かる。

「やあ、諸君。おはよう」

と、カカシがやってきたのは影がだいぶ短くなった頃だった。さすがに目の覚めていたナルトが大声で抗議する。いつもならなだめ役のサクラも、じっとカカシを見た。サスケは睨んでいた。

「おっそーいってばよ」

「それがな、目の前を黒猫が通り過ぎてさ。いやっはっはっは……」

「ごほん」

途中で言い訳の空しさに気づいたのか。カカシは咳払いしてナルトの抗議を遮り、目覚まし時計を丸太の上に置いた。丸太は地面に突き刺さるように立てられており、高さはナルトたちよりも少し高い。時計が置かれたのは三本あるうちの真ん中で、セットの時間は十二時、今の時間は十一時過ぎだった。もはや遅刻というレベルではない。

チリン。

サクラたちに向き直ったカカシの手には二本の紐と、それにつけられた鈴が二つ揺れていた。

「今日の課題は俺から昼までにこの鈴を奪うことだ。奪えなかったものは昼飯抜き。この丸太に縛り付けた後、目の前で俺が弁当食うから」

丸太を叩きながらにこやかに告げられた。朝飯食うなつてのは、つまりこういうことだったわけだ。素直に朝飯を抜いてきた三人の腹が鳴る。空腹を忘れるようにサクラが質問した。

「でも先生。鈴が二つしかないけど」

「ん。そうだな。最低一人は丸太行きになる。そいつは任務失敗ってことで失格だ。アカデミーに戻ってもらう。不合格者は最低一人かもしれんし、全員かもしれん。手裏剣使ってもいいぞ。俺を殺す気で来ないと取れないからな」

僅かにサクラは眉間にシワを寄せた。何かが引つかかった。考え込もうとしたが、ナルトの大声でサクラは意識を目の前に戻す。

「先生、黒板消しもよけられないのあぶねーってばよ」

「世間じゃ実力のないやつほど吠えたがる。ま！ ドベはほつとい
て、よいスタートの合図で」

「どべっ？　こんの……くっそ！　たあああっ」

あつさりと言葉を返されただけでなく、ドベと一蹴されたナルト
は目を吊り上げ、クナイを握り締めてカカシに襲い掛かった。
はずだった。

「まあまあ、落ち着けよ。まだスタートは言っていないだろ」

カカシはいつの間にかナルトの背後にいた。ナルトの腕を取り、
金色の後頭部へ彼自身のクナイを向けさせた状態で、何事もないよ
うに立っていた。ナルトはまだ一歩も足を踏み出していない。サク
ラはごくりとつばを飲み込んだ。

いつの間に——見えなかった。これが上忍の実力。

「でも、ま。これで俺を殺す気になったようだな。やっとお前らを、
好きになれそうだ。始めるぞ。

よいい、スタート！」

演習開始だ。

* * *

忍び足るもの、基本は気配を消し、隠れるべし。

基本原則通り隠れたサクラは先ほど中断した思考を再開させ……。

「いざ、尋常に勝負、勝負だつてばよ」

またしてもナルトの大声に遮られた。あの馬鹿。

肩を落としているサクラ同様、カカシもまたがくつとしていた。

忍者の癖に真つ向勝負とは、ある意味で意表をついている。

「あのさあ、お前ちとずれてない？」

「ズレてんのは先生の髪型そうちだろ」

忍者らしくもなく真正面からぶつかって行くナルトに対し、カカシは呆れつつどこまでも落ち着いていた。そして、片手を腰のポーチに入れて中を探る。ナルトもさすがに警戒したのか、足を止めた。

「忍び戦術の心得その一、体術を教えてやる」

言いながらカカシが取り出したのは……『イチヤイチャパラダイス』と書かれた本だった。裏表紙には年齢制限マークが描かれている。つまり、そういう本らしい。なぜかカカシはそのままイチチャパラ（本の略称）を読み始めた。彼の意図がその場の誰にもつかめない。

戸惑っているナルトにカカシはどうした、と問いかけた。彼の目は本から全く離れない。目が動いているので本当に読んでいるのだろつ。首をかしげてナルトは尋ねた。

「あのさあああのさあ、なんで本なんか？」

「なんでつて……そりゃ話の続きが気になっていたからだよ。気にすんな。お前ら相手じゃ本読んでても関係ないから。ほら、さっさとかかってこい」

あからさまな挑発だった。

「こんのおっぱつこぼこにしてやる！」

とてもあつさり挑発に乗ったナルトが繰り出した拳を、カカシは視線を一切向けないまま片手で受け止めた。パシッと小気味よい音が鳴った。ナルトは表情を険しくさせ、身体をひねった。続いて放たれた回し蹴りをカカシはしゃがんで避け、また拳を突きつけたナルトの上空を軽やかに跳び越えて、彼の背後でしゃがんでいた。流れるような身のこなし、とはこういうことなのだろう。

「あり？」

拳を前に出したままカカシの姿を見失ったナルトが首をかしげた。カカシは呆れた声を出す。

「忍者が何度も後ろ取られんな、バカ」

カカシはいつの間にか閉じていた本を両手の中に挟み、両手の指二本を立てていた。それは火の術、火遁かとんを使う寅の印に似ていた。下忍相手に使うようなものではない。慌てたサクラはナルトに逃げると叫ぼうとし、

「木の葉隠れ秘伝体術奥義、千年殺しいiiiiiiiiっ！」

その前に、カカシがナルトの尻に思い切り指を突き刺していた。口を開けた状態でサクラは固まる。……寅の印でもなんでもなく、ただのカンチョウらしい。勘違いにサクラの顔が赤くなった。何が秘伝だ。

「ぎゃひiiiiiiiiん！」

一応威力はあったらしく、ナルトが叫び声と共に跳び上がり池に落ちていった。派手な水しぶきを見ながらサクラは思考を切り替える。

と、とりあえず。

あの動きを見る限り、自分の実力では到底かないっこない。サクラの結論はその一言につきた。大体忍びにすらなっていない彼女たちに、上忍から一本取れとは無理すぎる。これでは九人どころではなく全員失格になるだろう。そういうこともまれにあるかもしれないが、さすがにこのままでは試験にならない。実際に合格者が何人もいるわけだから、必ずどこかに合格する穴があるはずだった。

サクラは考える。

「ははははは」

目の前では力カシが本の内容に笑いながら、池からナルトが放った手裏剣を指でくると回している。こんな相手から自分一人で鈴を取るなどふかの……一人？ サクラはハツとした。

そうだ。オカシイ。

そもそもなぜサクラは一人で鈴を取ろうとしているのか。鈴が二つしか用意されておらず、誰か一人は不合格になると言われたからだ。

じゃあわざわざスリーマンセルに分かれたのはどうしてなのか。卒業生二十七名中、九名しか合格できないのであれば、チーム分けせずともそのまま最終試験をした方が手っ取り早い。しかし実際は三人に分けている。何か理由があるのだろうか。

「スリーマンセル。卒業生二十七名中、合格者はたったの……九名？」

口に出してサクラは気づいた。

合格者は九名。随分と中途半端な数字だが、これを班分けで考えるとちょうど三班になる。カカシは合格者九名という言い方をしたが、もしかしてこれは三つの班が合格するというのではないだろうか。最低一人は不合格ではなく、全員合格か全員不合格のどちらか。つまり班員の三人で何かをしなければならぬ。そう考えると班分けをした理由にも納得する。

だがカカシは一人は不合格と言った。サクラの推理が正しいのならカカシは嘘を吐いていることになるが……なぜそんな嘘を。

あの嘘の中に、合格の答えが眠っているのだろう。考える。自分はこんなところでつまづいている場合じゃないのだから。

「ん？」

水音と共にびしょぬれのナルトが池から上がってきた。座り込んでいる彼の腹から空腹の音が聞こえ、サクラも思考で忘れていた空腹を思い出し、ちよつと情けない気持ちになった。

「じゃなくて、考えなきゃ」

首を横に振ったサクラは、カカシとナルトを目で追いながら考える。もし三人同時に合格するという推論が正しければ、鈴が二つしか用意されていないのはなぜだろう。三人で何かを成し遂げる必要があるのではないのか？ これでは逆に仲間割れを起こしてしま、う――？

「あ」

サクラは数度瞬きをした。そうか、そういうこと。

目の前ではナルトが七人となってカカシに襲い掛かっていた。足音が聞こえるので、ただの分身の術ではない。実体がある。サクラ

の知らない術だった。

しばしそれらをボケツと見ていたサクラは、太ももに手を伸ばし手裏剣を手に取る。――この試験の本当の狙いが分かった今、ただ隠れている訳には行かなくなった。

とはいえ、むやみやたらと手裏剣を投げるわけにも行かない。自信はそこそこあるがナルトの動きが読めない以上、動きを阻害してしまうだけだ。サクラはじつと様子を伺う。ちょうどナルトの本体が力カシの背後につき、動きを止めているところだった。

「しまった」

「忍びは後ろを取られちゃ駄目なんだろ、せんせ！」

そのまま他の分身体が力カシの四肢をがっちりと固め、残りの一体が力カシに殴りかかる。もしかしてフォローせずとも終わってしまっ
まう？

「えっ？」

しかし、殴られたのはナルトだった。……どうやら力カシはナルトの分身体と変わり身の術で入れ替わったらしい。その事に気づかないナルトは「お前ってば力カシ先生が変化の術で化けてるんだろ」と分身体に殴りかかり、分身が全て消えた時ぽんと一人で佇んでいた。ものすごくかつこ悪いが、こっちの方がナルトらしかった。

「でも力カシ先生はどこに？」

未だ手裏剣を構えながら力カシの姿を探すが、さすが上忍。全く心配がない。

そしてナルトはというと、落ち込んでいたのもつかの間、近くの木の根本に”たまたま落ちていた”鈴に目を輝かせていた。疑うこ

となく鈴の元に向かう彼は、本当に忍びなのだろうかと疑いたくなる。

「先生、慌てて落としていったんだな。ラッキー！ これで鈴ゲツとおおおおおおおおっ？」

鈴にナルトが手を伸ばした瞬間、縄のしなる音がした。一瞬のうちにナルトは両足を縄で縛られて木に逆さ吊り状態になっていた。サクラは頭痛を覚え、空を仰いだ。そんなの罠に決まってるでしょ、なんで引つかかるの。

「術はよく考えて使え。だから逆に利用されるんだ。それと……バレバレの罠にひっかかん、馬鹿」
「んつにぎぎ」

木から現れたカカシは鈴を拾い上げ、ナルトの目の前で音を鳴らして見せびらかしていた。サクラは気を取り直す。

まだ動けない。今ナルトを罠から救っても意味がない。

「忍びは裏の裏を読め」

カカシは身動きの取れないナルトに向かって言っているようで、その言葉が自分たち全員に向けられたヒントだとサクラは気づいた。そう。裏の裏を読まなければいけないのだ。

逆さ吊りのナルトはピョンピョンと跳ねる。はたから見ていると遊んでいるみたいに思えた。

「んなの分かってるってばよー」

「あのね、分かってないから言ってるの。大体お前の動きって無駄だらけなんだよ」

その時、多数の手裏剣が力カシに向かって飛んでいった。サスケだ。サクラもここでようやく手裏剣を放った。サスケとは違いサクラの目的は力カシではなく、ナルトの縄。そして場所がばれただろうからすぐに退避する。今までのことから力カシがあれだけでやられたとは到底思えない。

予想通り、手裏剣がささったように見えた力カシは丸太へと姿を変えた。先ほども使った変わり身の術だ。ナルトが無事に脱出できたかは分らないが、ひとまず話をするならサスケからだろう。ナルトの周囲は見晴らしがいいから話し合いもできない上に、彼の性格を考えると身を隠すなんてこともないだろう。……忍びとしてそれはどうなのかと思うが。

とはいえ、サスケも移動しているのでどうやって探すかが問題だ。演習場は広く、時間制限もある。説得するのも大変そうだ。それに作戦も立てなければならぬ。しかし落ちる訳には行かない。

サクラはぐつと拳を握り締めた。

第二十劇「サバイバル演習の謎」（後書き）

サクラの推理について。

第一期の時点でサクラが能力を発揮できるのは頭脳ぐらいだろうと判断し、第七班のブレインとして頑張ってもらうつもりです。

なので今後このような推理場面が多々出てくると思います。分りにくい点、間違っている点などがあれば遠慮なく教えてください。原作を知らない方、知っているが細かいところを忘れた方のためにかなり描写を多くしています。わずらわしいかもしれませんがお付き合いください。

しかしサクラ視点で一番困るのはサクラ自身がほとんど戦闘に参加していない点です。当事者以外の目線だとこんなにも戦闘描写が大変だとは思いませんでした。精進します。

演習編は後二話＋αです。

修正＆空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第二十一劇「答え合わせと本当の意味（こたえ）」

「説得したら、ナルトにさっきの術で注意をひきつけ足止めしてもらって、私とサスケ君で鈴を……ううん。私はナルトのフォローするべきか。先生を一人で止めるのは無理ね。でもそうすると」

目の前を走る少女の呟きを聞いたカカシは、僅かに目を細めた。気づいたか。

先ほどナルトの縄に手裏剣を放っていたことから「もしかして」と思っていたが、これは間違いなさそうだ。今は作戦を練りながらサスケを探しているのだろう。声に出しているのは甘いが。

合流させるか、どうするか。カカシは少し悩んだ後、サクラ自身の実力を確かめることにした。場に不釣り合いな明るい声をサクラにかける。

「サークラ」

「はっ」

振り向くと同時にサクラはカカシに手裏剣を放ってきた。反応、手裏剣の狙いは共にアカデミー生にしては、合格ラインか。思いながらカカシは手裏剣を片手ではじき、素早く印を結んだ。サクラが目を開いて息を呑み、しかし目が空ろとなり虚空を見つめ始めた。サクラの周囲では不自然な風が大量の木の葉を踊らせている。

忍び戦術の心得その二、幻術。

幻術とは一種の幻覚催眠法のことである。物理的なダメージを負わせる事は難しいが、相手に精神的なダメージを与える事ができるのが特徴。人の五感のどれかを対象とするもので、カカシが今使ったのは視覚系の幻術である。

あっけなく幻術に落ちたかと思えたサクラは……目に力を取り戻した。すぐさま彼女は手を組み、

「解」

幻術を解いた。今のは幻術返し。術によって掌握された己のチャクラをあえて乱すことで幻術を解くのだ。カカシは目を細めた。アカデミーで幻術返しは教えていない。

「でも残念」

幻術に気づくまでと、気づいてから解くまでの間が長すぎた。背後に回りこんでいたカカシはサクラの首裏を軽く叩く。それだけでサクラの身体からは力が抜け落ち、カカシは小さな体を抱きとめた。

「ま！ 返されるとは思ってたけどな」

そう難しい幻術ではなかったため見破られる事はあっても、返されることは予想していなかった。幻術返しは中忍でも上手く出来ないものもあるほど難易度は高い。もしかしたら、サクラには幻術の才能があるのかもしれない。……まあ、あの人の血縁者であることを考えると別段おかしくもない、か。

気絶した少女を地面に横たえたカカシは、ふと、サクラがしている黒い手袋に目を留めた。別におかしなことではないのだが、彼女にはひどく不釣り合いに思えたのだ。悪いと思いつつ、カカシは片方の手袋を外し右目を大きく開いた。

「これは」

サクラの手のひらはマメだらけだった。つぶれたマメや細かい傷

も多い。つぶれたマメが治る前にまた出来てつぶれ、を繰り返したのだろう。皮膚が硬くなっている。決して普段の生活でなるような手ではなかった。

これは修行の跡だ。

別段隠す必要のない、むしろ誇るべきものだがそこはやはり女の子。気になるのだろう。カカシはそつと手袋を元に戻し、顎に手を当てて考え込む。

「ふむ」

アカデミーの成績を見るとサクラの取り柄、と言えばペーパーテストぐらいだった。他は平均値、よりやや上程度。しかしあの手や先ほどの動き——ただ走るのではなく、チャクラを足裏に集めて吸着と反発を利用して走っていた。脚の動きに合わせてタイミングよくチャクラを集め、微細に調節しなければならぬ。しかも足裏は一番チャクラを集めにくい場所だ。理論上、確かにそうすれば早くなるが、同じことができるものは上忍クラスになるだろう。そんな走法を下忍にすらなっていない子供が自然と行っているのは、さすがに驚いた。さらにこの試験の意味に気づいたとすれば——。

あまりあの成績表はあてにならなさそうだった。元からあまり当てにしていなかったのだが。

「基礎がめちやくちやなナルトから考えれば基礎がかなりしっかりしているな。ちゃんとした指導者の元で経験を積みば、あるいは」

経歴や家系からナルトとサスケにばかり注目していたが、サクラも侮れない。なんとも大変そうな班を任されたものだ。カカシは一つため息ついて、サスケの元へ向かった。

* * *

サクラは勢い良く飛び起きた。

「鈴！」

すぐさま太陽の位置を確認する。気絶する前からあまり経っていないようだ。ホッと息を吐いて、すぐに顔を引き締めた。

「とはいっても時間がないのは変わらず、と」

カカシに不覚を取ったことについて反省点はあるが、そもそも一人ではどうにか出来る相手ではないので気にしないことにした。するだけ無駄というものだ。

「早く二人に伝えなきゃ」

気配を探って慎重に走りながら、サクラは二人の説得方法を考える。

「ええっと。なんて説明するのが手っ取り早いかな。ナルトは普通の言い方じゃ理解できないだろうし……！ 今の音は！」

走っている中、大きな振動と共に破裂音のようなものが聞こえた。誰かが近くで戦っている。サスケか、ナルトか。どちらにせよサクラが探していた人物であるのは間違いない。今日、この演習場は第七班の貸切なのだ。

彼女は音の方角へと、慎重に向かった。

お腹が減りすぎて考えられないというべきか。

「おうおう。腹の虫が鳴つとるね、君たち」

元凶の男が平然と言つてのけるのが腹立たしいものの、サクラには怒る元氣もない。演習の目的を察したところで、実行には移せていないのだ。サスケは一人でも鈴に触れたというが、演習の目的には気づいていない。ナルトに至つては、まあ、そういうことで。全員不合格なことは明らかだ。

「ところで演習についてだが、君たちはアカデミーに戻る必要はないでしょ」

だから力カシがそう言つた時も喜ぶナルトとサスケを余所に、サクラだけは目を伏せた。

「じゃあさ、じゃあさ、三人とも」

「そ。三人とも——忍者を辞める！」

しんと静まり返つたその場に、裏返つたナルトの声が響く。

「忍者辞めろつて、どういうことだよ！ そりゃさそりゃさつ 鈴取れなかつたけど、なんで辞めるとまで言われなきゃなんないんだよ！」

「どいつもこいつも忍者になる資格もないガキつてことだよ」

「っ」

「あ、サスケ君！」

淡々とした力カシの言葉に、サスケがクナイを握つて飛び掛つていった。

「だからガキだつてんだ」
「ぐっ」

カカシはサスケをいとも簡単に取り押さえサスケの頭をグツと足で踏みつけた。それからゆっくりとナルト、サクラへ向けられたカカシの目は、冷たい。

「サクラ」

目をサクラで留めたカカシが声を急に柔らかくし、言った。

「答え合わせをしようか」

「な、なんだつてばよ。答え？」

ナルトは不思議そうにサクラを見るが、サクラはただ真っ直ぐにカカシを見た。どうやらカカシはサクラが”気づいている”ことに気づいている”らしい。一度、サクラは深呼吸をした。頭を働かせて整理をする。

「まず最初に先生からルールを聞いた時、引っこかりました。下忍にすらなっていない私たちが上忍にかなう訳がないということです。いくら忍びが過酷なものだと言ってもこれでは誰も合格しません。」

また、先生は最大で”三人のうち二人しか受からない”って言いしました。けど、もしそうならばスリーマンセルをわざわざ組む必要がない。どころか組まない方が手っ取り早く試験を行えます」
「ふーん。それで？」

淡々としているカカシは全く表情を変えない（見える部分は少な

いが、動揺しているとは思えない)。話していることが合っているのかいないのか。イマイチ判断がつきにくい。だがサクラには推理を続けるしかない。

「次に、合格者が九名という点。九というのは随分と中途半端です。でも班で考えるとちょうど三班が受かることになります。そこから三人の中で誰か一人は不合格のではなく、全員合格が不合格しか存在しないのではと考えました」

「つまり、俺が嘘をついていると？」

「はい」

聞いてきた力カシに躊躇無くサクラは頷いた。ナルトが「え？何？ なんの話だっけだよ」と場違いな声を上げていたが、二人は意に介さない。サスケはただ二人を眺めていた。

サクラは息を吸う。ここからが本番だ。

「ではどうして先生が嘘をついたのか。それはこの試験がただの鈴取りゲームじゃないからです」

「っ！」

「えっ？」

「へえ。じゃあ、聞こうか。ただの鈴取りゲームじゃないなら、この試験の目的は何？」

問いかけてきた力カシは面白がっているように見えた。一泊置いてサクラは答える。

「チームワークを見る試験、ですね」

言い切った時、たしかに一瞬力カシは笑った。

「ちょちょちよつと待ってくれればよ、サクラちゃん。だって鈴は二つしか」

「ナルト、この試験はね。ワザと仲間割れさせようと仕組まれてるの。——忍びは裏の裏を読み。その言葉を先生が言った時に確信しました」

前半はナルトに、後半はカカシに向かって告げ締めくくった。パチパチパチ。

随分と能天気な音が演習場に響く。カカシが手を叩いたのだ。

「んー、概ね正解」

サクラはカカシの言い方に引つかかるものを感じて、眉間にシワを寄せた。これ以上の答えが果たしてあるのだろうか。

「俺の台詞からその結論をよく導いた。だが、お前は答えを知っただけで分かっちゃいない。」

この試験は確かにお前が言った通り、こういった状況の中でも利害に関係なく、チームワークを優先できるものを選抜するために出来ている。……ま！ まったく試験の意味を考えなかったどっかの馬鹿たちよりはマシだがな」

カカシの目が鋭くなった。それだけでサクラの背筋が震えた。

「サクラ。お前は答えを導いたがそれだけ。本質を理解しちやいない。ナルト！ お前は独走するだけ。サスケ！ お前は二人が足手まといと決め付け個人プレイ。」

任務は班で行う。確かに卓越した技能や考えることは必要だ。が、それ以上に優先されるのはチームワーク。仲間をないがしろにした個人プレイは、仲間を危機に陥れ、殺すことになる。例えばだ」

今までの飄々とした力カシはどこにもいなかった。上忍の迫力とでも言うのか。サクラもナルトも、そしてサスケも、力カシの放つ重い空気に吞まれていた。三人が身動きの取れない中力カシは腰のポーチからクナイを取り出し、驚いたことにサスケの首元へ突きつけた。

「サクラ！ ナルトを殺せ！ さもないとサスケが死ぬぞ！」

「ふええっ」

「っ！」

「と、こうなる。」

人質を取られた挙句、無理な二択を迫られ殺される。任務は命がけの仕事ばかりだ」

クナイをしまった力カシはサスケの上から退いた。そしてそのまま歩き、丸太と正反対に置かれた石の前に立った。

「これを見ても」

石というには少々大きなそれを彼は示す。石の表面はツルツルしており、たくさんの文字が彫られてあった。

「ここに刻まれた数多くの名前。これは全て、里で英雄と呼ばれている忍者たちだ」

「っ！ それって」

「あ。それぞれそれぞれ！ それいい！ 俺もそこに名前を刻むってことを今決めた！ 英雄英雄。犬死なんてするかってばよ」

「ちよっちよつと馬鹿ナルト！ あんたね」

興奮しだしたナルトにサクラは諫めの声を上げるが、本人は聞い

ていない。英雄とまで言われる忍びが、こんなにたくさんいるはずがないのだ。

「が、ただの英雄じゃない」

「へえ。どんな英雄たちなんだってばよ」

少し振り返ったカカシに対してナルトはどこまでも能天気だった。説得を諦めたサクラは地面を見つめて続く言葉を待った。カカシはまた前を向いた。答えるそぶりはない。じれったそうにナルトが足を暴れさせた。

「ねえ、ねえ？」

「——殉職した英雄たちだ」

やっぱり。

自然と心が沈むも、ナルトは意味が分からなかったらしい。無邪気な表情で首をかしげている。

「じゅーんーしょーくって？」

「任務を遂行するために、亡くなったってことよ」

「え？ あ！ おっ俺っ」

ナルトはゆっくりと言葉を飲み込んでいき、固まった。何か言おうとして、言葉が見つからなかったのだろう。無意味に動かしていた口を閉じ視線を下に向けた。

「これは慰霊碑だ。この中には、俺の親友の名も刻まれている」

慰霊碑を向いているカカシの表情はサクラたちには見えない。しばらく、誰も声を発しなかった。

* * *

「お前らにもう一度だけチャンスをやろ。昼からはもっと過酷な鈴取り合戦だ。挑戦したいヤツだけ弁当を食え」

沈黙を破ったのは、振り返った力カシだった。先ほどの悲しげな雰囲気はない。

「ただし！ ナルトには食わせるな」

「ひえっ？」

「ルールを破って一人昼飯を食おうとした罰だ。もし食わせたりしたら、そいつをその時点で失格にする。

ここでは俺がルールだ。分かったな」

まだチャンスがある。サクラは心を入れ替えて気合を入れた。

第二十一劇「答え合わせと本当の意味（こたえ）」（後書き）

幻術（返し）と戦闘について。

ナルトWIKIを参考に自分なりの解釈も入れています。手元にファンブックがないので、術に関してはいろいろ困ってます。

幻術返しを使えたのは勉強の賜物ですが、経験がないため使うまで時間がかかって、ほとんど原作通り気絶してただけになってます。めちゃくちゃ活躍するのを期待されていた方おられたらすみません。いろいろ子供離れした箇所が見えてきてますが、まだまだ弱いのです。

答えにたどり着くだけでは駄目。本当の意味でのチームワークを知る必要がある。今回はそんな話でした。

修正＆空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

顔を見たのは、これが初めてだった。

妙に気恥ずかしくなったサスケは彼女から視線を逸らし、気を紛らわせるように口を開く。

「昼からは三人で鈴を取りに行く。足手まといになられちゃ、こっちが困るからな」

早口になってしまったが、幸い誰にも気づかれなかった。彼はホツとした。

「そうそう。だから遠慮なく食べなさい」

「サスケ、サクラちゃん。ほんと、ありがとうだってだよ」

「お礼は良いから早く食べなさいよ」

腹が減っているだろうに、差し出された弁当をナルトは食べようとしないう。怪訝に思っサスケがナルトを見ると、少し。いやかなり鼻の下を伸ばした状態で手を示した。ナルトは腕ごと身体を丸太に縛られているので自分で飯を食べられないのだ。

「ああ、それもそうか。はい」

「あゝん」

あつさり頷いたサクラはご飯を箸でつまみ、ナルトの口へと持つていく。ナルトの青い目がサスケを見て、ニヤリと笑ったのが無性に腹立たしく感じた。やっぱり飯やるの止めるか。本気で考えた。

ナルトが飯を飲み込んだ瞬間、突如強い風が吹き乱れた。サスケはそれが自然のものではないとすぐさま気づく。溢れる気配に舌打ちした。こんなに近づかれるまで気づかないとは。

「ちっ」

「あわわわわわっ」

「ひゃあっ」

「お前らああああっ！ ルールに逆らうとは覚悟はできてんだろうな、ああん？」

風の中には怒った様子の力カシが立っていた。サスケが戦闘体勢に入った時、力カシは低い声で尋ねてきた。

「何か言う事はあるか？」

あまりの迫力に一瞬ひるんだナルトは、しかしきつと顔を上げた。サクラも毅然と力カシを見ていた。サスケは……軽く心の中で笑った。

こついうのも、まあ、悪くない。

彼も力カシを睨みつけた。

「だって。だってだってだって！ 先生さっき言ったってばよ。だから二人とも」

「俺たちはスリーマンセルなんだろう？」

「そうよ。私たちは三人で一つ、でしょ」

「そうなんだってばよ。だから」

近寄ってくる力カシを見ながら、三人は言い切った。険しい顔をした力カシは「三人で一つ、ね」と呟きながら全員の顔をじいっと覗き込み。

「ごうかーく！」

と、笑った。

「はっ？」

サスケもサクラもナルトも、すぐには言葉の意味が飲み込めなかった。それだけ合格の響きが予想外だったのだ。

「いやあ、お前らが初めてだよ。今までの奴らは俺の言う事をきくだけのボンクラばかりだったからな」

まだ三人が呆然としている中、カカシの雰囲気は明らかに柔らかくなっていった。

「忍者は裏の裏を読むべし。確かに忍者の世界でルールや掟を破るヤツはクズ呼ばわりされる。けどな。

仲間を大事にしないヤツは、それ以上のクズだ」

カカシがぐつと親指を立てた。ふん。そういうことが。サスケは立ち上がった。

「これにて演習終わり。全員合格！ 第七班は明日から任務開始だ」

「はい」

「フン」

「やったってばよ。俺忍者！ 忍者！」

「帰るぞー」

背を向けたカカシの後を、笑顔を浮かべたサクラと、いつもより機嫌のよさそうなサスケがついていく。さらに後ろには……。

「どーせこんなオチだと思ったってばよ！ こらあつ！ 縄、ほどけーーーーー！！」

足をばたつかせたナルトの叫び声がこだました。

第二十二劇「三人で一つ」（後書き）

演習編完結。次話は間劇です。その後も一つオリジナル話が入り、第二十四劇で波の国編になります。ってか、進行速度遅くてものすごく長くなりそうな予感がヒシヒシと。
が、がんばります。

修正&空白行入れました（11・04・05）
修正（11・06・12）

間劇「綺麗な渦」

火の文字が書かれた帽子を机に置いた老人——三代目火影、猿飛
ヒルゼンは煙管を銜えて息を吸い、ゆっくり煙を吐き出した。火影^{ほかげ}
とは木の葉の忍びの頂点であり、アカデミーの校長であり、里長で
もある偉大な存在だ。

「して、どうじゃった？」

部屋には彼以外誰もいないと思えたが、応じる声と共に膝まづく
カカシの姿があった。暗い部屋の中、銀色の髪が月明かりを受けて
輝いている。

「正直とんでもない奴らを任された、と思ってますよ」

苦笑交じりの声にヒルゼンは大仰に頷いた。

「うむ。あのうちはサスケにうずまきナルトじゃからな。しかしお
前以上に適任もおるまい」

正直なところ、彼らを押さえつけられるのはカカシしかいないと
ヒルゼンは考えていた。カカシは軽く首を振った。

「まああの二人もそうですが春野サクラも、ですね。別に贖する
つもりはありませんでしたが他の二人を特に注視していた感は、否
めません」

「春野……エイノ事件の子じゃな」

「はい」

ヒルゼンは少し記憶を遡った。あの事件の後、事情聴取もかねて会いに行ったことがある。その時彼が思ったのは、

「お前から見てあの子はどう写った？」

「頭の回転は悪くないようです。チャクラコントロールはかなり飛びぬけています。経験を積みれば化けるでしょう……と、言う事ではなさそうですね」

「うむ」

「少し大人びた印象がありましたが過去から考えると当然とも思えますし、今のところ特には」

訝しげなカカシに「そうか」とだけ言ってヒルゼンは目を閉じた。左手に握られた煙管から上がった煙が、風に揺らされて奇妙な舞を披露していた。

* * *

『大変な目に遭^おったのサクラ。もう、大丈夫じゃからな』

腰をかがめてサクラと視線を合わせたヒルゼンは、笑顔を浮かべたまま一瞬息を呑み、内心の驚きを隠すのに必死になった。五歳とは思えぬ落ち着いた声が彼をさらに追い込む。

『いえ、それは違います三代目。遭^おったんじゃない私——遭^おわせたんです』

翡翠色の瞳には綺麗な渦があった。

渦は何十年、何百年、何千年、それ以上の年月をヒルゼンに彷彿とさせた。決して、五歳の子供にあるはずのものではない。そこにあるのは全てを受け止める包容力であり、様々なものを見てきた老獯さであり、猛々しい力強さであり、諦めであり、嘲りであり、疲労であり、純真さであり、また存在感でもあった。

こんな人間を彼は初めて見た。いや、そもそも人間にこんな目が出来るのだろうか。

『っ！』

得体の知れないものが彼の身体を駆け巡る。ヒルゼンは背中が寒さに震えるのを感じた。

歴代火影最強と謳われた彼が！ 里の者全員を家族と呼び愛する彼が！ 里に住む五歳の子供に、恐れを抱いたのだ。

* * *

「サクラが何か？」

「いや」

カカシの声に目を開けたヒルゼンは、思い出したように煙管を口元へ運ぶ。長々と息を吐き出した。

「報告、ご苦労じゃったな。下がってよいぞ」

「はっ」

「……ふむ、カカシのヤツでも感じとれなんだか」

あの渦に気づいたのはヒルゼンだけだった。彼は気のせいかもしれない

思ったが、何度か見かけた時にもやはり見えた。そうして何度か見かけた時に彼は大きな思い違いに気がついた。

あの時に感じたものは恐怖ではない。

以前にも感じたことがあった。あれは——何千年も聳え立つ古木を見た時だ。人の身では到達できない年月を経たものだけに宿る力強さ。母に抱かれたような安心感。言葉に表せないほどの存在感に威圧感——それらを人の言葉で表すならば、すなわち『畏怖』いや、『畏敬』の方が近いだろうか。

どちらにせよ。まだ五年しか生きていない子供に、ヒルゼンが畏敬の念を感じたのはたしかだ。現役は隠退して久しいといえど、仮にも火影に畏敬の念を覚えさせたのだ。普通の子供であろうはずがない。

しかし日向一族にも見てもらったが、身体能力もチャクラ量もごくごく普通の子供でしかなかった。親戚に特異なものがいるわけでもない。異常性は見当たらない。ゆえに異常であった。

「そうか。あの子が忍びになったか」

里の者全員の全てを知っている、とは言わないが、里長として大体の事情は把握しているつもりである。しかしあの子供についてはあまりにも不明すぎた。何かあった時のためにも力カシに任せたのだが。

しばしヒルゼンは思いふけた。別段彼はサクラが里に何かをすとは思っていない。里の大人から嫌われているナルトに対しても普通に接することのできる優しい子だ。サクラのことを彼は信じている。

だがあの目に他の誰かが——邪な心の持ち主が気づいた時に利用される危険性があった。彼はただただそのことが心配だった。

おそらくこういった優しさが現役を引退して尚、里中から慕われるヒルゼンの魅力なのだろう。

「ふうむ。綱手^{つなで}、自来也^{じらいや}辺りなら分かるかのお」

愛弟子を思い浮かべたヒルゼンだったが、意識して最後の一人の名は口に出さなかった。

「まったく、どこをほつつき歩いているのやら」

呟かれた重々しい声とは反対に、煙が楽しそうに踊っていた。

間劇「綺麗な渦」（後書き）

三代目のじいちゃん大好きです。こんなじいちゃん欲しいよね。
カカシ班に配属となった理由とかあるといいなあと思ってました。
た。叶って嬉しい限り。

渦がシカマルに見えてカカシに見えない理由とか、後々書けると
いいな。大風呂敷広げすぎた気がしないでもない。

修正＆空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第二十三劇「その熱は氷を溶かす」

忍びに与えられる任務には、難易度が高い順にA・B・C・Dとそれぞれランクがつけられている。これを里の上層部が能力のあった忍者に依頼を振り分けていく。上忍ならAランク以上。中忍ならBかCランク。下忍ならCかDランクという風にだ。他にも特性に合わせて割り当てることもある。

サクラたちはまだ下忍なりたてなので、こなしたのはほとんどDランク任務だ。おそらく最初の数ヶ月は試用期間で、その間にそれぞれの得意分野などを見極めていくのだろう。ちなみに今までこなした任務は子守、草抜き、畑の収穫、ゴミ拾い等々。そして今は、

「わわわわわつちよつちよつまてつてばよ！ まっうぎゃあああああっ」

犬の散歩、なのだが、なんとも大仰な叫び声が響いていた。

見栄を張って大きな犬を選んだナルトが犬に引きずられ、ものすごい勢いでどこかへと消えていった。ナルトはいつもこうして身の丈に合わないことに挑戦し、いつもこうして失敗している。反省をまったくしていない。ちなみにサクラは小さく大人しそうな子（チワワ、オス、四歳）を選んだ。

「はあ、やれやれ。お前らは少しここで待ってる」

カカシがため息をつきながらナルトを追いかけて行った。するのとなくなつたサクラは握り締めたリードに意識を集中させる。任務中にも修行あるのみ。時間は有効に使わなければならない。

忍びになつてすぐの頃サクラは、任務が簡単な分早く終われて修

行の時間を多くとれる！と喜んだが、現実には甘くなかった。ドリンク任務は簡単な分もらえる報酬も少ないのだ。忍の給料はその報酬のみなので数をこなさなければ生活に支障をきたす。はつきり言えば新聞配達の方がよほど給料はいい。

しかし、まあ。何事も積み重ね。簡単なものをこなしていけば信賴してもらえて、難易度は徐々に上がっていくだろう。なので別段サクラに不満はない。あるとすれば、ナルトのせいで任務時間がかかってしまうことだろうか。

そんなことを考えながらサクラはチャクラをリードに流し込む。任務中。周りを意識しながらもちやんとコントロールできるようと始めた修行だったのだが、チャクラを上手く扱え^{リーフ}ば物を動かせることが判明した。イメージとしては手足の延長。今なら中指をくいと曲げるような。

「サクラ」

「うわひゃあっ」

サクラはあまりにも集中しすぎていたため、妙な声を上げてしまった。声をかけてきたサスケはびっくりした様子でサクラを見て、やがて肩を震わせて笑い出した。

「くつくく。なん、だよ、その声」

恥ずかしさで顔を真っ赤にしつつ、サクラは内心驚いていた。サスケがこうして無邪気に笑うところを見たのは、随分と昔に一度だけだった。ぼけっと彼を見つめっているとサスケは少し笑いを治めた。

「お前って料理上手いんだな」

「え？」

「——弁当、ありがとう。美味かった」

そう言って笑った彼に対し、サクラはポカンと大口を開けてさらに呆けてしまった。結果、その表情が何やらツボに入ったらしいサスケに散々笑われることとなった。クールに見えて、意外と笑い上戸らしい。

「そっそんなに笑わなくなつて」

「わ、わるつくつくくく」

「もうっサスケ君！」

怒っているサクラと謝りつつ笑うという中々器用な事をしているサスケの間に、わだかまりはもう見えない。変だ。

サクラはサスケとやり取りをしつつ、戸惑っていた。顔が熱い気がした。心臓もやけにうるさい。別段激しい動きをしたわけでもないのに、だ。何か、何かが変だった。

「サスケ君、実は全然悪いって思ってたでしょ」

「いやおもって……ぷくく」

「ほらあ！ もうっだからさっきのことは忘れてっば」

胸は苦しく、サスケは笑い続けている。その状況は不愉快な、はずだ。なのにどこか嬉しく思う自分がいて、サクラはただただ戸惑った。

* * *

「いやー悪い悪い。ナルトが結構遠くまでひきずられて……ん？

どうしたサスケ。機嫌よさそうだな。何かあったのか？」
「別に」

カカシとナルトが戻った時、そこにはいつもより楽しそうなサスケと、何やらものすごく疲れた顔をしているサクラがいた。二人の足元では犬が所在なさそうに佇んでいる。

少し首をかしげたカカシだったが、ま！　いいかと頷いた。この二人はどこかぎくしゃくしていたが、それがどうやら解消しているのだ。いつかは何とかしないと、思っていたカカシからすれば、喜ぶ事はあっても怒ることはない。……ナルトは複雑そうだが。

いやー、君たち青春してるねえ。

第二十三劇「その熱は氷を溶かす」(後書き)

忍びの報酬について。

かなり自己解釈が入ってます。次の話でも任務について描写があるので細かい話はそのときに。

まあ、サラリーマンのように定期的にお金をもらってる忍び、てなんか嫌だと思うのは私だけ？

あとサスケファンにお詫びします。キャラが笑い上戸になってしまった。

全く、君ら青春しているね。

ところで最近困っているのはカカシ先生のポジションです。保護者で通すかロリコンにするか(！)。よろしければ拍手等での無記名で構いませんから「カカシ先生は保護者(orヘンタイ)だ」と投票いただけたら助かります。参考にさせていただきます。

修正&空白行入れました(11・04・05)

第二十四劇「初めての超護衛任務」

今日も今日とてカカシ隊第七班は任務をこなして……。

「ああつもー！　そういうのはノーセンキューだってばよ！」

いなかった。

任務・依頼幹旋所にてナルトの不満が爆発していた。カカシとサクラは同時に肩をすくめた。いつか駄々をこねると二人は予想していたのである。まあ、ナルトにしては我慢した方かな。

ナルトの不満を簡単に言う——任務がしょぼい、だ。確かに今までこなしてきた任務は迷子ネコの捕獲やゴミ拾い、草抜き、犬の散歩等。なぜ忍者に頼むんだ。自分でやった方が安くつくじゃん。と、言いたくなる内容だ。そんなことを言ってしまうと下忍の仕事がなくなるので、サクラは思うだけで口には出さないが。

それに依頼者の気持ちもよく分かった。

簡単な仕事でも一般人より遥かに身体能力が高い忍びに頼めば早く、安全に済む事は多い。Dランクぐらいだとかなり依頼料がかなり安いこともある。Cランクでもそうそう家庭の財布を苦しめたりもしない程度だ。そうでなければ毎日これだけたくさん依頼が国内外から舞い込むはずもない。

しかしサクラは、依頼の多さを木の葉隠れに対する信頼の表れ、と考えている。火の国唯一の公式な隠れ里（公式なので隠れていない）は、忍び五大国と呼ばれる中でも最強と言われているほどだ。大きな里ゆえの安心感は少なからずあるはずだ。

忍びの気性が他と比べて比較的穏やかなのも一因かもしれない。そこら辺りは三代目の人格が里に影響していると思われた。もちろん中にはとんでもない性格をした者もいるが木の葉は仲間を大事に

し、信頼には信頼を返す。そういう忍びたちを木の葉は育て上げている。しいて言うならば、依頼量が多いのは三代目への信頼の現われとも言える。

というのは言い過ぎかもしれないが、サクラは目の前にいる老人を人格者、指導者として心の底から尊敬していた。なので、駄々をこねて三代目を困らせている問題児を、思い切り殴って黙らせることにしたのであった。痛々しい音がその場に響くと黄色い頭が床に沈んだ。ピクピクしているが、サクラは全く気にしない。

ペコリと頭を下げる。

「すみません、三代目」

「いいや」

三代目——ヒルゼンはどこかひきつつた微妙な顔をしていた。隣で受付をしているうみのイルカ（アカデミーの教師でサクラたちの担任だった）は、額を押さえて長い息を吐いていた。変わってないな。そんな声が聞こえた。

「じほん」

ヒルゼンはわざとらしく大きな咳払いをし、変な方向へ流れた話を修正した。

「そうじゃの。なら、Ｃランクの任務でもしてもらうか。ある人物の護衛じゃ」

「三代目、それは」

「よいよい。イルカ。こいつに世界を見せておくのも良かるう」

ガバツと飛び起きたナルトの目が輝いている。サクラがそつと隣のサスケを窺うと、ナルトほどではないが彼も少し喜んでいるよう

だ。男の子は危険が好き、とイノから教わったがどうも本当らしい。サクラは妙な関心をしていたが、声には出していないため誰にもツッコまれなかった。

「ほんとかしいちゃん！　ね、誰？　誰？」

「そう慌てるな。今紹介する。……入ってきてもらえますかな」

背後から聞こえたドアが開く音に七班は全員振り返った。まず見えたのは酒ビンだった。

「なんだア？　超ガキばっかしじゃねーかよ」

少ししわがれた声を発したその人はグビグビと酒を飲んだ。第一印象を一言で言うならば、酔っ払いのジジイ、以外に相応しい表現はない。

尖った髪と口の周りのヒゲは年相応に薄い色、メガネの奥にある目は少し眠そうに細められ、額にはねじり鉢巻、首にタオルをかけている。お年寄りではあるが背中はずりまっすぐしており体格もいい。服装や雰囲気は何となく大工をイメージさせた。

「特に、ほれ。その一番ちっこい超アホ面のおめー。ホントに忍者か？」

ズケズケと初対面にもかかわらず言ってくる様子は、見た目そのままだ。

「あはははは。だーれだ？　一番ちっこいアホ面って」

他人事のように笑っているナルトは、サクラとサスケを交互に見た。サクラとサスケの目が合い、二人はやれやれと息を吐いてナル

トの隣に立った。ナルトはしばらく二人を見て、とある事実に気づいて眉を吊り上げる。すなわち、この中で一番小さいのはナルトなのだ。今すぐ老人に飛び掛りそうなナルトの首元をカカシが掴んで止めた。

「ぶつころーす」

「これから護衛するじーさん殺してどーする」

じたばたじたばた暴れるナルトに対し、老人は関係ないといわんばかりにぐびぐび酒をラツパのみしていた。ぷへえっと吐かれた息はとても酒臭い。

「ワシは橋造りの超名人タズナというもんじゃわい。ワシが国に帰って橋を完成させるまでの間、命をかけて超護衛してもらう」

老人、タズナの言葉に少し引っかかりを覚えつつ、サクラは長期任務の準備をするため家へと帰った。

* * *

くぐった大きな門には『あ』と『ん』の文字が書かれており、それを見たサクラは少し目を細めた。里の外に出るのは随分と久しぶりだ。

「いよーし。しゅばーーっ！」

やたらと気合の入った声を上げているのはもちろんナルトである。遠足に行く子供のような。

「何はしゃいでんだ、ウスラトンカチ」

「ムッ。うつせーんだよ、サスケ！　しょうがねーだろ。俺ってば里の外に出るの初めてなんだ。えへえへえへっほおほおこんな感じなのかあ」

うがーっと騒いだ後は、里の周りをきよろきよろと見回し始める。分かっていたことではあるが、本当に落ち着きがない。タズナがナルトを指差して顔をしかめている。そしてカカシに、

「おいおい本当にこんなガキで大丈夫なのかよ」

と言った。タズナの気持ち分からないでもないサクラは、ただ苦笑した。カカシも心境は似たようなものだろう。はははと軽く笑った。

「上忍の私がついてますからそう心配いりませんよ」

「そうかあ？　まあ、超頼むぜ」

二人の会話をサクラはじつと観察していた。やっぱり気になった。タズナの言動の端々からかなり身の危険を感じていることが窺える。確かに道中で賊に襲われたら彼一人では対処できないだろうが、それなら送り届けるまでで済むし、その方が依頼料も安い。わざわざ橋の完成まで護衛しろということは、波の国とやらの治安が相当悪いのか。それとも彼自身に狙われる理由があるのか。……橋の完成までと言い切ったことから後者の可能性が高い、か。

んゝああ、駄目だ。まだ情報が少ない。

「サクラ、どうした？」

「えっ？　あ、うつん。何でもないよ、サスケ君。ありがと」

「別に」

ポケットとしていたサクラは、サスケの声で我に返った。見るとすでにナルトやカカシたちは十メートルほど先にいた。サスケに礼を言って早足で彼らに追いつく。

「お前、その癖直せよ」

「癖？」

歩きながらサスケは呆れた顔をした。考え込む癖だと指摘される。

「考え込んでまたぶつかるぞ。この前のでんちゅ」

「わわわっわーわー！」

サクラは思わず大声を出してサスケの声を遮った。少し前にいたナルトが声を聞いて後ろにやってくる。カカシやタズナはちらとサクラを見たがすぐに前へ向き直った。

「どうしたんだってばよ、サクラちゃん」

「なっ何でもな」

「いやこの前サクラがでん」

「わーわーわーサスケ君！ な、なななななんで知ってるのっ？」

それはついこの間のことである。任務帰りに修行法について考え込んでいたら、集中しすぎて気づかずに電柱と正面衝突したのだ。幸い周りに人がいなかったので安心していたというのに、どうしてサスケが知っているのだろう。はっ！ まさかあの時見られてた？ 大声を出したり赤面したり青くなったり両手を振ったり、と忙しいサクラをしばらく眺めていたサスケは、顔を彼女とは逆に向けて肩を震わせ始めた。

「ぷつくくく。おまっマジかよ」

「あー？ サスケ、何が面白いんだってばよー」

ナルトが変なヤツだなとサスケを見る中、サクラは気づいた。からかわれていたのだ。

「ちょっとサスケ君！ 嘘吐くなんてヒドイ」

「ええっ？ おいサスケ。いくらサクラちゃんが騙されやすいからって嘘つくのはサイテーだぞ」

文句を言うサクラと、フォローしているのかなんなのか微妙なナルトに対しサスケは、

「何やってんだお前ら。早く来い、置いていくぞ」

一人笑いのツボから開放されていつもの態度に戻っていた。この落差がサスケは激しく、サクラはいつも振り回される。疲労感を両肩に感じながらまた少し早足になった。自然とサクラも意識の切り替えが早くなってしまった。

心臓が早く鼓動しているのは、早足のせいだろう。まだまだ体力が足りないんだ。修行しなきゃ。

カカシたちに追いついたサクラはそんなことを考えた。

第二十四劇「初めての超護衛任務」（後書き）

依頼について。

かなりの独自解釈が入っています。なぜわざわざお金を払って忍びを雇うのかを考えた末にこうなりました。早くて安全で安いのは三拍子そろっていれば、まあ頼むかなあと。

信頼云々は、大きな企業だと安心してしまふあの心理ですね。重要任務（暗殺・情報収集など）を頼んだ方がいいが裏切られた！では困りますから。

三代目のおかげというのはいいすぎでしょうが、ある程度は関係あると思ったので……ただ単に三代目のじっちゃんが好きだということもあります。

今日、説明とキーワードに恋愛要素は薄めと追加させていただきました。書いてたつもりが書いていないことに気づいたもので。大変失礼しました。

仲の良い第七班を書きたいんですが、中々難しいですね。

保護者の声がきたので、カカシ先生のポジはとりあえず保護者で行きます。サクラ十二、三歳だしな。ふざけて絡むのはありかもしれませんがね（サスケとナルトをからかう目的等で）。

カカシ先生はどっち（保護者・変たry）にもとれるような感じで行きたいと思います（11・06・12追記）。

修正＆空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第二十五劇「初めての实战」

「ねえ、タズナさん」

「んあ？」

サクラが声をかけると、タズナは銜えていたビンから口を離した。キュポンと音が鳴る。

「タズナさんの国って波の国、ですよ」

「それがどうした？」

「カカシ先生、その国にも忍者っているの？」

見慣れたサクラが今でも怪しいと思う男に声をかけた。サクラがあまりズケズケ言わないタイプで良かったろう。現在も尚、部下兼教え子に怪しいと思われるのと知れば、カカシに深い心のキズを与えたに違いないからだ。

教え子に内心怪しいと思われる哀れなカカシは、質問に答えた。

「いや、波の国にはいない。が、大抵の国には風習や文化こそ違えど隠れ里が存在し、忍者はいる」

忍びとは、簡単に言うとな国の兵士だ。隠れ里の力。その国の軍事力と言い換えてもいいだろう。里の力具合で隣接国との境界線を守っている。しかし隠れ里が国へ忠誠をしているのか、というところでもない。あくまでも表面上は対等の関係にある。それでも隠れ里が堂々と在れるのは国が保護・援助しているからなので、立場的には少々弱い。

木の葉に関して言えば、その気になれば国を掌握も出来るほどの強さがあるため、火の国と里はほぼ同格だ。最近では里の規模を小さくするように国から要請を受けているらしいが、今その話は置いておこう。

一つの国に対して隠れ里は大抵一つだけしかない。これは里同士の争いを避けるためだ。実際今までも里同士の戦いが起き、大規模な内乱になった国もあるらしい。

「波の国のような小さな島国だと他国の干渉を受けにくいから、忍びが必要ない場合もある。」

知っていると思うが……隠れ里を持っている国でも火、水、雷、風、土の五力国は国土も大きく、力も絶大なため、忍び^{しのび}五大国と呼ばれている」

「へえ、そうなのかってばよー」

「ぐっナルト。お前ね。アカデミーで一体何を習ったんだ」

一度ナルトに脱力したカカシだったが、また説明を始めた。

火の国はサクラたちの所属する木の葉隠れの里。水の国は霧隠れの里。雷の国は雲隠れの里。風の国は砂隠れの里。土の国は岩隠れの里。この五つの里の長だけが影の名を名乗る事が正式に許されている。火の国なら火影、水の国なら水影。それぞれ国の名を背負う彼ら五人を五影と呼び、各国の頂点にいる忍者たちだ。

「と、こんな感じだが、安心しろ。Ｃランクの任務で忍者対決なんてないよ」

笑ったカカシがサクラの頭をぽんと軽く叩く。その際にタズナの表情が一瞬陰つたのを、サクラは見た。どうも雰囲気からするとこれはただのＣランクじゃなさそうだが、カカシは気づいているのだろうか。サクラがそっと窺った上司の顔はほとんどが隠れていて、

よく分からなかった。

一行は、他に会話と言う会話はなく進んだ。

幅三メートルほどの川にかけられた小さな橋を渡ると、土が乾き始めた。砂混じりの足音を立てながら歩いていく。こちら辺は人の手がいっており、道がある程度整備されているので比較的歩きやすい。天気も非常によく、任務中ではあるが気分は晴れやかだ。もしもサクラが一人であったのなら、鼻歌でも歌っていたかもしれない。

ナルトの暇だという文句を聞き流し、道の真ん中にできた水溜りを避けて歩きながら、サクラはカカシをちらと見た。カカシはすぐさま彼女の目線に気がつき、よく出来ましたと言わんばかりに目を細めた。

何事もなく一歩二歩三步と歩み進めた。

鉄がこすれる音が聞こえたのは、サクラが十歩目を数えた時だった。振り返ると、鉄の鎖がカカシの身体を縛りつけている。カカシにはそんな趣味が！ な、わけではもちろんなく。鎖の先には見知らぬ忍びが二人いた。額当てに彫られたマークは木の葉のものではない。短い曲線が縦横二つずつ並んでいる——水の国、霧隠れのもの。つまり、敵だ！

敵の片腕には大きな三本爪が装着されており、鎖はそれぞれの爪部分につながっていた。ところであのマスクはオシャレなのだろうか。そこに着目したサクラは、冷静でいるようで内心パニック状態に違いない。

「一匹めえっ」

くぐもった声と同時に忍びが鎖を引っ張った。カカシの身体が浮き上がり、まばたきも出来ぬ間に鎖につぶされた。びちゃびちゃと地面に血液らしきものが滴り落ちる。最後までその光景を見ることがなく、ハッとしたサクラはすぐさまタズナの前でクナイを抜き、油

断なく構えた。

「離れないでください」

「お、おう」

その間にも力カシがやられた衝撃が抜けないナルトの背に、二人の忍びが近寄る。

「二匹め」

鎖がナルトを絞め殺そうと迫る。サクラはその場から手裏剣を投げようとしたが、止めた。いち早く動いている影を認めたからだ。

投げられた一つの手裏剣は、お手本にしたいほど綺麗な回転を維持して鎖を弾き、ほぼ同時に放たれていたクナイが鎖を木に縫い付けた。敵はひどく驚いていたが、当たり前である。敵の攻撃を黙って見守る馬鹿はいない。妨害を考えていないこの二人はマヌケとは思えなかった。

自らの獲物である鎖によって身動きが取れなくなった忍びたちの腕にサスケは飛び乗り、

「ふんっ」

両者の顔面に蹴りを入れた。その動きは鮮やかだ。

「ぐぬうつ」

忍びたちはすぐさま鎖を爪から外して別々に動いた。一人は今だ動けないナルトの背後へ。もう一人はサクラ、いや、タズナへと向かって鋭い爪を突き出す。

攻撃を避けるわけには行かない。受け止めなきゃ。

ぎゅっとクナイを握り締めてサクラは相手の動きを見つめた。自分でも十分対処できると彼女は思った。しかし敵の姿は突如掻き消えた。代わりに紺色とうちわの文様がサクラの目に飛びこんでくる。呼吸が一瞬、止まる。

『待つて、待つて——君！ 置いていかないで』

サクラの頭の中で声が響いた。なんでこんな時に！

「死ねえっ！」

爪がサスケに迫り、

「ガハ」

到達する前にカカシの拳が忍びの腹に入っていた。カカシの片方の腕には、もう一人の忍びが気絶した状態で抱えられている。カカシがやられたと思われた場所には、細かく切られた丸太が転がっていた。変わり身の術だ。

「すぐに助けてやれなくてすまなかったな、ナルト」

ほっと息を吐いていたサクラは、カカシの言葉を聞いて『そういえば先生はどうしてすぐに助けてくれなかったのか』を考えた。敵の襲撃を知っていたはずなのに……しかしまた思考に潜り込みそうだったので、その前にサスケへ声をかけた。

「サスケ君、さっきはありがとう。怪我はない？」

目の前の彼に礼を言うのが先だった。サスケはサクラを肩越しに

振り返り、すぐに前を向いた。

「護衛対象を守っただけだ。礼を言われることじゃない」

そっけないが、照れているのだとこしばらくの付き合いで分かった。だからサクラは気にせず笑う。それからナルトへ目をやった。ナルトは手の甲に怪我を負っていたが、命に別状はなさそうだった。

「怪我、させてしまったな。まさかお前がここまで動けないとは思ってなくてな」

ナルトがカカシの言葉にショックを受けているのを見ていたが、一番最初に安全確認すべき人を思い出したサクラは慌ててタズナを振り返った。タズナは少し冷や汗をかいていたが怪我一つない。一息つく。

「とりあえずサスケ、よくやった。サクラもな」

「あ、でも先生。私は」

「いいんだよ。お前の行動は間違ってないさ」

カカシが態々襲われるのを待った理由に気づき、それを阻害した自分は褒められるべきじゃないとサクラは思った。そんなサクラにカカシは優しい声で言う。今の任務は護衛であり、護衛対象を真っ先に守るのが”普通”だ、と。論理的に諭され、サクラは硬くしていた身体を弛緩させた。きつと「大丈夫」とだけ言われて慰められていたらもつと落ち込んでいただろう。カカシはサクラのそんな性格を把握しているのだ。

ちよつと上司を見直したサクラだった。

「よお。怪我はねーかよ？ ビビリ君」

「んぐっ」

そんな和やかなサクラたちとは反対に、サスケとナルトは少々陰悪なムードだ。サスケはナルトを気にしていないようでいて、こんな風につつかかることが度々あった。二人の視線が絡み合う。

ナルトからしてみれば悔しかったろう。自分だけが怖がつてマトモに動けなかったのだから。悪いのは自分だと分かっている、はつきりと言われてナルトが黙っていられるわけがない。

「サスケー！」

怒鳴って今にも飛び掛りそうなナルトを、カカシが制した。

「ナルト、こいつらの爪には毒が塗ってあるからな。お前は早く毒抜きする必要がある」

「え？」

慌ててナルトが左の手の甲を見た。キズ自体は深くなさそうだが、毒があるのなら楽観視はできない。

「傷口を開いて毒血を抜かなくちゃならない。そう強いものではないが、さそうだが、あまり動くな。毒が回るぞ」

さてと。カカシは黙り込んだナルトからタズナへ視線を移した。タズナが怯む。

「タズナさん。ちょっとお話があります」

第二十五劇「初めての实战」（後書き）

国と里について。

原作を元におなじみの自己解釈が混じってます。

国と里は互いに利害が一致している限りは関係良好。国は里に守ってもらい、里は援助してもらう。火の国など大きいのに里が一つなのはなぜだろうかと考えた結果、戦争回避としました。

まあ、無理に統合したらそれはそれで軋轢を生みますが。

サクラのキャラが、なんか変わってきている気がするのは、気のせいだろうか。……HINATA様の影響っ？

お気に入り50突破しておりました。ほんと、ありがとうございます！

修正＆空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第二十六劇「騒がしい集団」

「霧隠れの中忍つてところか。こいつらはどんな犠牲を払っても戦い続けることで知られる忍びだ」

丸太にくくりつけた忍びをカカシやサクラたちは見下ろしていた。霧隠れの忍びは口元に大げさなマスクをしており、そこからくぐもった声がした。

「なぜ我々の動きを見切れた」

敵の質問に答える義務などないが、カカシはサクラを呼んだ。おそらくナルトやサスケたちにも知っておいてもらうためだろう。サクラは頷いた。

「ここら辺に数日雨が降っていないことは乾いた土からも明白。そして今日も晴れ。水溜りなんて出来るはずがないわ」

「そういうこと」

「ぐっ」

どう見ても子供であるサクラにまであっさり見破られていたと知って、霧隠れの忍びは悔しげに顔をしかめた。この二人はあの水溜りの中に術で隠れていたのだ。しかし戦闘中のマヌケっぷりといい、本当に中忍なのだろうか、この二人。

「あんた、分かっているんでガキにやらせた」

タズナの声にカカシは一瞬彼へ目をやり、また霧隠れの忍びに戻

した。

「その気になればこいつらぐらいなら瞬殺できます。が、私には知る必要があったのですよ。こいつらのターゲットが誰であるのかを」
「どういうことじゃ」

カカシはそこでようやくタズナに向き直った。嘘を見逃すまいと真っ直ぐにタズナの目を見ていた。

「つまり狙われているのはあなたか。それとも我々の誰かなのか、ということですよ。今のであなたがこいつらに狙われているのが分かりました。

しかし我々はあなたが忍びに狙われているとは聞いていない。依頼内容はギャングやただの武装集団からの護衛で期間は橋が完成するまで、だったはず。敵が忍者ならCランクではなく、高額なBランク任務に設定されていたでしょう」

木の葉の依頼料設定では、CとDはまだ庶民に払える程度に抑えられているものの、B以上になると値段が跳ね上がる。しかしながら依頼をごまかす例は少ない。Cランクで依頼するのとBランクで依頼するのでは派遣される忍びのレベル（＝安全度・成功率）がかなり違ってくるからだ。

今回のような護衛の場合、あらかじめ危険を察している者がわざわざ危険度の高い方を選ぶことはそうない。

しかしタズナはBにせず、忍者に狙われる可能性を隠しCで依頼を登録した。事情があるのかもしれないが嘘を吐いて依頼されれば、依頼された方の危険度も増す。心証は悪い。

「これだと、我々の任務外となりますね」

「ちょよ、ちょっと待ってくれ。あの時ワシの前には小娘がおった。

こやつらの狙いはワシではなく小娘かもしれんじやろうが」

焦ったタズナが反論した。サクラがしてしまった失敗とはこれのことだった。しゅんとしたサクラの頭をカカシは慰めるように撫で、

「サクラ。他にもタズナさんが狙われていると思えることは？」

質問した。名誉挽回の機会をくれたのだ。サクラは張り切った。

「まず一つめ。タズナさんがわざわざ木の葉まで一人で依頼に来たこと。道中の安全確保なら、そもそも国を出る必要がない。つまりは波の国内で危険を感じている。」

二つめ。波の国に入ってから橋完成までという依頼期間。単純に国の治安が悪いのであれば完成までと区切る必要はなく、長期契約を結べば済む話。ここから国の治安は命の危険を感じるほどではないが、橋の完成までは命の危険を感じていると推測できる。

三つめ。タズナさんが度々口に出している『私たちのような子供で大丈夫か』という言葉。波の国までの道は比較的安全でそうそう襲われることはないにも関わらず、必要以上に身の危険を感じている。

これらを考えるとこの橋を巡って何か争いに巻き込まれている可能性が高い。以上」

「ほえー」

「いやあ、いつもながらサクラはよく頭が回るね。偉い偉い」

マヌケな声を上げるナルトと感心したように頷いているカカシを見て、サクラはなんだかむず痒くなった。カカシがタズナを窺う。

「どうですか？ タズナさん」

タズナは無言だ。その態度を見てカカシは顎に手を当ててわざとらしい声を出す。

「んーそうだなあ。ナルトの毒抜きには麻酔が要る。荷も重そうだしこりや里に戻るか、な？」

カカシの語尾が上がった。何を考えているのか、ナルトが突然クナイを左手の怪我に突き刺したからだ！ 血が勢いよく吹き出て地面の一部を染めた。サクラは呆然としてから、

「ちよっ何やってんのナルト！」

慌てて駆け寄ろうとしてカカシに肩を掴まれた。サクラが見上げると、カカシはまっすぐにナルトを見ていた。サクラも視線を戻し、ハッとした。ナルトの目が強く輝いていた。

「この左手の痛みに誓うつてばよ。俺は二度と助けられるような真似はしねー。このクナイでおっさんは俺が守る！ へへっへへへへ。任務、続行だ！」

左手から血を流しながらこっつけて笑うナルトだったが。

「ナルト。景気良く毒血を抜くのはいいけどな。それ以上は出血多量で、死ぬぞ」

「……………え、えっと、じよ、冗談」

「じゃない。早く止めないとマジでやばいぞー」

なぜか嬉しそうなカカシの言葉にナルトは真っ青になった。そんな彼にサクラとサスケは呆れた視線を送り、「ダメダメ！ ダメダメ！ こんなんで死ぬるかっつてばよ」と盛大に騒ぐナルトを見て、

タズナは呟いた。

「やっぱりあのガキは超アホじゃな」

サクラはフォローができなかった。

「はいはい。ほら、ちょっと手、見せてみる」

「だずげでっではよががじぜんぜいっ」

怪我を力カシが診ている間に、サクラはリュックを下ろして小さな皮袋を取り出した。再びリュックを背負いなおすとナルトの治療がちょうど巻き終わったところだった。サクラはナルトに取り出した袋を差し出す。

「はいナルト」

「サクラちゃん？　なんだってばよ、これ」

「何って、解毒薬よ。いくら毒血を抜いても多少の毒は体に残るから、念のため飲んどきなさい」

「げどくげどく解毒……えーっ！　こんなの持つてるならもつと早くに出して欲しかったってばよ。そしたら」

「うっ。しょ、しょうがないでしょ。効果に自信なかったし、大体アンタが勝手にクナイを手に刺したんじゃないの」

ぎゃーぎゃーとしばし騒いだ後、面倒くさくなったサクラはナルトの口の中に無理やり解毒薬を入れた。ナルトは苦しそうにしたらぐくんと飲み干し、「につが」と舌を出してうめいた。

「うーん。ま！　ナルトは大丈夫そうだな」

とりあえず力カシの一言でその場は収まったのだった。

第二十六劇「騒がしい集団」（後書き）

今回の推理について。

自信ないです。ものごとそないです。なのでつつこみどころがあった場合はお手柔らかにお願いします。

依頼料について。

里にとって依頼料は大きな収入源の一つ、と考えました。かといって高すぎでは依頼が来ない。そのためのランク付け。些細なことはお安く、危険な仕事は高く。ま、危険手当と考えたら当たり前ですね。

アニメを見直しているとカカシ先生がやたらと嬉しそうだった気がするのでこんな感じに。和氣藹々第七班大好き！

修正 & 空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第二十七劇「だてに年は食ってない」

霧で辺りは覆われていた。

視界が悪い中、エンジンではなく手漕ぎの舟が静かに進んでいく。サクラは注意深く周りを見るが、ほとんど何も見えなかった。こんな霧でよく舟を出せるものだ。

「そろそろ橋が見える」

舟を操作している男が抑えた声で言った。

「その橋沿いに行くと、波の国だ」

自然と全員の目が前に向かう。まだ霧しか見えな——突如、何か大きな影が現れた。徐々にはっきりと見えてきたそれは建築途中の橋で、サクラの知識にあるどの橋よりも大きかった。

「うつひょー！ でっけー！」

「こ、こらっ 静かにしてくれ。この霧に隠れて舟出してんだ。エンジン切って手漕ぎでな。奴らに見つかったら……終わりだ」

喜びの声を上げたナルトを男は叱るも、その声はやはり抑えられた小さな声だった。ナルトは慌てて口を手で塞いだ。カカシがタズナへ静かに声をかける。

「棧橋につく前に聞いておかねばならないことがあります。あなたを襲うものの正体、命を狙われる理由。でなければ我々の任務は、タズナさんが上陸した時点で終了」

「っ！」

「という線もあります」

サクラは不安げにタズナとカカシを交互に見た。タズナはしばし沈黙していた。事情を知っているだろう男は、舟を操る事に意識を集中させているのか。それとも巻き込まれたくないからか。口を挟まない。

「話すしか、いや。ぜひ聞いてもらいたい」

長く息を吐き出したタズナは、ゆっくりと話し始めた。

「確かにこれはお前さんたちの任務外じゃろう。ワシは、超恐ろしい男に命を狙われておるからな」

「超恐ろしい男？ 誰です？」

「海運会社の大富豪、ガトーという男じゃ。名前ぐらいはあんたたちも聞いたことはあるじゃろ」

「えっ？ ガトーってあのガトーカンパニーの！ 世界有数のお金持ちと言われる」

「ああ、そうじゃ」

ガトー。表では海運会社社長ということになっているが、裏ではギャングや忍びを使い、麻薬や禁制品の密売、企業や国の乗っ取りまでする金をもつけるためなら何でもする男。一年前ガトーは波の国に目をつけた。力でもってあつと言う間に入り込んできたガトーは島全ての海路交通、運搬を手中に収めてしまったのだという。

「波の国のような島国で海路を牛耳られてしまったら、ワシらはヤツに全てを支配されているのと同じじゃ」

話を一端止めたタズナは顔を上げて橋を見た。タズナが狙われる理由は、やはり橋にあったのだ。

「そんなヤツが唯一恐れているのが、かねてから建設中の橋じゃ」

この橋が完成すれば波の国には新たな交通網が出来てしまう。自らの支配が行き届かなくなるガトーからしてみれば、うっとおしい存在だろう。海運会社であつても橋を買い取れるだろうが、波の国の人々が易々と橋を手放すとは考えにくい。少なくとも抵抗にあうのは確実だ。

「じゃあこの前の奴らはガトーの手のものってことか」

「ん？ んんん？」

「はいはい。ナルトには後で説明してあげるから」

一向に理解できていない馬鹿のことは放って置いて。

「しかし、それならなお更分かりませんね。相手は忍びすら使ってくる相手。なぜそれを隠して依頼をされたのですか？」

「……波の国は超貧しい国でな。大名ですら金を持っていない。もちろんワシらもな。ワシにはCランクが精一杯なんじゃ。」

まあ、お前さんらが上陸と同時に任務を打ち切るならば、ワシは確実に殺されるじゃろ。家にもたどり着けんでな。なあに気にするこたあない。ワシが死んでも八歳になる可愛い孫が泣いて泣いて泣きまくるだけじゃ！」

個性溢れる七班メンバーの表情が、この時初めて一つになった。その表情を引きつり笑い、という。

「ああ、それにワシの娘も木の葉の忍者を一生恨んで恨んで恨みま

くって寂しく生きていくだけじゃ。いや、なに。お前さんたちのせいじゃあない」

忍び四人は顔を見合わせ、カカシは額当てに指を当てカンカンとかきむしるような仕草をした。

「ま！　しょうがないですね。護衛を続けましょう」

「おおそうか。それはありがたい」

護衛は続行になった。タズナがブイサインをしていたのは見えなかったことにしよう。

* * *

再び陸路を歩きながら、サクラは気を取り直してカカシに声をかけた。

「先生」

「ん？　どうしたサクラ」

「さっきの奴らが霧隠れの忍びってことは、次に襲ってくる相手も霧隠れよね？」

「そうだが……？」

「サクラ、どうしたんじゃ。そんなのは超当たり前のことじゃろうが」

「えーっとね。隠れ里には特色があるの。得意な戦術だとか忍術だとか特徴だとか。それが分かったら襲撃の際に少しは役立つかなくて」

「ふつむ。なるほどね」

もちろんそれらが全てではないが、知っているのと知らないのでは差が大きい。サクラが霧隠れについて知っているのは水遁が得意ということぐらいだ。そうそう他国に情報が漏れることはないが、カカシなら何か知っているかもしれない。

「確かにその通りだが、だからこそ各隠れ里は他に情報が漏れないように徹底しているからな。分かっているのは霧隠れが成功主義であること。水遁系が得意ぐらいか。ま！上忍クラスになると他の術も使えるから頭の隅に置いておけばいいだろ」

成功主義。どんな犠牲を払っても戦い続けることで知られる忍び。真新しい情報はないが、しかし考えれば一つの心配要素が浮かんでくる。

「タズナさんってご家族いるんですよね？」

「ああ。娘が一人と孫が一人……さっきからどうしたんじゃ、おめーさんは」

頭が切れることを知ったからか、サクラをどこか見直していたタズナは訝しげに彼女を見た。他のメンバーも心配げな顔をしているサクラを窺った。

「あまりこういうことは言いたくないんですけど、ご家族の方は大丈夫なんですか？ 狙われたりとか」

「っ？ そ、それは」

タズナは今初めてその可能性に気づいたらしい。申し訳ないとサクラは思っても、大事なことだった。いくら自分たちでタズナを守っても家族を人質にとられてしまえば終わりだからだ。

「すみません。心配させるようなこと言って」
「いや、むしろ言ってくれて助かったわい。そうじゃったな。相手はあのガトーじゃ。何をしてくるか分からんからな」
「……今ここでご家族のことを言ってもしょうがありません。行きましょうか」

少し歩く速度を上げた。

* * *

そして今、目の前ではやたらと張り切って辺りを警戒しているナルトがいた。先ほどの失敗を取り消そうとしているらしい。急ぐ理由ができたと言うのに。

「そこだあっ」

大声と共にナルトがクナイを草むらに投げた。びっくりしてサクラは少し固まる。ナルトは未だに投げたポーズのまま。しばしの沈黙。

「……………なんだ、ネズミか！」

「びびらすな！」

「頼むからやたらめったらクナイを使うな、ナルト！ マジで危ない」

「はあ、ウスラトンカチが」

「こらっチビ！ まぎらわしいことするんじゃない！ 寿命が超ちぢんだわい！」

「おつあそこに人影が！ いや、あつちかつ？」

キヨロキヨロキヨロキヨロとうつとおしい。

額に手をつけて息を吐き出したサクラだったが、その時首筋がビリリツと痺れた。彼女は勢いよく顔を横に向けた。

「そこっ」

またナルトがクナイを投げたのは、サクラが顔を向けた方角だった。クナイは草を突き抜けて見えなくなった。反応はない。タズナがナルトの頭に拳骨を落とす。

「だから止めると言っているじゃろうが、このチビ！」

「いつてえな！ だってホントに誰かがこつちを狙ってたんだつてばよ」

「ん〜？」

カカシが草を掻き分けてナルトが投げたクナイを追いかけた。気になったサクラとナルトもカカシの後ろから覗く。見たのは木に刺さるクナイと、気絶している白いウサギ。ウサギの頭すれすれにクナイは刺さっていた。ナルトが慌てた。

「うわあああごめんよ、うさこおおおつ。俺つてばそんなつもりは」
「なんじゃウサギか。ほんとに紛らわしいのお」

ウサギを抱き上げて頬を摺り寄せているナルトと安堵の息を吐いているタズナを横目に、サクラは首をかしげた。ウサギについて知っている情報が瞬時に頭を駆け巡る。

名前はユキウサギ。全長46〜65cmの大きさで体重は1.6〜3.95kgほど。夏になると毛色は茶褐色になりその濃淡には

個体差がある。冬になるとほとんどの個体が白色の毛になる（一部が白くならないものもいる）。これは日照時間が短くなるためと言われている。

目の前のウサギはどう見ても白だった。ちなみにサクラの服装は半袖。特に寒さは感じない。

と、いうことは室内で飼われていたウサギなのだろう。それが突然こんなところにいるということは、変わり身用のウサギか。

可哀想な話だが、変わり身術に生き物が使われることは多々ある。戦闘中とはかく、潜伏中に居場所がバレそうな時など丸太ではバレてしまうが、生き物だと気づかれにくい。目の前のナルトやタズナのように勘違いだと思わせることができるからだ。

まだ国に辿りついてないのに二回目の襲撃らしい。

どこか他人事っぽく思いながらサクラは平静を装って身構え、うなるような風の音を聞いた。何かが飛んでくる。

「全員伏せろっ」「タズナさんっ！」

第二十七劇「だてに年は食ってない」(後書き)

ユキウサギの記述について。

ウィキと原作での説明を混ぜ合わせました。

忍びの特徴について。

確か原作で言ってたような気がするんですが、まあ文化が違えば特徴も違うよな、とこうなりました。

家族が狙われる可能性について。

なぜ誰も指摘しないのだろうと考えたんですが、カカシはわざと言わなかったのかも。心配させるだけだし、家族まで守れる人員の余裕もない。が、今回あえてサクラに言わせてみました。

しかしですね。先を書いているとオリジナル要素が多くなっている気がするんですが……あ、今更か。

修正&空白行入れました(11・04・05)

修正(11・06・12)

第二十八劇「上忍の戦い」

タズナに覆いかぶさったサクラの上を、風を切って回転している何かが通り過ぎていった。それが木に刺さって動きを止めたことで、ようやく巨大な刃物であることが分かった。

包丁に似た長方形の刃物の先の方には丸い穴、根本には半円の凹みがある少々変わった武器だ。幅も厚みも長さもあるその巨大包丁を手裏剣のように軽々投げたのは、十中八九刃物の上に立っている男だろう。

男はサクラたちに背中を向け、かすかに顔をコチラへ向けていた。黒髪短髪の頭には額当てが横斜めにつけられており、そこに描かれたマークは霧隠れだった。

額当ては斜めにつけるのが流行っているのだろうか。それに上半身裸というのは防衛的にどうなの？ というサクラの胸中での感想に、残念ながら突っ込める人はこの場にいない。

「タズナさん、大丈夫？」

「ああ。すまん。超助かった」

起きるのを手伝いながらサクラは男から目を離さない。カカシが数歩前に出た。どこか気の抜けた声で男に話しかけている。駆け引きが始まったのだ。戦闘前に相手の情報を多く掴むのは、これからの戦闘を優位に進める上で非常に大事なことであった。

「これはこれは霧隠れの抜け忍、桃地再不斬君じゃあないですか」
「ぬーけえにんっ？」

マヌケな発音をしたナルトは抜け忍の意味も知らないらしい。が、

今は悠長に説明している場合ではなかった。飛び出そうとしているナルトをカカシが押し止めているのを見ながら、サクラは自分の行動について考える。カカシがすぐに気づけたほど有名な忍びなら、強さもかなりのはずだ。ならば自分に出来ることは一つしかない。

タズナを守る。

とりあえずそれだけを考えることにした。もちろん情報収集は忘れない。

「写輪眼しゃりんがんのカカシとお見受けする。悪いが、ジジイを渡してもらおうか」

ようやく肩越しに振り返った再不斬は、口元を包帯のようなもので覆っていた。カカシは己の額当てを掴んだ状態で動きを止めている。

「お前ら、正まんじの陣じんだ。タズナさんを守れ。戦いには加わるな。それがここでのチームワークだ」

言いながら、カカシはゆっくりと額当てを上げていく。今まで隠れていた左目の箇所には縦に傷跡があり、開かれた目は不気味なほどに赤く……そこには小さな勾玉のような形の黒い紋様が三つ、円を描くように浮かんでいた。

「再不斬、俺と戦え」

「ほお。噂の写輪眼をこの目で見れるとはな。光栄だね」

写輪眼とはある一族に伝わる瞳術で血継限界（遺伝によってのみ伝えられる、特殊な能力または体質）の一つである。体術・幻術・忍術をすべて見抜くことができる上に見ただけでその技をコピーし、自分の技として使うことができる。

写輪眼って何だよ！ と騒ぎ出したナルトにサスケが簡単に説明しているのを聞いてみると、突如辺りを霧が立ちこみ始めた。タイミングがタイミングだけに自然のものとは考えられず、サクラはクナイを掴んで構えた。

霧隠れの忍びは水遁が得意、か。

サクラはちらと近くにある湖に目を留めた。水遁を使う際、水場が近くにあった方が有利である。あらかじめ襲撃場所をここに決めていたに違いない。なるほど。そう考えると水場がたくさんあるこの国は彼らにとって戦いやすい場所なのだろう。

「俺が霧隠れの暗殺部隊にいた頃、ビンゴブックにお前の手配情報が載ってたぜ。千以上の術をコピーした男。コピー忍者の力カシ。まあ、お話はここまでにしとくか。俺はそこにいるジジイをさつさとやらなきゃなんねーからな」

サクラ、ナルト、サスケがお互いを背中合わせにクナイを構えタズナを囲った。

「といっても、力カシ。お前を倒さなきゃいけねーみたいだけど、なっ」

一瞬で武器を木から抜いた再不斬は湖の上へと降り立った。何か印を結んでいる。霧が更に濃くなりスウーッと再不斬の姿が掻き消えた。気配も感じ取れない。

「どんどん霧が濃くなっていくつてばよ」

「波の国は海に囲まれとるから、超霧が出やすいんじゃ」

「……いいえ。これは自然の霧じゃないわ。おそらく……霧隠れの術、気をつけて」

霧は数歩前にいたはずのカカシですらサクラの目から隠した。なんとか見えるのは自分の手の届く距離のみ――突然視界が少しだけ晴れ、カカシの背中が再び見えた。彼が何かをしたのだろう。

空気が、冷たく、重い。

カカシと再不斬の殺気がぶつかり合い、サクラの身体に襲い掛かってくる。重力が増えたような感覚に、意思とは反対に身体は動きを鈍くする。それでも警戒を続けるが、サクラは他の三人の様子がおかしいことを察していた。特にサスケ。殺気の重圧で身動きが取れなくなっている。これほどの殺気を浴びるのは初めてだろうから、仕方は無いが。

マズイ。この状態でこっちに來られたら。

「サスケ、安心しろ。お前らは俺が死んでも守ってやる。俺の仲間
は絶対、殺させやしないよ」

少し振り返ったカカシは笑っていて、サスケの震えが止まった。

「っ！」

「それはどうかな？」

近くで聞こえた声にサクラが振り返る。再不斬はサクラたちが組む陣の真ん中に現れていた。早いっ！

再不斬が笑う。

「終わりだ」

巨大な包丁が音を立てて横に振られる。どうするっ？ クナイで受け止め、駄目だ。クナイごと斬られる。ならタズナだけでも、とサクラは思っのに身体の動きは遅い。包丁が迫る。くっ間に合わない！

「ぐぬっ」

しかしサクラたちを襲うだろう衝撃が、いつまで経ってもくるとはなかった。

「カカシ先生っ」

瞬時に移動してきたカカシが再不斬の胸にクナイを突き刺していたからだ。サクラは一瞬喜び、しかし再不斬の傷口から流れ落ちているのが水であることに気づく。水を媒体にした分身の術だ。ぬつとカカシの背後に現れる影。

「先生後ろ」

ナルトの声は遅かった。再不斬の分身が水に変わって地面に吸い込まれた時、巨大包丁もまたカカシの胴体へと吸い込まれていた。血が飛び散り——いや、これもまた水！ カカシが再不斬と同じ分身の術を使ったのだ。術と言うものは見ただけで使えるようになるものでは、決してない。それをすぐさま自分のものにするとは。

コピー忍者。

その二つ名の意味を、サクラは目の当たりにしていた。

「動くな。終わりだ再不斬」

再不斬の背後に回りクナイを首前に突きつけているカカシが、今まで聞いたことのない低い声を出した。

おそらく戦いが始まってから何分も経っていない。あつという間に進み、終わる。これが上忍同士の戦い。桁が違いすぎた。

「すっげえー」

明るいナルトの声には賛成だが、気は抜けない。きっとまだ終わっていないからだ。再不斬の目には焦りがなかった。

「ふ、ふっふっふっふっ。終わりだと？ 分かってねーなあ。猿真似ごときじゃこの俺は倒せない。絶対にな」

実際、笑い出した再不斬には余裕さえ見えた。もしやこれも分身？ サクラは注意深く周りの気配を探るも、霧のせいだ。それとも目の前にいるのが本物だからか。気配は感じられない。もつとも、先ほどの水分身の気配すら感じ取れなかったので自信はない。

「しかし思った以上にやるじゃねーか。あの時点で水分身をコピーし、その分身にらしい言葉を喋らせといて注意を引き付ける。そして本体は霧に隠れて俺の動きを観察してた、と。なるほどな」

けどな。

再不斬の低い声が、一層低くなった。

「先生っ」

とつさにクナイを投げていた。カカシの背後に、影があった。再不斬はクナイはかすかに首を振るだけで避けた。

「俺もそう甘かねーんだよ」

バシャン。水分身が水に戻り、カカシの背後から巨大な包丁が真横に振り抜かれる。カカシはその一撃を何とかしゃがんで避けたが、回転の速度を利用した再不斬の回し蹴りをくらい、湖へと飛ばされ

た。

「カカシ先生！」

再不斬が追いかけて湖へと飛び込んだ。そして、

「甘いな。水牢の術」

「しまっ」

丸い水の球の中にカカシは閉じ込められた。閉じ込められたのが分身、という都合のいい話ではなさそうだ。

「脱出不可能のスペシャル牢獄だ。カカシ、お前に動かれると厄介なんだな」

サクラの頬を、汗がつたり落ちた。

第二十八劇「上忍の戦い」（後書き）

写輪眼について。

ウィキと作品内の説明を参考にしました。

少年マンガだから仕方ないけど、ピンチ有利ピンチの繰り返しで、文章で表すのめっさムズイですね。

もっと迫力ある戦闘シーンが書きたい。

修正＆空白行入れました（11・04・05）

修正（11・06・12）

第二十九劇「忘れていたこと」

カカシは捕まり、身動きが取れない。こちらはナルトもサスケも身動きとれず、タズナは言うまでもない。

「とりあえずあいつらから片付けさせてもらうぜ」

再不斬は右手を水の塊から離さぬまま、片手で印を結んだ。すると湖の水が浮かび上がって形を作り、再不斬の姿となった。水分身の術を使ったということは本体は動けないのだろう。一つ勝機が見えた。

しかしサクラ一人でタズナや二人を守って分身と戦いつつ本体を攻撃、などは不可能だ。なんとか二人に自分を取り戻してもらわないといけなかった。

でもっとうやって！

カカシのような安心のさせ方など、サクラに出来るはずがない。八方塞のままサクラは焦りをとりあえず内に隠し、クナイを構えてタズナの前に立ち塞がる。再不斬がサクラたちを見下ろしてハッと笑った。

「偉そうに額当てまでして忍者気取りか。だがな、本当の忍者つてのはいくつもの死線を越えた者のことを言うんだよ。」

つまり、俺様のビンゴブックに載るようになって初めて忍者と呼ばれる。お前らみたいなのは、忍者とは呼ばねー。ただの、ガキだ」

分身が霧の中に消えた。一瞬後、

「つつ」

「ナルト！」

再不斬に蹴り飛ばされたナルトが、地面を転がった。少年の額には額当てがなく、それは再不斬の足元に在った。まだ新しい額当てが踏みつけられて金属音を奏で、カカシの悲鳴染みた声が響く。

「お前らタズナさんを連れて早く逃げる！ こいつとやっても勝ち目はない。水牢の術でこいつはここから動けない。水分身も本体から一定距離は慣れると使えないはずだ。とにかく今は逃げる」

逃げる？ サクラは胸の内でカカシの案を却下した。

残念ながらカカシ先生。それは無理だ。格上の相手から逃げる難しさを、あなたは知っているはず。さらには一般人であるタズナに殺気で震える少年を抱えた状態じゃなおさら。

サクラたちがこの場の危機を抜け出すには、カカシを開放するしかないのだ。……それに、たとえ忍び失格といわれようと、逃げることはできない。

仲間（先生）を置いて逃げてしまえば、きっとそれはもう私では
サクラないから。

「しっかりしてサスケ君！ 今は呆けている場合じゃないの」

「サ、クラ？」

自分一人では無理でも、三人でならできるはずだ。サクラたちは三人で一つなのだから。

「ナルトを引っぱたいて二人で何とかカカシ先生を助け出して。分身の方は私が死んでも押さえておくから」

「なっお前！」

「今はそれしかないの」

サスケの反論を聞かずにサクラは飛び出そうとしたが、肩をぐつと押さえつけられ、動けない間に横を紺色が駆け抜けていった。翡翠色の目を大きく開いてその背に静止の声を上げた。はずなのに、なぜか声は出なかった。代わりとばかりにサクラの頭の中で、またあの声が響く。

『待つて、待つて——君！ 置いていかないで』

手がようやく伸びた時には、サスケの身体が再不斬に投げ飛ばされていた。タズナの傍から離れてはいけない。サクラは頭で分かっていたのに気づけば飛び出していた。無我夢中で走った。高い位置からサスケが無防備に地面へと叩きつけられる前に入り込み、受け止める。反動で地面をそのまま勢い良く転がった。

* * *

「サスケっサクラちゃん！」

あのサスケが簡単に再不斬に投げ飛ばされ、サクラがそんなサスケを助けに行くのが見えた。二人はしばらく地面を転がった後、サスケだけが立ち上がる。サクラは、動かない。

「サクっ」

ナルトは震える手をサクラへ伸ばし、白い包帯を目にした。ズキンとあのキズが痛む。

『この左手の痛みに誓うつてばよ。俺は二度と助けられるような真似はしねー。このクナイでおっさんは俺が守る！』

ああそうだった。

手の、身体の震えが止まった。立ち上がったナルトは目をサクラから再不斬、そして踏みつけられた木の葉の額当てへと移す。あの額当てはナルトの誇りだ。努力の末に恩師が与えてくれた大事なものだ。まずはそれを取り返す。

ナルトは地面を蹴った。

「たああああああっ」

「なっ止せ！ ナルトっ！」

「フン。馬鹿が」

再不斬の足が上がった。ナルトは手を伸ばし、誇りを掴んだ。胸に衝撃が入り激しく咽ながら地面を転がっても、彼は決して手を離さなかった。

身体をふらつかせ、ナルトは起き上がる。視線は真っ直ぐ逸らさない。

「おい、その眉ナシ！ 新しくお前のビンゴブックに載せとけ。いずれ木の葉隠れの火影になる男、木の葉流忍者——うずまきナルトってな」

額当てをしっかり巻きつけて再不斬を睨んだ。そして少し振り返る。

「サクラちゃんは？」

「……頭を強く打ったらしいが、問題ない。気絶しているだけだ」
「そうか、よかった。タズナのおっちゃん、サクラちゃんを頼むっ

てばよ」

「あ、ああ」

ナルトは安心して前に向き直る。

「サスケ、ちよおつと耳かせ。作戦がある」

「はっ。あのお前がチームワークかよ」

サスケの言う通り、まさか自分がチームワークを気にするなんてオカシイとナルト自身も思う。しかし、

『ナルトを引っぱたいて二人で何とかカカシ先生を助け出して。分身の方は私が死んでも押さえておくから』

自分が動けない間もサクラは”三人で”この状況を変えようとしていたのだ。それを聞いて気づいた。下忍になってからナルトは自分たちが”三人で一つ”である、ということをしつかり忘れていたのだ。

だから。

「さあて、暴れるぜえ」

ちよつとの間、待っててくれればよ。

第二十九劇「忘れていたこと」(後書き)

試験的に空白の行を入れてみました。連続で何行も入れるのは自分の中のポリスー(笑)と反するのでこれで勘弁してください。

読みにくい、というご意見がなければ、全話これで統一します(11・04・05全話実施)。

「サクラちゃんの活躍を期待されてた方には申し訳ない展開に。ってかサスケ君ファンにも怒られそうだ。

あっさり気絶してしまったサクラちゃんですが、これからどうなるのかっ!？ とか、盛り上げてみたい。

修正(11・06・12)

第三十劇「あっけない終幕」

「サスケ、ちょおつと耳かせ。作戦がある」

ナルトが不適に笑い、サスケは意外そうに目を細めた。作戦。そういうことを言い出すとしたらサクラだと彼は思っていた。一体このナルトがどんな作戦を立てたというのだろうか。

「ふっふっふ。随分鼻息が荒いが、勝算はあるのか？」

「お前ら何やってるっ？ 逃げろって言っただろ」

返事をする前に聞こえたカカシの声を、サスケは冷静に受け止めた。さすがの上忍も焦っているらしい。普段カカシの言葉をしっかりと聞くあのサクラが、カカシの言葉に従わなかったその意味に気づかないとは。

カカシが捕まった時点で、サスケたちに取りれる選択肢は一つしかないのだ。怪我人と一般人を抱えた状態で身軽な忍びから逃げるのは難しく、カカシを失った自分たちが追っ手に対処できるとは到底思えない。

サスケもそのことには気づいていた。

『分身の方は私が死んでも押さえておくから』

しかしその言葉を聞いた時、彼はとつさにサクラの肩を掴んでいた。翡翠色の目は本気で、実際死ぬ気でなければ足止めできないだろう。サクラの判断は正しいと分かっていたが、彼女の発した『死んでも』という言葉聞いたサスケは——腹の底から湧き出るような怒りを覚えたのだ。

サクラにそんなことを言わせてしまった、自分の弱さに。

「俺が捕まった時点で白黒ついてる。早く逃げろ！ 俺たちの任務はタズナさんを守ることだ。それを忘れたのかっ」

聞こえてきた力カシの声は、今まで聞いたことのない声音だった。ハッとしたナルトがタズナを振り返る。サスケもタズナを見た。彼の中で答えは出ているが、依頼主の言葉は確かに聞くべきだった。タズナは冷や汗をビッショリかきながらもそこに堂々と立っていた。サスケでさえ死んだ方がマシと思えるほどの殺気に包まれているのだ。膝をつかずに立っているだけでもたいしたものだ。

「なあに、元はと言えばワシがまいた種。この期に及んで超命が惜しいとは言わんぞ。」

すまなかつたなお前たち。思う存分に戦ってくれ」

声は震えていたものの、笠の下には場に不釣り合いな笑みがあつた。このおっさん、中々根性が座ってる。ふっとサスケも笑う。

「ふっふふふふはーはっはっはっは！ 成長しねーな。お前らの年頃には俺はもうこの手を赤く染めていたぜ？」

ああ。あれは、楽しかつたなあ」

にたりと笑った男に、ぞくりと得体の知れないものがサスケの全身を駆け巡り、

「ぐはっ」

「サスケ！」

気づいた時には再不斬の膝が腹に突き刺さっていた。あまりの衝

撃に腰を曲げて膝を地面につけた。そんなサスケの背中を容赦なく再不斬は踏みつける。骨が痛々しい音を立てた。

「がはあっ ああ！」

そのまま体重をかけられ身体がつぶされていく。痛い。苦しい。悔しい。サスケの目から生理的な涙がこぼれた。

焦ったナルトが悔しげに顔を歪めながら、両手の指を二本立て十字に重ね合わせる。

「ちつくしよ！ 影分身の術」

実体を伴ったナルトの分身が現れた。数はおよそ三十体。再不斬が少しだけ感心した声を上げていた。

影分身は実体を持つ分身を作り上げる高等忍術。下忍が扱えるようなものではない。さらに影分身の術はチャクラ消費も多い。再不斬が使った水分身は影分身よりも消費が少なく実体を持たせられるが、分身の強さは本体より落ちる。影分身は本体そのものを分身させるので、分身と本体の強さに差がない。

どちらがより強いかは状況や使い方次第ではあるが、水分身の再不斬でも今のナルトたちより強いのは間違いなかった。

ナルトの分身が再不斬を押さえている間にサスケは一端後ろに下がりがり、呼吸を整えた。ナルトが再不斬を取り押さえられたのはその一瞬だけだった。分身があっけなく弾き飛ばされ消えていく中、

「サスケエっ！」

叫び声とともに何かをナルトが投げていた。サスケはとっさに手を伸ばして何かを受け取り、作戦とやらを理解した。ナルトが投げたきたのは大きな四枚刃の手裏剣、風魔手裏剣。畳まれた状態であ

ったそれを開く。

お前にしてはよく考えた、ナルト。

「ん？」

「風魔手裏剣、影風車」

「ふんっ。手裏剣など俺には通用せんぞ」

「はあああっ」

余裕を崩さない再不斬の言葉を気にせず、サスケは手裏剣を思い切り投げた。見事な回転をつけた手裏剣が弧を描いて水分身に……当たらなかった。

「なるほど、こつち（本体）を狙ってきたか」

そう。サスケが狙ったのは分身ではなく本体！ 再不斬は右手を水牢の術に使っているのですその場を動けない。

「が、甘い」

左手であっさりと受け止められる風魔手裏剣だったが、空を切る音は途絶えない。

「何っ？」

手裏剣の死角にもう一枚の手裏剣があった。これを影手裏剣の術という。

もう一枚の手裏剣が再不斬に迫る。右手は術に、左手は先ほどの手裏剣を受け止めた姿勢のままなので動かせない。手裏剣を間近に捉えながらも再不斬にはどこか余裕があった。その場で彼は軽く跳んだ。手裏剣は空しくも通り過ぎていく。

「やはり甘い」

「それはどうか」

作戦が成功したことをサスケは確信し、口元に笑みを浮かべた。

「へへんっ」

「何っ？」

再不斬の背後で手裏剣が、ナルトの姿へと変わった。変化の術。あの手裏剣はナルトの変化した姿だったのだ。跳んだことと驚きとで再不斬は体勢を崩している。ナルトは笑って、クナイを投げた。

* * *

「ここだあっ」

迫るクナイに再不斬はとっさに右手を引いて避けた。が、クナイはわずかに再不斬の頬をかすり血を流させた。彼の目が血走る。今までとは段違いの殺気がナルトに向けられた。

「こんのガキが！」

再不斬は、左手に持っていた先ほどの手裏剣を無防備なナルトへ投げようとしていた。しかし、目の前で起きている仲間のピンチを、この男が許すはずがない。

右手の甲で手裏剣を止めた力カシは、濡れて張り付いた髪の間からギロリと再不斬を睨んだ。赤い左目に再不斬は一瞬ひるむ。

水しぶきを上げてナルトが湖に落ちていった。すぐさま笑顔で顔を出したナルトに、カカシは声をかけた。目つきとは違い、随分と優しい声だった。

「ナルト、作戦。見事だったぞ。成長したな」

「へへんだつてばよ」

影分身で再不斬の視界を遮って本体は手裏剣に変化。その手裏剣をナルトの分身体にサスケへと投げさせる。サスケは受け取った瞬間に作戦に気づき、自分の手裏剣を重ねて投げたというわけだ。カカシはナルトが立てた作戦に関してもそうだが、何よりいいがみ合っていた二人が連係プレイをしたことの方に、より成長を感じていた。その二人をつなぎ合わせたのが――。

「サクラの状態は？」

「頭を強く打ってるみたいだけど、呼吸は落ち着いてるってばよ」
「そうか」

いいチームになってきたな。

まだ戦いは終わっていないというのに、気を緩めると口元が弧を描きそうだとカカシは思った。

「俺としたことがカツとして術を解いちまうとわな」

「違うな再不斬。術を解いたんじゃない。解かされたんだろ？」

「くっ」

「一応言っておくがな。俺に同じ術は通用しない。さあ、どうする」

手裏剣が折りたたまれ、カカシの右手にかかる圧力が増した。

手袋の甲につけられた鉄板と手裏剣がこすれ、甲高い金属音が響く。この体勢は不利だ。カカシは右腕に力を込め手裏剣を弾き飛ば

し、同時に二人は跳び退り距離を取った。

再不斬が空中で印を結び始め、カカシはその動きを写輪眼で見、彼もまた印を結ぶ。その動きは再不斬と全く同じ。印は複雑かつ長いものの、二人の印を結ぶスピードは異常に速い。

両手の中指と薬指を折り曲げ、他の指の先を同じ名前の指先につける酉の印とりで両者が動きを止めると、静かだった湖が突然波打ち始めた。

「わわわっわうぶっ」

今だ湖に浮かんでいたナルトが沈みかけていたが誰にも気づかれず。

「水遁・水龍弾の術！」

果たして早かったのはどちらの声であったか。

波が首をもたげるように龍の姿を形取る。水龍はまるで意思を持っているかの如く長い身体をくねらせ、互いの身体にまわりつき牙を立ててぶつかり合い、周囲に大量の水を雨のように降らせた。同レベルの術者同士の場合、早く発動させたものが有利だが、水龍は相殺し合った。

役目を終えた水龍がただの水へ戻っている最中、湖の真ん中でカカシと再不斬は互いの得物をぶつけ合っていた。力はほぼ互角。いや、得物の特性もあって少々再不斬が有利か。しかし再不斬の表情には戸惑いが在った。

写輪眼は『術を記憶しコピーするもの』のはず。だというのに術の発動が同じタイミングというのは、オカシイ。

その動揺が再不斬の力を弱めていた。

「ぐっ」

二人はお互いを押し戻すように離れ、円を描くように走り止まる。全てが同じ動作だった。

再不斬が左手を真つ直ぐ上げ右手を胸の前にもってくれば、カカシもまた同じ動作を同じタイミングで行った。それは完全に再不斬の動きを、

「読み取ってやがる」

「っ？」

カカシが声を発すると再不斬の表情が驚きに染まった。カカシはそんな再不斬を冷淡な目で見つめている。赤い左目が怪しく輝いた。再不斬はまた別の印を組みながら赤い目を睨んだ。カカシもまた印を組みながら声を発する。

「胸糞悪い目つきしやがって、か」

「くっ」

動揺を、再不斬はすぐに飲み込む。

「所詮はコピー。二番煎じだ」

慎重かつ素早く印を結んでいく。

「お前は俺には勝てねーよ。サル野郎」 「お前は俺には勝てねーよ。サル野郎」

二人の声は完全に被っていた。再不斬は目の前に己の姿が見えた気がし、目を見開く。

「水遁・大瀑布だいはくふの術！」

「なっ」

術を先に発動させたのは術をかけた方の再不斬ではなく、コピーしたはずのカカシであった。

水が浮き上がり渦を巻くような動きを見せ、すさまじい勢いで再不斬に向かって放たれる。術の発動前だった無防備な再不斬になす術はなく、彼は水に飲み込まれていった。

水は勢いを維持したまま湖を抜け、地面を大きく削りながら木々をなぎ倒し、それでも勢いは止まらない。決して小さくない湖の水が流れてどんどんと水位を下げていった。

カカシはそんな中を木から木へと飛び移りながら再不斬を追いかけて、数本のクナイを投げた。

「ぐおおっ」

受身も取れず木に身体をぶつけ、さらにクナイで動きを封じられた再不斬へ、カカシは静かに言い放った。

「終わりだ、再不斬」

水がようやく引いていく。再不斬は息も絶え絶えに問うた。彼の表情には純粋な驚きがあった。

「なぜだ。お前には未来が見えるのか」

その問いかけの返答は短い。

「ああ。お前は死ぬ」

血が空気を漂った。

どさりと倒れた再不斬の首には細長い針のようなものが二本刺さっていた。千本と呼ばれるものだ。カカシではない。

「ふふつ。本当だ。死んじやつた」

カカシは視線を声の聞こえた方に向けた。高い木の枝に立っていたのは声や背格好から、おそらくナルトたちとそう変わらない年頃の少年と思われた。顔には不思議な模様のついた面をつけているため、顔立ちは分らない。面の額部分には短い斜めの曲線が縦横二個ずつ並んでいる。霧隠れのマークだ。

再不斬の傍でしゃがんだカカシは首筋に指を触れさせて脈を計り、彼が死んでいることを確認した。

「確かに、死んでいるな」

「ありがとうございました。僕はずっと、確実に再不斬を殺せる機会を窺っていたものです」

「そのお面。お前は霧隠れの追忍おいにんだな」

「さすがですね。よく知っていました」

追忍とは、再不斬のように里へ反抗し里を抜けた忍を追いかけ、殺す者たちのことだ。忍びを殺す忍びであるだ。その強さは普通の忍びとは一線を画する。

この年で追忍とはな。

ナルトが悔しそうにしているのを視界に納めながら、カカシは少年の動きをつぶさに見ていた。

「ではそろそろ失礼させてもらいます。この身体を始末しなければならぬものですから」

いつの間にか再不斬の近くにいた少年は、大きな身体を背負って、

消えた。

第三十劇「あっけない終幕」(後書き)

影分身について。

原作であり影分身を使っている人(上忍でも)がいないため、結構使い勝手が難しいものと判断しました。簡単につかってなお疲れないカカシやナルトが異常なんでしょうね。

ってか、ナルトは散々「才能がない」と言われてますが、あれだけスタミナがある時点で説得力ないよね。とか、思うのは私だけだろうか。スタミナも十分才能だと思う。

基本こんな風に原作重視ですが、サクラの活躍の場はちゃんとあるのでご安心を(笑)。

見にくいというご意見なさそうなので、会話と地の文を基本的に分けることにします(あえて分けない箇所も有)。

一話一話の長さについてですが、もっと長くてもいいんですかね。このぐらいが読みやすいかなあって思ってたんですが、そうするとものすごい話数になりそうで……。短いだとか長いだとかあれば遠慮なく言ってください。できるかぎり考慮したいと思っています。

修正(11・06・12)

第三十一劇「見えるようになったもの」

サクラが目覚めたのはタズナ宅についてからだった。彼女が受けた衝撃を言い表すのは難しい。

「すいません」

「何、お前さんはようがんばった。それに皆無事じゃったんだ。気にする必要はないわい」

がははと笑ったタズナに、サクラはなんとか笑顔を見せた。

お面の少年が去った後、写輪眼を使いすぎた後遺症でカカシは倒れ、布団で寝ている。写輪眼は強く便利な反面、身体に負担が大きいうのだ。

少し落ち着いたサクラは、真剣な表情でカカシを見た。

「ああ、それで先生。話を聞いていて気になったんですけど」

「どうした？」

「本当に再不斬は死んでいたんですか？」

カカシがサクラの目を覗きこむ。

「千本という武器は治療にも使われます。投擲武器としては当たる面積が点ですからあまり殺傷力はありませんし、首に投げたというのが気になるんです」

「サクラちゃん、首だとして気になるんだってばよ」

ナルトの問いに沈黙を返したサクラは、自分の首に手を当てて言った。

「カカシ先生の話だと少年は首のここを正確に貫いています。ここにはツボがあつて——肉体を一時的に仮死状態にすることが可能です。他の場所にもありますが、首は筋肉が少ない分当てやすいと思います」

「やはりそうか」

「っ！なるほど。そういうことか」

サクラの言葉に驚きつつ納得したのはカカシとサスケで、ナルトとタズナは「は？」と互いの顔を見合わせた。ナルトがよく分からない話をしている彼らにムツとし、大声でわめいた。

「お菓子の状態がどうしたんだってばよ！」

「……はあ」

本気でそう思っているらしいナルトに、サクラは深い息を吐き出す。カカシとサスケは呆れを通り越して哀れむ視線をナルトに向け、タズナははつきり告げた。

「やっぱり超阿呆だの、おめーさんは」

ごほん。カカシは咳払いする。仮死状態に関して説明する気はなさそうだ。

「とりあえず、だ。追忍は身体の構造を知り尽くしている。サクラの言う通り仮死状態にすることは可能だろう。」

通常、追忍は遺体をその場で処理をするにもかかわらず、重いはずの再不斬の遺体をわざわざ持って帰ったこと。殺傷能力の低い千本と言う武器を使ったこと。

情報を整理すれば再不斬と少年はグルで、再不斬はまだ生きてい

る可能性が高い」

「そりゃ超考えすぎじゃねーのか？」

「いや。クサイと当たりをつけたのなら準備をするに越したことは
ありません」

準備とはなんのことだろうか。サクラは考えるが予想つかない。

第一力カシは一週間ほど動けないのだ。向こうも仮死状態から回復
するまで時間はかかるだろうが……力カシはサクラたちをゆっくり
見回す。にっこりと笑った。

「お前たちに修行を課す」

* * *

タズナ宅の近くに在る森で修行は行われる事になったのだが、足
元に投げられたクナイをサクラは複雑な表情で見ていた。

それもそのはず。修行を課すと力カシにいわれ、一体どんな修行
かと期待していたら木登り修行だったのだ。サクラが散々行っ
てきた、手を使わずに木を登る、あの修行である。

なぜ今更チャクラの修行なのかと不満なナルトとサスケに力カシ
が説明をしていた。ちなみに力カシは木の枝の下に逆さ向きで立っ
ていた。チャクラで足と木を吸着させているのだ。

術が使えていたらきちんとチャクラを扱えている、とはならない。
術には用途に合わせて身体エネルギーと精神エネルギーを混ぜ合わ
せる必要があるのだが、これは調合、もっと簡単に言うと料理と考
えても良いだろう。

料理を作る際、レシピ通りに作れた方が通常はより美味しいもの
が出来る。たまにレシピからずれてまったく新しい料理（もしくは

よりおいしい料理」が出来た際もあるが、なんにせよ基本のレシピをマスターしてからの話だ。

しかしそのレシピ通りに作ったつもりでも作れていない場合がある。そういった場合毎回どこか違う料理が出来たり、失敗したり、余分な材料を使ってしまったりする。つまり、より正確なチャクラコントロール技術を手に入れることで、安定して術が発動できるように、余分なチャクラを消費せずに済むということだ。

「お前らにはまだ難しいだろうから、歩いてではなく走って勢いをつけてから登れ。そして登れた場所にそのクナイで傷をつける。そして次はさらに上に傷をつけられるよう心がける。いいな？」

カカシの説明を聞き終わり、一番最初にクナイを拾ったのはナルトだった。ついでサスケが拾う。二人とも半信半疑な表情だ。

「こんな修行俺にとつちや、朝飯前だってばよ！　なんたって俺は今一番伸びている男！」

「はいはい。ごたくはいいから、さっさと登ってみろ」

カカシの適当な相槌にムツとしてから、ナルト、それからサスケは目を瞑って足にチャクラを集中した。サクラは特に何もしない。する必要がなかった。彼女はクナイを拾ってすらいない。

「よっしゃ！　いつくぞあい！」

ナルト以外の二人は無言で木に向かって駆けていく。最初に木へ足をかけたのは、やはりといふべきかナルトであった。

「どぐえっ」

が、一歩目で足を滑らし頭を打っていた。チャクラが少なすぎたらしい。いってえええ。頭を押さえて叫びながらゴロゴロ転がっていくナルトは、もちろん最初の脱落者だ。クナイで傷をつける暇もない。

そんなナルトの横でサスケが苦悶の表情を浮かべながら駆け登って行く。十歩目を越した辺りでコントロールが乱れたのだろう。チャクラの量が多くなり、木の幹がサスケを弾いた。クナイでその場に傷をつけ、舌打ちしつつ地面に着地する。

サスケは冷静に分析しているようだ。先ほどの自身の様子と隣で転がっているナルトを見比べ、この修行の難しさを実感していた。

「いってててて……あれ？ カカシ先生、サクラちゃんは？」

松葉杖をついたカカシは木から降り、一本だけ残されたクナイを真剣な目で眺めていたが、ナルトの声に笑顔で頭上を指差した。ナルトが少し顔を上げる。サスケも気になったのか顔を上げた。しかし、サクラの目立つ髪色は見えない。

「違う違う、もっと上だ」

「もっと？」

二人がどんどん目線を上げていく。そしてポカンと口を開けた。木の天辺に、見慣れた色が見えた。顔までははつきりと見えないものの、風になびいている髪と赤い服は彼女で間違いないだろう。木の頂上から何を見ているのだろうか。地上の視線に気づいていないサクラは、どこか遠くを見ているようだった。

「おーい、サクラー」

大きな声でカカシが呼びかけ手を振ると、気づいたらしく手を振

り返していた。

「戻ってこーい」

一泊遅れて「はい」と返事が聞こえた。

満足そうに頷いたカカシだったが、すぐに目を見張った。サクラの上半体が前に倒れたのだ。

「サクラちゃん！」

「ちっ」

飛び出そうとした二人をカカシは止める。抗議の声と目線に対し「よく見る」とだけ言った。

「よく見ろ」たつてサクラちゃんが落ちて……はれ？」

ナルトが不思議そうな声を上げた。確かにサクラは地面へ真っ直ぐ向かってきていた。しかし落下ではないことは、あの猛スピードの中でも決して離れない足と幹が語っている。つまり体重は支えきれないが、木と足が密着する程度のチャクラを調整しているのだ。その差はごく僅かだろう。

あんなの、俺でもできるかどうか。

カカシがサクラへの認識を改めたところでピタとサクラは止まった。地面から一メートルほどの高さである。そのまま悠々と地面へ降り立つ。

三人を振り返ったサクラは一瞬不思議そうな顔をして、すぐさま「しまった」と言わんばかりに目と口を大きく開き、パーの手を口の前に持ってきた。任務中は相手の嘘を見破り鋭い推理をするサクラだが、普段の彼女は純粹で嘘がつけない。今のように動揺も隠せず、思考が筒抜けなのだ。

「えと、ど、どうしたの？ カカシ先生」

引きつり笑いを浮かべているサクラを追及する声はない。カカシとしては木登り修行に慣れているのが気になりはするが、この場で指摘するのは可哀想だと判断した。

「ん？ いやいや。この中で一番チャクラのコントロールが上手いのは、どうやら女の子のサクラみたいだな」

「うひょー！ すげえすげえってばよサクラちゃん！ ねね。今のどうやんの？」

「ナルト。木登りもマトモに出来ないお前には到底無理だ。木登りをマスターしてからにするんだな」

「いよっしゃ！ なんかやる気出てきた。行くぜ。たああああっ」
「ふんっ」

俄然やる気になって木へと駆けて行く二人を見送り、サクラを見た。目が合うとサクラは大げさに肩を震わせた。用件を察しているのだろうが、目の前で『私は何も知りません』と宙に目を彷徨わせている姿と、鋭い冴えを見せる姿は重ならない。普段は大人びているが、こういう姿は年相応だ。

「とりあえず修行はいいから。念のためタズナさんたちの護衛に戻れ」

「はいっ」

「あ。夕食後、俺の部屋に来るように」

「……はい」

一度喜んだ後、サクラはしょんぼりと肩を下げた。とぼとぼ去っていく背を見ながら、カカシは右目を細めた。

カカシが第七班を受け持ち始めてから一ヶ月以上経過している。それだけ一緒にいれば気づくことは多い。その中でも際立ったのが、サクラの強さへの貪欲さだった。両親が目の前で殺された過去を考えると当たり前かとも思ったが、どうもそれだけじゃないように見える。もうすぐそこにタイムリミットが迫っているかのような強い焦燥を感じるのだ。いや、焦りというよりもあれは――。

それにあの渦。

写輪眼でサクラを見た時の衝撃が彼には忘れられない。三代目が自分にサクラを任せた理由はこれかと悟った。サクラの中に渦を巻く何かが見えたのだ。今は右目でも見える。突如見えるようになった原因は不明だが、基本あの渦が見えないものであることは分かった。

「はあ。やれやれ」

本当に大変な班を任された。カカシは思って頭をかいだ。彼の目は、しかしとても柔らかかった。

第三十一劇「見えるようになったもの」（後書き）

。うちのサクラはすげーんだぞ！ を、ちょっと主張してみた（笑）

渦が見える条件はいくつかあります。写輪眼で見えたってシカマルと三代目はどないやねん！ と、なるかもしれませんが、一応理由はあります。ご都合主義かもしれませんがそんなけども。

チャクラコントロールの説明について。

料理云々とか、よけい分かりづらいとかは言わないお約束^え。

それにしても、やたらとカカシ先生の出番が多いんですが、どうしよう。そのうちカカシ先生主人公になってたりして（爆）。

修正（11・06・13）

間劇「それぞれの視点」

一体力カシに何を言われたのか。肩を落としてしょんぼりと去っていく背中を見送り、サスケは前に向き直った。

『どうしてあんなことをした？』

『え？』

タズナの家に着く少し前にサクラは目を覚ました。礼を言いながら自分の背を降りた彼女に、サスケは言った。

『なんで俺をかばった』

『それは』

彼が首だけ振り返ると、どこかで見たことのある、困ったような泣きそうな顔をしたサクラがいた。あれはいつ見たのだったか。

思い出せぬままサスケは前を向く。ナルトとタズナは力カシを抱えながらすでに家の玄関をくぐっていた。この場には二人だけしかない。息を吐き捨てるように、サスケは声を口からしぼり出した。

『……二度と、するな』

ごめんなさい。消え入りそうな声を背中で聞いた。

「くそっ」

苛立ちながらサスケは木を登っていく。しかし、先ほどより遙かに下の方で足が滑った。もう片方の足で木を蹴り空中で体勢を整え、

着地する。ぎりつと見上げた木の頂上はあまりに遠かった。

「だせえ」

サスケは重々しく呟いた。

あんなのただの八つ当たりだった。サクラは悪くない。あのままの姿勢で落下していたらサスケもただではすまなかったろう。だが、ピクリとも動かないサクラを見て、サスケは頭が真っ白になった。呆然とサクラを見下ろすことしかできなかった。

ナルトがいなければ、間違いなくぼけつとしたまま殺されていたことだろう。

「とりゃあああああつ」

うるさい叫び声を上げて木を登っていく姿を目で追いながら、サスケはもう一度呟いた。だせえ。

『ごめんなさい』

サクラの声がサスケの中で繰り返し響く。あの時サクラは泣いていたのだろうか。ああ、俺はいつもあいつを悲しませるばかりだ。せつかく最近はずっと普通に話せるようになって笑顔も――。

「おいサスケ。なんだ、もう休憩か？」

「っ！　んなわけあるかよ。このウストラトンカチ」

カカシの声でサスケは我に返る。自分は何を考えてるんだ。今はこの修行に集中しなければ。サスケは木の天辺を睨みつけた。…風になびくサクラ色が見えた気がした。

* * *

サクラが努力しているのを、ナルトはよく知っていた。以前それで手を気にしていた彼女に、手袋を贈ったこともある。すつごく喜んでくれた。

「すつげえな」

ナルトは乱れた呼吸をしながら地面に倒れ込み、木の傷痕を見つめた。一番高くて四メートルほどだろうか。そこから視線を天辺に向ける。まだまだ遠い。

サクラが努力しているのを知っていた。自分も負けじと努力していたつもりだった。だというのに、この差はなんだろうか。ついと彼は手を伸ばす。

「遠い」

サクラの周りはいつでも鮮やかで温かくて眩しくて、ナルトは中々声をかけることが出来なかった。ナルトにとってサクラはもっとも近くにいて、もっとも遠い存在だった。

だから同じ班になれたのが彼はとても嬉しかった。少しでも近づけると思った。でも、まだまだ遠すぎる。

あれほどのことができるようになるまで、サクラはどれほど修行したのだろう。想像したナルトは、勢いよく起き上がり、勢いをつけすぎて少しふらついた。情けない。

タンタンタン。

視界の隅で軽快に木を登っていくサスケの姿が見えた。サスケはナルトの印をあっという間に超えていく。遠い。悔しい。自分より

もいつだってあいつの方が彼女に近いのだ。

ナルトは自分の手を見つめた。修行でマメや傷だらけになった手を。

『ごめんね、ナルト。もらった手袋ぼろぼろになっちゃって』

申し訳なさそうに言ってきたサクラの姿が思い浮かぶ。一体どんな修行をしていたのか。擦り切れて穴だらけになった手袋を悲しげに見下ろし、新しい手袋をつけている理由をサクラはナルトにわざわざ話にきた。気にせずともいいのに、自分が傷つくと思ったのだろつ。

あの時ナルトは確かにショックを受けた。しかしそれは、密かにおそろいで買っていた自分の手袋がまだまだ使える状態だった、これに対してだ。次の日から彼はもつとがむしゃらに頑張るようになった。それでも、

まだまだ足りないのだ。

「とりゃあああああつ」

気合を入れてナルトは木を登っていく。

絶対に追いつくんだ。時折寂しそうにしている彼女の傍に行くんだ。いつだって自分を励まし、引っ張ってくれる彼女を、今度は自分が。

『どうしたの?』

いつかの夕暮れを唐突に思い出した。

* * *

これはこれは。

カカシは少し呆れながら二人を見ていた。サクラがいなくなった途端、先ほど以上に気合が入っている。これだけ気合が入っていれば逆に集中が乱れそうだが、お互いの存在を意識しつつも徐々に二人は高い地点へと向かっていた。

どうもサクラという存在は二人の起爆剤らしい。そして相性の悪い二人の接着剤でもある。

個性溢れる七班がまとまっているのはサクラの存在が大きいだろう。しかし中心のサクラはかなり不安定だ。中心が崩れた時、七班こいつらがどうなるのか。カカシはそこが不安であつた。

ま！　そこを何とかするのが俺の役目なんだがな。

「とりゃあああああつ」

気合の声と共に登っていくナルトへ自然と目が向かった。ナルトとサクラはどうもアカデミー前から仲が良かったようだ。二人の関係は世話のかかる弟とそんな弟に苦労する姉のよう。と、ナルトに言えば怒られてしまうだろうが、サクラは同意するに違いない。光景が思い浮かんだカカシは少し笑ってから、息を整えているサスケを見た。

「だせえ」

小さい呟きが聞こえた。このサスケとサクラの関係がよく分らない。最初はぎくしゃくしており、仲良くなったかと思えばまた戻っている。二人の態度を見ていると単純に恋心を抱いている、という感じでもなさそうで、かといって嫌いあっているわけでもなく。

……問題はこの二人だろう。

一体二人の間に何があるのか。カカシは知らない。知る必要もきつとない。それ自体は二人が解決すべきことだ。しかし、吐き出し口ぐらいにはなれる。

「とりあえずはサクラから、だな」

カカシは口の中だけで呟いた。

間劇「それぞれの視点」（後書き）

一話一話の長さが増してきていて、ストック切れそうなのが恐い（ガクブル）。

カカシていーちゃーのポジションは、結構半々？ な感じなので、どっちともとれる程度の描写に抑えとこうかなあって思ってます。ナルトやサスケをからかっている大人と、割かし本気な大人気ない先生と。ちなみに私はどっちも好きです。

修正（11・06・13）

第三十二劇「保護者の苦勞」

「ツナミさん、手伝います」

台所をのぞいたサクラは、タズナの娘であるツナミに声をかけた。ちょうど料理中だった彼女は長い黒髪を一つにまとめ上げていた。サクラを見て微笑んだ。

「気にしないでいいんだよ。サクラちゃんたちはお客さんなんだから」

「はは。でも料理するの結構好きなんですよね」

「そうかい？　じゃ、お願いしようかな。あ、これを短冊切りにしてくれる？」

「あ、はい」

了解をもらって台所に入り、サクラはツナミと同じように髪を纏めた。手を洗ってツナミから渡された野菜を指示通りに切り始める。その様は自炊しているだけあって手慣れている。ツナミがそれを見て感心した声を上げた。

「へえ。本当に上手だね。お母さんに習ったのかい？」

「あつと、そ、そんなものです」

サクラは返事に一瞬詰まったが、ツナミはそれに気づいたのか気づかなかったのか。明るい声を出した。

「でも嬉しいもんだねえ」

「え？」

大根を切っていたサクラがふいと顔を上げた。ツナミが笑っていた。その笑顔に、サクラは少し固まった。

「娘と一緒に台所に立つの、夢の一つだったから……サクラちゃんのおかげで叶ったわ。ほらいナリは男の子だし料理なんて手伝ってくれないしね。」

あ、娘だなんて勝手に言っちゃってごめんなさいね」

『お母さんね、夢だったの』

別の声も聞こえた気がして、翡翠の目が見開かれた。だから、途中で申しわけなさそうに眉を下げたツナミに、

「いえ、ありがとうございます」

サクラは笑って礼を言った。

* * *

非常に憂鬱なため息がサクラの口から吐き出された。目の前には変哲のないドアがあった。入りたくない。サクラは思いながらドアを睨んでいた。

「サクラ、何してる。入れ」

が、部屋の中から聞こえた声に逃げることもできず、肩を落として彼女は部屋に入ってしまった。

部屋の広さは六畳ほどで、怪我人の力カシはその部屋を一人で使

っている。真ん中にしかれた布団で横になりながらイチャパラを読んでいた彼は、誰がどう見ても凄腕の忍者には見えない。サクラが一步部屋に入るとカカシは本を閉じ、座るように目で促した。サクラは迷った後、布団近くで正座した。

本音を言えば入り口付近で座りたい、いや、逃げたい。

「で、サクラ。どうして呼ばれたか、分かっているな？」

「はい」

「あの修行法、どうやって知ったんだ？」

「……図書館で読みました」

かすれた頼りないサクラの声に、カカシの目が細められた。

木登り修行は、簡単そうदैて難しい。そして何より危険を伴う。途中で落下した際、まだ体勢を整えて着地できる程度ならいい。だが、身体も動かせないほどスタミナが切れた場合はどうだろうか。何もできずに落下してしまう。良くて大怪我。下手をすれば死もありうる。

第一チャクラは生命エネルギーでもあるため、全てを使い切つてしまえば死ぬ。チャクラを使った修行とは、それだけ危険と隣りあわせでもある。なのでアカデミーの生徒（一般人）に教えることはない。あつたとしても、それは保護者付きの上で、だ。

とはいえ、サクラも嘘を吐いたわけではなかった。

「確かに図書館に忍術修行法の本があつてもおかしくはないが、アカデミー生には閲覧禁止となっているはずだ」

図書館とは言つても、一般人に貸し出し・閲覧禁止となっている本は多くある。主に忍者に関する本だ。情報漏えいを防ぐためもあるが、修行法一つにしても木登りのように危ないことはたくさんあるのだ。到底一般人に貸し出せるわけもない。

「す、みません。その、忍びの人が読んでいるのを横から盗み見ました」

うなだれて白状したサクラは、カカシが驚きに目を丸くしたのを知らない。ひたすら俯いて審判の時を待っていた。カカシのため息にビクリとする。

「サクラ。お前がそこまでして強くなりたい理由は、なんだ？」

次いで聞こえた言葉は、サクラの予想と大きく違った。意図が分からず、サクラは恐る恐る顔を上げてカカシを見た。黒い瞳がまっすぐ彼女を見ていた。真剣な、嘘も言い逃れも許さないといわんばかりの強い目線だった。

小さな唇をサクラは引き結んだ。

「ある人を救うこと、か？」

「……そう、です」

「……………サクラ、お前」

サクラが何も言わずにいるとカカシは少し目を伏せてから、またあの目をした。さつきよりも、断然優しいものだった。

「お前は一体何を怖がっているんだ？」

「っ！」

体中を電気が走ったように、サクラの身体が小刻みに震え始めた。まるで本当に電気で身体が痙攣しているようだ。異常な彼女の反応を見てカカシが少し慌てた。

「サクラ」
「や」

カカシの優しい声に、サクラは首を横に振る。こわばった顔から血の気が引いてくる。確かにサクラは何かを恐がっていた。
何を？

「あの子のために、生まれたのに」
「あの子？」

こみ上げるものを堪えるように、サクラは己の身体をキツクキツク抱きしめる。震える手で必死に、自分を閉じ込めていた。
そんな努力をあざ笑うように、彼女の口は勝手に言葉を吐き出し
ていく。

「あの子のために生まれ、あの子のために生き、あの子のために繰り返してきた。でもあの子は磨り減るばかりで、消えてしまいそうだった。このままでは私の意味がなくなってしまう。だから私はあの子になつたのに」
「――」

聞いていたカカシが何かを言った。サクラにその言葉は聞こえなかった。一度吐き出し始めた勢いは止まらない。

「ここにるのが楽しい。ずっとここにいたいと思ってしまう。みんなが愛しくて仕方ない。もうどうしたらいいのか分からないの。苦しい。だって私は、私は」
「――」

誰かの声がして、視界が暗くなった。

* * *

「すまない、サクラ」

カカシは痛む体を動かしてサクラの体を横たえた。先ほどまでの取り乱した様子とは違い、健やかに寝息を立てていて、彼はホッと息を吐き出した。

「まさかこれほどとは、な」

サクラが胸の奥に抱え込んでいるものの大きさを目の当たりにし、カカシの瞳が悲しげに揺らいだ。

正直、彼には言葉の半分も意味を理解できなかった。あの子というのが鍵なのだろうが。

『私はここにいてはいけないのに』

小さくか細い声が、カカシの耳に強烈に残っていた。何がサクラを追い詰めているのか。カカシには分からない。分かってやることできない。

「あの渦と関係があるのか？」

話している間のサクラの目には渦があり、明らかに普段よりも強く速く渦巻いていた。翡翠の奥で渦巻くそれを思い出してカカシの身体がゾクリと震えた。到底自分の手に負えることとは彼には思えなかった。あの目は、人にできるものじゃない。しかし、

彼は右手で頭の後ろをかきむしった。

「……サクラ。それでもな。たとえお前がどんな存在でも、お前は俺の大事な仲間だ。きつと——ナルトやサスケも、そう思ってる。だからな、もう少し俺たちを頼れ」

* * *

サクラが目を開けると、見慣れたマスクと斜めにつけられた額当てが見えた。彼女はパチパチと数度まばたきをする。カカシはやっぱり右目しか見えていないのだが、よく見ると結構美形かもしれない。

え、いや、違う。そうじゃなくて。えー？

何が起きているのか分からないサクラに、カカシは笑顔で声をかけた。

「よつサクラ。おはよう」

サクラは暖かな布団の中にいた。そして目の前の男、カカシも布団の中にいた。部屋には布団は一つしかなく、つまり同じ布団で寝ているわけで、自然と二人の距離は近くなるわけで……彼女は思い切り息を吸った。

「いやーーーーー!!」

その叫び声でナルトたちが駆けつけた。勢いよく飛び込んできたナルトとサスケが、なんとも言えない表情をして、慌ててサクラをカカシから引き剥がした。寝たきりのカカシへ詰め寄る二人の剣幕

に押され、サクラが正確に状況判断できるまで数秒かった。
そしてサクラは思い出す。昨日、話の途中で眠ってしまったこと
を。さあっと頭が冷めた。

「カカシ先生つてば見損なっただってばよ」

「あのね。今のは私がわる」

「変態上忍」

「いやだから先生が悪いんじゃないよ」

「サクラちゃん、こんなのかばう必要ないってばよ！」

「そうだな。こんなのはさっさと始末すべきだ」

「こんなのつて……待て。いいか？ 俺はこの通り動けないから襲
いたくても襲えな……あ、ちがつ。落ち着け！ お前ら目が本気だ
ぞ」

「ああ、本気だ」「本気だつてばよ」

「待つて待つて本当に違うんだつてー」

その後、サクラが四苦八苦しつつなんとか二人の誤解を解くこと
はでき、カカシの命は無事だった。ふう吐息を吐いたサクラは、心
が妙にすっきりしていることによりやく気がついた。

「本当に何もしてないんだな、先生？」

「しつこいなお前も。してないつて」

「……ふん。どうだか」

「あのねえサスケ、ナルト。お前らちよつとは俺を信じようと思
わないの？」

「思わないな」

「同じくだつてばよ」

「がくつ」

サクラは二人に囲まれたままの力カシを見た。

まさかわざと？ 私が昨日のことを引きずったりしないようにしてくれたの？

じっと見ていると視線に気づいたカカシがサクラを見て、にこっと笑った。大幅に見直したところだったので彼女はちよつとドキっとした。

「あー！ カカシ先生がヤラシイ目でサクラちゃんを見ているってばよ」

「んぐっナルト、お前ね……ってサスケ、無言でクナイを構えるな！ あぶおっ」

が、

「んぐぐぐ、考えすぎかな」

必死に下忍二人から逃げ回っているカカシに、サクラはそう結論付けたのだった。

第三十二劇「保護者の苦勞」（後書き）

修行に関する記述について。

独自解釈です。基本的な鍛錬法のわりにナルトたちが全く知らなかったのは変だなあと、こうしてみました。

実際かなり危険ですよ。作中でもナルトが落ちそうになって危ない！ みたいなシーンもあったし。

図書館について。

忍者に関する書物が氾濫していたら、アカデミーにわざわざ通わなくても忍者になれる。そうすると、正規の忍者を雇わず自分でやった方がよくなることは多いです。世界が破綻しかねないと思ったのでこうしました。

変なところあれば教えてください。

今回は力カシていーちゃーとの話でした。ふざけながらもちゃんと氣遣っている先生が好きです。

主人公、サクラちゃんの謎についてはまあ、もう分かった人いるのかな？ いたら、まだ胸の中にそっとしまっていてもらえると助かります。……サクラだけど、ほとんどオリキヤと化しているなと最近思っ舞傘です。あくまでも肉体はサクラですが。

お気に入り100人突破！ ありがとうございます。これからもがんばります！

修正（11・06・13）

第三十三劇「俯いた国」

トントントンカンカンシヤシヤッ。

聞いていると一つの楽曲のように思える騒音の中、サクラは珍しそうに工事現場を見回した。積まれた資材や行きかう人の邪魔にならないように注意しながら、何かあればタズナをすぐ守れる距離をキープする。

サクラはカカシからタズナの護衛を任されていた。

カカシたちは、というと襲撃に備えて木登り修行に専念している。今は再不斬も仮死状態の後遺症で動けないはずなので、家族にまで手は伸びないだろうという判断からだ。下手に命の危険を知らせて不安に思わせることもないため、タズナの娘であるツナミと孫のイナリには何も告げていない。

「珍しいか？」

「珍しいというか、すごいなあって」

重そうな角材を肩に乗つけたタズナが初めて彼女を振り返り、そんなことを聞いてきた。黄色いヘルメットがタズナの雰囲気も合つてとても似合っていた。孫がいる老人とはとても思えない。

「これだけ大きいと、バランスだとか強度もかなりしつかりさせないと崩れてしまいますよね。設計者の方はもちろん、作業している人たちはすごいなあって」

「……おめーさんは、本当に子供らしくないの。あの金髪のカキみてーに純粹に超感動すればええんじゃないよ」

「ははは。性分なもので」

サクラが苦笑していると一人の男が駆け寄ってきた。何があったのか。思いつめたように表情が暗い。

「タズナ、ちょっといいか？」

「どうしたギイチ」

「俺、よく考えたんだが」

ギイチと呼ばれた男は、随分と齒切れが悪かった。タズナが眉を寄せた。何か察しているような顔だった。

「俺、橋造り、降ろさせてもらってもいいか？」

「はあ、まさかおめーまでそんなことを言い出すとはの」

「あんたとは昔からの縁だ。こんなことは言いたくねーんだが、無茶をすると俺たちまでガトーに目をつけられちまう。それにお前が殺されてしまったら元も子もない。この辺で止めにしねーか」

雲行きが怪しい。タズナは角材を置き、まだできていない橋の、その先へと顔を向けた。彼は首をかすかに横へ振った。

「そうはいかねーよ」

「タズナっしかし」

「この橋はワシらの橋じゃ。資源の超乏しい波の国に物流と交通をもたらししてくれると信じて、町の人みんなで造ってきた橋じゃ」

「けどっ！ 命までとられたら」

「もう昼じゃな。今日はここまでにしよう——ギイチ、次からはもう来なくていい。サクラ、行くぞ」

「あ、はい」

歩き出したタズナをサクラは追いかけた。気になって彼女が振り返ると、まだ佇んだままのギイチがそこにいた。

＊ ＊ ＊

「どこに行くんですか？」

「帰りに夕飯ゆうめしの材料を頼まれとったからの」

会話をしながら二人は町中を歩いていく。

二人とさきほどすれ違った男は『仕事なんでもやります』と書かれた板を持ち歩き、道の両端にはたくさんの方が無気力に座り込んでいた。座り込んでいるものの中にはサクラより幼い子供もあり、傍にはお椀のようなものが置いてあった——お椀の中は、空だった。

「ドロボー！」

叫び声に驚いてサクラがそちらへ顔を向けると、果物を手につかんだ男の子の走り去っていく姿が見えた。サクラは唇を噛む。鉄の味がした。

「いっじゃ」

タズナが立ち止まったのは、看板がなければ店とは気づけないほど小さく静かな建物だった。

あまりにもガランとした店内を見て、今度こそサクラは立ち尽くした。商品を置く棚にはほとんど何もない。空いている棚の方が圧倒的に多く、置いてあったとしてもやせ細っていたり腐りかけの野菜があるだけ。この状態がただ単に売り切れたから、でないことは簡単に思い浮かべることができた。タズナは黙り込んでいるサクラに何も言わず、いくつかの野菜を買って、彼女を促し店を出た。

「驚いたか？」

「はい……予想はしてたんですけど」

しばし無言が続き、タズナがぼそりと口を開いた。サクラは目を伏せながら頷く。タズナが命を懸けてまで橋にこだわる理由を、サクラは本当の意味で理解した。いつだって自分は頭で知ったつもりになるばかりだ。そのことを、痛感した。

「ガトーが来てから、ですか？」

「そうじゃな。元から裕福とは言えない国じゃったが、こんなにも下を向いてばかりではなかった。ガトーが来てから、大人たちはみんな腑抜けになっちまった」

「タズナさん」

「だから今、あの橋が必要なんじゃ。勇気の象徴。無抵抗を決め込んだ国の人々にもう一度、逃げない心を取り戻すために。あの橋さえ、あの橋さえあれば。町はきつとあの頃に戻れる。みんな戻ってくれる。」

ワシは、ワシらはそう信じとるんじゃ」

握り締められたタズナの拳が、決意の重さを語っていた。

「大丈夫ですよ」

感化されたのかもしれない。あの子を重ねただけかもしれない。思いながらも、サクラは口を動かしていた。見上げたタズナの顔は、影になっでいてサクラにはよく見えない。必死に笑顔を向けた。

「私たちが必ず守ります！ ですからタズナさんは橋造りに専念してください。絶対に完成させましょう！ そしたらきつわぶ」

言葉は最後まで言えなかった。頭をタズナに押さえつけられたからだ。でも、サクラは抵抗しなかった。乱暴に頭を撫で付けるその手が、どこか優しくかったから。

「ああ、頼む」

「はい！」

* * *

同時に木へ向かった二人だったが、先に地上へ戻ったのはナルトだった。

「くそっ」

まだ登っているサスケを見て悔しげに顔を歪ませた。

「ちっ」

サスケは幹に傷をつけて降りる途中、ナルトがつけた傷を見て舌打ちした。段々ナルトが彼に追いついているのだ。地上に降り立ちサスケがナルトを見ると、ナルトもまた彼を見た。しばしにらみ合った後、サスケはまた登っていく。

それを見送ったナルトは深呼吸を何度か繰り返して気を静めた。

『ねえねえサクラちゃん、コツ教えてくれってばよ』

『っ……もう、しょうがないわね。いいい？ あんたはすぐやつきになるけどそれじゃダメ。リラックスして木に集中するの。分かつ

た？」

サクラにコツを尋ねた時のことを思い出す。そういえばなんか驚いてたみたいだけど、なんだったんだろ。驚いてたってよりもショック受けてたみたいな、あれ？ 意味一緒か……って違う違う。集中集中。よし、いい感じだ。いける！

「おい、ナルト」

「あだっだ」

今まさに飛び出すところだったナルトは、サスケの声に足をもつれさせ、見事に転んで頭を地面にぶつけた。飛び起きてサスケに怒鳴る。

絶対たんこぶできたぞ今ので。

「もおおおっなんなんだってばよお前は！ 集中してんのに邪魔するんな！」

「う、あ、その、なんだ」

ナルトが睨みつけると、サスケの様子がおかしくなった。いつもなら真っ直ぐ睨みつけてくる目が、あちこちを彷徨っている。そもそもサスケからナルトに話しかけてくること自体が珍しい。ナルトは警戒した様子でサスケを観察した。

「こ、この前サクラにコツ聞いてたよな。お前に、なんて言ってた？」

目の前で照れくさそうにしているサスケを驚いた目で見てから、ナルトは嫌味な笑いを浮かべた。

「教えな―い」
「ぐぬっ」

サスケの眉がびくびくと動き、二人はいつもの如く睨み合った。

* * *

「いやー超楽しい夕食だわい。こんなに大勢で食事するのは久しぶりじゃな」

タズナの笑い声を聞きながら、ナルトとサスケはすごい勢いで食べていた。そんな中、ツナミの手伝いをしていたサクラが台所から顔を出す。料理をしていたからか、いつも下ろしている髪を上げ、エプロンをしていた。

「ちょっと二人とも！ もう少しゆっくり食べなさいってば」

サクラの声にナルトとサスケの箸が一瞬止まる。しかし目が合った二人はにらみ合い、また勢いよく食べ始めた。カカシがタズナとツナミに申し訳なさそうに笑いかける。

「すみません。遠慮を知らない奴らで」

「いやいやいいんじゃないよ。にぎやかな方が食事は楽しいもんじゃ」
「そうだよ先生。それにこれだけ食べてくれれば作る側も嬉しいからね」

大人たちはそう言ってまた三人へ目を向けた。その目はどこか温かい。

「サクラちゃんおかわり!」「サクラ、おかわり」

「あ・の・ねえ。私は二人の給仕係じゃないんだから、もうっ」

文句を言いつつ、サクラは睨み合っている二人からお碗を受け取っていた。条件反射のようだ。ご飯をついで二人に渡す姿は中々様になっている。

「ありがとう!」「サンキュ」

またかき込み始めた二人の周りでサクラはちょこちょこ動き回る。怒りながら、

「ああもう、ナルトっ! あんたもう少し綺麗に食べれないの?」
「むぐぐ」

口の周りを汚しているナルトの顔をぬぐってやり、

「んんっ」
「はいはい、一気に食べるからそうなるのよ」

喉に食べ物を詰まらせたサスケの背をさすってやり、

「あ、イナリ君、おかわりいる?」
「……いる」

物静かなタズナの孫、イナリを気づかってやり、と大変忙しい。どうもサクラは根っからの世話焼きのようだ。そんなサクラを眺めていたタズナは、ふむふむと頷く。

「サクラ、おめーさんは将来いい嫁さんになるぞ。どうじゃ。イナリの嫁にこんか？」

「ぶふーっごほっけはっ」「ぶほっかはかはっ」

彼の爆弾発言にナルトとサスケが同時にふき出した。サクラが「汚い」と顔をしかめて後ろに二歩下がる。が、げぼげぼ激しく咳き込む二人にまた駆け寄って二人の背をさすり始めた。サクラ自身はタズナの言葉をどうとも思っていないようだ。お世辞の一つ、と考えているかもしれない。

「ちよつと二人とも大丈夫？」

「サクラあ、俺の心配もして欲しいんだが」

「あーはいはい」

ふき出されたものを頭から被った力カシが哀愁漂う声を上げ、サクラがタオルを手に力カシの髪を拭き始めた。

「いきなり何言うんだってばよ、タズナのおっちゃん！　ってか、力カシ先生なんてうらやましい」

「うらやましいってあのなあ、誰のせいで」

「先生動かないでよ！　ちゃんと拭けないでしょ」

「ごほっかはっはっ」

「わわわっちょ、サスケ君大丈夫？」

「いやー今からひ孫の顔が楽しみじゃわい」

「だーっサスケ、てめっわざとだろそのセキ！　おっちゃんもいい加減その話題から離れろってばよー」

ぎゃあぎゃああと騒がしすぎる面々を、巻き込まれないように見ていたツナミは、肩を震わせて笑っていた。こんなに笑ったのは久しぶりだと彼女は思った。

* * *

そんな騒がしい食事が終わり、ゆっくりとお茶休憩していると、サクラは壁にかけられた写真に近寄った。

写真には四人写っており、そのうち三人はタズナとツナミ、それからイナリだ。だがもう一人、どうやら男性らしい人がいるのだが顔が分からない。そこだけが破られていた。まるで意図的に破り取られたようである。

「なあなあおっちゃん。なんで敗れた写真なんか飾ってんだ？ここに写ってるのって誰だ？」

サクラの隣にやってきたナルトがそれを覗きこんだ。皿を洗っていたツナミが一瞬、動きを止めた。いや、彼女だけでなくタズナもイナリも、まともにいた空気をガラリと変えた。サクラが眉を中央に寄せた。

「夫よ」

「かつて、この町で英雄と呼ばれた男じゃ」

湯飲みを見つめながらタズナが言うと、唐突にイナリが立ち上がった。そのまま無言で出て行ってしまふ。慌ててツナミが追いかけて行った。

「お父さん、イナリの前であの人の話はしないでっいつも」

ドアが勢いよく閉められた。

サクラはほとんどイナリについて知らない。話しかけてもろくろく返事すらしてもらえないからだ。暗くよんだ目の少年は、最初にサクラたちと会った時「こいつら死ぬよ。ガトーに逆らって無事でいられるわけないんだ」と言い放った。ナルトが木の葉の火影になり英雄になるのだと語れば「英雄なんていないよ。バカじゃないの?」と彼を怒らせていた。

かなり根暗なイメージが強いが、この写真に写っているイナリは年相応の明るい笑顔だった。こうして笑っていると中々可愛らしい顔をしている。

「何かわけありのようですね」

「……ガトーが来てからなんじゃよ」

タズナが言うには、昔はよく笑う子だったのだが、慕っていた養父をガトーに処刑された日から笑わなくなったらしい。

養父の名前はカイザ。国外からやってきた漁師だった。いじめられていたイナリをカイザが助けたことから知り合い、イナリはたいそう彼に懐いて、やがて本当の家族になった。

他国の人間ではあったが明るく、また勇気のあるカイザは町の人たちからも慕われていた。大雨が降って堰が壊れかけた時には命がけでロープをつなぎ町を救った。町の英雄、とまで呼ばれたすごい人だった。イナリからしてみればさぞかし誇らしかったろう。そんなイナリの気持がサクラにはよく分かった。

しかし、そんな人間であったが故にガトーに目をつけられてしまった。町民たちの希望を閉ざすために、カイザはまだ幼いイナリの目の前で無残にも処刑された。

「あれ以来、イナリもツナミも、町民も変わってしまった。地面ばかり見るようになったんじゃ」

第三十三劇「俯いた国」（後書き）

普段髪を下ろしている子が、たまに髪をあげているときっとします（笑）。とりあえず、仲良し騒がしい七班が書いて満足。

ってか、話が進んでなくてすみません。どうしてもタズナとの会話は入れたくて。カイザンとはあっさりすませたけど、結構大事な話ですよ。なぜこの国が無気力になったのか。かなり簡潔にしていますでしたが、伝わるといいなあ。

しばらくこんな感じで戦闘ないんですが、お付き合いいただける嬉しいです。

第二幕は何事もなければ三十七劇までで、間劇が一つ入ります。

修正（11・06・13）

第三十四劇「突きつけられる現実」

「えつと……氣候を考えるとここらへんに生えてそうんだけどなあ」

サクラはきよろきよろと森の中を見渡した。朝の散歩がてら薬草を探していた。カカシの治療のためだ。

一応上司であるし、この前のお礼？ もかねてている。

「怪我や病気とはまた違うから気休めだろうけど、何もしないよりはいいよね？」

一人でブツブツと呟いている様子は、少し不気味だ。
余計なお世話だと思われたらどうしよう。

こてんと傾けたサクラの顔から不安の色は消えない。そんな彼女に迫る影があった。

「どうかしたんですか？」

「うひゃあっ」

声に驚いてサクラが後ろを見ると、目を丸くしている黒髪の美少女が立っていた。思わずその姿勢のまま二人は固まり、しばしの沈黙後に「ふふふ」と少女が肩を揺らし始めたことで、ようやくサクラの金縛りは解けた。サクラの顔が一気に赤くなる。ごまかそうと無意味に両手を大きく振ったことで、細い肘にひっかけているカゴが大きく揺れて音を立てた。少女がカゴに目を留めてなるほどと頷いた。

「いやその、やつやくしよ、薬草をつつつつつ摘みに来たんでしゅ！ あう」

少女の様子に気づかなかったサクラは、よほど慌てていたらしい。噛みまくった。

落ち着け。

サクラは心の中で自分にツツコミを入れるが、上ずった声を聞いてしまったせいで余計に緊張したらしく、口からは「わひゃわひゃ」と無意味な声が出るだけだった。元々赤くなっていた顔がさらに赤く染まった。

沈黙が降りた。

気まづげに再び硬直したサクラは、まるで審判を待つ罪びとのように緊張していた。

「ぷっあははははははっや、やくしようならいい場所知っていますよ」

沈黙を破ったのは、少女の笑い声だった。少しぽかんとしたサクラは、顔を逸らして笑いを堪えているらしい少女に眉を吊り上げた。

「薬草です！」

「すいませ……ふふふ」

「んむ」

少女は綺麗な顔をしている割に意外と意地悪らしい。笑いを納める様子なく歩き始めた。案内してくれるのだろっが、どうぞと言いながら口元がしっかりと弧を描いているため、サクラは素直に礼を言えなかった。ムスっとしたままついて行く。だがどうにもツボにはまったらしく、ムスっとした表情まで笑われてしまい、顔に見合わず笑い上戸な少女にデジャヴュを覚えた。これはいくら言っても

無駄だろう、とサクラは悟った。

深い深いため息が吐き出された。

案内された先には、確かにサクラの探していた薬草が群生していた。しゃがんで薬草を摘み始めた少女（どうやら同じ目的だったらしい）を眺めながら、サクラも薬草を摘もうと手を伸ばし、動きを止める。ボロボロの手が空気にされされていた。

普段、手袋はつけっぱなしなのだが、寝る時は外す。どうやらそのまま来てしまったらしい。さつき少女の気配に気づかなかったことといい、随分と寝ぼけている。

まあしょうがないかとサクラは苦笑し、プチンと薬草を摘み取った。

「……もしかして忍びの方ですか？」

サクラが無心に薬草を摘んでいると、そんなことを問われた。少女の声には、真剣な響きがあった。眉を寄せたサクラが顔をこわばらせて目を向けると、少女が自身の頭を指で叩いていた。サクラの額当てがある位置だ。

そりゃ額当てを見れば分かるか。

警戒を少し解く。

「まあ、まだまだ弱いんですね……いっ」

「あ！ 大丈夫ですかっ」

余所見をしていて、サクラは草の葉で指を切ってしまった。ピリリとした痛みと失態に顔を少し歪め、サクラはポーチに片手を伸ばした。

もっつどうしてこう今日は寝ぼけてるんだろっ。

手は、ポーチにたどり着くことなく止まった。

「あの？」

「ちよつと待つててください」

なぜか目の前の少女に、サクラの手が握られていた。懐を探った少女は傷薬のようなものを取り出し、茶色っぽい軟膏をサクラの指に問答無用で塗りつけた。傷がしみて反射的にサクラの手が動いたが、少女の力は強く、びくりともしなかった。

手を放してくれる気配は無く、サクラは仕方なしに適切に処置をしていく姿を眺めていた。見れば見るほど綺麗な少女だった。

まつ毛長いなあ、とか。髪さらさらしてるなあ、とか。肌白いなあ、とか。顔も可愛いしモテるだろうなあ、とか考えた。ほら、この手もきれ……いい？

「っ！」

「駄目ですよ。まだ終わってませんから」

気づいたサクラは慌てて腕を引いたが、少女の手は、やはりビクともしなかった。

淡々と治療を続けているその手は、ゴツゴツと硬かった。それが普通になるものでないことを、サクラはよく知っている。いろいろと思い違いをしていた。

修行を重ねたものだけにできるその手は、しかしサクラのものよりも大きい。ナルトやサスケの手に似ていて、どれだけ力を入れても動かないことが何より雄弁に語っている。目の前の儂げな少女が、忍びとしての訓練を受けた男の子であることを。

寝ぼけていたサクラの頭が覚醒し、回転し始める。

忍びはこの国にはいないはずだ。と、すれば対象は絞られてくる。……おそらくこの子がお面の少年なのだろう。体格は得ていた情報と一致するし、そうゴロゴロこの年のやり手忍びがいては堪らない。どうする？

腕を取られた状態、しかも相手はかなり強い。助けを呼ぶ？ しかしナルトは修行に出ていておらず、サスケやカカシはまだ寝ているだろう。自分でなんとかするしか。

怪我をしていない左手を動かした。

「下手なことはしない方がいいですよ？」

「くっ」

クナイを掴む直前にあっさりで見破られ、草地に押し倒される。両手は頭上で地面に縫いつかれたようでもしなない。両足で下半身も押さえ込まれていて、サクラはまったく動けなかった。

自分を見下ろしている少年をサクラは睨むが、余裕な笑みを浮かべている彼は、己が掴んでいるサクラの手のひらを見つめていた。途端、サクラは身体から力を抜いた。手のひらを見つめている少年がどこか嬉しそうで、気が抜けたのだ。

殺されることはない。

根拠もなく確信してしまい、そんな自分自身にサクラはひどく戸惑った。

少年は抵抗しなくなったサクラに「おや」と目を向けた。本人は自分の表情を理解していないのだろう。「抵抗しないんですか？」聞いてきた少年にサクラはため息をついて「朝から無駄なことはいらないの」と答えた。少年はくすくす笑った。

「あなたは変わった人ですね」

「うっわ、悪かったわね！ どーせ変人ですよっ！」

「ふふふっ怒るってことは、よく言われるんですか？ でも、僕は好きですよ」

「放つといってくれ……は？」

ポカンと口を開けてしまったサクラに、少年は微笑んだ。それは

とても綺麗な笑みだった。が、なぜだかサクラは寒気がした。

「だって僕と同じ目をしている」

「な、に言って」

「本当はあなたも気づいているはずだ。僕とあなたは似ている。僕たちは道具だ。ある人の目的を果たすための」

「違うっちは、私の意志で」

『私は彼らの背中を見ているだけなの。それが辛い』

あの子の声が頭の中で響いて、サクラは言葉を続けられなかった。本当に自分の意思なのか。そもそも自分の意思とはなんのことだ。自分の意思などあったらどうか。自分はある子の――。

「あ、ふうっはひっ」

唐突にサクラの息が乱れ始めた。

苦しいのだろう。翡翠の瞳からは涙が零れ落ちていた。少年はそんなサクラの頬を優しく撫でた。サクラは「止めて」と懇願した。苦しさよりも、その先を聞きたくないと彼女は思った。必死に耳を塞ごうと暴れた。少年はそんな抵抗を簡単に押さえ込んで微笑む。整った少年顔がサクラに近づく。

嫌だ！ 聞きたくない！

腕に力を込め、なんとか抜け出そうとサクラは身体をひねる。しかし形のいい唇が動き、吐息がサクラの耳に届いた。

「いつ捨てられるか。いつ居場所を失うか。いつ存在意義がなくなるのかと、怯えている。」

あなたは僕と同じそんな目をしている」

* * *

「まったく、どこまで行きやがったんだ。ウスラトンカチ共が」

イライラとサスケは足を動かした。

ナルトは「この世に英雄がいるってことを、イナリに教えてやる！」と意気込んで昨晩から帰ってこず、サクラは「散歩に行きます」と今朝ツナミに声をかけたきり、朝ごはんの時間になっても帰ってこない。

口では文句を言っている彼だが、さつさとご飯を食べ終え「散歩」と称して二人を探していた。きよろきよろ動いている黒い目は、心配の光を持っていた。

草を踏みしめながら歩いていく。ひんやりした朝独特の空気が心地よい。

「はっはっうう」

「……サクラっ？」

小鳥の鳴き声に混じって聞こえた苦しげな呼吸音に、サスケはピタリと動きを止めた。一度だけ聞いたことのある、忘れようにも忘れられない音おもいでだった。

サスケは慌てて音の聞こえた方に駆ける。木がひどく邪魔で仕方なかった。焦燥が募る中、木と木の間から鮮やかな桜色が見えた。

「サクラッ」

サクラは、あお向けに倒れ込んだ状態で浅い呼吸を繰り返していた。名前を呼ばれても、どこかぼんやりとしている。ふっくらした唇がサスケを呼んだようだったが、声は出てこなかった。なんとも

弱い。昨日サスケとナルトに説教していた強気な少女の姿は、どこにもない。彼女の姿は今にも消えてしまいそうに儚かった。

柄にもないと頭で思いつつも、サスケは焦った。

どうすればいい？ 前はどうしてた？

「かはっはっあ」

翡翠色の瞳は何かをサスケに訴えているようだったが、パニくるだけでどうするべきか彼には思いつかない。その間もサクラは苦しそうに息をしながら、いつその呼吸が止まってもおかしくないように感じた。

このままでは、死――。

『お前らは俺が死んでも守ってやる』

「そうだ！ 少し待ってろ。今力カシを呼んでく」

ようやく人を呼ぶという選択肢が思い浮かんだサスケだったが、足は動かなかった。紺色のシャツを引っ張るものがあった。

「か、なで」

「サクラ？」

呼吸の間に小さな声がした。肩越しにサスケが振り返ると、サクラは辛そうにしながらも身体を起こし、弱弱しく彼のシャツを握っていた。大きな瞳からは今にも涙が零れ落ちそうだったが、サスケを真っ直ぐ見ていた。あまりにも必死な彼女の様子に、サスケは耳へ意識を集中させた。聞かなければならない気がした。

「置いて、いかないで」

『待って、待って――君！ 置いていかないで』

「っ！」

その言葉に、サスケの心臓が大きな音を立てた。
どこかで聞いたことがあった。いや、そんなことはない。こんな記憶に残るような声を忘れるはずがないのだ。きっと気のせい。

「私も、い、しよに」

肩より短くなつた桜色の髪を、サスケは見下ろしていた。自分が守れなかった証をじつと見て、こいつはこんなに小さかったかと驚いた。いつも傍にいたのにそんなことにも気づいていなかった。気づかなかった自分をサスケは笑った。

『サクラ、ありがとう』

さまざまな思いを乗せた言葉と共に、彼女を置いていった。連れなど、行けるわけがなかった。いや、違う。サスケは首を振った。
なんだこれは。こんな光景、自分は知らないはずだ。

「っ、サクラ？」

背中に増した重力でサスケは我に返った。

脳裏に浮かんでいたすでに情景は消えており、先ほどまで何を考えていたかも分からなくなったが、今はサクラの方が大事だった。シャツを掴んでいた手からは力が抜けており、そっと手を外して向き直る。いつの間にか呼吸は正常に戻っていたが、意識がない。ぐったりした身体を支えてやりながら、サスケは彼女の頬に手を当てる。熱も特になさそうだ。そのまま一滴だけこぼれていた涙を拭い、ほうつと息を吐き出した。

「ほんと、なんなんだよ。お前は……わけ、分かんねー」

呟きながら背負った少女は、自分とそう体格が変わらないはずなのにとても軽かった。

* * *

「……サクラ、落ち着け」

「ふええっ？ お、落ち着いてます！」

「じゃあ歩き回ってないで座りなさい。それとも先生の膝がいい？」
「え？ あ」

カカシに指摘され、サクラはようやく自分がうるちよろ無意味に歩いていたことを知った。途端に顔が熱くなり、ぎこちなく椅子に腰かける。カカシの後半の台詞は軽く無視をした。サクラの視界の隅では、カカシが少ししょんぼりしていた。

翡翠の目は、テーブルの上に置かれた料理に向かった。そこにはすっかり冷えてしまった夕食が二人分、用意されている。ナルトとサスケの分だ。

おそらく二人で木登り修行をしているのだろう。

サクラとて、理解はしていた。だが、理解できても納得しているのかといえば、そんなことはない。なんだかすごく嫌な予感がしていた。迎えに行こうとしてカカシに止められた。サクラがなぜと聞いても「あいつらなら大丈夫だ」しか答えは返ってこない。

「おおっ？ なんじゃおめーら。超バテバテじゃねーか」

背後で聞こえたドアの開閉する音に、サクラは勢いよく振り返っ

た。そこにはサスケがナルトに肩を貸して支えている、という珍しい光景があった。二人はタズナの言う通りボロボロだったが、無事ではあるようだ。

「へへへっ二人とも天辺まで登ったぜ」

ほっとした表情のまま、サクラは固まった。ナルトの声を頭の中で反芻する。

天辺まで登った？ まだあの修行を始めて一週間しか経っていないのに？

サクラは愕然とした。木の天辺まで登るためには結構なスタミナが必要で……彼女は約一ヶ月かかったのだ。

どうしようもない現実を突きつけられ、サクラは俯いた。今、二人を見るのは怖かった。

「よし。ナルト、サスケ。次からお前らもタズナさんの護衛につけ」
「おっす！」

* * *

どうも変だな。

カカシは腕を組んだ。彼の目の前には、競い合うようにして食事をするナルトとサスケ、怒りながら二人の世話を焼くサクラ、というここ数日で当たり前と化した光景が広がっている。一見いつも通りだが、違う。

渦が弱まっている。

ナルトとサスケは変わらない。しかしサクラの目に宿る渦が、息を吹きかけただけで消えてしまいそうなほどに小さく、弱い。

おそらく彼女の精神状況も同じなのだろう。なんて分かりやすい。

サクラのことだから、二人の修行がクリアされたことを聞けば喜ぶだろう。カカシは思っていたが、先ほどの彼女は、逆に落ち込んでいた。二人より先に始めていたため、一週間で追いつかれたとでも思ったのかもしれない。実際は追いついてなどいないのだが、複雑な心境になるのは分らないでも、ない。

しかし心の中では悔しくとも、サクラなら笑顔で「お疲れ様」ぐらいは言うはずだ。彼女はそういう気遣いができる子である。

「おかわり！」「おかわり！」

「マネすんなってば」

「どっちがだ」

「あゝはいはい。にらみ合わないの」

やはり、朝、か。

カカシは今朝のことを思い出す。サクラは、サスケに負ぶわれて返ってきた。慣れない環境に疲れたのだろう。タズナやツナミはそう言っただけで納得していた。ありえなくもないが、カカシには違和感がある。サスケは「寝てた」とだけ報告したが、一瞬目が泳いだのをカカシは見逃してはいなかった。

「なんで、なんでそんなに必死になるんだよ！ 諦めろよ！ どんだけ頑張ったってガトーには勝てないんだから」

「ん？」

カカシは思考を中断した。

部屋に響いた声はナルトたちよりも幼い。タズナの孫、イナリがドアの隙間から顔をのぞかせてボロボロのナルトたちを見ていた。ナルトは青い瞳でイナリをちらと見て、すぐに逸らした。興味が無い。そう言わなければかりに。ナルトがこういった態度を取るのは珍しい。

い。カカシの目がわずかに細まった。

「うるっせえなあ。お前とは違うんだよ」

「黙れよ！ お前から見てるとムカつくんだ。この国のこと何も知らないくせにでしゃばって。辛いことなんて知らないで、いつもヘラヘラしてるお前らとは違うんだよ！」

泣きながら叫んだイナリの言葉に、ナルトもサスケも、サクラも……反応の度合いは違えど、わずかに身体を動かした。サスケはイナリを見て、身体ごと別の方向へ向けた。サクラはそっと目を伏せた。ナルトは、そんな二人を見てから、

「だから悲劇の主人公気取ってビービー泣いてりゃいいってか？」

今までカカシが聞いたことのない低い声を出した。イナリがビクリと震えた。ナルトは机に突っ伏した状態のまま、そんなイナリを睨みつけた。

「お前みたいなバカはずっと泣いてる。泣き虫ヤローがっ！」

「んんぐっいくっ」

「ちよつとナルト、あんた言いすぎ……ナルト！」

「……ふん」

慌てたサクラが注意するも、ナルトは立ち上がって家を出て行った。サクラはオロオロしてナルトが出て行ったドアと、泣いているイナリを交互に見ている。カカシは思わず苦笑した。サクラ自身も悩みを抱えて苦しいだろうに、キョロキョロしている翡翠の瞳には心配の輝きしかない。

ふとそんな瞳とカカシの目があった。困惑の表情を浮かべている彼女からカカシは目を離し、ドアを見て、また彼女に目を戻す。聡

い少女だ。意図に気づいたのだろつ。少しホツとしたように息を吐いてから、ドアを開けて出て行った。

こっちとしては助かるが、一番心配な生徒が一番気遣いできるつても考えものだな。

カカシはサクラを見送った後、とりあえずタズナとツナミに謝罪を口にしたのだった。

第三十四劇「突きつけられる現実」（後書き）

こういう謎のある主人公って、今さらながらどうなんでしょうかいやほんと今さらなんですが。

あと、カカシ先生にはこんな風にサクラを構って欲しい。恋愛感情とか関係なく。年の離れたお兄さんの感じで。他の二人を、サクラ使ってからかい遊ぶとか、いいよね。

七班は、個人個人も好きだけど、全員そろうとなお好きだ。

次回は間劇です。ちょっと？ 恋愛要素入る、かも。

修正（11・06・13）

間劇「まだ僕には両腕がある」

イナリは一人、棧橋の上で三角座りをしていた。何をするでもなく、水面に写っている月と自分の顔を眺めていた彼の背に、声がかけられた。

「ちよつといいかな？」

彼が振り返ると銀髪の男がいた。鼻の上から首までをピチリとした黒い布で覆い、左目を斜めにつけた額当てで隠す、というなんとも怪しい格好をしている。月明かりしかない今は特に怪しくて仕方がない。祖父のからは凄腕の忍者と聞いていたイナリだが、松葉杖をついて柔和に笑っている男の姿から「凄腕の忍者」は想像できなかった。

「別にいいけど」

「ありがとう」

そっけなく返した声に怒った気配もなく返事が来て、イナリはとても惨めな気分になる。膝を抱く腕に力が入った。

どっこいしょ。

ジジ臭い台詞を吐きながら隣に座った力カシは、やっぱり強そうには見えない。でもきつと、怪我をしている今でも自分など及ばないほどに強いんだろう。タズナに聞いた話を思い出し、イナリは俯いた。彼らは自分とは違って強い。……だけど、それでもきつとガトーには勝てない。

「ナルトも悪気があったわけじゃないんだ。ただ、あいつはすごく

不器用でね」

話し始めた力カシに、イナリは視線すら向けず黙り込んでいた。思い出すのは金髪の少年のこと。いや、彼だけじゃない。必死に強くなろうとしているサスケも、弱そうに見えるのにタズナを必死に守ろうとしているサクラも、イナリには理解不能だった。

彼らには関係のないことのはずだ。命を懸けてまでタズナを守るなんて、どうかしている。

『じゃあ、あなたはおじいさんに死んで欲しいの？』

ふとサクラに言われた言葉が頭を掠めた。彼らが帰ってしまえば、十中八九タズナは殺されるだろう。イナリにも分かっている。分かっている。イナリだってタズナに死んで欲しくなどない。大事な家族なのだ。

大体じいちゃんもじいちゃんだ。なんでわざわざ危険を冒し、依頼内容を偽ってまで忍びを雇って橋造りを続けるんだ。諦めたらいいじゃないか。どーせ頑張ったって無駄なんだ。父ちゃんだって。

「お父さんの話は、タズナさんから聞いたよ」

聞こえた声にイナリの身体は勝手に反応した。きゅうつと心臓が縮こまるような気が、彼はした。

「ナルトには小さい頃から両親がいない。というより、あいつは親という存在を知らない。ずっと一人で生きてきたんだ」

「え？」

「サスケとサクラにはいたけど、今はいない。二人とも君と同じで家族を殺されてる。あいつらはみんな一人だ」

ようやくカカシを見上げたイナリに、しかしカカシは視線を前に向けたままだった。どこか、遠くを見ているような目だとイナリは思った。

「でも、あいつらがいじけたり泣いたり、諦めたりしているところは一度も見ることがない。まあ、俺もあいつらとそう長い付き合いってわけでもないんだけどね。」

ナルトは誰かに認めてもらいたいって目標に向かって一生懸命で、サスケやサクラも目標こそ違うがやっぱり一生懸命で、前に進むうとしている。

夢のためなら、あいつらはいつも命がけなんだ」

「……どうして」

「んん？」

「どうしてあんなに頑張れるんだ」

気づけば、イナリはそんな問いをこぼしていた。カカシは視線だけをイナリに向け「そうだな」と少し目を瞑った。

「きつと泣くことに、諦めることに、飽きたんだよ」

「あき、た？」

「そう……だから強いってことの意味を知ってる。君の父さんのようにね」

「父ちゃん」

目を開いたカカシが、また遠くを見つめた。イナリはなんとなくその視線を追いかける。視線の先には水平線と夜空しかない。月がやたらと眩しく感じた。

『危ないよ父ちゃん』

『大丈夫だ。父ちゃんはイナリのいるこの町が好きだからな』

堰が決壊しかけた時、カイザはそう笑ってイナリの頭をなで、激流の中に飛び込んで行った。イナリはそんなカイザを岸から応援していた。縄が繋がった時は、誇らしかった。ただ、自分は見ていただけ。

『いいかイナリ。本当に大切なものはこの両腕で守るんだ』
にっと笑ったカイザの腕は、頼もしかった。いつか自分もあんな風になるんだとイナリは思っていた。
だけど、自分は彼に頼っていただけ。

『父ちゃん！』

『泣くな、イナリ』

最後に見たカイザは、無残にも腕を切り落とされていた。――嘘つきだとイナリは思った。あの腕で守ってくれると言ってたじゃないかって、心の中で父を罵った。
だけど、自分は泣いていただけ。

「父ちゃん」

ああ、そうか。そうだったんだ。
ようやく気づいたことに、イナリは静かに涙を流した。だけど、気づくのが遅すぎた。あまりにも、遅すぎた。

自分がカイザを『自分の両腕』で守ればよかったんだ。

ただ見守るのではなく。ただ頼るのではなく。ただ泣くのではなく。いつだってカイザが自分に教えてくれたように、自分の両腕で彼を守ればよかったんだ。カイザはずっと教えてくれていた。そう。死の間際でさえ、腫れた顔をしたまま笑って、教えてくれていたんだ。

「もう無理、かな」

「イナリ君？」

「今さら気づいたって遅いかな。もう父ちゃんのようになれないかな？」

カカシの目線を感じながら、イナリは膝の上で握り締めた拳を見つめていた。すると頭の上に軽いものが乗つけられ、何度か帽子越しに彼の頭を撫でた。きっと髪の毛はぐしゃぐしゃになったことだろう。でも怒る気はしなかった。

「きつとなれるさ。君が気づいて、前に進もうとする限り、ね」

水面に写っている自分の顔が笑っているのを、イナリは久々に見た。

* * *

「夜の木の上つても、中々いいものね」

ナルトは、細い木の枝の上で器用に膝を曲げて座っていた。

気配には気づいていたものの、ナルトは視線を彼女に向けなかった。いつもなら声を掛けられただけでも嬉しいはずなのに、今はただ放っておいて欲しかった。だから出会ってから初めてナルトは彼女を無視した。

というのに、彼女——サクラは気にした様子なく大きな満月を見上げ、心地よい風を全身で楽しんでいた。翡翠の瞳は気持ち良さそうに細められ、横に流れている桜色の髪が、月明かりを浴びて妖しく輝きを帯びた。

「ありがとね、ナルト」

唐突にかけられた言葉に、ナルトはついサクラを見てしまった。サクラは「やつとこっち見た」と彼に微笑んだ。まんまと罠に引っかけってしまったのに、なぜか彼は悔しくなかった。それでも反論の一つぐらいはしたいとナルトは頭をめぐらせたが、彼のの口はポカンと間抜けに開いたまま動かない。

月を背負って微笑んでいるサクラから目が離せなかった。なびく髪はいつも見るより落ち着いた色をしていて、顔に浮かべた微笑みはあまりにも優しく、翡翠の瞳はナルトの全てを飲み込んでしまいくらいに深い。

まるで生きた芸術品のような――いや、自分の頭ではふさわしい言葉が思いつかない。芸術品なんて言葉じゃ足りない。そんなものじゃ生ぬるい。

目の前にいるのはサクラのはずなのに、別の何かに思えた。

「あんたが私たちの分も怒ってくれたから、すっきりしちゃった。きつとサスケ君も感謝してると思う」

声で我に返ったナルトだったが、サスケの名前に途端不機嫌そうに口を尖らせた。別に、何もしてないってばよ。冷たく言葉を返しても、サクラはくすくすと笑うだけ。口元に手を当てて笑っている姿にはどこか気品が漂っていて、気恥ずかしくて視線を逸らそうと思ふのに、逸らさせてくれない。ずっと見ていたいとナルトに思わせるのだ。

ずるいよな、サクラちゃんは。気づいたとしても、そつとしておいてくれたらこんな恥ずかしさは感じないのに。

心の中で文句を言いながらも、気づいてくれたことがやっぱり嬉しくて、気を抜くとナルトは顔が緩みそうだった。気を抜いたって構わないのだが、そこは男の意地だった。

「だけどあれは言いすぎよ。まだイナリ君は八歳なんだから、言葉を選んであげないと」

「だってあいつが」

「あいつじゃないでしょ？ イナリ君」

「……サクラちゃんはどうちの味方だつてば」

イナリを庇うかのような言動にナルトがムツとして聞くと、サクラは呆れた顔をした。「どっちの味方でもないわよ、中立よ。中立」聞こえた声に、ナルトはさらにムスツと頬を膨らませた。

「ほーらもう。拗ねないの」

「いてっ……別に、拗ねてないっ」

いつの間にかすぐ傍にいたサクラに、眉間を指で軽くはじかれた。たいして痛くはなかったが、ウルサイ心臓をごまかすため、ナルトは大げさに手でさすった。すると今度はサクラがムツとし「私はそんな馬鹿力じゃないわよ」そう怒った彼女はいつもの彼女で、ナルトは知らず安堵した。

自然と差し出された自分よりも小さな手を、彼は自然と握り返した。手袋をしていない彼女の手は硬かったけれど、温かった。

「さっ帰るわよ」

「うん」

「イナリ君と仲直りしないと朝飯抜きだからね」

「えええっ？ そんな！ サクラちゃんそれだけ？」

「じゃあ仲直りすることね」

「うう」

一緒に木を降りながら、ナルトは横にいる彼女をうかがった。す

ぐ気づいてこちらを見た彼女に、笑いかける。

「俺、サクラちゃん大好きだ」

ナルトが素直な気持ちを言葉にすると、彼女の身体がガクンと下がって彼は大変に驚いた。

「っひゃ」

「わわわ、ちよつ大丈夫？」

「ナルトーっ！」

「へ」

なんとか無事地上に降り立った後で散々サクラに怒られたナルトは、しかし不思議そうな顔で彼女を見ていた。彼女の顔は、心なし赤く染まっていた。

「ねえねえ。なんで怒ってるの？」

「なんでって……あんたがいきなり変なこと言うからでしょ！」
「変なことって？」

「……す、好き、だとか」

「だって俺サクラちゃんのこと好きだし」

「っひゃっ」

「ほんとどうしたんだってばよ」

「どどどっとうしたって……あ、あんたのせいでしょ！ いい？
そういうのは気軽に言っちゃ駄目なの。人前で言うのも駄目！

絶対駄目！」

「なんで？ 嘘じゃないし、冗談でもないし、ここには俺とサクラちゃんしかいないよ？」

首をかしげたナルトに、サクラは俯いて黙り込んだ。あまりにも

様子がおかしいので彼が心配になった頃、キツとサクラは顔を上げた。翡翠の瞳が今にもこぼれそうなほど潤んでいて、ナルトはドキツとした。

ぱつと手が離される。

「もうあんたなんか知らないっ」

「えっ？　ちよつ待つてつてば、サクラちゃん！　よく分かんないけどゴメン。だから許して」

「ついて来ないでよ」

「そう言われても、家の方向そっちだし」

「黙らっしやい」

理不尽だ。

思いつつもナルトはサクラの背中を追いかける。本気で怒っていないのが分かってるからだ。修行で疲れきったナルトのペースに合わせて歩いているのが、何よりの証拠。自然と笑みがこぼれる。

「やっぱり俺ってばサクラちゃん大好きだ」

ポロリとナルトがこぼしてしまうと、気のせいどころじゃないほど顔を赤くしたサクラが振り返り、彼の名前を怒鳴るように呼んだ。いつもなら恐いその声も、今は恐くなかった。

なんと言っても真っ赤な顔が可愛くて、ナルトは癖になりそうだとほくそ笑む。基本サクラの言うことは守るのだが、これだけは守れそうになかった。

「あははは。サクラちゃんすっげー可愛い」

「か、かわっナ、ナルトーっ！　もうっだから、そーいうのは禁止だつて言ってるでしょ！」

間劇「まだ僕には両腕がある」(後書き)

ストーリーと関係あるけれども、サクラ視点がまったくない場合は今度から間劇とします。

イナリの決意的な話を書きたかったんですよ。それと波の国の人
がカイザに頼りすぎてたんじゃ、という思いもぶつけてみました。
ずっと守ってきてくれた英雄を誰も守ろうとはしなかった。あれは
悲しかったなあ。タズナが今回がんばってるのは、その反省がある
からじゃないかと勝手に妄想。

後半は書いててぎゃーっとなった。はずいはずい。ナルトは天然
タラシ(天然黒?)だと信じて疑わない作者です。

修正(11・06・13)

第三十五劇「熱に身を任せた」

「じゃ、ナルトをよろしくお願いします」

カカシの言葉にツナミが「任せといてよ、先生」と胸を叩いて頼もしい返事をした。彼女の顔が晴れやかなことに、ナルトとイナリが仲直りした一件が絡んでいるのは、間違いなかった。

一体カカシはイナリをどんな風に慰めたのだろうか。サクラはそれがすつごく気になって仕方ない。

昨日の夜、サクラとナルトが家に帰るとイナリがいきなり土下座をしてきたのだ。

「今まで偉そうに言ってるごめんなさい」

謝って顔を上げたイナリは、目元が少し赤くなっていたが、真っ直ぐにサクラたちを見た。数度まばたきをしてから「気にしないで」と微笑んだサクラに対し、男の子二人は複雑な顔だった。それでもサスケは「別に」と短く返事をした。まだわだかまりが少ない分、言いやすかったのだろう。

黙り込んでいるナルトをサクラは肘で小突く。

「う……お、俺もちょっと言い過ぎたつてばよ、ゴメン。イナリ」

照れくさそうにそっぽを向いていたナルトとイナリの目が合った。この時二人は初めて笑い合い、すぐさま意気投合したのだ。今まで of 険悪ムードはなんだったんだ、とサクラが文句を言いたくなるほどだった。以前「男なんて基本、単純馬鹿なのよ」などとイノが言っていた。その真理をサクラは見た。

「強くなるためには筋トレだーっ」
「おぉーっ」

叫びながら腕立て伏せをしている二人を眺め、サクラは納得していたものだ。イノの言葉はホントためになる、と。

まあ。そんなことがあったため、筋トレで疲れきった二人は日が高くなった今もぐっすり夢の中だった。

当初の予定では、サクラが家に残ってツナミとイナリの護衛をする予定だった。しかしこの通りナルトが寝ているのでサクラは急遽、タズナの護衛につくこととなった。

再不斬とお面の少年。

最低でもこの二人の相手をする必要があるのだが、この二人は強い。守りながら戦うのは困難で、一人は戦闘に加わらず、タズナを守る必要があった。つまり最低でも三人は必要となる。

なのでナルトにツナミたちの護衛を任せて、サクラはタズナについて行くというわけだ。いくら疲れきっていてもナルトだって忍びの端くれ、何かあれば起きるだろう……たぶん。

確信を持ってないのはなぜだろうか。

「それじゃ、行って来るわい」

「行ってらっしゃい。気をつけてね」

「わかつとる」

復活したカカシ、修行を終えたサスケと共にサクラはタズナについて行った。

* * *

橋の上は異常なほどに静まっていた。

「なんという、ことじゃ」

タズナが力なく膝をつく。彼をいさめる声はない。

昨日まで活気にあふれていた橋の上に、作業をしている人間は一人としていなかった。漂っているのは鉄の匂い。散らばっているのは赤く染まった建築資材と、肉の塊。足元に転がっている黄色いヘルメットの『安全第一』という文字が、白々しくサクラの目に映った。

「遅かったな」

その声には聞き覚えがあった。無言でサクラが目を向けると口布を巻いた男、再不斬がそこにいた。彼の隣にはお面の少年、後ろには見覚えのない忍びが二人立っていた。

それだけを確認したサクラは、興味なさそうに彼らから視線を外した。代わりに見つめるのは誰のものかわからない腕。日々の建築仕事で傷だらけの力強い腕が、持ち主不在で転がっていた。

『なんだ嬢ちゃん。橋造りに興味があるのか？』

『すいません。気になっちゃって』

『はっはっはっ！ 構わんさ。いいかあれはなー』

護衛の任についていながらもサクラは好奇心が抑えられず、休憩中の作業員に話しかけてしまった。彼らは嫌な顔一つせずサクラの質問に答えてくれた。楽しくなったサクラは何度も彼らに質問をし、そうして話を重ねるうちに彼らと自然に親しくなっていた。任務の一環だというのに、橋に行くのが楽しみになっていたのだ。

忍びとしては失格だが、それでも今日は一体どんな話が聞けるのだろう。内心そんな期待を抱きながらサクラは毎日ここに来た。彼らはこの国に残っていた勇氣そのものだった。

『橋が完成したら波の国は変わる！ いや、俺たちで変えてやるのさ』

みんな自分の仕事に誇りを持っていて、橋の先を子供のようなキラキラした瞳で見つめていた。この橋が国に繁栄をもたらしてくれるのだと。俯いている人たちが元気になってくれるのだと、心の底から信じていた。

その信じた未来を、彼らが迎えることはもう、ない。

指の先から氷水につかっっていくような寒気がサクラの全身を覆っていく。これは、なんだろう。寒いのに、腹の奥だけマグマでもあるみたいに、熱かった。これは、なんだろう。サクラはそつと腹に触れた。手袋越しに熱が伝わってくるような気がした。

「お前たちがあまりにも遅いからよ。ちょっと遊ばせてもらったぜ……遊びにもならなかったがな」

霧が辺りを覆い始めた。「サスケ！ サクラ！ 陣を組め」という力カシの声を聞きながら、サクラは構えることもしなかった。

身体がひどく重かった。殺気を感じて萎縮しているのではない。身体が拒否反応をしているのだと、サクラには分かった。春野サクラとしての正しい行動をしる。腹の中の熱を冷ませ、と訴えているのだ。それは今までに幾度も自分を縛ってきたもの。繰り返されて積み重ねられた泥が、高い壁となって目の前に立ち塞がっていた。今まで何度も屈服し続けてきた壁をサクラが見上げると、

『タズナさんを頼むぜ嬢ちゃん。あの人が鍵だからな』

『俺たちがどうかなっても、あの人さえ生きてりやなんとかなる』

声が頭の中で響き、思った。サクラとしての”正しい”行動？
そんなの——知ったことか。

腹の中に留まっていた熱が一瞬で全身を駆け巡って行き、重かった身体が嘘みたいに軽くなった。そして彼女は、風を切って自分たちに向かってくる武器、その数三十二、をはつきりと捉えた。

「サクラっ？ 何して」

訝しげな力カシの声を、サクラは意識の外で聞いた。

飛来する脅威のうち、護衛対象、及び自分たちに命中する数二十九。それを防ぐ手順は三種。もっとも確実かつ安全な手順をサクラは選択する。それに則って己が取るべき行動は十三度、どの角度に、どのタイミングで、どの武器を使い、どのような行動を取るのか。それらを一秒とかからず計算した彼女は、手裏剣を三つ手に取った。投擲された手裏剣はそれぞれ金属音を奏で、軌道が逸れた凶器が別の凶器へぶつかって地上へ落ちていく。計六つの脅威を排除することに成功した。残り二十三。

サクラは手裏剣の結果を見終わる前にクナイを抜いて、右足に練ったチャクラを一気に送りこんだ。全身のバネとチャクラの反発力を使ったその跳躍は、サクラの残像をその場に残した。左手から飛んできたものをいくつかクナイで叩き落とし、頭上から降ってきたものに向けてクナイを投げる。カキンと一度音がし、クナイの角度が変わった数秒後、

「爆！」

声と同時にクナイは爆発した。起爆札（爆発する術式が書かれた札）をクナイに巻いていたのだ。

今ので計算より多くの脅威を無力化することに成功した。すぐさまサクラは手順を修正する。排除すべき対象は後七つ。立ち上がった護衛対象がやや後ろに位置を変更したが、問題はない。

再びクナイを抜いてサクラはタズナの背後に回り込んだ。迫っていた凶器を四つ弾き、手裏剣を斜め後ろと真上に一つずつ投げる。甲高い音が二つ聞こえ、最後の一つはカカシが叩き落した。これでひとまず脅威の排除は完了だ。

驚いた気配を背に感じつつ、サクラは黙して語らない。語るべきは今ではない。カカシもよくそのことを分かっていたので、彼女に問いかけることをしなかった。

「ほお。この霧の中でそれだけの動きができるとはな。そっちのガキはそこそこやるみたいだが、もう一人は震えているじゃないか。可哀想に」

周りを囲むように突然現れた再不斬の水分身に、サクラは一瞥すら向ける必要を感じない。身体は相変わらず熱いが、冷静に状況を把握できていた。

「武者震い、だよ」

背後でサスケの震えが止まったのが、今のサクラには見ずとも分かる。彼の口角がにと上がったことすらも。

「やれ、サスケ」

カカシの声より少し早くに地面を蹴ったサスケは、水分身が抵抗する前にその身体をいとも簡単に切り裂いていた。水分身が役目を終えて水に戻り、パシャリと音を立てて橋の上に広がる。

「水分身を見切ったか。あのガキ結構成長したな。ライバル出現つてところか、白」

「そうみたいです」

その場で何が起きているのか把握しているにも関わらず、サクラは目で見てはいなかった。妙な感覚だった。タズナはもとよりカカシやサスケの呼吸、まばたき、表情すらも彼女には認識できた。

修行の成果だ、と思いたい。

「俺はカカシをやる。白はあの小僧、お前らはジジイと小娘だ」
「はっ」

濃い霧の中、再不斬たちの姿が不自然に浮き上がって見えた。

* * *

イナリは膝を抱え、震えていた。

先ほど刀を持った男が家に二人やって来て、母親を連れて行ってしまったのだ。タズナに対する人質だといっていた。刃物が目の前に迫った恐怖を思い出し、イナリはただ震えた。恐くて逃げることもできなかった。

ナルトはタズナを追いかけて行ってしまい、この場にいなかった。自分しかツナミを守る人間はいない。イナリは理解していた。でも、

「ごめんよ。母ちゃん。僕には勇気がなくて。僕は弱くて、死にたくないんだ！」

『泣き虫やローがっ！』

「っ！」

ポタリと床に落ちた涙を見て、イナリは震えを止めた。

『だから悲劇の主人公気取ってビービー泣いてりやいってか？

お前みたいなバカはずっと泣いてる。泣き虫ヤローがっ！』

『今さら気づいたって遅いかな。もう父ちゃんのようになれないかな？』

彼は昨日の誓いを思い出す。自分の細い腕を見下ろした。一日腕立て伏せをしただけで悲鳴を上げている腕は、我ながら弱い。けれど、そこにある。養父のような力強いものではなくとも、自分にはまだ両腕があった。

養父が教えてくれたように、この両腕で今度こそ大事なものを守る。誓ったんだ。

イナリは目元を拭って立ち上がった。彼の膝は震えていたが気にしない。逃げそうになる足を叱咤し、ツナミを追いかけた。

何度もこけながらイナリが玄関を出ると、まだ棧橋の上にツナミの姿があった。縄で手を後ろに縛られているが、怪我は特になさそうだ。とりあえず安心し、イナリは思い切り腹に力を込めた。気を抜くと今すぐ泣いてしまいそうだった。

泣くな泣くな。泣いている場合じゃない。僕が、僕が母ちゃんを守らないで、一体誰が母ちゃんを守るといふんだ！

「母ちゃんから手を離せ」

出した声は、かすれていてひどく情けなかった。男たちが振り返り、軽く睨まれただけでイナリは座り込みそうになった。それでもツナミの姿を見て、彼は小さな身体から勇気を搾り出す。今勇気を出さなくては、一生後悔することになるのを、イナリは知っていた。

目を見開いたツナミが悲鳴を上げた。

「イナリっ！ どうして来たの。逃げなさいと言ったでしょう！」

「んあ？ なんだ。さっきのガキじゃねーか」

「母ちゃんから離れるおおおお」

素手でただ突撃してくるだけのイナリを見て、刀に手をやった大きな男は楽しそうに笑った。唇を舐めた表情は、斬りたくてたまらないと如実に語っていた。こみ上げてくる恐怖をイナリは叫び声で無理やり抑え込む。

「ひゅー。なあなあ、斬っていいよな、これはよお」

「しょうがねえな。いいだろう」

「待ちなさい！ そんなことをしたら舌をかつ」

「うるさい。寝てろ」

「母ちゃん！」

なんとかイナリを守ろうとしたツナミであつたが、腹に拳を入れられて倒れた。イナリは、母へ手を伸ばす。男二人の姿など、すでに目に入っていない。母を守りたい。それだけを考えて。

「ああああああつ母ちゃんは、僕が守るんだあつ」

「そりゃ残念だったな。死ね、ガキ！」

刃が宙に二本の線を描く。イナリの白い帽子が切り裂かれ……しかし、赤い血が飛び散ることはなかった。栈橋に転がったのは、三つに切られた丸太であつた。イナリの姿はそこにはない。

「馬鹿な！ 変わり身の術だどつ？」

「おい、女がいねーぞ」

男たちが慌てる中、『彼』は軽やかに着地した。

「遅くなっちまって悪かった、イナリ」

「ナルト、兄ちゃん？」

「ヒーローってのは遅れて登場するもんだからな」

目の前にある金色の髪を、信じられない思いでイナリは見つめた。ナルトはイナリを肩から下ろすと、腕に抱えていたツナミをそっと横たえた。ツナミは気絶しているだけのようだ。

ツナミの無事を確認したナルトはイナリを見て、青い瞳を細めた。

「よくやったな、イナリ。お前があいつらを引きつけてくれたおかげで、母ちゃんを助けられたぞ」

「でも兄ちゃんどうしてここに。じいちゃんのとこに行っただんじや」
「あゝ、それがよお。森の中で斬られたイノシシを見つけて、変だなと思ってたら木とかにもたくさん刀傷があって、それがイナリの家に向かつてるからどうも心配になってさ」

悠長に話している二人の背後で、男たちは冷静になって、笑った。忍者といえどまだ子供。斬る人数が増えたにすぎない。

「なんだ。誰かと思ったら、タズナの雇った駄目忍者か」

「ふんつやるぞ」

「兄ちゃん後ろ！」

再び向かってくる男たちにナルトは振り向きもせず手裏剣を放つ。あっさりと弾かれたが、男たちの後ろに二つの影があった。ナルトの影分身だ。手裏剣はおとりにすぎない。ナルトは笑った。

「ばーか」
「ぐはあっ」

あっけなく気絶した二人を分身が縄で縛る。あまりにもあっさりした手並みに、イナリはパアッと顔を輝かせてナルトを見た。ナルトはどこか照れくさそうに頬をかいた。

「すっげえ！ 兄ちゃん、忍者みてえ」
「……イナリイ、忍者みたいじゃなくて、俺ってばちゃんとした忍者なんだけどなあ」

そんなに忍者に見えないかなあ。
落ち込んだナルトと、必死に慰めるイナリの姿がしばらくその場にあった。

* * *

「サクラ」
「大丈夫です。先生は再不斬に集中してください」
「……ああ」

お面の少年とサスケはすでに戦闘に入っていた。霧の向こうから金属がぶつかり合う音が聞こえてくる。

彼らとサクラの間に距離があるからか。どのような戦いになっているのか、サクラには認識できない。まだ力カシの位置ぐらいまでは察知できるので、この不可解な現象が切れたわけではなさそうだが、いつまで持つかはまったく分からない。サクラは考えた。

同じような攻撃はしてこないだろうとは思うものの、こちらから

攻撃はできない分、状況は自分に不利だった。

今、サクラの状態で感知できる範囲はタズナを中心として……最大三メートルがギリギリのラインだろうか。敵は二人いる。あまりタズナから離れることはできない。守りながら動くと考えればサクラにはせいぜい一メートルが限界で、身動きもろくに取れない。彼女は体術が苦手なのだ。

とはいえ、カカシには再不斬へ集中してもらわなければならない。サスケもお面の――白と呼ばれていた少年の相手で一杯一杯だろう。この場にいないナルトに期待するのは愚策だ。時間を稼げればなんとかなるだろうが、周りを把握できるこの状態がいつまでもつか分からない。不確定要素が多すぎるため、早く終わらせるのが最良、か。

サクラは、手に入るだけの情報を元に作戦を構成し始めた。

「クククつ俺たちの相手はこの二人だってよ」

「再不斬さんもひでーよな。自分のはあのコピー忍者とやりあってるんだぜ。いいよなあ。俺もやってみたかったぜ」

姿は見えず、反響した声はどこから聞こえているのか、サクラに読ませない。意識を研ぎ澄ませても分からないのでおそらく距離が離れているのだろう。

「まあ、その分いい声で鳴かせられるからよしとするか」

「そうだなあ。どうもさっき聞いたジジイたちの声だけじゃ満足でねーしよお」

「やっぱりガキの声が一番いい」

「女だったら尚更いい」

男たちの声にピクリとサクラの腕が反応した。後ろで心配そうに彼女を呼んだタズナに、サクラは大丈夫と短く答えた。事実、サク

ラは自分が狙われていることをどうとも思っていなかった。

「あなたたちが、おじさんたちを殺したの？」

気になったのはその一点で、のどから出たかすり声はなんとも頼りなく、か細かった。男たちが弱い弱いサクラの声を聞いて笑った。

「ああ、そうだぜ」

「馬鹿な連中だ。橋造りを止めたら殺さないって言ったのによお。全員、橋を造り続けたんだぜ。俺たちを無視して」

「まったく、失礼な態度だよな。ム力ついたからちよつと遊んでやったら、粉々になっちまいやがった。カカカ」

男たちの言葉を聞いたサクラの身体が、さらに軽くなっていた。ほんと、この感覚は一体なんなのだろう。サクラは、そう、と吐息のような声を出した。頭が妙にすっきりしている。

「ほんと。君たち人間はいつまで経っても愚かな生き物だね。けれど――愛しい」

「は？ 何、を言ってる？」

「私はどんなに愚かでも君たちを愛そう。だからごめんね。許してとは言わないよ。次にめぐる時まで、眠るといい」

翡翠色の瞳が、男たちへと向けられた。霧の中で、サクラは男たちの姿を完全に捉えていた。標的まではおよそ六メートル。一人は右斜め後ろに、一人は左に。同時に襲ってきた場合、左の攻撃を受け止めれば後ろの攻撃からタズナを守れない。かといって後ろに回れば左の敵の標的が自分からタズナに変わるだけ。両方の相手しようにもタズナが障害物となって遮る。

ならば、

「タズナさん、しゃがんで！」

声をかけながら後ろにジャンプしたサクラは、腰をかがめたタズナの背に片手をつき、空いている手で左の敵へ手裏剣を投げる。敵は首を横に倒してそれを避け、にやつと笑った。しかし、笑ったのはサクラも同じだ。違ったのは、悲しみの微笑だったことか。

「爆！」

「な」

敵の真後ろで爆発が起きた。あの手裏剣にも起爆札がつけられていたのだ。敵の身体が爆風で浮き上がり、前方へたたらを踏んだ。その間に後ろから迫っていた敵の腕を掴んだサクラは、相手の勢いを利用して自分より大きな身体を投げ飛ばす。

「はあああっ」

「なっ！ にいい」

気合と共に投げられた敵はクナイを前に突き出した状態のまま、しゃがんでいるタズナの上を飛び越え、体勢を崩している相方へと突っ込んでいった。そして二人が驚いている間に、彼らへと凶器は放たれた。

「ぬぐおっああ」

「が」

手裏剣の一つは眉間に、一つは肺に突き刺さり、二人は抱き合うような体勢で橋の上に倒れ込んだ。一人はしばらくもがいていたが、サクラがもう一本クナイを投げたことですぐに静かになった。二人

の死を確認して、サクラは止めていた息を吐き出した。彼女の心に去来するのは、虚しさだけだった。

「……はっ、はっふう」

「おいっ？ サクラ、大丈夫かおめーさん」

サクラの身体から気からが抜けた瞬間、心臓が急速に活動を始め、足ががくがくと震えた。口元を手で押さえる。タズナの問いかけに、残念ながら答える余裕はなかった。サクラは顔だけ振り返って、なんとか笑う。先ほどまでの身軽さはどこにもない。反対にいつもの重力の倍以上を感じ、気を抜くと座り込んでしまいそうだった。

どうも先ほどの状態はかなり身体へ負荷がかかるらしい。脳へ伝えてくる情報が膨大で、処理するだけで頭がどうにかなりそうなくほど痛い。さらには身体が鋭敏になるようで、先日切った指がひどく痛かった。

強力な分、使いどころに悩みそうだ。まあ、そもそも発動の条件も仕組みも分からないのだが、きつとあの子なら使いこなせるだろう。

何か一つ残せたことに、サクラはひどく安心した。

「しかし」

「少し、張り切りすぎただけですよ」

まだ心配そうなタズナに、ようやく呼吸が整ったサクラはいつもの笑みを浮かべてみせた。

第三十五劇「熱に身を任せた」(後書き)

戦闘は鬼門です。うーん、難しい。

起爆札について。

この発動方式がよく分かりません。ウィキには時間が経つと、つてあるんですが、それだと持っているだけで爆発してしまう。チャクラでも込めるのかな。

とりあえず、サクラの戦闘に関してはこんな感じのスタイル(計算尽くしスタイル?)です。文章力に関しては、まあ、がんばりますです、はい。

今回書きたかったのは名もなきキャラたちです。タズナだけで橋はできない。ともに造ってきた彼らへスポットを当てたかった。原作だとケガしたただけですが、実際問題、殺されてるよねって思う。

修正(11・06・13)

第三十六劇「季節外れの雪が降る」

「フオオオオオオオオオオオオオオオオ」

どれほどの間じつとしていただろうか。サクラが焦燥を感じ始めた頃に聞こえてきたのは、辺り一面を揺るがせるほどの大きな咆哮だった。

人のものではなく、ただの獣でもない。それはなんと禍々しい気配を放ち、嘆きの声を響かせている。どうして殺したと怒っている。

嫌な予感がした。

サクラは気づいている。この声の持ち主が誰なのか。禍々しい中にかすかに残っているこの温かな気配は、

「ナルト？」

見た目と同じく、いつも明るく笑っている少年のものに間違いなかった。

いつ来たのかすらサクラは気づいていなかったが、もしもこの気配が彼なのだとすれば、彼が死を悲しむ相手はカカシかサスケのどちらかに他ならない。カカシならば再不斬がサクラやタズナを放って置くわけはなく、今二人が無事だということはカカシではない。じゃあ、誰が死んだのか。あまりにも簡単な問いだったが、サクラは答えを出すことを拒否した。

唐突に霧が晴れていく。

「俺様の未来が死だと？ また外れたな、カカシ」

にらみ合っているカカシと再不斬の間には、白という名の少年がいた。白の左胸にはカカシの腕が深々と突き刺さっており、絶命しているのは見ただけで分かる。どうやら再不斬を庇ったらしい。どこか満足そうな顔をしている白から、サクラの視線はゆっくり動いていく。

金髪の少年が佇んでいるその奥、倒れ込んでいる影が見えたところで動きは止まった。一瞬ナルトの青い瞳がサクラを捉え、すぐに逸らされた。彼の唇が動いたが、声はサクラまで届かなかった。

サクラの肩に手が置かれる。タズナだ。

「ワシも一緒に行こう」

「……うん」

一泊置いてサクラはタズナに頷きを返した。大きな手と手をつなぎ、走る。ナルトの横を走りすぎた。

心臓がばくばくとうるさかった。

近づけば近づくほどはつきり見えてくる影に、サクラの走る速度が落ちていく。傍になって見下ろせば、倒れているのがサスケだと否定しようのない真実が重圧となって彼女に襲いかかってきた。サスケの身体のあるところは、千本が突き刺さっておりとても痛々しい。サクラがへたりとしゃがんで血に濡れた頬に触れてみれば、冷たかった。夢や幻術でも、分身でもなく、それは目の前で起きている現実だった。

ああ、また。

「ワシの前じゃからと気にせんでええ。こういう時ぐらい、おめーさんも素直に泣くといい」

かけられた優しさに、サクラはそつと翡翠の瞳を閉じた。

「ある日のテストでね、忍びの心得第二十五項を答えろって問題が出たの」

「ん？ それがどうしたんじゃ」

「私は得意げに鉛筆を動かして『忍びははどのような状況においても、感情を表に出すべからず。任務を第一とし、何事にも涙を見せぬよう心がけるべし』って書いた。

満点もらったのになあ。おかしいよね」

「サクラ」

「そんなの分かりきったことだって、思ってたのに」

視界がゆがんでいく。

どうしてだろうとサクラは考える。仲間として頑張っていたのは、あの子と入れ替わった後、あの子が孤立しないためのはず、だ。深い理由などない。

腹の底が熱い。

先ほどから何度も感じている抗いがたい熱の正体を悟り、自分ではなくこの身体が感じているものとサクラは思った。いや、そうなんだ。そうに違いない。どうせ別れがくる、と誰に対しても一定距離を保っていた、はずなのだから。――悲しみなど、感じるはずがない。

「ううあああああつサスケ君、サスケ君っ嫌だ、なんでっなんで！
いあああああああ」

泣いているのは自分ではない。この身体が、あの子が泣いているんだ。必死に言い聞かせながらサクラは声を上げた。
世界が、震えた。

* * *

「何をしに来た、ガトー」

橋の奥には左腕に包帯を巻いた小柄な男がいた。丸く小さなサングラスをつけたその男は、背後に柄の悪そうな男たちを多数引き連れている。再不斬の様子から判断するに、この小さい男がガトーなのだろう。カカシは、二人の不穏な空気に眉を寄せ、鋭い目をさらに尖らせた。

ガトーはくくくつと笑って杖をカツンと橋に下ろした。

「少々作戦が変わってねえ。悪いが再不斬、お前にはここで死んでもらう。正規の忍びを雇えばやたらと金がかかる。そこでお前らのような抜け忍を雇ったというのに、このザマだ。せめて相打ちにでもなってくれば手間も金もかからずにすんでよかったのになあ」

対峙していた再不斬はカカシに背を向けた。カカシが彼の背中に襲いかかることはなかった。そんな必要がないからだ。

「悪いな、カカシ。戦いはここまでだ。俺にタズナを狙う理由はなくなつた」

「そのようだな」

カツンカツンと杖で音を立てながらガトーは歩き、白の傍に近寄った。死んで動けない白の顔を、ガトーはあろうことか杖で思い切り殴った。憎憎しげな顔をしていた。

「なんだいなんだい、このカス死んだのかい。あたしの腕を折ってくれた礼をしたかったんだがなあ。あっけなく死ぬとは。まったく使えないにもほどがある。おらあ！」

満足できないのか、何度も殴り、蹴り、最後にはつばを吐きかけていた。ナルトの眉がつり上がる。カカシはナルトの服を掴んで止めた。ナルトの気持ちには分かるが、それは自分たちの役目でないとを、彼は知っていた。

「てめえっ」

「よせ、ナルト」

「でもよカカシ先生……再不斬っ大体おめえもなんで何もいわねーんだよ！ あいつはお前の仲間だろ。あんなことされてなんとも思わないのかよ！ お前つてば、ずっと一緒だったんだろ」

「ガトーが俺を利用していたように、俺も白を利用してただけだ。勘違いしているようだがな、小僧。俺たち忍びはただの道具だ。俺が欲しかったのはあいつの能力であって、あいつ自身じゃない。未練は、ない」

再不斬はナルトとカカシに背を向けたまま、淡々と語った。その態度に納得できないのだろう。ナルトは彼自身が泣きそうになりながら、白がどれだけ再不斬を大切に思っていたかを語った。白と戦っている間にいろいろな話をしたようだ。戦闘中にのんきなカカシは思つて、否定した。

わざとのんきに会話をしたのか、と。あの白という少年はきつと、優しすぎた。

「あいつはお前のことが本当に好きだったんだぞ。それなのに、お前は本当になんとも思わないのかよ。忍びは道具でしかないなんてそんな馬鹿なことあるか！ 忍びだって人間だろ？ 悲しくねえのかよ。なあ、なんとか言えよ、ざぶ」

「小僧」

どこまでも真っ直ぐなナルトの声を遮った再不斬は、顔だけ振り返った。彼の顔を見たナルトは、黙り込む。再不斬の目からこぼれているのは、

「それ以上、何も言うな」

再不斬は顔を大きく振って口布を破いた。カカシが壊した両手は、彼の動きにあわせて頼りなく揺れるだけだった。

「白は、俺だけじゃない。お前たちのことで心を痛めながら戦っていた。俺にはわかる。あいつは、優しすぎた。」

最後にお前らみたいなのと戦えてよかった。……ああ、そうだな。忍びは道具である前に結局、ただの人間でしかないんだろう。まったく、お前の言う通りだよ。俺の、負けだ」

「ざぶ」

「小僧、お前のクナイを貸せ」

彼の決意を知ったのだろう。ナルトは青い瞳から涙をこぼしつつ、一本のクナイを投げた。空中を舞ったクナイを再不斬は口で受け取る。そして、一気にガトーへと迫った。怪我人とは思えない動きだった。何よりも彼がまとった空気は、

ガトーが情けない悲鳴を上げた。

「ひっ！ 何をしている！ さっさとやってしまえ」

「うおりゃあああああっ」

再不斬は鬼人の呼び名に相応しい迫力を背負っていた。

おそらく金で雇われただけのものたちなのだろう。腰が抜けたガトーの情けない姿に眉一つ動かさず、用心棒たちは再不斬に向かって各々の得物を抜いた。ガトーの姿が男たちの間に溶け込んで消え

る。

にやけた顔をした用心棒たちは、再不斬を甘く見ていた。

「ぎゃああああっ」

「がはっ」

「いてえええ」

聞こえてきたのは再不斬の叫び声ではなく、用心棒たちの苦痛の喘ぎ。再不斬の武器は口にくわえたクナイ一本のみだったが、次々と敵を倒し、時には飛び越えて着実にガトーへと近づいていく。身体にどれだけの武器が刺さろうと彼の動きは止まらない。そしてついに、再不斬の目がガトーの姿を捉えた。用心棒が守ろうと動いたが、遅い。

「やつやめ」

恐怖にゆがんだ表情のまま、ガトーの顔は肉体を地上に置き去りにして宙を舞った。

「白」

もうガトーから興味をなくしたとばかりに再不斬は、白を振り返った。彼と目があつた男たちはその気迫におののき、道を空ける。クナイが橋の上に転がって涼やかな音を立てた。

彼はそのまま一歩、二歩と歩き、限界がきたらしい。再不斬の膝は折れ曲がった。

「もうお別れだ。今まで、ありがとう。すまなかったな」

力尽きて倒れた再不斬から、ナルトはとっさに顔を背けていた。

カカシはナルトに「目をそむけるな」と強い口調で諭す。酷かもしれなかったが、きちんとその姿を見届けて欲しいとカカシは思った。

「必死に生きた、男の最後だ」

ナルトは齒を食いしばって、また前を向いた。

* * *

誰かが泣いていた。

彼は聞き覚えのある声だった。しかし考えてみると、そいつがこんな風に泣いているところは見たことがなくて、やはり気のせいかと彼は考え直す。

ゆっくりとサスケは目を開けた。まぶたがやたらと重く感じた。

「サス、ケ、君？」

まず彼の目に見えたのは色鮮やかな桜色の髪と、濡れた翡翠の瞳だった。サスケはああ、と思った。ああ、ついに泣かせてしまった。悲しませたくないかないのに。

泣くな。

そんな気持ちと同時に、涙を流すサクラの姿があまりにも綺麗で、もう少し見ていたいとも彼は思った。だから呆然とサクラを見ていたのだが、あまりにも涙が止まらない様子にこのまま干からびて死んでしまうのではと、妙なことを心配してしまった。

動かしにくい腕を動かして、サスケはそっと彼女の頬を撫でる。

「……変な顔してんぞ、お前」

「っ馬鹿」

返ってきた言葉に、たしかに自分は馬鹿だと、サスケも思った。

* * *

「おいおいおい、お前たちさー。安心しすぎ」

響いた声に、カカシはやれやれとそちらを見て、どうしようかと嘆息した。

カカシの背後でサスケの手当て（千本を抜いて血止め）をしているサクラは、まるで「まだいたの？」と彼らに言わんばかりの顔をしている。いやサクラだけでなく、その場にいたカカシを除く全員が用心棒たちの存在を忘れていたようだった。

ガトーの用心棒たちはそんな彼女たちの様子に口元や眉を引きつらせた。話し合いは無理そうだった。

とはいえ、チャクラを使いすぎた状態であれだけの相手は、さすがのカカシでもキツイ。どうするべきか。カカシはナルトたちの様子を見ながら、頭を働かせていた。

「クソ忍者！ てめーらのせいで折角の金づるが死んじまったじゃねーか」

「こうなったら町を襲って金目のもの全部いただいでいくしかねえなあ」

「ひっひっひ」

「うおりゃあああああ」

「どどどどうするんだってばよ、先生っ」

「さあ、どうしようか」

慌てるナルトに、落ち着いてはいるもののいい案が浮かばないカシは、自分たちへと向かってくる用心棒たちを見た。こうなったらナルトたちだけでも。カシが覚悟を決めた時、

「カカシ先生、ナルト！」
「ん？」

名前を呼ばれてそつとサクラを見ると、彼女は両手の指を二本立ててそれをクロスさせた。カシは一瞬驚いた顔をして、頷いた。そして彼女の通りに印を結ぶ。

「さすがサクラ。影分身の術！」
「えっああ、そうか。よっし俺も、影分身の術！」

二人と同じ姿が何人も現れ、用心棒たちは少しひるんで足を止めた。そんな彼らの足元に、今度は幾本もの矢が突き刺さる。

橋の反対側、町の方角にはイナリを先頭に大勢の人々が武器を持つて立っていた。彼らの表情は勇ましい。数日前にカシが見た、あの無気力な姿はどこにもなかった。

「それ以上町に近づくのなら、全島民の力を持って抵抗する」
「おおおお」

力強い援軍の登場にナルトが青い目を輝かせ、イナリが照れくさそうに鼻をなで、タズナの目に涙が浮かんだ。

「イナリ！」
「へへんっ。ヒーローは遅れて登場するんだぜ、兄ちゃん」
「おおイナリ、おめーたち」

形成は一気に逆転した。

元々金目当てにガトーの元へ来ていた男たちだ。命は惜しいのだろう。慌てて町の反対へと逃げていく。人々が歓声を上げた。――この国は変わる。いや、変わったのだ。今、この瞬間に。

喜んでいる彼らへ柔らかな目を向けていた力カシだったが、影分身を解いて再不斬の傍まで歩み寄った。再不斬はまだかすかに息をしていた。力カシと目が合った再不斬の口端は、少し上がっていた。

「どうやら終わったみたいだな」

「ああ」

「力カシ、悪いが頼みがある」

「なんだ？」

「あいつの、あいつの顔が見たいんだ」

ささやかな彼の願いを聞いた力カシは、額当てを下ろした。そして無言のまま、再不斬の背に刺さった槍と刀を抜いていく。血が吹き出ても、再不斬は眉一つ動かさなかった。痛みも感じないのだろう。目を閉じた再不斬は「恩にきる」とだけ力カシに言った。彼と力カシは敵だった。だが、それが忍びというものでもあった。

霧が晴れたはずの橋の上が、また白色で覆われ始めた。空から降り注ぐそれを見上げた再不斬が呟いた。

「泣いているのか？ 白」

力カシは言葉を返さない。ただそつと再不斬を白の傍に横たえ、離れた。すまねえな。いや。最後にそんな短いやり取りをした。

隣にいる白へ、再不斬は腕をよろよると動かした。優しく白の頬を撫でる彼は、ガトーを殺した時の、鬼のような姿とかけ離れた穏やかな顔をしていた。もしかすると、こちらが本来の再不斬の姿な

のかもしれない。

「ずっと傍にいたんだ。最後まで傍に……でも、できるなら、お前と一緒にのところにきてえ、なあ」

それきり、彼が動くことはなかった。

誰もが言葉なく立ち尽くしている中、隣にいたナルトがぐずぐずと泣きながらカカシに言った。

「こいつ、白ってば、雪の降る村で生まれたんだ」
「そうか」

降り注ぐ季節外れの雪が、白の顔に当たってまるで涙のように流れ落ちた。カカシはそっと目をつむって二人が一緒にいられるようにと願った。

しかし、

「サクラっ？　おい、どうした、サクラ！」

悲鳴と慌てたサスケの声が橋の上に響き、カカシは感傷を吹き飛ばした。目を開けて勢いよく振り返ると、サスケの腕の中に、ぐったりしたサクラがいた。意識がないのか、サスケに揺さぶられるままにサクラの身体が揺れていた。

第三十六劇「季節外れの雪が降る」(後書き)

影分身について

影分身は禁術指定のはずなのに、みんながみんな、存在を知っているのはなぜか。……まあ、禁術なのは多重影分身(数が多い)なんですけどね。カカシとかも普通に使ってるし、謎。あと、チートすぎるので経験がどうのってのは止めようかなと考え中。ナルトは才能あるからなくても大丈夫だと思っただがなあ。

とりあえず、急ぎ足で終わらせた感がビシバシする文章ですね。淡々と説明する文章が苦手だあ。
次で波の国は終わりです。

修正(11・06・13)

第三十七劇「夢への架け橋」

「あのお先生？ 本当には大丈夫だから降ろして欲しいんだけど」

「駄目駄目。お前がすぐ無茶するのは今回のことでよく分かったからね。先生は、お前の『大丈夫』を当てにしないことにしたの」
「む」

完成した立派な橋の前で、カカシはサクラと何度目か分からない会話をしていた。だがいい加減疲れたのか、諦めたのか。サクラは口を開きかけてからため息をつき、カカシの背に体重を預けた。

あの戦闘後、サクラはチャクラ切れで倒れた。

幸い次の日には元気になっていたのだが、任務完了のため里へ帰る際にカカシに負ぶわれることになった。本人はいたって元気なつもりなのだが、サスケもナルトもゆっくりしてるの一点張りで、カカシもそこは譲らない。

ほんと、チャクラ切れ起こすほど何をやったんだか。

「そうじゃのお。おめーさんはすぐ無茶しそうじゃし。おお、そうじゃ。忍びを辞めてイナリの嫁にこんか？ 良い案じゃろ」

サクラとカカシの荷物を分けて背負っていたナルトとサスケは、タズナの言葉にぎょっと目を見開き、イナリは顔を真っ赤にした。タズナは「かっかっか」と笑っている。

「なっとなな何言っんだよじいちゃん！」

「そうだそうだ！ いい加減にしろってばよ、タズナのおっちゃん」
「なんじゃなんじゃ。イナリもサクラが可愛いと言ったじやろうに。それに、ほれ。ナルト、おめーさんは別にサクラの恋人でも

なんでもないじゃろ」

「じいちゃん！ それは内緒にしてって言ったじゃないか」

「イナリ！ お前」

ぎゃーぎゃーと騒ぎ始めたナルトたちをカカシは楽しそうに眺めていたが、話の当事者であるはずのサクラは、

「ツナミさん、いろいろとありがとうございました。お料理もいろいろ教えてもらって」

「いいのよ。また遊びに来てね」

「はい」

ツナミと和やかに話をしていた。カカシはそんな彼女を見て声を上げずに少し笑った。苦笑に近いものだった。

「ナルト、そろそろ行くぞ」

「あ、うん。分かってるってばよ、カカシ先生」

「……兄ちゃん」

「へへんっだ。イナリ。お前寂しいんだろ。別に泣いたっていいんだぜ？」

「誰が泣くもんか。兄ちゃんこそ泣いたっていいぞ！」

「俺がこれぐらいで泣くかよ。ふんっ」

カカシが声をかけると、今までつかみ合っていたナルトとイナリはバツが悪そうな顔をして離れ、ナルトはあっさりとイナリに背を向けた。全然気にしてないぞと、背中では語っているつもりらしい。

そんな彼の背後ではイナリが涙を堪えきれずに流していたが、実のところ、ナルトも同じような顔をして泣いていた。ナルトも寂しいのだ。二人を見ていたサクラは、呆れた顔をした。

「男の子って意地っ張りね、先生」

「ハハ。まあ、そう言ってやるな、サクラ。男には色々あるんだよ」

今度は声に出してカカシは苦笑した。

* * *

小さくなつていく彼らの背をじっと見つめていたタズナは、うむ、と一つ頷いた。隣に立っていたツナミがいぶかしげな目線をタズナに向ける。

「決めた。この橋の名前は、ナルト大橋にする！」

「ふふっそれはいい名前ね」

「そうじゃろう？ あの少年がイナリに勇気を与え、イナリが町民へ勇気を与えてくれたことを、決して忘れぬように、な。これでこの橋が将来超有名になること間違いないじゃ」

満足そうに笑っていたタズナは、服を引っ張られて下を見た。先ほどまで泣いていたはずの孫、イナリが真っ赤になった目でタズナを真っ直ぐ見上げていた。

「じいちゃん。僕、じいちゃんみたいな大工になりたい」

「っイナリ」

最近はずもろくなつたな。タズナは目元を拭った。

「ワシは超厳しいぞ」

「望むところだ」

「じゃあ、ついてこい。これから波の国は、超忙しくなるんじゃないかな」
「うん！」

第三十七劇「夢への架け橋」(後書き)

これにて第二幕終了。面白みのない話ですみません。
次に第三幕についてのお詫びと説明文を載せてます。説明文はともかく、お詫びの箇所だけ読んでもらえると助かります。説明文には原作のネタバレ含むので、原作知らない方はご注意ください。……たぶんいないと思いますが。

さてさて、いつも読んでいただきありがとうございます(拍手も)
。これからもよろしくお願いします！

修正(11・06・13)

第三幕の【お詫びと説明】

【お詫びと説明】

第三幕はいよいよ中。試験——ではなく、すみません。波の国編
く中。試験編までの話です。

中。試験を楽しみにしてくださっている方には申し訳ないですが、
どうしても書きたい話があるので。

それは、原作主人公ナルトの誕生日（十月十日）話。

七班で一度はこの日を過ぎて欲しいため、中。試験を受けられ
るのは『下忍暦一年以上の忍び』だけという独自設定を加えさせて
もらいます（絆を深めるためにも）。

なので原作よりみんな成長してます（いろんな意味で）。

他にも七班以外のメンバーとの話なども描きたいと思っています。
ほとんど間劇（サクラ以外がメインの話。もちろんサクラは絡みま
す）です。

ある程度描いた後第四幕へ進みますが、思いついたら増えるかも
しれません。登場キャラは私の好みで偏ってしまいそうなので、も
しリクエスト（キャラクター）があれば教えてください。本編に影
響がない範囲で書かせていただきます。

以下説明（考察？）。

ネタバレになる・めんどくさいから嫌だ！ という方は読まずに
飛ばしていただいても構いません。伏字はありません。

原作内では季節感がないため中忍試験がいつ頃かはつきりしないのですが、春に卒業（＝下忍になった時期）と考えていますので、そうすると夏ぐらいに中忍試験かなと思ってます。森の描写も青々としているし、サクラの服装を考えるに冬ということもなさそうなので（木の葉に冬がないならありますが、波の国で降った雪に驚いている様子がなく、雪を知っていると言うことは冬がある、と考えます）。

しかし試験が夏だと、かなり下忍期間が短い上に『彼』の里抜けが中忍試験からちよつと？ 経つてからなので、十月十日に全員そろって誕生日パーティ、というのは無理です。第一、試験後の『彼』が和気藹々とナルトの誕生日を祝ってくれるとは思えません。七班そのものがほによほほ、ですしね。

ナルトだけでなく他のメンバーの誕生日も祝いたい、というのがあります。サスケとかも中忍試験に被ってるのでお祝いできない。

という理由から中忍試験を一年遅らせるため、原作より全員少々強くなってます。

ご理解のほど、よろしく願います。

以下、第七班の誕生日、当小説内での波の国終了時の年齢、原作イベント？ の時期を載せます。今まで以上にネタバレ？ です。これまた読まずに飛ばしていただいて構いませんので。

【第七班誕生日・年齢】年齢は当小説内の設定です。波の国終了時

●はるの サクラ （三月二十八日） 十三歳（アカデミー卒業

時はまだ十二歳)

- うずまき ナルト (十月 十日) 十二歳
- うちは サスケ (七月二十三日) 十二歳
- はたけ カカシ (九月 十五日) 二十六歳

学年の区切りは一月一日〜十二月三十一日としています。これはナルトよりサクラが先に生まれていたらいいなあという勝手な願望(笑)。

中忍試験時は、各年齢にプラス一歳となります。しかしこうなる
と第二部にはカカシてぃーちゃーが二十九か(笑)。

【原作イベント時期】当小説内の設定です。

- アカデミー入学・卒業・下忍合格・任務開始(三月終〜四月初頃)
- 波の国編(五月〜六月頃) 注1
- 写真撮影(六月頃) ↑原作で細かいことは書かれてませんが。
- 中忍試験推薦(五月頃〜六月初頃)・中忍試験開始(六月中頃)・中忍試験本戦(八月一日〜木の葉崩し)
- 曉襲来(木の葉崩し〜一週間後頃)
- 綱手探しの旅(曉襲来と同時期)・三竦みの戦い(九月初頃)・五代目誕生(九月中頃)
- ライバル対決(九月中頃)
- 第一部終了(十月初め頃)

注1:あの橋は相当大きいっぽそうなのですぐに出来るわけがない。と思うのですが、建築期間に詳しくない上、NARUTO世界の技術レベルが不透明であることや、途中までできていたことを加味して一ヶ月ぐらいとしています。国から国への移動時間もいれるとちょっといきそうですけどね。現代人より健脚であることは間違いないありませんが(しかも忍びだしなあ)。

イベント時期は大体の目安です。あまりこういった設定を書きたくなかったのですが、原作との変更点を明確にし、混乱を避けるため載せさせていただきました。

何か不可解な点がある場合は教えていただけると助かります。

序劇「唐突な路線変更」

淡いピンク色が風に舞い上げられている場所で、彼女は待っていた。

もうすぐ帰ってくるのだ。伝えなければならないことがあった。謝らなくてはならないことがあった。

「サクラ」

声のした方を彼女が見ると、周りを舞う花卉と同じ色を持った少女がいた。彼女はにっこりと笑う。少女は、大きな瞳を潤ませた。口元に当てた手が震えている。翡翠の瞳には喜びと、ほんの少しの寂しさが見えた。

「よかった。元気になったんだね」

少女は勢いよく彼女の元へと駆け出した。すぐさま抱きつこうとしてきた少女の広いおでこを、彼女は指で弾いた。少女は戸惑った様子で額を押さえ、彼女を見た。力加減を間違えてしまったらしく、少女はかなり痛そうだった。人より広いおでこは一部が赤くなっていた。

謝るように胸の前で手を合わせた彼女は、そつと首を横に振った。少女の翡翠の瞳が、ただでさえ大きいというのにさらに大きく開いていく。そのうち顔全体が瞳で覆われるのでは、とホラーな様子が浮かんでしまい、こんな状況だというのに彼女は腹を抱え大口を開けて笑った。

「え、どうして？　だってこの身体は君の——」

瞳の端に涙すら浮かべている彼女は、必死な少女の様子に笑いを引っこめ、少しだけ頭を右に傾けた。翡翠の瞳からポロポロと流れ始めた水滴を指で拭つてやりながら、彼女はゆっくりと唇を動かす。少女の顔が、恐怖にゆがんでいく。

「そんなこと言われても全然嬉しくないよ。私は君のために生まれただ。このままじゃただの道化じゃないか。私がしてきたことはすべてムダってこと？　だったら、私のこといらないうんからはつきり言つてよ」

今度必死になったのは彼女の方だった。否定するように首を横に何度も振っている。貧血でも起こしそうな勢いで、何度も振っている。少女はそんな彼女を見て、唇をかみ締めた。

「ここに置いていかないで、お願い。なんでもするから。君が望むならまたリセットしてもいい。根本から造り替えたつていい。君の記憶を消してもいい。苦しいんだ。」

こんなはずじゃなかったのに。君が寝ている間の代わりをするだけだったのに。今度こそ君が君自身の手で夢を叶えられるように、準備だけするつもりだったのに。これ以上ここにいたら、私は私に帰れない。もう苦しい。疲れた。

だからありがとうなんて言わないで。ごめんだなんて言わないで。間違いだつたなんて言わないで。私の存在を否定しないでよ」

すがり付いてきた少女を見下ろす彼女の目は、悲しみに満ちていた。伝える順番を間違えてしまった。震える少女の身体を抱きしめて背中を叩く彼女の腕は、慈しみに満ちていた。伝えるのはこっちが先だった。

少女がはっと顔を上げる。

「え？ 今、なんて」

桜色の髪を彼女はなでた。あまりファッションには興味のない少女だが、髪だけはきちんと手入れしているのだ。とてもサラサラしていて触り心地がよい。

「なんで、何を言っ」

少女の唇を指で押さえると、少女は不安そうに彼女を見上げた。きつとあの時の自分はこんな顔をしていたのだろう。すぐにでも泣き出しそうな迷子の子供そのものの姿を眺め、彼女はふふと笑った。言い得て妙とはこのことか。たしかに少女は子供で、彼女はそんな少女の――。

言葉をなくして佇む少女に、彼女は柔らかく笑った。

* * *

すっかり見慣れてしまった天井を目にし、サクラはまばたきをした。何度まばたきをしても変わらずに見えている天井に、現実なのだと理解した。

彼女に言われた言葉は、それほど現実離れた威力を持っていた。

『今はあなたがサクラよ』

「サクラ……私が、サクラ？」

そんな馬鹿なことがあるわけない。サクラは否定するために起き上がった。

鏡の前に立てば、そこに写っているのは桜色の髪と翡翠の瞳を持

つ少女だった。右手を顔に触れさせれば、目の前の少女は左手をお
そのおその顔に触れさせた。馬鹿なと呟けば、目の前の少女の唇が
動き、部屋には独り言が響いた。

『あなたはもつと我侭言っているの。私だけじゃなくて、みんなあ
なたの幸せを願ってるわ』

「幸せになる？ 私が？ みんなが願ってる？ そんなわけない。
私はすべての元凶なのに、ありえないよ。」

それに私は君を幸せにするための存在だ。君が幸せになってくれ
たら私はそれだけで幸せになれる。なんでそんなことを言うのさ」

サクラは、サクラになった少女は戸惑い、立ち尽くした。

序劇「唐突な路線変更」（後書き）

第三幕の、そして本当の意味での始まり。という意味を込めて序幕としました。

原作から離れすぎてて申し訳ない。第三幕の開始はこの話から始まり、途中から間劇を入れながら進みます。

修正（11・06・13）

第三十八劇「自分の心すら」

「——ん。サクラちゃん！」

「ふええっ？ ひっやあああああ」

「ごぶふ」

サクラがハツとして前を向くと、そこにあつたのはナルトのドアツプだった。彼女はとつさに拳を突き出した。ナルトが腹を押さえてもだえる。「ひでーってばよ、サクラちゃん」そんな声によつやく自分がぼけつとしていたことにサクラは気がついた。

今はゴミ拾いの任務中であるにも関わらず、サクラのカゴにはほとんどゴミが入っていなかった。

「ごごごめん、ナルト。大丈夫？」

「だいじょ、ぶじゃないかも」

「ちよつと休んで。後は私がやるか、ら？」

サクラはうずくまっているナルトから顔を上げ、こてんと首を倒した。目の前には綺麗な道があるだけで、記憶の中にあるゴミだらけの惨状はどこにもない。そんな彼女に、サスケが「もう終わった」と淡々と告げた。そんなサスケの傍にはゴミ袋が三つあり、どれもパンパンに膨れていた。

どうやらぼけつとしている間に終わつたらしい。サクラはうなだれる。

「ごめん」

「別に」

「気にしないでってばよ、サクラちゃん。ゴミ拾いなんて俺とサス

「ケで十分だし」

「っ……うん。ごめん」

励まそうとしたらしいナルトの言葉に、サクラは余計に下を向いた。サスケがナルトを睨んで「このウストラトンカチ」と小声でなじった。ナルトはナルトで「てめえにだけは言われたくねーんだよ」と言い返し、いつもの喧嘩が始まった。普段ならここでサクラが二人を止めるのだが、サクラはただ地面を見つめていた。喧嘩の声すら彼女はろくに聞いていなかった。

「……ん、熱はないみたいだな」

「っ先生」

冷たい手が額に置かれた。

驚いてサクラが見上げると、カカシが後ろから顔を覗きこんでいた。唯一見える右目に心配げな光を見つけ、サクラはすぐに目を逸らす。カカシは目を細くした。

「サクラ、お前はもう帰りなさい」

「え？」

頭上から聞こえた声に、翡翠の瞳が見開かれる。七班にはこの後イモの収穫が任務として入っていた。だが、カカシはサクラに帰れと言う。その意味は、

「後は俺たちだけでやるから。サクラはゆっくり休んでまたあし——て、あつあれっ？」

「あ——、カカシ先生がサクラちゃんイジメてるってばよ」

「何やってんだカカシ」

「え、あ、その、さっサクラ？ 先生が悪かったから」

珍しくカカシが焦っていた。ナルトもカカシを責めながら焦っていた。サスケは普段と変わらないようできて、やっぱり焦っているようにサクラには見えた。

何を焦っているのだろう。

不思議に思っていたサクラだが、口元に流れ込んできたしよっぱい水で理由を知った。目元に触れれば黒い手袋はあつという間に湿り気を帯びていく。

「ちがつこれは」

サクラは言い訳しながら泣き止もうと目に力を入れた。涙は余計に流れ出てきた。どうすればいいのか。彼女には分からなかった。手で目元を拭ってみても、全然止まらない。明日、目が腫れているかもしれない。

とりあえずこれ以上ここにるのがいたたまれなくて、なんとかチームメイトへ大丈夫だと伝えるために、サクラは微笑を顔に浮かべてみせた。

カカシ、ナルト、サスケが驚いた顔をしていて、「ああ、笑顔失敗したんだ」と彼女は悟った。背を向けた。もう無理だ。

「ごめんなさい。また、明日」

そのままサクラは逃げるようにその場を去った。

* * *

サクラの涙は、しばらく放置していると自然に止まった。街中を

歩いていたものだから視線を浴びてしまい、彼女はたいへん恥ずかしい思いをした。

泣き止んだ今でも視線を感じるの、おそらく目が赤くなってるんだろうとサクラは思ったが、部屋に帰る気はしなかった。あの部屋は自分のためというよりも、あの子のため。そんな意識がどうしても抜けない。もう悩むことはない。好きにしていいいのだとあの子はいうが、

『サクラちゃん。ゴミ拾いなんて俺とサスケで十分だし』
『後は俺たちだけでやるからさ』

今までならこんなにも落ち込むことはなかっただろう言葉も、今のサクラには上手に受け止めることができなかった。

私がサクラになってしまったから、もう必要ないんだ。

思考が悪い方にしか向かない。あの子がサクラに戻っていたらあんなこと言われなかったのだろう。考えれば考えるほど思考の渦から逃れられなくなる。こんなことじゃ駄目だと頭を振って意識を切り替えようとするのだが、すぐにまた渦に飲み込まれた。

誰かに会いたくて、誰にも会いたくなかった。名前を呼ばれてしまえば、逃れられなくなるから。

「サクラちゃん？」

声にサクラが振り向けば、訝しげな顔をしたヒナタと、キバと彼の頭に乗っている赤丸、シノの八班がいた。おそらくは任務帰りなのだろう。ヒナタが驚いているのを見ながら、サクラはいつも通りを装った。厄介な相手に見つかった。

「ヒナタ、久しぶり」

「久しぶり……ううん、そうじゃなくてサ」

「赤丸とシノも久しぶりね」

「ああ」

「あうーん」

「おい、さらつと俺を無視するな」

忍びになつてからはお互い忙しく、しかもサクラは二日前に波の国から帰ってきたばかりだ。サクラはそのまま別れようとしたのだが、

「サクラちゃん！」

珍しすぎるヒナタの大声に、やっぱり無理かと苦笑した。こういう時、イノだと気を使いすぎて強気になれず流されてくれるのだが、ヒナタは意外と直球なのだ。しっかりと掴まれた右手を見て、さて今回はどんなことを言い出すのかとサクラは対策を練る。

「これから暇だね。じゃ、イノちゃん探しに行こう」

「わわっちょ、ヒナタ」

「じゃ、また明日ね。キバ君、赤丸君、シノ君」

なぜイノが突然出てくるのか。

さっぱり不明で、サクラは戸惑ったままヒナタに手を引っ張られた。後ろからはのんきな声が聞こえた。

「あんなにハキハキしてるヒナタ、初めて見たぜ」

「俺もだ」

「わうあうーん」

* * *

ヒナタは、驚くべきことに日向秘伝の白眼^{びゃくがん}まで使ってイノを探した。どうしてそこまでするのか、サクラには彼女の意図が理解できない。理解できないので対策も考えられない。

戸惑っている間にヒナタはイノを見つけ、引つ張られる力が増した。仕方ないのでサクラは抵抗することなく流れに身を任せることにした。

「イノちゃん！」

「あれ、ヒナタ？ それに、サクラまでつどうしたのよ」

イノたち十班もまた任務帰りなのだろう。イノだけでなくチヨウジにシカマル、担当の猿飛アスマ上忍もいた。アスマが財布片手にブツブツ呟いているので、また焼肉でもおごらされそうなのかもしれない。上忍の給料はかなりいいはずなのだが、そんな彼の財布を圧迫させるほど食べるらしい。誰が、とは言わないが。

アスマはサクラたちを見て悲鳴を上げかけていた。おごる人数が増えるとも思ったのだろう。そんな彼に、少々現実逃避していたサクラは同情した。しかし、まったくおごってくれないカカシよりずっと先生らしい姿ではある。

「今日サクラちゃん家に泊まらない？」

「へっ？」

「なるほどね、そういうこと。ええ、分かったわ」

「いや、あの」

唐突な会話だったが、イノにはヒナタの意図が伝わったらしい。サクラにはさっぱり意味が分からず首をかしげた。

なぜ泊まる？ しかも自分の家……家、か。そうだ。いつかは帰

らなければならない。あの『サクラ』のために用意した部屋に。
胸の前で、サクラは左手をぎゅうつと握った。

「はあ、ったく。おいイノ。サクラ困ってんぞ」

何やら話し出した二人の間に、面倒くさそうな声が割って入った。
いつの間にか俯いていた視線をサクラが上げると、シカマルが明後
日の方を向いてあくびをしていた。イノはそんな彼を一瞬睨んでか
ら、サクラの方へと向き直る。青い瞳が細められた。

「何あんた、また本散らかしたの？」

独り暮らしをし始めてから、サクラはほとんど本を買ったことは
ない。しかし父親が残した本がたくさんあり、その本たちをアパー
トに詰め込んでいる。まだ一室に収まっているので普段は綺麗なの
だが、時折読み返しているとあれもこれも他の部屋に持ち込むた
め、本が散乱するのだ。足の踏み場もなくなるとはこのことで、片
付けのためにイノやヒナタに助けを求めることがしばしばあった。

もちろん今回は違う。

それでもサクラは「えと、ごめん」と笑った。心の中ではイノに
礼を言っていた。どうして彼女は自分の心がこうも読めるのだろう。
いつもいつもサクラにはそれが不思議でしょうがない。文献で読ん
だ超能力というやつだろうか。

「しょうがないわね。あたしの家にしましょ。ヒナタは一度帰って
おじ様に説明してきなさい」

「うん、分かった。じゃ、また後で」

「もう日が暮れるからなるべく急ぎなさいよ」

あ、お泊り会するのは決定なんだね。

乾いた笑いを浮かべながら、サクラは文句一つ言わなかった。言っても無駄であることは重々承知している。だてに親友をやつてきたわけではない。

一旦開放された右手を、今度はイノにがっしりと掴まれた。イノは律儀に待つていた男たちへと向き直る。

「そういうことだから、先生。また今度おごつてね。じゃ、また明日」

「おう」

「うん、またね。イノ、サクラ」

「気をつけて帰れよ」

「はい」

イノとサクラを見送るアスマの顔が輝いていたのは、おごらされずにすんだ喜びが混じっているのだろう。ちゃんと先生らしくするのも大変なんだな。サクラは引つ張られながらそんなことを思った。

* * *

借りた淡いピンクの可愛らしいパジャマを身に着けたサクラは、居心地悪そうに苦笑いを顔に貼り付けていた。

てつきり根掘り葉掘り聞かれると思つていたら、目の前の二人はコイバナを始めたのだ。今日久々にサスケ君を見ただけどやっぱり格好よかったあ、だとか。ナルト君はやっぱり優しい、だとか。口を挟まず彼女たちを見守っていたのだが、二対の目が突如こちらに向いて、サクラはぎよつとした。

「で、あんたサスケ君となんかあった？」「サスケ君に何か言われ

たの？」

「はっ？」

サクラはまばたきをして二人を見る。じれったそうに長い金髪を揺らしたイノは「はっ？　じゃないわよ、はっ？　じゃ」とサクラに詰め寄り、ヒナタはヒナタで「そうだよ！　はっ？　じゃないの！」とイノに同意しながら白眼を発動しかねない迫力でサクラに迫った。

一体なんだというのか。

さっぱり不明ではあったものの、この二人がそこまでいうのだから何かあるのだろう。サクラは目を少し上に向けた。記憶を探っていくが、特にこれといって思いつくものはなかった。瞳をきよんとさせたサクラは、二人へと視線を下げ、首を横に振る。

「特に何も無いけど？」

二人は、「そんな馬鹿なことがあるか」と言いたげな顔をした。

本当に、さつきから二人はどうしたというのだろう。ウサギの又イグルミを抱きしめながらサクラは考えてみたが、まったく分からなかった。

不思議そうなサクラをじっと見ていたイノとヒナタは、どうやら嘘ではないことをには納得したようだ。二人で顔を見合わせて頷き合った。先にサクラを見たのはヒナタだった。

「じゃあ、どうしてサクラちゃんはそんなに落ちこんでるの？」

いよいよ来た質問に、サクラはそっと目を伏せた。又イグルミを抱く腕に力が入る。

「なんでも無いよ」

サクラが言った瞬間、空気が凍った。

「っ、それが本当ならっあたしたちの目を見て言いなさい」

「ちよつとイノちゃん、落ち着いて」

「落ち着けるわけないでしょ！」

湿った声にサクラが慌てて伏せていた目をイノに向けると、青い瞳があふれそうなほどの水滴でゆがんでいた。声は怒っていたが、イノの瞳は悲しみに彩られていた。

驚いた。

イノはめったに泣かない。「涙は女の最終兵器だから」などとふざけたように言っていたが、どれだけ苦しくとも、彼女はいつだって涙をぐつと堪えて前を見据える。そんな強い女の子が今、泣いている。

自分のせいだ。

そのことはサクラにも分かった。でも、どうするべきなのか分からない。あの子ならどうするのだろうか。想像してみても、さっぱり彼女には分からなかった。

無言のままなサクラに対し、イノの目つきが鋭くなった。

「どうしてあんたはいつもそうなのよ。自分は関係ないって顔して、今あんたの話をしてんのよ」

「イノ」

「なんでそうなの、あんたは。舐めんじゃないわよ。気づいてるんだからね。あんた、あたしたちと会話しててもずっと他人事みたいに思ってたでしょ。どっか遠くから眺めてるみたいに！ あたしたちを見下すのがそんなに楽しい？ どうなのよ！ そんなになつてまで、なんで何も言ってくれないのよ。何か言いなさいよっこのデコリンの癖にいつく、うああああ」

サクラは慌てて「そんなことない」と告げようとした。しかし、口は動かない。決して見下していたつもりはない。それでも、イノの言っていることはほとんど正しかった。二人と話するのは楽しかったが、その楽しさを味わうべきなのが自分ではないと、どこか冷めていた。距離を置いていたことはまぎれもない事実で、一体どんな言葉で否定するというのが。

固まってしまったサクラを見て、ついにイノは耐え切れなくなったらしく大声で泣き始めた。まるで幼い子供のように。ヒナタはそんなイノを抱きしめて、サクラを見た。涙こそ浮いてはいなかったものの、寂しそうなヒナタにどきりとした。

「私たちが駄目なのかな？ そんなに頼りないかな」

「ひ、なた？」

「私はサクラちゃんと出会えてよかったと心の底から思ってる。くじけそうな時いつも助けられた。寂しい時はいつも傍にいてくれた。友達だと言ってくれて、すごく、嬉しかった。」

だからこれからもずっと三人でいられたらって願ってる」

ヒナタの白い目から、一滴の涙がこぼれた。いつもなら手を伸ばして拭ってやれるのに、サクラの手は下がったままだった。目の前にいるのに、自分の手は届かない気がした。届かないことを、確認したくなかった。

「ねえ、サクラちゃんはどう思ってるの？ 私たちのこと本当に友達だと思ってってくれる？　ずっといたって思ってくれてる？」

「私は」

イノもヒナタも友達で、ずっと一緒にいたい。思っている。願っている。祈っている。——本当に？

サクラには自信がなかった。本来二人の友達であるべきなのは、自分ではなくあの子のはずだった。自分がここにいていいのか。ずっと一緒にと願っているのは、自分なのか、それともこの身体に染み付いた願いなのか。今までずっとあの子の願いだけを考えてきた。そのためだけに自分は生まれたのだから。

『今はあなたがサクラよ。幸せになりなさい』

あの子はそう言った。あの子の願いならば叶えるべきだが、幸せってなんだ。私は、一体何をすればいい。ヒナタとイノを慰めるべきなのか。もっと別のことをすべきなのか。

分からないのだ、何も。

この時ようやくサクラは、自分が何も分かっていないことに、気づいた。

第三十八劇「自分の心すら」（後書き）

ようやくイノとヒナタが出せた。

こう、感情を吐露する場面は難しい。だいぶマシにはなったんですが、まだまだですね。がんばります。

修正（11・06・13）

第三十九劇「どっちが先生なのか」

ぐいっと襟元を後ろに引つ張られてサクラの首が絞まった。

サクラは抗議しようとしたのだが、目の前には誰がどう見ても壁にしか見えない木の板がずらっと並んでいて、激突寸前だったと気づけば口からは自然と礼の言葉が出た。とはいえ他にやりようもあつたろうと、思わなくはない。

小さく咳き込んだサクラは、後ろを振り返った。

「ありがと、先生」

「……どういたしまして」

返ってくる声が呆れているのは、先ほどから何度も同じことを繰り返しているからなのだろう。そのため息をつくサクラの目の下には、くつきりとクマがある。昨日は一睡も出来なかったのだ。

気まずい雰囲気でもなんとか朝ごはんだけはイノたちと一緒に食べたものの、ほとんど会話はなかった。会話どころかイノはサクラと目も合わせなかった。ヒナタはこそつと様子をうかがってくるものの、目が合うとすぐに逸らした。結局何もしゃべらぬまま、サクラは彼女たちと別れた。

二人に嫌われてしまった。

思い出すと心臓のある箇所がサクラに痛みを訴える。痛すぎて泣いてしまってもおかしくないと思うのだが、涙が出てくる気配はこれっぽっちもなかった。

ぐいっと今度は手を引つ張られてサクラはこけそうになった。

「サークラ、お前の家はこっちでしょ」

「え……あっそう、ね」

カカシに指を指された方向は、たしかに家の方角だった。サクラは真逆へ行こうしていた身体を反転させ、んん？ 動きを止めた。カカシがどうしたと聞いてくるのを、若干眉を引きつらせながら見た。

「そつえば、先生はなんで私の家の場所を知ってるの？」

任務中、昨日同様ぼけつとしっぱなしなサクラが心配だと主張したカカシは、家まで送ると言い出した。サクラは断つて一人で歩き出したのだが、カカシは勝手についてきた。最初はついてくるなと猛抗議していたが、カカシは口笛を吹きながら知らぬ顔でついてくる。徹夜のしんどさもありサクラは諦めたのだ。

今二人で歩いているのはそういった経緯があり、まだそこまですらよかった。サクラが歩いて、その後をカカシがついてきているだけだからだ。

しかしよくよく考えてみれば、先ほどから道を外れまくっているサクラを、カカシは確実に家へと誘導していた。カカシに家の場所を教えたことがないのに、だ。サクラはじとつとカカシを見上げた。担当上忍は、相変わらず右目しか見えない怪しい格好をしていて、現状と組み合わせればどうしようもなく疑わしい。

「今さら気づくなんて、やっぱりお前らしくないな……ちょっと待って何その目。違うって、担当になった時にそういう情報が回ってきただけだから！」

「ふうん」

「別に何もやましいことじゃなくてだな。アスマや紅だって担当下忍の住所ぐらい知ってるはずだ！ ほんとだってどうか信じてくださいお願いしますサクラさん」

じとつとカカシを見ていたが、あまりにも必死に言いつくろう姿に「あははっ冗談よ」とサクラは笑った。彼女の笑顔を見たカカシは、焦燥の表情の代わりに優しい微笑を顔に浮かべ、サクラの頭に手を置いた。

「やつと笑ったな」

「え」

「うんうん。やっぱりお前は泣いてるより笑ってた方が可愛いよ」

「カカ、わっ」

サクラが名前を呼ぼうとしたら、頭に置かれた手に力が加わり、乱暴に髪をくしゃくしゃにされた。少し声に出して笑ったカカシは、サクラの前にしゃがみ、目線を真っ直ぐ合わせてきた。カカシの目は穏やかだったが、逸らすことを許さない力強さもあった。

「何を悩んでるかは知らないけどな。一人で考えるだけじゃなくて、お前はもう少し周りを頼ることを覚えなさい。俺じゃなくてもいいから、ナルトやサスケだっているし。ほら、イノちゃんやヒナたちやんも……サクラ？」

言葉の途中でカカシがぎょつとした。本気で焦り始めた彼を見て、また泣いてしまったのかと今度はすぐに察せられた。彼女は涙を止めようとは思わなかった。無駄だ、となんとなく悟っていた。

「先生、どうしよう」

「サクラ？」

「二人に、イノとヒナタに、嫌われちゃった」

* * *

テーブルに置かれたカップがかちゃりと音を立てた。

「どうぞ先生」

「……ありがとう、サクラ」

どこか居心地の悪そうなカカシが可笑しくて笑いを堪えながら、サクラは「こっちこそゴメンね」そうぺこりと頭を下げて謝った。

あの後、道端で泣き出したサクラに周囲の視線が集中した。彼女の傍にいたカカシへ非難の目が向けられるのは、ごく自然な流れだった。冷や汗をかき冗談抜きで慌てているカカシの姿に、サクラの涙が引つ込んだのは不幸中の幸いだったろう。

とりあえず二人は気まずいその場から離れ、サクラがお詫びにとカカシを部屋に上げてコーヒーを差し出していた。

サクラは自分用に入れた紅茶から出てくる湯気をしばし眺め、カップに口つけることなくカカシへと目を向けた。カカシは珍しそうに部屋を眺めている。

「何か面白いものでもあった？」

「……ああいや、ごめん」

苦笑まじりの声にカカシはハツとサクラを見て、罰が悪そうに頭の後ろへ手をやった。普段の彼だ。サクラは紅茶を手に取り、ほろっと息を吐き出して水面を揺らす。部屋を眺めているカカシが、どこか寂しそうに見えた。なぜなのかは、サクラには分からない。けれど、そんな表情は見たくない、気がした。

口をつけた紅茶はぬるい。一口二口。不安ごとゆっくり飲みこんだ。落ち着いたところで息を吐く。

「先生はさ」

「んー？」

飲みこんだはずなのに、吐き出した息と共に言葉がスツと出てきてしまい、サクラは口を閉じた。なんでもない。とはサクラには言えなかった。訝しげにこちらを見るカカシを見ないように紅茶を見つめ、しかしすぐに顔を上げ、こてんと首を倒した。

「もしかしてお金に困ってるのか？」

「え？」

「だってアスマ先生とか紅先生はおごったりしてくれるみたいなのに、同じ上忍のカカシ先生は一度もないでしょー。上忍の給料はかなりいいと思うんだけど、パカパカ使っちゃうタイプだったり？」

「いや、あの、サクラさん」

「あつ！ それとも借金があるとか？」

戸惑っているカカシへ矢継ぎ早にしゃべりかけると、そのうちがつくりと彼の肩が垂れ下がった。

「今度何かおごらせていただきます」

「やった！ じゃ、最近評判のエリーゼに行きたいな」

「エリーゼ？」

「ケーキ屋さん。一回行ってみたかったの」

につこりとサクラが笑って見せると、カカシは苦笑して「了解」と言った。

* * *

「逆に気を遣わせてどうするんだっての、俺」

自室のベッドに寝転がりながら、カカシは深いため息を吐き出した。自分が情けなくて仕方なかった。

何かをひどく悩んでいる教え子に「もう少し周りを見る」とだけでも伝えなかった。だがどうにもその言葉はタイミングを外したらしい。というより、最悪なタイミングだった。ポロポロ流れ落ちる涙に自分らしくもなく焦ったことに彼は少々戸惑った。

泣いた、とはいっても泣き声一つサクラは上げなかった。あんな泣き方されるくらいならば、大声を上げて泣いてくれた方がまだマシだとカカシは思う。――周囲の視線はもっとキツクなっていただろうが。

『二人に、イノとヒナタに、嫌われちゃった』

サクラは泣き声の代わりにそう呟いた。すべてを諦めたような、そんな笑みを浮かべて。

お詫びだと、サクラに引つ張られるままカカシが部屋に上がったのは、このまま一人にしては駄目だと思ったからだ。

おじやましますと、部屋に入り彼は立ち尽くした。部屋は綺麗だった。あまりにも綺麗すぎて、カカシは言葉を失い、当初の目的を忘れてしまった。

サクラの部屋は、必要最低限とはこのことかと言わんばかりに物が少なかった。物に執着しないだとか、そんなレベルの話ではない。子供が一人で住むには広いその空間は、あまりにも寒々しい。パツと見、誰も住んでいないように思えるほど片付いている。自身もモノを置かないカカシだが、彼の部屋はまだ生活観がある。

ところどころに置かれた可愛いクッションがなんとか女の子の部屋らしかったが、これらはサクラの物ではなく、イノやヒナタ

が持ち運んできたという。おそらく彼女たちもカカシと同じ印象を抱いたのだろう。部屋の中で肩身が狭そうな可愛らしい小物は、全部彼女たちが持ってきたものだった。

居心地が悪いほどに片付いた部屋を、カカシはぼけっと見つめていた。

『何か面白いものでもあった？』

苦笑混じりの声に顔を前に向けると、普段通りに見えるサクラがいた。タイミングを逃したのだと知った。どうにか聞き出せないかとカカシは手を頭の後ろにやったが、いい方法は思いつかない。サクラは紅茶に息を吹きかけて飲んでいた。

『先生はさ』

サクラはその時、たしかに何かを言おうとしていた。結局、サクラがその続きを口にすることはなかった。次に発したのは明らかに別のことで、気づかれたんだとカカシは悟る。サクラからすべてを聞き出した時、果たして自分はそれを受け止めることが出来るのか。カカシには自信が持てなかった。話を聞こうという態度を見せながら、心の中ではずっと恐怖していた。

受け止め損ねてしまえば、彼女を壊すきっかけになりそうで。

「これじゃ一体どっちが」

温かな光を帯びていた翡翠の瞳を思い出して、カカシは呟いた。

第三十九劇「どっちが先生なのか」(後書き)

カカシ先生の出番が多いのは、保護者という立場上、ですね。なるべくひいきはしたくないんですが、ご容赦ください。

結局全然話が進んでないことに一番自分がびっくりしつつ、第三十九劇をお届けしました。

修正(11・06・13)

第四十劇「答えは簡単」

机の上から二番目の引き出しには、鍵がかかっている。

サクラは小さな鍵を取り出して鍵穴に差した。開錠の音が静かな部屋の中で大きく響く。引き出しを開けると、見えたのは赤と緑のリボン。

「イノ、ヒナタ」

赤いリボンはイノからもらったもの。もう一本は、ヒナタと交換したもの。共にサクラの宝物だ。壊れ物へ触れるように、サクラはそつと二本のリボンを手に取った。

「サクラが私なら、これは私の宝物？」

声に出した疑問への答えは返ってこない。

しばらくじつと手の中にあるリボンを見下ろしていたサクラは、リボンをポケットにしまい、部屋を飛び出した。

すっかり日が落ちた外は暗かった。月は雲に隠れており、ぼつりぼつりと立っている街灯が寂しげに地面を照らしている。サクラはあえて人がほとんどいない道を選び、走った。走って、走って、ふいに足を止めた。

迷うように足はその場を意味なく歩いた。一度止まり、やがて進路を変える。

「お願い。これだけ許して、もう、最後にするから」

一歩進むたびに建物が少なくなっていく、人の気配も遠のいてい

く。森が見え始めたところで、サクラは目的地にたどり着いた。平屋建ての大きな建物がたくさん並んでいるその場所を、ゆつくりと歩く。

延々と続く立派な壁には、堂々と描かれた家紋があった。

火を操るという意味が込められたうちの絵が、ここは『うちは一族』の居住区だ何より雄弁に語っていた。うちは一族の居住区は、まるで他者を飲み込むような静けさに包まれていた。

「サスケ君」

彼の顔が見たかった。無性に見たくてたまらなかった。

最後だと思った時サクラの中に浮かんできたのは、イノやヒナタではなく、なぜか彼の顔だった。

サクラは門を眺め、屋敷を眺める。明かりは点いていない。寝るには少々早い時間だが、もう寝たのだろう。今日もまたサクラは任務をまともにできず、サスケとナルトはいつも以上に疲れたはずだから。

会えないことが残念だった。と、同時にサクラはホッとした。会えば絶対決心が鈍る。

「サクラ？」

だというのに、彼女の後ろから声があった。心臓がどうしようもなくうるさくなる。身体は正直で、彼の顔が見たいと訴えてくる。振り向きそうになるのをサクラは気合で抑えつけ、無言のまま逃げ出した。

「おいっ」

「は、なして」

しかし、逃げ出す前に手を掴まれ無理やり彼の方を向かされた。普段より少し苛立ったサスケが、サクラを真っ直ぐ見ていた。それ以上彼に見られたくなくて、サクラはもう片方の手で自分の視界を遮った。不機嫌な声で名前を呼ばれても、決して彼を見なかった。もうサクラであることに疲れていた。波の国ではつきりと悟ったのだ。自分にはもうサクラとして生きるのは無理だ、と。

だというのに、疲れた時に代わってくれと言ったあの子は、笑って拒絶した。あなたはもうサクラとして生きていい。突然そんなことを言われても今さらすぎる。今まで耐えられたのは、代わりだったからだ。自分が自分であって自分じゃなかったからだ。言い訳がいくらでもできた。自分がサクラじゃないから上手いかないのだと、ずっと言い訳していた。それをすべて否定され、自分などもう要らないと突然放り出され、右も左も分らない。

イノとヒナタにも嫌われてしまった。

すべて終わらそうと彼女は思った。自分がしてきたこともすべてあの子が拒否しようとか関係ない。元に戻すのだ。

「サクラっこんな時間にどこへ」

「違う！ 私はサクラじゃない。その名前で呼ばないで」

「そっそれは、どういうことだ」

サスケの声の調子が変わった。彼は力づくで腕を外し、サクラの顔を覗きこんだ。サスケの目は赤く、不思議な文様が浮かんでいた。鋭い目でサクラを睨んでいたサスケだったが、すぐに写輪眼は解かれた。彼の顔はホッとしているように見えた。

「何を言っているかは知らんが、お前は俺の知っている春野サクラそのものに見えるがな」

「え？」

「集中し出すと周りが見えなくなつて壁やら電柱にぶつかる。声を

かけると変な声を出す。頭がいい割りに簡単にだまされる間抜け。嘘が下手。山中と日向の跡取りと仲がいい。料理は、そ、そこそこ美味い。大の本の虫で、クソマジメで、ケチで、天然で——お人よしすぎて貧乏くじを自分から引きにいくウストラトンカチ。それが、俺の知っている春野サクラだ」

サスケは手を離してふっと笑い、付け足した。

「ああそれから、泣き虫だ」

翡翠の瞳が大きく開き、大粒の涙が地面へと流れ落ちていった。涙と同じく、彼の言葉がサクラの胸の中にすくと落ちた。

『今はあなたがサクラよ。幸せになりなさい』

彼女が言った意味を、ようやく理解できた。あれは別に自分を拒絶したわけじゃない。彼女は気づいていたのだ。本当は自分がずっと寂しがっていたことに。みんなと一緒に過ごしたいと願ってしまっただけに。

君は馬鹿だ。君の方が苦しいだろうに私のことを気にするなんて。安堵や嬉しさや呆れで、サクラは涙を浮かべながら楽しそうに笑った。指先で涙を拭う。

「サスケ君、ありがとう。なんか、悩んでたのが馬鹿みたいにすっきりしちゃった」

「ふん」

「でもね」

何かを察したらしいサスケは逃げようとしたが、そのまえにサクラは彼の肩をがっちり掴んでいた。サクラは笑顔のまま手に力をこ

める。先ほど浮かべていたものと同じ表情のはずなのだが、妙に迫力があつた。

「誰が間抜けでどケチですって？」

「どケチは言つてな……つうつ、さっサクラ、その、痛いんだが」

「うん痛くしてるからね。痛くなつてもらわないと困る」

「ぐおおつまえ、性格いきなり変わってないくうあああつ」

「そう？ サスケ君の気のせいでしょ」

第四十劇「答えは簡単」(後書き)

悩み事の解決って、意外とあっさりしているもんですよね。でも、あまり上手くかけなかったなあ。やっぱり悩みの解決を描くのは難しい。精進しないと。

次は間劇二話挟みます。……ところでサクラのキャラが変わっている気がするんですが、気のせいですか？w

修正(11・06・13)

間劇「深まった友情と犠牲になったもの」

サクラは変だ。

出会った当初からイノが抱き続けている印象である。きっと一生変わらないだろうと、自信を持ってイノは宣言できる。

勉強や修行が大好きで、ファッションや恋に興味がない。他人のことになると必死になるのに、自分のことには無頓着。集中し出すと周りが一切見えなくなる。どんな悪意をぶつけられてもヘラヘラしてて、だけどイノやヒナタが悪意の対象になると怒る。お人よしという言葉の範疇を超えた変人。悪意には敏感なのに、自分に向けられる好意にはとことん疎い。変なところはあげ始めるときりがない。

「分かってたつもりだけど、あんなに馬鹿だったなんて」

曲げた膝に顔を埋めてイノは呟いた。

落ちこんでいるサクラをヒナタがつれてきた時、正直嬉しかった。今度こそ彼女の助けになるのだと、イノは意気込んでいたのだ。

助けているつもりで、サクラにずっと助けてもらっていた。

山中家は、日向ほど立派な家柄というわけではないものの、木の葉で長く続く忍びの家系であった。なのでイノには生まれた時から、いや、生まれる前から忍びになることが義務付けられていた。物心ついた時から修行漬け、というほどではなくとも、普通の女の子として過ごすことは出来なかった。

両親はなるべく普通の子と同じように遊ぶ時間を与えてくれ、イノには友達も出来た。それでもどこか他の子たちとは線引きのようなものがあって、完全に混じることは不可能だった。イノは必死に他の子たちに置いて行かれないようにファッションに気をつけ、恋

の話にも積極的に参加した。その頃から人気だったサスケを好きだということにして――目で追いかけるうちに本当に好きになったのだが、今その話は置いておく。

そんな風に、必死に普通の女の子になろうとしていたイノとは、真逆に進もうとしている子がいた。

「あつサクラちゃん！ い、一緒に遊ばない？」

よく遊ぶ友達の一人が、緊張した声で誰かに声をかけていた。サクラというらしいその子は、名前の通り桜色の髪をしていて、なんといつても優しい輝いている翡翠の目が印象的な子だった。見た目は同じ年だろうに、ずっとずっと年上に見えた女の子は、うんと笑顔で頷く。なぜ友達が緊張していたのか、イノはその笑顔を見て理解した。

両親が自分を褒めてくれる時の笑顔にそっくりだった。

自分と同じ子供のはずなのに、どうもちぐはぐなその女の子を「変な子」だとイノは思った。

サクラを知るうちに、変、という思いは強くなった。春野という苗字の忍びは聞いたことがなかったからサクラは一般の家庭だろうに、普通の子として生活することを拒否していた。イノとは違い、忍び以外の道が選べるはずなのになぜ忍びを選ぶのか。イノには理解不能だった。

もちろん一般の家庭から優秀な忍びが生まれることはある。第一木の葉で忍びになることは憧れであり、尊敬の対象であり、誰もが子供の頃に一度は夢見る職業である。危険な職種だが、忍びを出すだけでも名誉なことなので、子供を忍者アカデミーに入学させる親は多い。

サクラの抱く思いは、しかしそんな子供の憧れレベルではなかった。修行の密度はイノよりも濃く、真剣なものばかり。しかも親からは忍びになることを反対されているらしい。本人も危険を承知し

ていて、それでもサクラは忍び以外になる気はないのだ。

「あんた、なんでそんなに忍びになりたいのよ」

あまりにも気になったイノは、直接たずねてみた。一瞬きよんとしたサクラは、いつも以上に穏やかな微笑みを浮かべた。

「ある人を救いたい。そのためには忍びになるしかないんだ」

言葉からは決意が感じられた。イノはその時初めて自分が忍びになる理由を考えた。親や親類の期待に応えるため。それも一つだろうが、納得するには押しが弱い。山中家に生まれたから、は理由ではなく言い訳だ。

考えこんでいると、サクラの手が目に入った。自分と同じかそれ以上に小さな手は、痛々しいほど怪我だらけだ。なんとなくその手に手を伸ばして触れてみた。サクラは戸惑っていたが、気にしない。バンソーコーだらけの手はデコボコしていて、決してさわり心地のよい手ではなかった。だがイノは、この手が好きだなと思った。

「しょうがないわねえ」

「イノちゃん？」

もしも自分が忍びにならなかったとしても、両親は決して自分を責めないだろう。むしろ、喜びそうだ。両親は忍びの過酷さをよく知っている。

だけど自分が忍びにならなかったとしたら、この手はもっともつとボロボロになっているだろう。誰かが近くで監視していないと、目の前の変人が無茶をしまくるのがイノの目には見えていた。

そして自分が忍びにならなければ、近くで監視することは出来ないのだろう。イノは、ボロボロな手をぎゅっと握った。痛いのか、

サクラは顔をしかめた。きつと痛いことすら今まで忘れていたに違いないのだ、この変な友人は。

「あたしも修行に付き合っただけ。あんな一人だと野垂れ死にそうだしね」

ぼけつとイノを見上げたサクラは、「ありがとう」とふんわり笑った。礼を言いたいのはこっちだと思いながら、明後日の方を向いたのを覚えている。

過酷な忍びの世界に足を踏み入れる覚悟が出来たのは、サクラのおかげだった。

苦しい修行に耐えられたのは、サクラがいつだって諦めなかったからイノの負けず嫌いに火が点いたため。どれだけしんどくても弱音を吐けなかったのは、イノが苦しうだとサクラまで苦しむからだ。自分が笑えばとても嬉しそうにサクラが笑うから、イノは笑うことを忘れずにすんだ。けど、どうしても悲しい時はずっとサクラが傍にいてくれた。

救われたことなど数知れずあった。だけどサクラが苦しい時、イノは何も出来なかったのだ。彼女の両親が殺されたと聞いて、慌ててサクラに会いに行つたあの時。

「さっくら」

「どうかしたの、イノ？」

白い病室の白いベッドに横たわっていたサクラの目には、何も浮かんでいなかった。絶やさずにあったあの穏やかな光も、悲しみすらも、浮かんではいなかった。

なんと声をかけていいのか分からなくて、イノは泣いてしまった。励ますどころかサクラになだめられた。彼女の方が辛いだろうに。あれほど自分を情けないと思ったことはない。

だからイノにとって今回のことはチャンスだった。サクラがここまで落ちこむことなんてそうそうない。ようやく友達の名に恥じない行動が出来るのだと、不謹慎にもそう思った。思ってしまったのが悪かったのかもしれない。

『なんでそうなの、あんたは。舐めんじゃないわよ。気づいてるんだからね。あんた、あたしたちと会話しててもずっと他人事みたいに思ってたでしょ。どっか遠くから眺めてるみたいに！ あたしたちを見下すのがそんなに楽しい？ どうなのよ！ そんなになつてまで、なんで何も言ってくれないのよ。何か言いなさいよっこのデコリンの癖にいつく、うああああ』

サクラが自分たちを見下しているだなんて、イノは本気で思ってたのではない。だけど飛び出た言葉は訂正できなかった。翡翠の目が見下すという言葉聞いた瞬間に『あの時』と同じ目になったのをイノは見えて、自分の情けなさにただ泣き喚いた。

たしかに何も言ってくれないことは悲しい。でも、どうして言うてくれないのかをきちんと聞けば、きっと答えてくれた。イノには確信が持てる。だというのに焦って逆に傷つけて八つ当たりして。最悪だ。自分のバカさ加減に呆れる。

「おいおい、大丈夫かよ」

「無理しないほうがいいよ、イノ」

どんな状態だろうと関係なく朝はやってくる。昨日は休んだが、二日も休むのはイノのプライドが許さなかった。いつもの集合場所に行くと、シカマルもチョウジも、無言のままのアスマも心配そうにイノを見た。ここ二日ほどろくに眠れていないので、どれだけ自分がひどい顔をしているのか自覚はあった。イノはあいまいに笑った。

もうサクラは自分に愛想をつかしただろうか。

頭に浮かんだ一文を、すぐに否定した。サクラは誰かを嫌うことができない。ただ、悲しんでいるのは間違いなく、イノはサクラが許してくれたとしても自分で自分が許せそうになかった。

なんとか任務を終えて帰宅していると、チヨウジが「あ」と声を出した。彼を見ると、珍しく何も食べてはおらず、小さい目が前を見ていた。何があるのかと、下を向いていた顔を上げた。

「三人ともお疲れ様。ちょっとイノ借りてっていい？」

「おお、連れてけ連れてけ」

「へっ？ わ、ちよつとシカマル何すん」

「じゃ、借りていくね」

背中を押されてシカマルを睨むが、さすが幼馴染。それぐらいじや効かない。イノが文句を言う前に、腕を掴まれて引つ張られる。チヨウジが懷からポテチを取り出しながら「イノ、また明日」と手を振っているのを「助けなさいよ」と怒鳴ってみたが、もはや聞こえてはいまい。

仕方なくイノは前に向き直り、気まずげに赤い背中を見た。

「サク」

「ごめんね」

サクラは前を向いたままだ。謝るのは自分の方だとイノは口を開けるのだが、それを制するようにサクラが話し始めて口をつぐんだ。

「私、イノとヒナタが大好きだよ。親友だと思ってるし、ずっと一緒にいたいし、二人が困ってたら全力で助けになりたい」

というより、言葉を失ったという方が正しいかもしれない。ピタ

リと足を止めたサクラは、イノを振り返った。

「二人には嘘をつきたくないし、隠し事もしたくない。けど、ごめん。どうしても言えないことがあるの。私だけの問題じゃないからだからこれからも相談できないことたくさんあって、そのことで二人を傷つけるかもしれない」

二人。イノはその時、呆然と佇むヒナタを見つけた。そしてこの場所は――イノが、サクラにリボンを渡した場所だった。

「もしもそんな私でもいいと思ってくれるなら、これからもずっと友達でいてくれませんか？」

夕日を浴びて立っているサクラは、同性のイノから見ても綺麗だと思った。一体この二日で何があったのかと目を疑いたくなるほどにサクラは綺麗になっていた。

後で追求してやろう。

イノは笑って、サクラの背中を叩いた。ヒナタもまた笑ってサクラの手を握った。綺麗だけどこか寂しげだったサクラの瞳が、嬉しそくに細められた。

「あつたりまえでしょ。あんたの面倒見れるのはあたしたちぐらいなんだから」

「ふふふ。そうだよ。サクラちゃんがイヤだって言っても友達やめてあげないよ」

「うん！ ヤメないでね」

三人顔を見合わせ、そろって笑い出した。

「あっそうだ。今度一緒に『エリーゼ』行かない？」

「どうしたのよ。ケチなあんたが珍しいわね」

「けっケチじゃないもん！ 俵約家っていつてよ」

「まあまあ、サクラちゃん落ち着いて。でもほんとに突然どうしたの？」

「ふふっ実は、カカシ先生という名のお財布をゲットしましたー」

「なるほど。もちろんあたしたちの分もおごりでしょうね」

「当たり前」

「ふ、二人ともそんな勝手にカカシ先生のおごりって決めたら駄目だよ」

後日、財布を片手に「お前も大変なんだな」とアスマの肩に手を置くカカシの姿があったとか。

間劇「深まった友情と犠牲になったもの」（後書き）

忍者への認識について。

危険な職種である忍者に、自分の子供をさせたがる親の図が原作では描かれています。現代の感覚では理解しがたいですが、警察なども忍者が行ったりするわけですし（一般人に罪を犯した忍びを捕まえるのは不可能）、消火にも術を使ってみましたし（アニメ）、里は忍びで成り立っているわけですし、まあ憧れは強いだろうと。戦争時には徴兵の意味もあるでしょう。

アカデミーについて。

原作での生徒数が30人と少なかったたので、一般の学校もあるのだろうと考えています（選択できる）。

忍びの一族について。

やっぱり一般人と同じ、とはいかないと思います。里を維持するために優秀な忍びの一族は貴重です。たとえ親が子供を忍びにさせたくないとしても、圧力はあるでしょう。

いろんな独自解釈を交えながらの仲直り・イノ編でした。サスケを好きになるきっかけは、完全捏造です。目で追いかけてるうちに、
ゝってあるよね。

仲直りの掛け合いは結構お気に入り。

次の話はヒナタ編です。

間劇「深まった友情と増えた悩み」

こんなに弱りきった彼女を見たのは、初めてだった。

「サクラちゃん？」

振り返ったサクラの目元は、赤くなっていた。ヒナタが一瞬息を呑めば、その間にサクラは普段通りの表情をして、なんでもないように振舞った。チームメイトのキバとシノには少々戸惑っている気配があつたが、サクラに合わせていつもと同じように接していた。

そのまま別れようとしたサクラに、ヒナタはとても苛立った。サクラはいつだって他人のことには必死になるくせに、自分のことになると途端に心を閉ざす。自分たちに恩返しするチャンスをくれな

い。

「これから暇だね。じゃ、イノちゃん探しに行こう」

腕を引っ張った。今彼女の腕を引くのは、自分の役目だとヒナタは思った。

* * *

本音を言ってしまうえば、ヒナタがサクラに抱く感情はプラスのものだけではない。

「はってやあっ」

イノとサクラと行う修行において、体術は家柄もありヒナタが一番だった。手裏剣はサクラが得意で、忍術に関してはイノが得意だったから、何か一つでも取り得があることはヒナタにとって支えだった。

だが段々と、ヒナタの攻撃はサクラに当たらなくなった。彼女の身のこなしにヒナタの方がついていけなくなっていた。サクラに攻撃の決め手がなかったので今まで組み手で負けたことはないが、それでも恐怖した。人一倍努力していると思っている。ヒナタの家は日向だ。木の葉最強とうたわれる名門の出だ。反対にサクラはごくごく普通の家庭で育ち、修行を見てくれる相手もない。だというのに着実にヒナタより強くなっていた。

なんでこうも違うのかと、枕を濡らして起きることがたびたびあった。

可愛くて、頼りがいがあって、料理も上手で、優しくて……欠点が見当たらないなんて、ずるかった。そしていつしか、アカデミーの実技テストで結果が出せない彼女を見て、喜んでいる自分にヒナタは気づいた。大好きなはずの彼女へ抱く醜い感情に、強い衝撃を受けた。だから、

「嫌い嫌い嫌い嫌い嫌い」

自分が大嫌いになった。

感情をもてあましていたヒナタは、誰にもそのことを相談しなかった。まさかサクラに言えるわけはなく、イノに言ってしまったら嫌われるのではと不安で、かといって他に相談できる相手などいなかった。ヒナタは段々二人との修行も休むようになった。

アカデミーの隅っこにあるブランコに腰かけて、地面を見つめていた。今日は二人と買い物の約束をしていたが、急用が出来たと断った。二人の顔が見れなかった。

「どうしたのかったばよ」
『どうしたの?』

特徴的な語尾のついた言葉に、ある日の声が重なって聞こえた。ヒナタが勢いよく顔を上げると、その勢いに金髪の男の子は驚いてのけぞった。

「あ」

サクラではなかった。分かりきっていたことだったが、なぜかそれが無性に寂しかった。
ぐにやり。

ヒナタの世界が突然大きくゆがんだ。男の子の焦った声がした。

「わわわっ泣くなっば」

男の子は必死にポケットを探っていたが、ハンカチなど持っていなかったのだろう。最終的に指でヒナタの涙を拭いた。そんな彼の指先は硬くて、サクラと似ていて、余計に涙が出てきた。

だがあまりにも慌てている様子に申し訳なくなり、ヒナタはなんとか落ち着こうと息を整えた。

「ごめんなさ」

「べ、べつにいい」

口ではなんてことなさそうに言っている男の子だったが、安堵しているのが分かり、ヒナタは気持ちが緩んでポロポロと心情を話し始めた。いつかと同じようなシチュエーションだった。会ったばかりの同じ年の子に、言葉をぶつけている。自分は何をしているのだ

ろう。どれだけ呆れても、言葉は止まらなかった。

「それでね。その子が失敗しちゃった時、私嬉しくなっちゃって。友だちなのに、最低だよな」

「ふーん、なんで？」

「え」

「どこらへんが最低なんだってば？」

嫌われるだろうなと思いながら話したことに対し、男の子の声は軽い。見ると、空みたいな瞳を不思議そうにこちらへ向けていた。ヒナタは言葉に詰まる。

「俺はその、友だちだとかよく分かんねーけど。俺もそう思う時はあるってばよ。それって最低なのか？」

「だっ、だって普通は一緒に悲しむべきだし」

「んー、でもよ。やっぱり嬉しいじゃねーか。自分の近くにいるみたいで」

「……近、くにいる？」

「うん」

男の子は、ちょっと照れくさそうに鼻の下を指でこすった。内緒にしといてくれよと彼は前置きした。

「お前ってば、いつもサクラちゃんと一緒にいる奴だろ？」

「っ」

「俺、実はサクラちゃんのが好きでさ」

「サクラちゃんが？」

「うん。でもさ、サクラちゃんっているんなことできるし、俺なんかと違って成績もいいし、すっごく、すっごく俺から遠い場所にいる気がするんだ。追いつこうって俺も頑張ってるつもりだけどさ、

なんかいつもうまくいかないんだよなあ、これが」

「そ、だね。うん。よく分かる」

「だろ？ けど、ああやって失敗してるところとか見ると、自分と変わらないように思える。だから俺は嬉しいんだ。絶対いつか追いつく！ って、やる気が出てくるから」

不思議な言葉だった。そんな風に考えたことはなくて、ヒナタの心がスツと軽くなった。

名前も知らない男の子は、「でも、やっぱりこれってば変なのか」と首をひねって真剣に考えている。ヒナタはくすつと笑った。男の子がこつちを向いた。

「うっん。素敵な考え方だと思うよ」

ならいいかと男の子も笑った。

「お前、笑った方が可愛いってばよ」

* * *

いろいろ思い出しすぎて少し赤面したヒナタは、首を横に振って意識を切り替えた。イノを探しながら、後ろにいるサクラの様子をうかがう。サクラはぼうつとヒナタの後姿を見ていて、胸が苦しくなった。

『遠い場所にいる気がして』

仲良く慣れたと思える今だからこそ、彼が、ナルトが言った意味

を実感する。物理的な距離ではない。心の距離が、遠いのだ。

自分たちを大事に思ってくれているのはたしかだった。だけど、どこか線引きがある。その線を、サクラが越えることはあれど、誰かに越えさせてくれることはない。一方通行なのだ。

ヒナタにはサクラが何かを恐がっているように見えた。

いつかその何かを吐き出してくれるだろうと見守っていたが、もう限界だ。無理にでも吐き出させようと思った。じゃないと彼女はどこか遠くへ、自分の手が届かない場所へ行ってしまう。根拠など何もなかったけれど、ヒナタは確信していた。

『私たちじゃ駄目なのかな？ そんなに頼りないかな』

身動き一つしないサクラを見て、方法を間違えたのだとヒナタは悟った。

今度は自分が助けるんだと意気込んでいた。

サクラと出会ってからヒナタの世界は色づいた。イノと出会えたのも、ナルトのことを好きになれたのも、サクラのおかげだった。今度は、自分が。周りが見えなくなっている彼女に、世界を見せたいと思ったのに。

「姉さま、あの」

「ごめんハナビ。今日も夕食はいらないから」

あの日以降、ヒナタは二日連続で任務を休んで部屋に引きこもっていた。世界そとを見たくなかった。

部屋の外から聞こえた妹の声にそっけなく返し、最低の姉だと自嘲した。だが、

「違います。お友達の方が来られて、あ、サクラさん、ま」

勢いよく障子が開けられた。そこに立つ少女をポカンと見上げると、翡翠の瞳が「しょうがない子ね」と柔らかくヒナタに注がれた。最後に見た姿ではなくいつもの――いや、それ以上に綺麗なサクラがハナビを腰に引き連れて立っていた。

「ごめんね、ハナビ。ちょっとヒナタ借りるから」

「えっはい」

「ほくら。行くわよ」

手を引つ張られ、自然と立ち上がった。そのままぐいぐい引つ張られていく。途中ですれ違った父親に「あ。娘さんをちょっとお借りします」などとサクラは頭を下げ、「うむ。よろしく頼む」と父親は返していた。

どうも状況を理解できていないのは自分だけらしい。

前と立場が逆で、もしかしてサクラもあの時こんな心境だったのかとヒナタは考えた。

「ごめんね」

赤い背中を見つめていると謝罪の言葉が聞こえた。謝るのは自分の方だと口を開く前に、サクラはヒナタの顔にハンカチを押しつけた。ハンカチは濡れていて気持ちよかった。いつの間に用意したのだろう。

「ちょっと待ってなさい」

サクラはそれだけ言うと、ヒナタを置いてどこかへ行ってしまった。ハンカチから顔を上げたヒナタは、この場所がどこであるか知った。

『ハンカチのお礼？ 気にしないでいいのに……あ、そうだ。じゃ、このリボンと交換しましょ。ヒナタのくれたものとこれじゃ見劣りするけど』

『ちよつとサクラ！ それどういう意味よ』

『あはは、ごめんごめん。でも、イノから私、私からヒナタでちよつどいいじゃない』

『何がちよつどいいのか分かんないわよ、まったく。はあ。好きにしないな。それはあんたにあげたものだもの』

この場所で二人からもらった青いリボンは、ヒナタの宝物となった。
た。

また涙が出てきて、サクラのハンカチを目に当てた。

「私、イノとヒナタが大好きだよ。親友だと思ってるし、ずっと一緒にいたいし、二人が困ってたら全力で助けになりたい」

足音が二つ響いたかと思えばサクラのそんな声がして、ヒナタはハンカチを目元から離れた。淡い金色の髪の少女が呆然としているのが見えた。おそらく彼女も引つ張られてきたのだろう。

「二人には嘘をつきたくないし、隠し事もしたくない。けど、ごめん。どうしても言えないことがあるの。私だけの問題じゃないからだからこれから相談できないことたくさんあって、そのことで二人を傷つけるかもしれない」

赤と言うには弱い、オレンジと言うには濃い夕日の色が、サクラを染めていた。さつきも思ったが、彼女は本当に綺麗になっていた。一体何があったというのだろう。聞いてもいいというのなら、教えてもらおう。

「もしもそんな私でもいいと思ってくれるなら、これからもずっと友達でいてくれませんか？」

どこか寂しそうな問いに、ヒナタの答えなど最初から決まっていた。イノと目があって、笑った。イノが思い切りサクラの背中を叩き、ヒナタはサクラの手を握った。

「あつたりまえでしょ。あんたの面倒見れるのはあたしたちぐらいなんだから」

「ふふふ。そうだよ。サクラちゃんがイヤだって言っても友達やめてあげないよ」

「うん！ ヤメないでね」

三人顔を見合わせ、そろって笑い出した。

* * *

後日、ヒナタはイノと共に、サクラに連れられてとある場所に来ていた。目の前には文字の彫られた石がずらっと並んでおり、サクラはそんな石の一つの前で立ち止まってこちらを示しながらその石に語りかけた。

「お父さんお母さん、改めて紹介するね。二人は、山中イノちゃんに日向ヒナタちゃんっていうの。」

私の自慢の親友です」

サクラがいろいろ話してくれるようになったのは嬉しいけれど、こつも表現がストレートなのはこつちが照れて困る。

居心地悪そうないノとヒナタは、別の悩みが出来たとため息をついた。

間劇「深まった友情と増えた悩み」（後書き）

自分だったら、眩しすぎてこのサクラとは友だちになれないなあ。とか、思う。

それに友だちだからといって、お互いに嫌なところがない、何てこともないでしょう。嫉妬することもある。人間なんだから仕方ない。

彼女たちと一緒にそこらへん成長していけたらなあと考えてます。

ナルトとヒナタの出会いについて。

このヒナタだと、原作どおりにナルトを好きになるか微妙だったので捏造です。

第四十一劇「変化」

「何かあつた？」

かけられた言葉にサクラは首を小さく傾けた。なぜかナルトはキョドキョドと視線をあちこちにさまよわせていた。顔も心なしか赤い。

「何かつて、あんたこそ何かあつたの？ 顔赤いわよ。熱あるんじゃない？」

「ひえ！ いあ、や、その」

「うーんちよつと熱い、かな。しんどいなら休んだ方が……ナルト？」

サクラが彼の額に手を当てると、ナルトの赤みが気のせいではないほどに増した。心配になったサクラが顔を覗きこむと、ナルトは慌てて顔を彼女の反対へと向けた。目線の先には、遅刻したというのにのんびり歩く上司がいた。

カカシはナルトとサクラを見て一瞬驚いたようだったが、「ああなるほどね」うんうん首を縦に振った。何かなるほどなのかは不明だ。

「あ、カカシ先生。ナルトがしんどいみたいなんだけど」

「ナルトなら大丈夫大丈夫。じゃ、今日もはりきっていきましょう」

「え？ わつちよ、先生！」

につこり笑っているカカシにサクラは抗議しようとし、ぐいっと手を引っ張られたことで口を閉じた。つんのめり、こけそうになっ

たところをカカシに抱きとめられる。感謝するべきなのか引つ張られた文句を言うべきなのか。サクラが悩んでいると、

「あーーーーーっカカシ先生！ サクラちゃんに何してるんだってばよ」

大声を上げてナルトがカカシに詰め寄った。元気でやかましいいつものナルトだった。よく事態が分からずにサクラが気を抜いていると、カカシとは逆へとまた手を引つ張られた。

「この馬鹿。お前もそろそろ学べ」

「え、何を？」

どこか不機嫌そうなサスケは、しばらく無言のまま不思議な顔をしているサクラを眺めていた。やがてため息をつく。サクラから視線を外した彼は、ニコニコしているカカシを睨みつけた。なんとも不思議なサスケの行動にサクラがカカシを見ると「ほら大丈夫」と言いたげにウィンクした。たしかにいつも通りみんな元気そうだ。

ナルトの体調が悪そうに見えたのは、気のせいなのだろう。たぶん。ちよつと怪しい気もするが。

半分納得したサクラは、ハッと我に帰って前を見た。

「サクラちゃん」

「行くぞー」

「ふん」

三人が振り返って自分を待っている姿になんだか泣きたくなりながら、サクラは走って彼らを追いかけた。

* * *

サクラは額を押さえる。

目の前ではいつものごとく喧嘩を始めたナルトとサスケに、そんな二人をあおる力カシがいた。細く長い息を吐き出したサクラは、おろおろしている気配を後ろに感じながらそっと三人に近づいていた。彼女の拳がぎゅっと握りしめられた。

「仲良く、ね？」

「ハイ！」

「すいませんでした」

「調子に乗りました」

一瞬後には地面で頭を押さえるナルトにサスケ、腹を押さえる力カシがその場にうずくまっていた。サクラはパンパンと手を叩いて三人を見下ろした。呆れきった顔をしていたが、すぐに申し訳なさそうな顔に切り替えてくるりと振り返る。

「すいません。こんなので」

「はあ」

老齢の男、写真屋は『悶絶しているこんなの』を見て引きつった顔で、「ははは」と笑った。

今、七班が何をしているかと言うと写真撮影である。力カシ曰く、下忍正式登録の手続きに必要なのを今まで忘れていたらしい。で、今日がその日というわけだ。

ほら撮るから並んで！。サクラが声をかけるとスクツと苦しんでいたのが嘘のように三人は立ち上がった。いつも彼らは大げさだ。左からナルト、サクラ、サスケと並び、後ろに力カシが立った。

が、両隣がにらみ合っているのを察したサクラは眉を寄せた。折角の記念撮影なのだ。仲良く撮りたい。サクラは腕を組んでどうしたら仲良く撮影できるか悩み、思いつきにふふと笑った。彼女が手を伸ばすと、両隣から悲鳴のような高い声が聞こえた。サクラは気づいていないフリをした。

「うわっサクラちゃん！」

「サ、サクラ！」

「はいはい、スマイルスマイル」

「楽しそうだなあ。サクラ、先生も混ぜて〜」

後ろから聞こえた声に、サクラがすっかり握った両手を少し持ち上げると、カカシがそこに手を置いた。写真屋は楽しそうな笑みを浮かべて、撮るよーとレンズを覗いた。

* * *

『サクラ？』

買い物に行った帰り、門の前に佇んでいたのは見知った少女だった。名前を呼ぶとサクラは大げさなほどに肩をびくつかせ、無言のままサスケに背を向けた。気がついた時、彼は買い物袋を放り出してサクラの腕を掴んでいた。止めなければもう二度と会えないように思ったのだ。

瞳を覗き込もうとすれば、避けるようにサクラは腕で目を隠した。そんな態度に彼はとても苛立った。

『違う！ 私はサクラじゃない。その名前で呼ばないで』

サクラは珍しいことにひどく錯乱していた。とりあえず落ち着かせようとサスケがサクラの名を呼ぶと、彼女の肩がまた震えた。何かに怯えているようだった。サスケは目をみはった。もう片方の腕を掴んで、無理やり顔を覗きこんだ。湿った翡翠の瞳の奥に、サスケは小さな渦を見た。

一瞬驚いて、しかしすぐにどうでもよくなった。

瞳に宿った穏やかさも悲しみも寂しさも喜びも優しさも、いつものサクラと何一つ変わらなかった。ここにいるのはまぎれもなく、自分の知っている『春野サクラ』だと、サスケには確信を持って言えた。サクラが言った意味は分からないが、サスケにとっての真実はその一言に尽きた。だから何も問題はなかった。

問題があるとすれば、自分が安心しすぎていることかもしれない。あった。

『何を言っているかは知らんが、お前は俺の知っている春野サクラそのものに見えるがな』

サスケが素直に出した言葉を、サクラはどう受け取ったのか。泣きながらサスケに笑って見せた。初めてサクラの素顔を見た気がした。

「おはよう、サスケ君」

「……ああ」

次の日、集合場所にサスケが着くとサクラが笑みを浮かべて挨拶してきた。いつものようにそっけなく返しつつ、サスケは心臓が速く脈打っていることを気づかれないように必死だった。普段通りにしていればいいのだが、妙に気まずい。勉強し始めたサクラに習って巻物を解いても頭に入ってこない。すぐ後にやってきたナルトに

感謝したいぐらいだった。

真っ赤になっっているナルトに、ちょびつと同情はした。

* * *

ほんと、何があっただろう。

ナルトは隣を見た。そこには、昨日までの沈んだ表情ではなく、満面の笑みを浮かべているサクラがいた。ドキドキ心臓がうるさくなってきた、ナルトがふいつと逆へ顔を向けた瞬間、パシャッと音がした。

ああ、よかった。

ナルトは安心した。彼女を見つめたままの写真が残らなくて、ほんとによかった。だって恥かしすぎる。

右手の温もりがなくなって、思わず「あ」とナルトの口から声が出た。サクラがナルトへ顔を向けた。翡翠の瞳と目が合えば、心臓だけでなく身体中が歓喜に揺れて騒音を奏で始める。まるで自分の身体ではないようだ。ナルトは感じた。

サクラの整った眉が怪訝そうにつり上がり、すぐに垂れ下がった。

「やっぱりあんた調子悪いんじゃない」

「ただ、大丈夫だってだよ」

近づいてこようとしたサクラをナルトは必死に押しとどめる。これ以上近づかれたら死んでしまう。冗談抜きでナルトはそんな心配をした。サクラは不思議そうな顔をしていたが、引き下がってくれた。どこか寂しそうな表情に失敗したと後悔したもの、今のナルトにはそれが精一杯だった。後でサスケからどんな小言を言われようとも、身体がどうにかなくなってしまふよりはマシだった。死んでし

まっさらもう彼女に会えない。

ふと目が合ったカカシは、そんなナルトの心境を理解しているように、苦笑いをしていた。なんだかむずがゆい。ナルトは頭の後ろをかいた。

サクラは、綺麗になった。

もちろん、ナルトはサクラを元々から綺麗だと思っていたが、さらに綺麗になった。それは劇的な変化で、一体何があったのかと疑問に思うのも仕方ないだろう。つい昨日まではあんなにも思い悩んでいたというのに、今日は晴れ渡った笑顔だ。誰だっけ気になる。それが好きな女の子なら、よけいに。

「じゃあ、センス、ナルト、サスケ君。また明日ね」

手を振るサクラにナルトはなんとか手を振り返す。サクラが元気になったことを、彼は本当に嬉しく思う。けれど、そこに自分がいなかったことが悔しい。ナルトは強く思って、振った手を握り締めた。

一体いつになったら自分は彼女の隣に立てるのだろうか。

* * *

手を振り返しつつ、カカシは情けなくて仕方なかった。結局、自分には彼女に何もしてやれなかった。どころか、気を遣わせてしまい、そのことで落ち込んでいる間にすべては解決してしまった。情けないにもほどがある。

「ま！ 良かったは良かったんだが」

「カカシ先生？ 何か言ってたかつてばよ？」

「いいや。気のせいでしょう」

不思議そうに見上げてきたナルトの頭を乱暴に撫で回して、彼はごまかす。ナルトの悲鳴を聞きながら笑った力カシは、抗議される前に「じゃあな」とその場から消えた。

第四十一劇「変化」(後書き)

写真撮影について。

写真を撮った時期、どんな感じで撮影したのかは謎なので、捏造しました。

すぐ撮影するかなあとも思ったんですが、すこし慣れた頃(5月頃)がいい。でも5月はカカシ班波の国へ行っているので、延期。そのままカカシが忘れてた、みたいな。

それにしても、この四人が写った写真欲しい。

第四十二劇「数式と天才」

図書館の端、定番の位置に座ったサクラの前にはノートや巻物、本が所狭しと広げられ、彼女はシャーペン片手にそれらを睨んでいた。ノートにはびっしりと数字や記号が並んでいる。何かの数式、らしいが、ところどころに上からバツ印がつけられて何度も書き直されていた。シャーペンの先で一つの数式をサクラは叩いた。

「ん〜これじゃ駄目、か。でも途中まではいい感じなんだけどな」

ぶつぶつ小声で何事か言いながら、サクラはその数式にバツを書いた。そしてまた新しい式を書き、考えてはため息を吐き、バツ印、書物をめくって考え、式を書き、を繰り返していた。随分と難しい顔をしている。

一体サクラが何をしているのかというと、新術の術式構成だった。波の国でサクラは周りを見ずとも察することが出来た。あの状態を術に昇格させようとしているのだ。感情の高ぶりからでしかあの状態になれないのでは、あまりにも使い勝手が悪すぎる。いくら便利でも、ここぞという場面で使えなければ意味はない。

なんといっても、今まで特別な術がなかったサクラにとって、あの状態はチャンスだった。

サクラが必死にかつ冷静に分析した結果、あの状態は『ひたすらに竹筒を避けた修行』が関係あるのでは、と思い至った。

攻撃が自分に向かってきた時どう避ければ一番効率がいいのか。それらを判断するための修行だったが、判断するには情報が必要となる。サクラは修行をしているうちに自然と目、耳以外からも情報を集めるようになっていたのだ。彼女が思い返せば、修行中とあの状況は感覚がよく似ていた。

もちろん、どれだけ集中したところでサクラの背中に目がついて

いるわけではなく、背後を知ることができない。しかしあの状況では背後の詳細も知ることができた。発動のためには、修行の他にも必要なものがある、ということだ。

「チャクラで神経細胞を活性させるんだから。となると細胞に働きかけるこの式を」

あの状態になった後、痛みがひどくなった。チャクラがサクラの五感を鋭敏にしたのだ。言葉にするとそれだけのことだが、どのようにチャクラを流せば感覚を引き出せるのか。熟知している必要がある。

つまりはあの修行と、ずっと勉強し続けていた医療知識がようやく役立つのだ。

とはいっても手放しに喜べないこともある。

そもそもあの状態になったところで身体能力そのものが向上するわけではない。感覚が鋭敏にはなるが、それは痛覚まで鋭くなるということ。入ってくる膨大な情報の処理で頭痛が起こるなどの副作用がある。さらにはチャクラの消耗が大きいこともあり、中々欠点の多い術だ。使いどころはとても難しい。

それでも死角がなくなるので使いどころを考えれば強力な武器となる。防御に関してはかなり有利だ。

からよみ
空読の術。

まだ出来ていないが、サクラはそう名づけた。

「範囲も指定できた方がいいよね。うーんそうするとこれじゃ無理か」

もうすでに存在する忍術の場合、印を教えてもらい、術の発動条件がそろっていれば（そろえるのが難しいのだが）発動させることが出来る。上手く扱えるかは各々の技量しだいだ。

だが、新術の場合は理論の構成から始めなければならない。どういったチャクラの配合にするか。チャクラの形質・性質をどのように変化させるのか。どんな結果をもたらすのか。そういったものを術式に起こし、その術式から印を考えるのだ。この印が考えられない限り、術の練習すら出来ない。

もつとも理論上、印はなくても術の発動は可能だといわれている。印とは術のイメージを具現化させた（補佐する）ものだ。つまり、きちんとイメージが作れるのなら印はいらない。では、なぜ誰もが印を結ぶのか。両手がふさがる印は邪魔にしなければならないというのに。答えは、術の詳細なイメージを浮かべるのが非常に困難、だからだ。

たとえば分身の術を使うには、自分と同じ姿を思い浮かべればいい。しかし、鏡や写真を見ながらならともかく、まったく同じ姿を思い浮かべられるだろうか。さらに言うなら術を使うのは戦闘中がほとんどだ。戦いながら意識を集中して思い浮かべるのは、不可能と言い切っていいだろう。

術のイメージを補佐するのが印の役目で、「あっちに向かって走れ」など漠然と言われるよりも、「アカデミーに向かって走れ」と具体的に言われた方が分かりやすいのと同じだ。

なので印はどうしても必要なのだが、サクラはその前段階である術式構成で詰まっていた。

術の基礎部分だ。ここがしっかりしていないと不安定な術になるので、手は抜けない。だが、先ほどから同じところで詰り、先に進まない。

「ああ、駄目だ。これだとチャクラが流れてしまっし、変化も違ってくるし。うう」

サクラは数式を親の敵のように睨みつける。もちろん、いくら睨

みつけても数式が変化することはない。一つため息をついて、サクラは分厚い本に手を伸ばす。最初から見直そうとした。

「まためんどくせーことやってんな、お前」

が、後ろから聞こえた声に驚きすぎたサクラは、大きく咳き込み、式の見直しどころじゃなくなった。

おいおい。

呆れた声を背後から聞きながら、涙を浮かべて「誰のせいだ」と彼女は心の中で文句を叫ぶ。

サクラが咳きこんでいる間に彼女を驚かせた犯人、シカマルはひよいとノートを取り上げそれを見た。シカマルはすぐ嫌そうに顔をゆがませていく。

「術式か。しかも新術とはな。これまたご苦労なことだ」

「う、さい。かえ、しけほっ」

手を伸ばすとサクラの届かない位置に避けられた。立ち上がるうとしたら頭を手で押さえつける念の入れよう。ぶるぶるとサクラ肩が震え、図書館だろうと関係なく怒鳴ってやろうと思った時、シカマルがいつものだるそうな口調で言った。

「この式をこれの間に入れてみたらどうだ？」

「へっ？」

ノートを机に置いたシカマルは借りるぞ、と言ってサクラの手からシャーペンを抜き取り、ある術式をマルで囲む。それを矢印で引っ張り、サクラがバツを書いた別の術式の間にとっていった。驚きで丸くなっていた翡翠の瞳が、真剣な輝きを帯び始める。

シカマルはある数字をトントンと叩いた。

「つまりお前はこの結果を出したいわけだ」

「うん」

「だとしたら、一つの式じゃ無理だな。ここで一旦区切って」

淀みなく動くペンを追いかけて翡翠の瞳も移動する。そして最後に書き込まれた答えに、ほうつと息を吐き出した。サクラが求めていたものが出たのだ。

「そっか。なるほどねえ」

「お前は組み合わせるのが相変わらず下手だな。全部式は出てんのよ」

「う。うるさい」

呆れたシカマルの声にサクラは頬を膨らませた。ノートにシカマルが書いたのは矢印ばかり。どうも、一つ一つの式にこだわりすぎて、組み合わせる発想が出てこなかったらしい。サクラは昔から点と点をつなぐのが苦手だった。彼女自身、よく自覚しているので反論はない。

反論はないが、不満はあるらしいサクラが黙り込んでいると、シカマルが小さく笑った。サクラが目を向けると、シカマルはニッとそれはそれは憎たらしい笑みを浮かべた。

「で、何か言うことは？」

「……りがとう」

「聞こえねーんだけど」

「あ・り・が・と・う・ご・ざ・い・ま・し・た、シカマル様」
「どういたしまして」

ああもうムカつく。

ここが図書館でなければ、拳を机に振り下ろし、足をじたばたと動かして思い切り叫びたい心境だった。実際しそうになったが、サクラの理性やら矜持やらが働いてストップをかけた。

実はこのめんどくせーが口癖のシカマル、学校の成績は悪いが（ついでに目つきも悪い）、頭の回転はものすごく速い。成績が悪いのはテスト中ずっと寝ているから、というふざけた理由のため。本人曰く、鉛筆転がすのもめんどくさいらしい。いつぞやは名前すら書かず、担任のイルカに怒られていたこともある。

そうでもなければ、サクラが座学で一位を取るのは無理だったろう。

もっとも彼の頭の良さを知っているのは少ない。サクラは普段の掛け合いからなんとなく察し、ある日将棋へ誘われた時に確信した。シカマルは天才と呼ばれる類の少年だと。悔しさはあるが、それ以上にサクラが思うのはもったいない、だった。やる気を出せば忍びだけでなく、様々な分野で活躍できるだろうに。

「でも珍しい。あんたが人の手助けしてくれるなんて……どうしよう」

「あ？」

「今日傘持って来てないんだけど。あ。でも槍が降ってきたら傘じゃ無理か」

「お前が俺をどう思ってるか、よく分かった」

「で、なんでやる気になったの」

あくびをしながらサクラの正面の椅子に座ったシカマルは、本が広げられた机の上を指差した。

「この状態じゃ寝れねー」

「良かった。槍は降らなさそうね」

サクラは息を吐きながらシカマルの前に積まれていた本を持ち上げた。するとシカマルは「ようやく寝れる」と頭を机に置いた。すぐに寝息が聞こえてくる。

「ありがとね」

そんな彼に笑顔で小さく礼を述べたサクラは、手にした本を元の位置へと直しに行った。今度何かおこつてあげようと考えながら見渡した図書館は、人がまばらだった。

第四十二劇「数式と天才」（後書き）

空読の術に関して。

こんな名前の術なかった、と思うんですが、あったつけ？ 第二部の途中からは読めてないので、知っている方いらっしゃったら教えてください。

あと、補助作用として幻術耐性がアップします。いずれかの五感から幻術にかかっても、他の五感がそれは現実じゃないぞ、と教えてくれるからです（追記）。

術全般について。

なぜ印が必要なのかを考えた末にこうしました。元々どうやって変化してるのか、とか謎だったので。印のない術もありますし（医療忍術・螺旋丸系・瞳術とか）、印がなくても発動することは全部の術（血継限界以外）で可能。ただし難しすぎる、ということに（追記）。

これに関してもおかしな点があれば、気軽に指摘ください。

よし、これでサクラも強くなれ……うわ、使い辛い術だな！ 身体への負担が大きい上に、能力が向上するわけじゃないとか。

考え出した本人がいうのもなんですけどね。

いつ使うのか、は楽しみに！

第四十三劇「第七班の日常」

ゴオゴオと周囲に存在を響かせながら落ちてくる大量の水は、しぶきを上げて一旦勢いを殺し、また流れていく。

「なんか今さらながらに、ヤメたくなってきたんだけど」

落ちてくる大量の水、一般的に滝と呼ばれるそれを見上げたサクラは冷や汗を流しながら呟いた。返事はない。ここにいるのは彼女一人だ。むしろ返事があつたほうが怖いだろう。

先日、サクラはシカマルの助けもあつて新術の理論構成に成功した。無事に印の組み合わせも出来たのだが、さて発動させようか、となつて問題が浮上した。――スタミナ（チャクラの総量）不足だ。波の国では感情でリミッターが外れたのだろう。実際あの時サクラはチャクラ切れを起こして気絶した。まだ誰かが傍にいたから助かったものの、一人で修行すればかなり危険な状態になるのは目に見えている。しかしながら危険な術だと分かっている以上、誰にも相談できない。止められるのもまた目に見えて明らかすぎた。

「理論上はできなくはないはず。うん、大丈夫」

まずはスタミナの底上げだ！　ということ、サクラが一晩考えた修行法は滝登りだった。木登りの要領で滝を登るだけという非常にシンプルなもの。さらなるチャクラコントロールも身につけなければならぬのでちょうどいい修行法だが、今まで以上に危険だった。しかしそれぐらいしないと到底あの術を使えそうもない上に、なんといってもチームメイトに追いつけない。サクラ以外の男たちは、全員馬鹿みたいなスタミナ持ちなのだ。

「最初は勢いをつけて」

気合を入れたサクラは、走って滝へと向かっていった。

* * *

修行に時間をかけたくとも、任務をこなさなければ日々の生活費が稼げない現実があった。サクラには目の前に『家賃・生活費』の文字が横たわっているようにすら見える。

ならば早く任務を終わらせて修行をしたいところだが、担当上忍であるカカシは大の遅刻魔だ。彼が待ち合わせの時刻通りに来たためにはない。かといって自分も遅刻するつもりなど毛頭なかった。

かといって時間は一分一秒でも惜しい。

そんなサクラが待ち時間を利用して勉強を始めたのは、自然な流れだった。彼女の影響を受けたサスケとナルトも待ち時間を有効に使おうと模索し始めた。しかし待ち合わせ場所は街中だ。まさか修行ができるわけもなく、彼女と同じく勉強にいたった。そうなる

「サクラちゃん、ねね、ここはどういうことだってばよ」

「ああ、ここはね」

「サクラ」

「ちよっと待つて。たしかそれについてまとめたのがあったはず」

一番座学の成績が良かったサクラが教える側に回るのも、自然な流れだった。カカシよりよっぽど先生をしている。カカシの給料の一部をもらってもいいんじゃないか。最近サクラはそう思う。

「やあ諸君おはよう。今日は迷子がいて」

「はい、嘘！」

「だってばよ」

「ふん」

ようやくやってきた力カシに対して七班のメンバーは顔すら向けず、勉強道具をせっせとしまつ。冷たい態度の三人を見つめる力カシの背中から哀愁が漂っていたが、やっぱり三人は無視してさっさと任務幹旋所に向かい始めた。自業自得なので、同情の余地はないとぼとぼ力カシも歩き始めた。

「サークーラちゃん、今日任務終わったら一緒に修行しない？」

「ナルトと？」

自分を覗き込んできたそわそわした青い目を見て、サクラは数回まばたきをした。考えてみれば、ナルトたちと個人的に修行した記憶はない。誘われてもすべて断っていた。サクラは（うわ。なんて愛想のない）と、自分で自分の行動に呆れた。いくら焦っていたとはいえ、チームメイトへの態度ではなかった。

ちよつと反省してから、緊張した面持ちで自分の答えを待っているナルトに頷き返す。

「いいわよ」

「えっ嘘！ ほ、ほんとに？」

「こんなことで嘘ついてどうするのよ。あ、でも夕飯の材料買いに行かなくちゃいけないから、早めに終わってもいい？」

「全然いいってば！ なんだったら俺、荷物持ちするよ」

「ほんと？ 助かる。あ。じゃあ、そのままご飯食べていきなさい。作れそうなものなら好きなもの作ってあげるから」

「わ、マジで？ やったー！ サクラちゃんのめーし！ めーし！

えつとね、えつとね、俺あれ食べたい。オムライスとハンバーグとカレーとそれから肉じゃがと」

大げさなほどに喜んでゐるナルトは、次から次へと料理名を挙げていく。そんなに作れるわけないでしょ。どれかにしなさい。などと怒ったものの、今にも踊りだしかねないナルトはまるで聞いていない。ひゃっほーと叫んでいる。

そんなに最近いいもの食べてなかったのだろうか。あ、またカツブラーメンづくしだったんじゃない。

ちよつと眉を寄せたサクラだったが、ふと視界に入ったサスケのムスツとした顔に驚いて目を丸くした。

「サスケ君？ どうしたの？」

「別に」

短く答えたサスケは、ナルトを睨んでいた。どうもナルトが原因らしい。特にサスケが怒るようなことはなかったと思うのだが。首をかしげるサクラの後ろからは、

「いやー、青春だね」

カカシのそんな声がした。

* * *

今日の任務は犬の散歩と子守だった。いつものようにナルトが無茶をしなかったため、あっさりと終わった。いつもこうならいいのに。

最近サクラたちはCランクも任されるようになったが、やっぱりまだDランクがほとんど。早くCランクを受けられるようになって真っ赤な家計簿とおさらばしたい、というのがサクラの願いだ。そして今は約束通りナルトと修行するために演習場へと向かっているわけだが、彼は不機嫌だった。

「だーっっサスケ！　なんででめえまでついて来るんだってばよ」
「知るか。たまたまだろ」

「嘘つけ！」

「まあまあナルト。お前も落ち着」

「カカシ先生までそろってなんなんだよ。折角サクラちゃんと二人きりになれると思ったのにい」

任務が終了し解散したにもかかわらず、珍しく七班はそろって歩いていた。苦笑しながら憤っているナルトに声をかける。

「いいじゃない。人数多い方が修行はかどるし、ね？」

「サクラちゃん……これはそういう問題じゃないってばよあ」

「え？　でもほら、カカシ先生は一応上忍だから教わることも、ない、かもしれないけどちょびつとはあるかもしれないし」

「ああ、そんな評価なのね。俺」

「ふん。自業自得だろ」

なぜか今度は落ち込んでしまったナルトに、サクラはどうしたらよいかとおどした。カカシはカカシで落ち込み、サスケはナルトとカカシを見てはんつと鼻で笑っている。なんともちぐはぐだが、これが七班だった。

やがて目当ての演習場にたどり着くと、ナルトはすっかり元氣を取り戻していた。両手を突き上げ「くたくたになるまで修行して、サクラちゃんの手料理いっぱい食べるぞー」と、叫んでいる。そん

な彼を見て、普段どんなものを食べているのか心配になった。今日はたらふく食べさせてあげよう……今回だけ食費請求はヤメとくとして。うはあ、今月も赤字か。サクラは肩を落とした。

サスケはというと、勉強会でサクラが渡した巻物を読みながら印を組んでいた。カカシは木の上に乗っていちやパラを読んでおり、サクラたちに教えてくれる気はなさそうだ。ほんと、何をしに来たんだこの人は。あきれ果て、いつそのこと感心する。遅刻魔で、未成年の前でやらしい本を堂々と読み、手伝うどころか助言すらない。駄目な上司の見本市だ。

こうはなるまいと、サクラは心に誓った。

「あ」

サクラは笑っているナルトを見、もくもくと修行しているサスケを見、本を読んでニヤけているカカシを見た。思いついたことがあった。ちよつとあくどい顔で彼女は笑った。

「ねえナルト。いい修行法思いついたんだけど」

* * *

んふんふんふふう。

なんとも奇妙な声を上げて本を読んでいたカカシは木の上から跳びのいた。近くの枝に着地する。

「火遁！ 豪火球の術」

直後、カカシがいた場所に大きな火の玉が衝突して木の一部が焼

失した。その場が一瞬真夏になった。カカシが以前見たより確実に術の威力が上がっている。さすがうちはというべきか。

術の発動者であるサスケは無事であるカカシを見て、「チッ」と忌々しげに舌打ちした。

「ちよつとちよつとサスケ君？ いきなり何すんの。危ないでしようが」

今のは避けなかったら確実に死んでいるレベルの術だ。やんわりと抗議するカカシに対し、サスケは鼻で笑うだけ。

その時、ひゅつと風の音がした。

サスケへの抗議をやめたカカシが首を横に傾ければ、先ほどまでカカシの顔があった位置をオレンジ色の物体が通り過ぎていった。オレンジ色の物体、ナルトはニヤツと笑った。カカシはそんなナルトの足を掴んでぐるりと回し、後ろから迫っていたもう一体にぶつける。腕の中のナルトと影分身が共に煙となって消えた。両方ダミ―（影分身）だったらしい。

悔しそうなナルトが木の陰から姿を現した。

「くっそー」

「どうしたのさ、ナルトまで」

言いながらもなんとなく彼らの意図は分かっていた。

再び手に持った本に目を落としたカカシは、逆の手に握ったクナイで飛んできた手裏剣を叩き落す。わずかに眉を動かした。彼は足裏にチャクラを集中させて、跳ぶ。彼が弾いた手裏剣に当たって軌道を変えた別の手裏剣が迫ってきたのだ。木の枝に次々と刺さっていく手裏剣はあのままだと、確実にカカシの急所に当たっていた。計算尽くしの手裏剣術に末恐ろしいものを感じた。

「サクラ、お前だな。考えたのは」

ため息をついてカカシが後ろを振り返ると、「えへへ」と可愛らしく笑っているサクラがいた。見た目と反して、あの手裏剣は中々えげつない。

「先生もたまには先生らしい仕事しなくちゃ、でしょ」

「たまにつて……はあ、やれやれ」

つまり三人は「先生らしく、相手をしろ」と言っているわけだ。たまにはこういうのもいいか。カカシは思っのだが、一方でサクラたちの中で自分はどんなイメージなのかと悩んでしまう。

肩をすくめて「ま！ いいでしょ」と、彼は立ち上がった。片手には相変わらずいちゃパラを持っている。

「お前ら相手じゃ本読んでも関係ないからな。ほら、さっさとかつてこい」

* * *

日が暮れた時刻、スーパー内でぞろぞろと歩く七班がいた。結局夕食も全員で食べることになったのだ。材料費はカカシ持ちである。一食分食費が浮いたとサクラは手を叩いて喜んだ。

「もうちょつとだったのに」

「俺もまだまだお前たちに負けてられないからね」

「だからって写輪眼まで使うのは大人気ないってばよ、先生」

「使わないとは言つてないでしょ」

「ムキーっ！ 最後まであの本取り上げられなかったし」

怒っているナルトと、彼の頭に手を乗せてなだめている力カシは年の離れた兄弟のようで、サクラは口元に手を当てて小さく笑った。店内は閉店間際ということもあり人はまばらだが、それでも他の客はいる。客とすれ違ったびにおどおどするナルトと客の間に、力カシはさりげなく身体を入れて視界を遮っていた。ナルトはそのことに気づいていなさそうだが、ホッとしているのがサクラには分かる。

しかし、この二人が兄弟だとすれば自分はそれを見守る母？ なんだかぴったりな気がした。

「サクラ、他は何がいる？」

「えっとそうね。あ。ケチャップがなかったかな」

サスケに声をかけられたサクラは一旦笑いを引っ込める。記憶を探って答えると、ピクリとサスケは反応した。そういえば彼はトマトが大好きだった。ケチャップにもこだわりがあるのかもしれない。いそいそとケチャップコーナーに向かうサスケの姿は可愛らしく、サクラはまた笑いながら重たくなってきた力ゴを持って追いかける。ケチャップ片手に真剣に悩んでいるサスケの手元を覗きこめば、いつもサクラが買わないような（比較的）高いメーカーのものだった。

「いつもそれ買ってるの？」

「ああ。……ここが一番、美味しい」

「そっか。じゃ、それにしようか」

「いやまで。卵料理にはこっちの方が」

どれだけこだわりがあるのか、とサクラは内心苦笑しながら悩ん

でいるサスケを見守った。そういえば父も醤油にこだわる人で、よくこんな風に悩んでいた。母はそんな父親をしょうがないと見守っていた。懐かしい光景が思い出され、サクラは自然と穏やかな気持ちになっていく。

はれ？ えと。ちょっと待って。

のもつかの間、とあることに気づいてしまい、顔が熱くなる。ナルトとカカシが兄弟で自分が彼らを見守る母ならば、サスケは――。サスケが振り返った。心臓が高鳴る。

「よし、こつちに。ん、サクラ？ どうした」

「ひええっ？ は！ いやっそのっな、なんでもございません」

深い意味はないのだと自身に言い聞かせながら、サクラは勢いよすぎるほどに首を振った。しばらく疑わしそうにしていたサスケだったが、ケチャップをサクラの持つカゴに入れて何事もなく歩き出した。気づくと腕が軽かった。

「何してんだ。行くぞ」

「う、うん」

カゴを片手に振り返るサスケに、サクラはまた顔が熱くなったのを自覚しながらついて行った。サスケのもつカゴの中ではケチャップが堂々と存在を主張していて、視線を逸らす。

元いた場所に戻ると、ナルトが「あついたったばよ」と嬉しげに二人へ駆け寄ってきた。ナルトの手にはお菓子が握られ、カゴに入れようとしてサスケが怒鳴った。

何勝手にいれてんだ、ウスラトンカチ。別にいいじゃねーか、サスケのケチ。あ、お前ってばうらやましいんだろ。んなわけあるか！ 言い合っている二人の光景すら、今のサクラには別のものと重なって見えてしまう。一度思い浮かべてしまった想像というのは中々

消えてくれないらしい。それ以上二人を見ないようにと、サクラは床を見つめて歩き出した。

「サクラ、どうかした？」

「べ、別に」

必死に熱を冷まそうとしているサクラの顔を、カカシが腰をかかめて覗きこんできた。驚いて声なき悲鳴を上げた。焦ったままサクラがパクパクと無意味に口を動かしていると、

「顔、赤いよ？」

にこつと笑ったカカシが言った。とつさに「ちょっと暑いだけ」

と言い訳する。そっか。あつさり引き下がったカカシは笑みを浮かべたままで、すべて見透しているようだった。

なんだか悔しくてじとつとカカシを睨んでみたサクラだが、

「いやー、サクラは可愛いね」

「なっ」

あつさりとかわされてしまった。カカシのオムライスにだけタバスコ入れようか。半ば本気で考えた。

第四十三劇「第七班の日常」(後書き)

きみわたの書き方が分からなくなってしまった。うーむ。なんか違う。

ストックも少なくなってきたため、もしかしたら週一更新無理になるかもしれません。ギリギリまではがんばります><!

間劇「いきなりそれは反則だと文句を言いたい」(前書き)

ちょっと甘い？　かもしれない。

間劇「いきなりそれは反則だと文句を言いたい」

図書館から出ると雨が降っていた。

天気予報を見ていたので雨の準備はバツチシだ。腰のポーチからビニール袋を取り出したサクラは、まず借りた本を濡れないようにしっかりと包む。自分より先に本、という辺りは彼女らしい。

「うん、よし」

それから折りたたみ傘を取り出した。サクラはしっかりと本を抱えたまま器用に傘を差し、首と肩で柄を挟みながらよたよた歩き出した。家はすぐそこだ。

少し借りすぎたかもと後悔しながら歩いていると、

「くううん」

聞き慣れているようで、初めて聞く鳴き声が足元からした。サクラが見下ろすと、よくある『拾って下さい』と書かれたダンボールがぼつんと置いてある。そこに入れられた子犬が二匹、震えながらサクラを見上げていた。

「えっわわっ」

数秒バタバタと無意味に足を動かしてから、ハッとして傘を二匹の傍に置いた。空を見上げる。雨は土砂降りではないが傘を差さないといけない、と思うほどには降っていて止む気配はない。天気予報も今日一日雨と告げていた。

どうしよう。

サクラは二匹を見て眉を下げた。子犬たちは濡れた身体をくっつけてなんとか寒さを凌いでいる。ハンカチで拭いてみても、あつという間に濡れて役立たずになった。だいぶ温かくなつたとはいえ、冷たい雨にさらされては凍えてしまふ。特に今日の雨は気温をぐっと下げるらしいので、心配だった。

「ちょっと待っててね」

少し悩んだサクラは慌てて走り始めた。

* * *

「あれ、サクラじゃない？」

「んあ？」

傘を差しながら器用にポテチを食べていたチヨウジがそんなことを言ったのは、「これじゃ外で昼寝できねーなあ」とシカマルが灰色の空を見上げていた時だった。チヨウジの視線を追いかけると、なるほど。確かにあの頭は間違えようがない。

「何やってんだ？」

「さあ」

いつも準備をしつかりするサクラには珍しく傘を忘れたのか。びしょ濡れで道にしゃがんでいた。決して小降りではない雨が華奢な身体を叩いているのも気にせず、その場を動く気配がない。あのままでは風邪を引くだろう。

めんどくせーけど声かけるか。声をかけずにいて後でイノ怒られ

る方がめんどくせーし。

どこか言い訳してみたことを胸に思い浮かべながらシカマルが口を開いた。

「あ、行っちゃった」

「みてーだな」

「残念だったね、シカマル」

「んあ？ 何がだよ」

ついとシカマルがチヨウジを見ると、彼はまたポテチを食べ始めていた。チヨウジの小さな目は「シカマルは違うの？」と、笑っていた。まるでシカマルの答えを知っているといったげだった。

「僕は残念だけどなあ。一緒に帰れたのに」

シカマルは改めて友人のすごさを実感する。

そっぽを向きながら頭をかき、シカマルは先ほどまでサクラがいた場所をちらと見た。そこには定番の文句、『拾って下さい』と書かれたダンボールと、水色の傘がぽつんと置いてあった。

「まためんどくせーことを」

「でも、らしいよね」

「……まあな」

* * *

「わっちょっそこでブルブルしちゃダ……め、なんだよお」

サクラの語尾が情けなく下がった。がつくり肩を落とした彼女の前には、あゝすつきりした！　と言わんばかりのキラキラした黒い瞳が四つ並んでいた。怒りたいのに怒りがたい目だった。ため息をつく。

「本、しまつて置いて良かった」

ぐちゃぐちゃの泥だらけになった部屋を見回して、心から思っている。犯人たちは風呂で温まったらしく、すっかり元気になって走り回っている。まあ、元気になったみたいでよかった。微笑みを浮かべたサクラは子犬たちを呼んだ。

「こらこら、まだ乾いてないからおいで」

「キャンキャン」

大家さんに頼み込んで一時的に犬オーケーになったとはいえ、元気にはしゃぐ二匹にサクラは少々頭が痛くなってきた。

というか、今更ながらどうしよう。イノやヒナタに言ったら、絶対怒られるか呆れられるかのどっちか、だよね。また考えなしに行動したの？　と。

二人の様子が思い浮かんだサクラは、うげっという顔をした。

「とりあえずトイレとか基本的なこと教えな、くしゅんっ」

考える前に、まずは自分がお風呂に入った方が良さそうだった。

* * *

「よし、じゃあ本日はこれでかいさ」

「じゃ先生、サスケ君、ナルトまた明日ね」

カカシが解散と言い終わる前にサクラはいつもの挨拶をして、走り去っていった。ナルトは彼女を一楽のラーメンにでも誘おうと思っていたのだが、声をかける暇もなかった。

「ちょっとサクラー？ 先生の話を最後まで……俺、なんかしたかな？」

律儀なサクラは、いつも最後までカカシの話を聞いてから綺麗に一礼し、任務を終えるのだが。

今日は一日中気もそぞろで三人への対応も変だった。カカシ同様にナルトも原因を考えてみるが、サクラに何かした覚えはない。ナルトがサスケへ目をやると同じことを考えていたのか、二人の目があった思わずいつもの睨み合い。

それも長くは続かず、どちらともなく終了となった。

「ご飯おごろうと思ったんだけどなあ。お前たちだけじゃ、ヤメとくか」

「ふん。お前と飯なんざこつちから願い下げだ」

「サクラちゃん。俺何かしたなら謝るからってばよ」

残された男三人は、がつくりと肩を落とした。

* * *

「はあ？ サクラが変？」

「そうなんだってばよ。任務中もずっとぼけっとしてるし、なんか眠そうだし」

「あの子が変なのはいつもだけど、それは確かに変ね」

「そっそうだね。へ、へへへへ変だと思っにゃあ」

「ヒナタ、気持ちは分からないでもないけど、とりあえず落ち着きなさい。ほら、深呼吸」

友人と久しぶりに甘味処でくつろいでいるとやってきた黄色いお邪魔虫を眺めながら、はい吸ってゝ吐いてゝ、とヒナタを落ち着かせるという偉業を成し遂げたイノは、熟考した。

お邪魔虫、もといナルトが言うには、体調管理をきっかりしているサクラが眠そうで、超が頭に付くほど律儀でマジメなサクラが任務中何度も余所見をし、カカシの言葉を聞き終わる前にさっさと帰ったのだという。それは、たしかに変だった。ものすごく。

「ねえヒナタどう思」

「お、おいどうしたんだってばよ、ヒナタ！」

「はややややあ」

「あちゃー」

引っ込み思案の友人は、背中をさするというごく普通のナルトの厚意により、ダウンした。いつものことなのにナルトは相変わらず慣れないようで、わたわたしていた。アカデミー時代から繰り返し返されてきた光景である。ヒナタの将来が非常に心配だ……ああ、今はサクラの話だった。はあ。どうしてあたしの周りには世話のかかる友人ばかりなのかしら。

イノは誰ともなしに文句を言いたくなつた。

「分かったわ。何か分かったら教えてあげる」

「頼むってばよ」

* * *

「くしゅんっ」

小さくくしゃみをしたサクラは、両腕の荷物を抱えなおした。定番の噂をされている、というやつだろうか。だとしたら、

「イノかヒナタかな」

呟きながら鍵をドアに差し込んで部屋に入る。途端聞こえてくるきゃんきゃんという可愛らしい声に、サクラは思わず頬が緩んだ。

「ただいま」

この言葉を口に出すのは何年ぶりだろうか。

涙腺が緩みかけたサクラは、足元にじゃれよってきた二匹を踏まないように気をつけて部屋へ入る。覚悟を決めながら部屋を見渡すが、思っていたほどの惨状はなかった。ビニールの上に新聞を敷いただけの簡易トイレの位置をすっかり覚えていられるらしい。一度しか教えていないのに、だ。……あちこち散らかしているのはまだ仕方ないとするにしても。

「賢いね。ちゃんと留守番してたんだ」

荷物をテーブルの上に置いて頭を撫でた。擦り寄ってくる様は「そうでしょ？」と、自慢げに見えた。ふふっとサクラは笑う。

「えーっとトイレの準備して……あ、ご飯いるよね。昨日はミルクしかなかったんだけど……まだミルクでいいのかなあ」

一応犬の本を買ったものの、不安だ。こういうのに詳しそうな級友の姿が浮かぶが、ヤメた。お互い忙しい身だ。いざとなれば考えよう。

「後は里親募集のポスターか。何枚くらい貼るべきかな。人通りが多いところといえば、幹旋所？ 貼ってもいいのかな？ ポスター作って明日にでも聞いてみよう。病院なら知り合いの先生に頼めば、たぶん大丈夫だし。図書館もいいかなあ」

ブツブツ呟きながら、サクラはせつせと子犬たちの環境を整え始めた。

* * *

「キバ！ どうせ暇なんだからおつかい頼むよ。子犬二匹、引き取つてきな」
「はあっ？」

マンガを読んでいたら突然そんなことを母親に言われ、キバの気分が悪くなるのも仕方ない。彼は母親を睨んだが、母親は忙しそうに身支度を整えていてキバの方など見もしない。

どうやら急な任務が入ったらしい。

「なんでまたわざわざ」

「将来が優秀そうだったからね。さっさとつば付けとくんだよ」

犬塚家は忍犬と共に任務を行うため、自然と忍犬を育て上げる技術も高い。なので忍犬養育所の運営・管理を里から一任されている。捨て犬の保護も、たとえ忍犬に向かない犬だろうと関係なくしているので、引き取ることはよくある話だ。しかし、わざわざ犬塚の本家が出向くことはない。養育所から職員が行った方が手続きの関係上、早いからだ。

そんな理由からキバが疑問に思うのも無理はないのだが、母親は理由を教える気はないようで一枚の紙を放り投げてきた。

「ほら、住所はここだよ」

「へいへい」

面倒だと思いつつも乱雑に折り込まれた紙を広げたキバは、母親の行動理由を悟った。さつさと任務に向かった背を見送ることなく、紙を凝視するキバの顔は真剣だった。紙は一枚のポスターであった。今時珍しく手書きのそれには、クリーム色の毛並みをした愛らしい子犬が二匹描かれている。中々に上手な絵だ。

本当に犬たちが大事なのだと伝わってくる絵だった。

おそらく母親は子犬よりもこの描き手に興味を抱いたのだろう。キバに行かせるのは、犬塚家と関係をつなげるため。

「じゃあねー。行くか」

「わうん」

キバと目が合った赤丸が、嬉しそうに鳴いた。

* * *

いつものようにサクラが任務から直帰すると、わんわんという声が玄関で待ち伏せしていた。今日の任務は盗賊退治という少々荒っぽいものでサクラはたいへん疲れていたが、その声を聞いただけで元気になれるのだから不思議だ。

「ただいま」

笑ったサクラが優しく声をかけると、二匹は嬉しそうにその場をぐるぐる回り始めた。ここは玄関であり、二匹が足元で走り回っている。そんなに広くない玄関でそんなことをされると、抱き上げなければサクラは部屋に上がれない。二匹はそれが分かっていて「早く早く」と目でサクラを急かした。

「しょうがないね」

しゃがんで腕を広げると、回っていた勢いそのままサクラの胸に飛び込んできた。子犬と言えども、侮れない衝撃がある。う。一瞬うめいたものの、サクラはなんとか踏ん張った。

「ちゃんという子にしてお留守番してた？」

「わん！」「わうん」

* * *

キバは、ポスターと部屋の前に書かれた表札を何度か交互に見た。

「マジか」

ポスターには連絡先が書かれていたものの、肝心の名前がなかった。書き忘れたのかもしれないし、わざと書かなかったのかもしれない。書き手の心情やら状況やらをキバは知らないが、もしも書き手が予想通りであるならば十中八九書き忘れたのだろうなと思う。表札には『春野サクラ』と書かれており、同じ名前の人物を、一人だけキバは知っている。

「あん？」

「わあつてるよ」

押さないのかと聞いてくる赤丸に、キバは返事をしてインターホンを押した。部屋の中から「わわつちよ、ちよつと待ってください」という聞き覚えのある声がして、ドタバタと騒がしい音と子犬らしい鳴き声も聞こえた。これは確定だった。キバの知っている春野サクラがこのポスターの書き手らしい。彼はへえっと思った。

絵が上手いとは知らなかった。意外だ。

「はいはい、どちらさ……あれ、キバ？」

明るい声と共に出てきたサクラは、キバの記憶にある姿とまったく変わらず、とはいかなかった。

自宅にいたからだろ。ノースリーブの白いシャツに青い短パンというラフな格好をしていた。普段見えない箇所が少しおしげもなく空気にさらされている。キバの思考が固まった。

付き合い自体はそこそ長いものの、キバは今までサクラに対して異性であることを意識したことはない。たまに話をするクラスメイト、優等生のわりに口が結構悪いといった印象だった。

のだが、少し曲線を帯びている身体はキバにはないもので、なんといってもその肌の白はキバにとってあまりにも凶悪すぎた。

「キバ？」

声に目線を上げていけば、湿気た桜色の長い髪が少しうねりながら彼女の胸元や肩にかかっている。風呂に入っていたらしい。それでバタバタしていたのかと、キバの思考はどうでもいいものに食いつく。

何もしゃべらないキバの名を、濡れた唇が呼ぶ。赤く染まった頬に、若干潤んだ瞳まで目に入り、こいつは一体誰だ。なんてくだらない疑問が浮かんた。頭はすぐに答えを出すのだが、心が受け取りを拒否する。キバはひどく混乱していた。それほどに目の前のサクラは普段と違うように見え、自分と同じ生き物には思えなかった。そうだ。こいつは女だった。

本人が聞いたら怒るだろうことをキバはようやく理解した。

「あうーん」

頭上から聞こえた赤丸の声でキバは我に返った。サクラは心配そうにキバを見ていた。なんだかそれ以上見ていられなかったキバは顔ごと目線を横にずらし、手に持ったポスターを突きつけた。

「お前なあ、住所だけじゃなくてちゃんと名前も書けよな。ってか、お前の家は電話もねえのか？　そうすりゃわざわざ俺様が来ることもなかったのによ」

八つ当たりのように強い口調で言い終わると、キバはちらとサクラを見た。そして、ぎよつとした。翡翠の大きな瞳が、若干どころじゃなく潤んでいた。そんなに自分は強い口調だったか。こいつこんなに泣きやすかったつけ。などが頭に浮かんで、焦った。

「キバのところが引き取ってくれるのね。わあ、ありがとう！」
「わっおい」

ふにっとなんか温かいものがキバの身体を包み、耳元で「犬塚家なら安心だわ」という声がして、ぞくりとしたものが背中を駆け巡る。こけるようなことはなかったものの、キバの混乱は人生で最高潮に達していた。

どうしてこうなった？ あ、なんかいい匂いがする。やわらけえ。ってそうじゃなくて、俺は、俺は……何しに来たんだっけか。えと犬を、犬を、うわ、なんかが胸のことですぶれて気持ちいい、これってもしかして、あ、いやちげーよ！ だから俺は犬をだな。

「きゃんきゃん」

「あつよかったね、あんたたち。キバの家が引き取ってくれるって」

拘束が解かれたのは、部屋の奥からやってきた小さい影たちのおかげだった。離れてくれた温もりにホッとし、キバは速くなっている心臓をなだめた。

サクラが安心して笑みを浮かべて小犬たちと会話している。犬のことに關して、キバが言うのはあれだが犬塚家以上に頼りになるものはない。だから彼女が喜ぶのも無理はないのだ。と、言い聞かせる。別に自分のことがどうとかではないんだ。

「今日このまま連れて行った方がいいの？」

「え、ああ、いや。まだこっちの準備できてねえから、引き取りは一週間後ぐらいになると思うぜ。んで、今日は話をつけて、それからちよつと書類の手続きがあつてよ」

「書類？」

「いろいろあつてな。きちんと出さなきゃいけねーんだよ。できたら今日中に手続きだけしたいんだが、いけるか？」

「うん、大丈夫」

説明に頷いた彼女が「じゃ、行こうか」と靴を履こうとしたので、キバは待ったをかけた。

「その前に着替えろ」

「なんで？」

「なんでって」

きょとんと不思議そうにするサクラを見て、キバは言葉に詰まる。サクラの格好は別段可笑しくない。もっと露出が高い格好をしているものはたくさんいる。しかし素直に心臓がもたないからだ、などとキバには口が裂けても言えない。どうしたものかと悩んでいると、風が吹いた。この季節には少々冷たい風だった。

「あ、そっか。今日ちょっと寒いもんね」

「……………ああ」

「ふふ、ありがと。ついでに髪も乾かしたいんだけど、時間大丈夫？」

「五時までに行けばいい」

「じゃ、中入って待っててくれる？ お茶ぐらい出すわよ」

キバが黙っていると上手い具合に勘違いをしてくれたので頷いておいた。

なだめたはずの心臓がまたうるさく騒いでいたことにキバは気づいたものの、静まりそうにないその音がサクラに気づかれないことを祈った。

間劇「いきなりそれは反則だと文句を言いたい」（後書き）

忍犬養成について。

どこかで訓練させているのは確実。しかし、特に描写はなかった（と思う）ので当小説では犬塚家が主に担当している、ということにしました。

カカシみたいに犬塚に関係なく忍犬使っている忍者もいるし。

キバとサクラの関係は、近所に住む悪がきとお姉さん（血のつながりはない）、なイメージです。なんかふと気がついたら近所の姉ちゃんが綺麗になってた！　みたいなの……女の子ってなんで急に綺麗になるんだろ。不思議。

あと、いろんなキャラを頑張っただけで出そうとして見事に失敗した。ただであえてそのままに載せてみました。うっとおかしいですねえ。

第四十四劇「すべてはソレのせい」

あの子のために無理をすることはなくなっても、サクラは強くなるための努力をし続けていた。

一体あの子に何があって磨り減ってしまったのかを、実のところサクラは覚えていなかった。それは肉体を持った弊害かもしれないし、世界の法則かもしれないし、元々知らなかったのかもしれない。それでも強くなろうとしていたことだけは身体が覚えていたので、強くなることに主眼を置いてきた。

今は自分がサクラで、自分の好きに生きていいとあの子は言った。じゃあ、自分のしたいことはなんだ。自分に問いかけた時、サクラがしたいことは今までとたいして変わらなかった。ある人を救う。目的は同じ。対象が変わっただけ。

『待つて、待つて——君！ 置いていかないで』

繰り返し繰り返し見る夢があつた。

身体に染み付いた記憶のかげらだろう夢と今までの経験から、あの子が磨り減った理由にたどり着くのはサクラにとって簡単であつた。

『待つて、待つてサスケ君！ 置いていかないで』

うちは サスケ。うちは一族ただ一人の生き残りで、実の兄への復讐を生きる目的に掲げている少年。彼を救いたいのだ。とくん。

彼のことを考えると、サクラは胸が苦しくなった。彼の近くにいと心臓が速く動いた。彼の笑顔を見ると顔が熱くなった。

とくん。

苦しくてしんどいのに、気がつくときサクラは彼のことを考えていた。苦しくてしんどいのに、彼の傍にいたいと願ってしまう。

これはなんだろう？

「ありえない」

とある一言で説明がついてしまうが、サクラはそれを認めるわけにはいかなかった。

別段友に気を遣っているわけではない。こんな気遣いをすれば、むしろ怒られる。あの子についても同じく怒ることだろう。

「さむっ」

サクラはぎゅっと膝を抱きしめる手に力をこめた。少し離れた場所からはゴォゴォと滝の音が聞こえる。何度も滝から落ちたサクラは全身ずぶぬれで、起こした火の傍に座っていた。だいぶ暖かくなつたとはいえ、川の水は冷たい。荷物の中からバスタオルを取り出して羽織った。それでも寒くて身体が震えた。

そんな仕草の一つ一つが妙におかしくて、サクラは笑みを浮かべた。

「ふふっこれじゃ本当の人間みたいだ」

自嘲の笑みになって、余計に凹んだ。

ため息をついたサクラは集めておいた枝を火に放り込み、ぱちぱちと燃えていく様を見つめた。

火は、どうしてもサスケを思い出させる。

以前イノとヒナタは、自分がサスケを好きなのだと勝手に断定した。本当に勝手な話だが、否定しても無駄っぽかったのであいまい

に笑っておいた。サクラはそんなことを思い出した。

「本当にありえないよ。私は、サスケ君を追い詰めた原因なのに」

* * *

「三十八度ちょうど。こりゃ風邪だね」

「……ごめんなさい」

「謝らなくていいから、ちゃんと寝てなさい。ま！ 元気になったら風邪の原因を話してもらうけどな」

「う」

「やっぱり何か無茶したんだな」

呆れた顔をしている力カシからサクラは目を逸らした。最近の滝登りでの疲労、冷たい川の水が風邪を引いた原因なのは疑いようがない。

集合場所でサクラは倒れてしまい、おかげで今日の七班の任務は中止となった。迷惑をかけたと反省している。

ほ、本当に話さなくちゃ駄目だろうか。絶対怒られそうな気がするからなるべく言いたくない。ああ。力カシの尋問に簡単に引つかかった自分が恨めしい。

風邪で思考能力落ちているなあ、とサクラはぼーとする頭で思ったが、周囲の面々にはサクラが健康であつたとしてもあっさり引かかる姿が目に見えに違いない。

「こんのウストラトンカチ！ 粥にマヨネーズかけようとするんじゃないよ」

「でもよお、サスケえ。これじゃ味薄いじゃないか」

「わ・ざ・と、薄くしてんだっつの、ドベ！」
「んだところあつ」

台所から聞こえる声に、サクラとカカシは顔をあわせて苦笑した。しょうがないねえ。立ち上がったカカシが部屋を出て行く。部屋は静まったが、台所から聞こえてくる掛け合いはヒートアップし、声だけでなく何かが崩れる音までした。積み重ねていたフライパンや鍋の音かもしれない。カカシーっと叫ぶサスケの声がした。

「あつれー？ おかしいな」

「おかしいのはてめえらだ、この家事能力皆無者どもが！ もう後は俺がやるからサクラ看てろ」

「ぶーぶー。なんだよ、手伝おうと思ったのに」

申し訳ないはずなのだが、楽しいのはなぜだろう。

ダルイ身体をベッドに横たえながらサクラは笑い、苦勞しているサスケに思いをはせた。ん……あれ？ もしかして。サクラは重たいまぶたを開閉させ、普段より明らかに動きの悪い頭を必死に回転させる。ズキズキ痛むが、無視をする。

イノやヒナタの言葉に、この前のスーパーでの思いつき、そこに風邪の体調不良が重なって、サスケに対して身体が変に反応した、とか？

考えて、今は特にサスケのことを思っても正常なので、どうもそうらしいとサクラは結論付けた。あんなに悩んで落ちこんだ自分って一体。深い深い安堵の息を吐き出した。

「良かった」

「ん？ 何がだつてばよ」

やはり風邪で意識が散漫としている。いつナルトが部屋に来たの

かも分からなかった。不思議そうな、それでいて心配そうな空色の瞳に、サクラはふつと笑った。

「たまには風邪引くのもいいかなって思ったのよ」

第四十四劇「すべてはソレのせい」(後書き)

ストックがなくなってきました。どうしよう。

間劇「二ガテ」

そろそろ夏になるかという季節、汗だくになりながらこなした任務の帰りだった。

騒がしい声がないことに気づいたサクラが主な騒がしさの発信源に目を向けると、先ほどまでいたはずの位置にはいなかった。

きよろきよろと探せば、少し後ろで立ち止まっているオレンジ色をすぐ発見した。

「ナルト？ どうしたの？」

サクラの声にナルトはビクウつと大げさに驚き、勢いよくこちらを振り返った。何か言いたいらしいのだが、口はパクパク動くだけ。しょうがない。

息を吸って、吐いて、と声をかけて落ち着かせる。

指示通りに深呼吸を繰り返したナルトは、照れくさそうに「ありがと」と笑い、

「ごめん。なんでもないってだよ」

嘘をついた。

「そう」

サクラも笑顔を返しながら、なるほどねと納得していた。あからさまに「なんでもなくない」様子で「なんでもない」と言われるとム力つく。イノやヒナタが怒るのも無理はない。今度からは自分も気をつけよう。サクラはそんな反省をしてから、ナルトに気づかれ

ないよう彼が見ていた方角へ何気なく視線を向けた。
ど派手なポスターが目についた。

* * *

「懐かしいなあ」

紺色の浴衣を見つめ、サクラは目を細めた。
任務の後、ナルトが熱心に見つめていたポスターを確認しに行つた。近くで見るともつと派手なポスターには打ち上げ花火が描かれていた。夏祭りのPRポスターである。
明るいポスターを見ながら、虚しさが全身を駆け巡っていった。

「言ってくればいいのに」

祭りに行きたいのだと、はっきり言ってくればいいのに。そうしたら、

「そうしたら」

声が小さくなっていく。そうしたら、なんだろう。自分は頷いた
だろうか。一緒に行こうと言っただろうか。

考えて、サクラは首を横に振った。きっと行かない。行けない。

「お父さん。お母さん。私は」

紺色の、母が着ていた浴衣を抱きしめた。祭りなど、2人がいなくなつてから一度も行っていなかった。

イノやヒナタ、他にもサクラを誘ってくれた人たちはいた。きつと行けば楽しかっただろう。分かった上で、すべて断っていた。怖かった。

どのぐらいの間じつとしていただろうか。ふう。息をゆっくり吐き出し、浴衣を綺麗にたたんだ。

「ゴメンね、ナルト。私はやっぱり無理みたい」

タンスの中に浴衣をしまった。

* * *

「それが、よく分からないんだってだよ」

ナルトは困った顔をした。自分を見つめる4つの目が、嘘を言うなど語っていたが、彼には本当に分からなかった。

ここは喫茶店で、目の前にいるのはイノとヒナタの2人だ。

「でもサクラの様子が変なのはあんたに対してだけでしょ」

「それは、そう、だけど」

イノにズバズバと言われてナルトは凹んだ。がくつと肩を落とす。

『ごめんね』

泣きそうな目をしたサクラを思い出す。最近、サクラは気が付くとナルトにそんな目を向けてくる。ナルトにだけ、だ。彼女に何かをした覚えはない。ナルトも悩んでいるのだ。

「でもイノちゃん。ナルト君、本当に覚えがないみたい」
「まあそうね。こいつにそんな高等演技が出来るはずないし」

なんとか2人の視線が弱まったことで、ナルトはようやく肩から力を抜いた。

「やっぱりあれかな」

「ん〜。と、思うけどいつもはこんなに浮き沈みしないでしょ。ナルトだけが関係してるのも変だし」

「そうだけど」

どうしたものか。考えようとしたら、2人はなにやら話し始める。心当たりがあるらしい。オレンジジュースを飲みながら、ナルトは耳を傾ける。

——あれってなんだ？

「ねえ、ナルト。あんた、まさかあの子を祭りに誘った？」
「うえっ？」

再び向けられた目と質問に、声が裏返った。誘おうと考えてはいたものの、まだ行動には移せていなかった。心が見透かされたのかと、ナルトはイノを見た。イノは呆れた顔をしていた。

「誘ったのね」

「い、いや、その、まだ」

ナルトの語尾が情けなくも小さくなっていく。まだ誘えていないことが、なんだか恥ずかしかったのだ。

しかし2人は、「あれ？」と首をかしげた。

「違うんだ。じゃあ、なんだろう」

「でもヒナタ。他に思い至ることある？」

様子が変だ。どうも思い至る原因が違ったらしい。ナルトは首を傾げて悩んだ後、意を決して話しかけた。

「一体祭りがどうしたんだってば」

ピタリと2人の会話が止まった。イノが息を吐き出した。

「あの子ね。祭りが苦手なのよ」

「え？」

「祭りが、というか……なんていうの？」

「えーっと行事、かな。クリスマスとかお正月とか」

ナルトは目を大きく開いた。彼にとって行事は憧れだ。だから苦手、の意味が理解できない。イノもヒナタも、どこか悲しそうな顔をしてうつむいた。2人はしばらく何も喋らなかった。ナルトも空気に吞まれて口を閉じた。

先に顔を上げたのは、イノだった。

「あんだ、サクラを祭りに誘いなさい」

「え？ でも今」

「いいから、さっさと行く！ それでも男なの？ あんたは」

話の流れをナルトは理解できなかった。無理に祭りへ誘い、彼女に嫌な思いはさせたくない。しかし2人の顔が真剣そのものだったから、きつと誘うべきなのだろうとナルトは思った。財布を出してお金をテーブルに置いた。

「分かったつてばよ。行ってくる」

どんな風に誘えばいいだろうか。必死に考えながら彼女の家へと急いだ。

* * *

「良かったの？ イノちゃん」

ナルトの背中を見送っていたヒナタが、優しく聞いた。イノはコップを見つめていた。溶けた氷がからんと音を立てて崩れた。

「あんたこそ良かったの？ ナルトのこと、好きなんですよ」

意地悪なことを聞いた。思いつつ、イノは膝の上で拳を握った。ヒナタは苦笑した。

「イノちゃんは意地悪だね」

「あら、知らなかったの？」

「……ほんとに意地悪」

いつものやり取りをして心が落ちついたイノは、拳から力を抜いた。手のひらがズキズキする。ツメの跡がついているかもしれない。

「たしかに悔しいけど、あたしじゃ無理なんだもの。仕方ないじゃない」

「そ、うだね。私たちじゃ無理なんだよね」

ため息と共に言葉を吐き出した。ヒナタが頷く。

——サクラは、昔からナルト（あいつ）に弱いから。

「あ。賭けしてみる？ ナルトがサクラを誘えるかどうか」

「それ、賭けにならないよ」

「たしかにそうねえ。じゃあ、『ナルトがサクラと2人きりで祭りに行けるかどうか』は？」

「……それも賭けにならないよ、イノちゃん」

呆れた顔のヒナタに、イノは明るい笑顔で「それもそうね」と言った。

間劇「ニガテ」（後書き）

更新再開一発目が本編じゃないってどういうことっ！

と、自分で自分にツツコミ。

しかもこの話、後編っぽいものへと続いてたり……（汗）。

夏祭りとはつくにおわツてますが、結構前に書いていたお話で、本編ストックがないため代行として掲載。

余裕があれば来週に本編とこの続きをアップしますが、あまり期待はされない方が……。

とりあえずみなさん、ただいま戻りました！

間劇「同じものなど存在しない」

不思議だ。

サクラは思いながら夜空に咲く花を見上げていた。パラパラと音を立てて咲き、枯れていく花々はとても綺麗だった。

「うはーっすっげえってばよ！　ね、サクラちゃん」
「ええ、そうね」

隣で大口開けて空を見上げていたナルトが、にかつと笑った。彼が身につけているのはオレンジの上下ではなく、白に近い灰色の浴衣だ。てつきりオレンジ色を着ると思っていたので意外だった。そんな彼の手には金魚の入った袋がぶら下がっている。金魚すくいだ。サクラがとってあげたものだ。

また花火をぽかんと見始めたナルトの横顔を見て、不思議だと、サクラはもう1度思った。自分の身体を見下ろせば紺色の浴衣がある。一生この浴衣に袖を通すことはないだろうと思っていた。だから、彼女は不思議だった。

* * *

「俺に思い出をください」

鼻息荒くサクラの家にやってきたナルトは、そんなことを言った。意味が分からなかった。不思議そうな翡翠の瞳に、ナルトも急ぎすぎたことに気がついたらしい。言葉を続けた。

「えーっとつまり、い、一緒に夏祭りへ行きませんか？」

ナルトの声は段々と小さくなっていった。青い瞳が不安そうに揺れている。唐突な誘いだった。でも、彼の行動はいつも唐突だ。サクラは、

——うん、分かった。

考える前に頷いてしまった。今まで誰の誘いも断り続けていたというのに、だ。

サクラは祭りが好きだ。祭りだけでなく、行事も好きだ。そこには両親との思い出が良いことも悪いこともたくさん詰まっている。目には見えないサクラの宝物だ。

そんな大事な大事な宝物の上に、新しい思い出を積み上げたくはなかった。

「ホントっ？ やったーってばよ」

頷いたことに気づいたのは、ナルトが大声で喜んだ時で、サクラは自分が何を言ったのか信じられなかった。サクラはイノやヒナタの誘いでずっと断っていたのだ。なぜナルトには頷いてしまったのだろう。理由はよく分からなかった。

1度行くといっってしまった以上、約束を破るわけにも行かなかったサクラは、懐かしい母の浴衣を着た。着付けはできなかったのですがヒナタの家に3人集まって互いを着飾った。それだけのことが想像していた以上にサクラは楽しかった。イノもヒナタも楽しそうに笑っていた。

イノは赤地にピンクの花が描かれた少々派手だが可愛い浴衣を着た。ヒナタは女の子らしいさの中にどこか気品もある紫色の浴衣を着た。サクラは落ち着いた紺色の浴衣をそれぞれ身につけ、里を歩く。行きかう人々も浴衣を着ていた。里中が随分と華やかで、祭りの最中

はこんな感じだったのかと初めてサクラは知った。

待ち合わせ場所に着くと、すでに男の子たちはそろっていた。すでに出店でたくさんの食べ物を買って食べているものもいた。誰とは言わない。

「お待たせー。どうどう？ 色っばいでしょ？ ってきやー、サスケ君すっごく似合ってる」

「ご、ごめんね。待たせちゃって」

「ちよつと2人とも、今日ぐらいは仲良くしなさいよ」

楽しい祭り会場前で睨みあっているナルトとサスケにサクラは呆れた。2人も浴衣を着ていた。ナルトは薄い灰色でごちゃごちゃとした模様が濃い青で入っている。サスケは黒の無地だった。両極端な2人だ。

2人は不機嫌な顔のままサクラたちを見て、固まった。ようにサクラには見えた。

「へ、変、かな？」

イノやヒナタに褒められて少し自信がついていた。しかしどうもナルトとサスケの様子は可笑しく、サクラの自信があっけなくしぼんだ。今日のイノとヒナタはいつも以上に可愛らしいので余計みすばらしいかもしれない。この浴衣も母が着ると綺麗だったが今着ているのは自分だ。

うなだれたサクラを見て、イノとヒナタが目元をきつくした。男たちがひるんだ。

「ぜぜっぜそんなことないってばよ。とってもサクラちゃんに似合ってる。な？ サスケ」

「う……まあ、変ではない」

顔を上げたサクラは、必死な様子の2人を見て、口元に手を当てて「ありがとう」と笑った。

会場前での一悶着は無事収束し、いよいよ祭りの会場に一步を踏み入れる。サクラは妙にその一步が緊張した。踏み越えた瞬間思わず目をつむってしまったほどだ。ナルトが怪訝そうにサクラを呼んだ声で目を開ける。世界は、何も変わらずにそこにあった。

当たり前だ。当たり前なのだが、サクラはとても安心した。

「なんでもないのよ」

「うん？ あ！ 金魚すくいだ。俺やっていい？」

「ふん。お前にすぐわれる金魚なんかいるのか？」

「なんだとサスケ？。よーし、じゃあ勝負だ」

——金魚すくい1つでも喧嘩するのか。めんどくせーやつらだ。と同行者の1人が呟いた。勝負、の一言に混じる騒がしいのだった。金魚すくいについてうんちくを語るものもいた。金魚すくいの一角がやたらと賑わう。

勝負を制したのは、サクラだった。

彼女としては、別段勝負に参加したつもりはない。ヒナタに誘われて男3人とは離れた場所で静かに楽しんでいたらナルトたちに見つかり、サクラの器内で泳ぐ金魚を見て3人が勝手に落ち込んだ。なんだかサクラは申し訳ない気分になった。

「情けないわね、あんたたち」
「ん？」

あまりにも落ち込みがひどかったナルトにサクラが金魚を渡している、イノのそんな声がした。駆け寄っていく。
何をしているのか。

浴衣だというに相変わらずのサングラスをつけた人物に聞く。イノたちが集まっているのは射的の出店だった。そこに並んだ景品に大きなウサギのヌイグルミがあり、どうもあのヌイグルミをイノが欲しい、とねだったのが始まりらしい。ほぼ無理やり挑戦させられた彼女のチームメイトは、ヌイグルミを落とせなかった。他のものも挑戦してみたが無理だった。

たしかに、あそこまで大きなヌイグルミを、軽いコルクの弾で落とすのは難しい。

冷静に観察していたサクラの目と、イノの目があった。イノがにやつと笑い、サクラは嫌な予感がした。

「サクラー、あれ取って」

まるで語尾にハートマークがついているかのような、可愛らしい口調での命令だった。拒否権などは存在しない。

ため息をついたサクラは、苦笑しながら射的の店主にお金を払ってくれた弾は3発——どうやら忍びは3発で、一般人は5発らしい——で、持つて見ると予想以上に軽い。これは1発では落とせないなと分かった。視線を弾から標的へと変える。形を立体で捉え、重心、狙うべき箇所、タイミングを計算する。落とせるだろうが、問題は銃に慣れていないことか。^{えもの}

後ろから絶対無理だという声がする中、サクラは銃にコルクを詰めてまず1発打ち込んだ。

おお。

そんな歓声に耳を貸さずに素早く弾を詰める。ヌイグルミは前後に揺れていた。タイミングを計り、ぐらりとヌイグルミが後ろに倒れ掛かった時にもう1発放つ。弾はヌイグルミの額へ見事に命中した。

ウサギのヌイグルミは、その駄目押しの1発で完全にバランスを崩し、ゆっくり後ろに倒れていった。

無事に大役をこなしたサクラは息を吐き出して、振り返る。

「で、ヒナタは何がほしいの？」

突然声をかけられたことにヒナタは驚いていた。

——どうして。

小さく呟かれて苦笑しか出てこない。先ほどからヒナタは胸の前で指を組んでいた。何か言いたいことがある時の彼女の癖だった。

「えつとあのね。アレが欲しいな」

恥かしそうにヒナタが指差したのは桃色の髪飾りだった。小さな花の形をした髪飾りは、たしかにヒナタに良く似合うだろう。

とても小さい髪飾りの入った箱を、サクラは簡単に射抜いて倒した。

「ありがとうサクラ」

「ありがとうサクラちゃん」

「どういたしまして」

和やかな会話をするサクラたちの後ろでズーンと沈んでいるものが数名いた。

「だから最初からサクラに任せとけつつあったんだよ、俺は」

「そうだな。なぜなら、サクラの射撃技術は俺たちの中で1番だからだ」

「ほんとすごいよねえ。あ！ おじちゃん、焼きそば3つ」

そんな数名に止めを刺すものもまた、数名いた。

「私、また何かしちゃった？」

「別にあんなの気にしなくていいわよ」

「サクラちゃんはかつこいいなあ」

祭りの時間はわいわいと騒ぎながら過ぎていった。

* * *

ついさきほどまでの時間を思い出し、やっぱりサクラは不思議だと思った。過ぎてみれば怖がっていたものは何一つなかった。両親との思い出は、みんなと過ごした思い出とは別の場所に堂々と居座っていた。消えるそぶりはまったくくない。

一心不乱に花火を追いかけている青い瞳をしばらく見てから、サクラも目線を花火へ戻す。

『ほらサクラ、よく見えるだろ？』

『うん！ とつても綺麗』

『ちゃんとお父さんに捕まってるのよ』

『はい』

「サクラちゃん、綺麗だね」

「そうね」

「キバもたまには役立つわね。こんな良い場所知ってるなんて」

「『たまには』が余計だっつの」

「いい昼寝場所だな」

「ここでお菓子食べるの気持ちよさそうだねえ」

「ふむ。虫たちも喜んでいる」

「まあ悪くない」

「なーにが『悪くない』だよ。スカシヤロウ」

「ああ？ なんだよドベ」

「2人とも仲良く、ね？」

「はい」「はい！」

楽しい思い出がサクラの中に積もっていく。どれ一つとして同じものはなく、サクラの新たな宝物となっていく。

間劇「同じものなど存在しない」（後書き）

忍者と一般人の差。

かなりあると思うんですね。チャクラが使えるか使えないか
てのは。

なので、両者が同じ土台で戦ってはダメだろうということで、屋
台ではそういうハンデがつけられている、としてみました。ただ上
忍の場合は景品なしぐらいにしないと、屋台の人たち涙目だよね、
と思う。

ナルトとのお話、を描くはずがいつの間にかサクラの両親との話
しに。あつれー？

とりあえず次回は本編です。お楽しみに。

間劇「とある日」

木の葉の里は、かなり大きな街である。そこに住む人数も多く、当たり前のように賑やかとなる。

だが一年のうち、とある日が迫ると途端に静まってしまう。

彼女はとある日が嫌いだった。里の雰囲気嫌いだった。

自己紹介で嫌いなものがとっさに出てこなかった彼女だが、これからはハッキリ『とある日の里の雰囲気嫌い』と言おうかと考えて、ヤメた。そんなことを言ってしまうえば傷つく少年がいた。少年が傷つくのは嫌だった。

毎年毎年。そのとある日が近づくにしたがって、いつも元気な少年がいつも俯いて歩いているのをいつも見ていた。そんな少年を見下ろす大人たちが嫌いだった。見ているしか出来ない自分が嫌いだった。

考えてみれば、嫌いなものなど結構たくさんある。

苦笑した彼女は、すぐに表情を引き締めた。

【とある日が嫌いだった彼と、とある日が嫌いな彼女の話】

良くも悪くもいつだって騒がしい木の葉の里が、とある日に近づくとしんとなる。

とある日とは、十月十日。

里を九尾と呼ばれる強大な化け狐が襲い、大きな被害を与えた日だった。

十月になると誰もが大声で笑うことを控え始める。豪勢な食事、

贅沢をすることを控え始める。そして、いつも以上に彼を見る目が冷たくなり、ささやく声が大きくなる。

「ほらあの子よ」

「なんであんなやつがのうのうと生きてるんだ」

「三代目もどうして」

「殺してしまえばいいものを」

子供に投げかけるにはあまりにも残酷な言葉の数々を、彼は無言でその身に受け続けた。彼がその日を嫌いになるのは当然だったろう。

しかし同時にちよっぴり楽しみでもあった。

毎年その日には、彼の部屋のドアにビニール袋がかけられる。袋を覗けば、中にはショートケーキと小さな箱が入っていて、箱の上には「誕生日おめでとう」と書かれたカードがちよこんと乗っている。送り主の名前は書かれてなくとも、彼の字とは比べるのが失礼なほど綺麗に書かれた文字には、見覚えがありすぎた。

送り主の少女が自分の境遇に関して不満を持っているのを、彼は知っていた。街中ですれ違えば声をかけようとしているのを、知っていた。堂々と誕生日を祝おうとしてくれるのを、知っていた。そのすべてを拒絶した。自分と一緒にいたら少女まであの視線と言葉を浴びてしまう。そう思えば、一人でいる方が気楽だったのだ。

とはいうものの、やはり祝ってくれると嬉しい。

だから彼はその日が嫌いだったが、今年はどんなケーキとどんなプレゼントなのだろうと想像して、その日が来るのを楽しみにしていた。

* * *

彼女は聡かった。だから、なぜ少年を見る里の人間が冷たいのかを多少は理解できた。……納得してはいないが。

波の国で聞いた獣の咆哮。

強大な何かが、少年の中にいるのは間違いなかった。では一体何があるのか。

考えた時、里の大人たちが『その日』に特別冷たい目をすることや、少年の生年月日が頭を横切り、答えは簡単に導けた。

十二年ほど前に里を襲ったという九尾の狐が、少年の中にいる。

九尾の狐とは尾獣と呼ばれる人知を越えた存在の一つで、莫大なチャクラの塊だ。一尾から九尾まで存在が確認されている。欲深い人間はこの力をなんとか我が物にしようと知恵を絞り、人間の身体に封印することに成功した。尾獣を封印された器の人間に『人柱力』などと名前までつけて。

話がずれてしまった。

つまり里に住む一定以上の大人たちは、少年の中に『九尾の狐』がいることを知っている。だからこそ『^{かたき}仇』を見る冷たい目を少年に向けるのだ。

「失った悲しみ、怒り、憎しみのほけ口。人にとって必要なものだと分かるけれど」

あの目は嫌いだ。

彼女は思うし、あの目をする人たちも、あの目を止めない自分を含めた人たちも嫌いだ。かといって里のものを憎むことも否定することも彼女には出来ない。少年があのに傷ついていると知っていないながら、彼女にはそんな愚かしい一面ですら愛しいのだ。どうしようもなく。それは本能とも呼べるもので、彼女自身に抗う術はなかった。

気づくと、毎年ビニール袋をドアノブに引っ掛けている自分がい

た。

無意識に感じていた罪悪感からだろうか。違うのだと思いたいの
に、彼女はカードに名前を書くことが出来ない。意気地のない自分
にほとほと呆れつつ、今年こそ！ と気合を入れていた。

だから彼女はその日が嫌いだったが、今年はどんなケーキを作っ
てどんなプレゼントを贈ろうかと考え、その日を迎える準備をして
いた。

* * *

今年は、彼にとって特別だった。

自分の中にいる化け物のことを知った年。化け物が中にあること
を知った上で、恩師が自分を認めてくれた年。念願の忍びになっ
ても好きな少女と同じ班になった年。ム力つくけれど頼りになる
仲間が初めてできた年。いつも以上に期待してしまうのは、仕方な
かった。

だが最近、どうも少女の様子がオカシイ。

「さっくらちゃん、おはよう！」

「ほあっ！」

「ほあ？」

「おおお、おはよう」

ぼうつとすることが多くなった。任務中まで何か考えている。考
えながら身体が動いているのがマジメなこの少女らしすぎて笑えた。
この少女。任務中は相手の嘘を見抜いたり演技することもできる
というのに、普段は嘘がつけないし嘘が見破れないし隠し事がまっ
たく出来ないのである。スイッチでもあるかのように、任務中と普

段ではまるで違った顔を持っていた。

挙動不審な様子は彼でなくとも何か隠しているのが丸分かりで、何を隠しているのかはスカしたチームメイトや、飽きもせずに年齢制限本を堂々と読み歩く上司の態度を見れば、頭を使うのが苦手な彼にも分かった。

とはいっても、チームメイトはたしかに最初こそ変な対応をしていたが、あまりにも少女の態度がバレバレなために隠すのをやめて堂々としているし、上司はほとんど普段と変わらない。違うところは、目がいつも以上に柔らかいことぐらいか。

ブツブツ呟いて、あつと声を上げて、ふふと嬉しそうに笑って、時折不安そうにして、少女は彼以外のチームメイトと何かをやっていた。

『あの態度で気づかれてないと思ってるんだもんなあ』

たまにわざとやっているのではと思うが、少女はどこまでも本気で、そんな少女を見ているだけでも彼は楽しかった。

さあ、気づいていないフリをして、迎えよう。嘘をつくのは得意だ。昔から自分自身にすら嘘について、楽しくもないのに笑って過去してきた。

彼は「ああでも」と思った。きっと、いや絶対。その日に自分が嘘をつくことはない。心から少女に驚きと、喜びと、感謝を伝えられるに違いないから。

「よお、ナルト。久しぶりに一緒に食べに行かないか？」

当日、任務後あっさり解散してしまつて彼が肩透かしを食らっていると、大好きで心から尊敬している恩師が声をかけてきた。自分の勘違いだろうか、と悩んでいた彼はその誘いに乗った。恩師は「一楽に行かないか？」とは言わなかった。

連れられていったのは、里の外れ。立派な平屋の屋敷が並ぶ一角だった。

ご機嫌な様子の恩師が先導して門をくぐり、しかし玄関の前で彼にその場を譲った。唐突に彼は緊張し始めた。唾を飲み込んでいると、恩師が「ほら、ナルト」と背中を押してくれた。彼は意を決して引き戸を開けた。パンパンつと耳どころか心臓に響く音がして、火薬の匂いが鼻につき、彼の金色の髪にきらきらした細長い紙がまとわりついた。目が熱いと思うのはびっくりしたからだ、と彼は自分言い訳した。

目の前には小さいコーンのようなものを持って笑っている上司と、無理やり持たされたのか嫌そうな顔をしている（でもどこか照れているような）チームメイト。それから、

「誕生日おめでとう、ナルト！」

満面の笑みを浮かべた少女がいた。だから彼は心からの驚きと喜びと、感謝を込めて笑った。

間劇「とある日」(後書き)

私事により更新が遅れました。すみません。

えつと拍手にてメッセージをいただきました。そろそろ試験に。今回の話を載せるに当たって、なるべく時系列順に載せたいな、と焦り、固執してしまっていたと気づきました。

なので次回から新章に突入します。短編などは思いつき次第、第三幕に載せようと思っています。

いつも拍手&メッセージありがとうございます。励みになってます。どうかこれからもよろしく願います。

第四十五劇「1年という歲月」

サクラはいつもの集合場所で分厚い本を読んでいた。表紙には忍具大全とあり、中にはたくさんの忍具が紹介されている。真剣に読書している彼女から少し離れたところではサスケが巻物を広げ、やはり真剣に読んでいた。どうせ今日も上司は遅いに違いない。1年以上、彼の元で任務をこなしている2人には簡単に想像がついた。そう。彼女たちが忍びになってもう1年が経つ。あまり変わらなかった2人の体格には、差が現れ始めていた。身長はサスケの方がより高くがっしりと。サクラは身体が丸みを帯びて女性らしくなっていた。元々長かった髪は腰の位置まで伸びていた。

「さつくらちゃん、おつはよ！」

「おはよう、ナルト」

元気よくそこに飛び込んできたのは金髪にオレンジの上下を着た少年、ナルト。彼も多少身長が伸びたようだが、3人の中では1番低いままだ。悩みがなさそうな彼も、身長については密かに悩んでいた。

もちろん彼らが変わったのは身長だけではない。今ではCランクを任されBランクも数度こなした。様々な経験をし、忍者として身も心も成長している。

ギヤーギヤーと騒がしいナルトも一見変わっていないようで、ちゃんと成長しているのだ。……たぶん。

「やあ諸君、おはよう。今日はま」

「ああーっ先生！ 来るの早いつてばよ」

「ちっ」

「やった。また私の勝ちね」

ようやくやって来たカカシに対してナルトは大声で悔しがり、サスケは舌打ちし、サクラは喜んだ。ごちそうさま、と2人にサクラが言ったの考えると……どうやらカカシが何時に来るかで賭け（夕食をおごる）をしていたらしい。なるほど。たしかに成長している。

お前らな。呟いたカカシの背が、それはそれは悲しげだった。

* * *

今日の任務は崖に生えている薬草の採取だった。危険な場所なのでCランク任務として7班に回ってきた。

途中、調子に乗ったナルトが崖から落ちかけたのをサクラとサスケがフォローしつつ、任務は無事に終わる。……やはりナルトは成長していないかもしれない。

4人揃って歩いていると空を鳥が横切っていった。カカシとサクラが見上げる。ぴーひよると元気よく鳥が鳴く。

「さてと、俺はこれから任務の報告書を提出せにやらんし、解散にするか」

カカシがそう言って部下を振り返ると、サクラたちはこの後何を食べるかで話し合っていた。カカシの話など聞いてない。いや、聞いてはいるのだろうが自分の方を向いてくれない。昔は素直で可愛かったのにな。カカシはそろそろ本気で泣きそうになった。

いいもんいいもん、どーせ俺なんて。泣く代わりにちよつとすねた。

「ごめんって先生。また明日ね」

「ああ、気をつけて帰れよ」

「先生それ、忍者に言うことじゃねーってばよ」

「ふん」

瞬身の術によってその場から力カシはいなくなった。驚くことなく3人は歩き出す。任務終わり、一緒にご飯を食べるのが彼らの日常に組み込まれていた。「一楽にしようぜ」「またラーメンかよ」「昨日も行っただじゃないの。もちろん美味しいけど」楽しげに歩いている彼らの後を、四角い箱がついていく。

3人は同時に足を止めて箱を振り返った。箱はびびったように動きを止める。サクラは苦笑してチームメイトたちをうかがう。サスケは目を瞑って眉をひくつかせ、ナルトはなんともいえない顔で箱を見下ろしていた。

箱は縦に細長く、表面には岩のような模様が描かれ、先頭部分に二つの穴が空けられたそれは、どうやら岩のつもりらしい。どう見ても四角い箱だった。

見て見ぬフリをしようか。サクラが思ったとき、ナルトが箱を指差した。

「そんな真四角で適度な穴が開いた岩があるか！ バレバレだったの」

「さすが俺の見込んだ男。俺のライバルだな、これ」

箱がしゃべった。

サスケが「こんな茶番に付き合ってられるか」舌打ちしてその場を離れようとしたのを、サクラが小声でなだめる。「賭けで負けたよね？　もしかしてサスケ君逃げるの？……なだめるといふよりも、脅しの方が正しかった。サスケは無言で足を止めた。彼の顔は若干と言わず、青白かった。

そんな2人はさておき、箱が飛び上がり中から3つの影が現れる。

「大人のお色気。くのいち年長組、モエギ」

「因数分解大好き。ウドン」

「里一番の天才忍者。木の葉丸」

「3人合わせて木の葉丸軍団、参上！」

箱から出てきたのはサクラたちより幼い子供で、それぞれがポーズを決めた。アカデミーの後輩たちだ。

紅一点のモエギは明るい茶色の髪を2つに分け、高い位置でくくっている。服は女の子らしく暖色でまとめてあった。3人の中で一番しっかりしている。

ウドンと名乗った少年はメガネをかけていて、髪はこげ茶で短い。全体にぬぼーとした空気を漂わせている。母性がくすぐられると一部から評判だ。

そして3人のリーダー格である木の葉丸このはまるはツンツン尖った黒髪で、雰囲気少しナルトと似ていた。特徴は首に巻いた長すぎるほどの襟巻き（深緑色）。彼は3代目火影、猿飛さるとびヒルゼンの孫でもある。ナルトのことを慕っており、ことあるごとにこうしてちょっかいを出してくるのだ。

3人に共通しているのは、頭にゴーグルをつけていることだろう。お揃いらしいゴーグルは、昔ナルトがつけていたものによく似ていた。

「やっぱお前らか。で、今度はなんだ」

「なんだって……兄ちゃん最近反応が冷たいぞ、コレ！」

「ねえリーダー！これから暇？」

騒ぐ木の葉丸をおしのけ、モエギがナルト——モエギとウドンか

らはリーダーと呼ばれている——に問いかけた。ナルトは困ったように振り返ってサクラたちを振り返る。これから遅い昼飯を食べに行くところだった。食べた後はそのまま修行に突入、というのがいつもの流れだ。ナルトは頬を指で掻いた。

「んー、俺はこれから忙しいんだってばよ」

「えーっ！ 今日俺たちと忍者ごっこしてくれるって約束してたじゃんよ」

「そ、そうだったか。えっと」

もう一度サクラたちを振り返ったナルトに、サクラは笑って「私たちのことは気にしないで行ってきなさい」と言った。「そういうことじゃない」思いながらナルトがサスケを見ると、鼻で笑われた。

「サスケ、おま」

「みんな！ ナルトをよろしくね」

「うん。リーダーのことはモエギたちに任せてね、サクラお姉ちゃん」

「いいってさ。ほら兄ちゃん、行こうぜ」

「コラ引っ張るなって！ さ、サクラちゃん」

木の葉丸たちは嬉しそうに歓声を上げ、ナルトを引っ張っていく。そんな彼らをサクラは優しい目で見ていた。……木の葉丸が誰かにぶつかるまでは。

「いたっ」

「あ？ なんだクソがき。イテーじゃん」

「うあ」

「木の葉丸！」

全身を黒で包んだ少年だった。頭巾まで黒色で統一している彼は、おそらくサクラたちよりも年上だろう。少年は独特の化粧を顔にしており、鋭い目つきと相まって木の葉丸に恐怖を与えた。少年が木の葉丸の胸倉を掴んで楽々と持ち上げる。木の葉丸が苦しみで顔をしかめた。

「カンクロウ、止めときなって。後でどやされるよ」

少年——カンクロウの連れらしい金髪の少女（カンクロウと同じか少し上）が辺りを警戒しつつ言った。

「いいだろテマリ。うるさいのが来る前にちよつと遊んでみたいじゃん」

手に力をこめたのか、木の葉丸がうめいた。

「その手を離しなさい！」

サクラは大きな声を出しながら木の葉丸に駆け寄る。カンクロウは口元だけで笑い、木の葉丸を投げた。サクラとは真逆へと投げられた木の葉丸だったが、なんとかナルトが受け止めた。ケガはなさそうで、サクラはふつと息を吐いてからカンクロウへ視線を戻す。

睨み付けてくるサクラの目などまったく意に介さず、彼はサクラを上から下まで眺めた。彼の唇がゆがむ。

「へえ、中々可愛いじゃん」

「……は？」

予想外の言葉にサクラが気を抜いた。その隙にカンクロウは彼女との間を詰め、細いあごに手をかけた。

いや、かけようとした。

彼は痛みで軽く手を押さえる。血は流れていない。一体何が――
思った彼の目が地面を転がっている石をとらえた。

「よそんちの里で何してんだ、てめえは」

片手で石をもてあそんでいるサスケが目つき鋭くカンクロウを睨みつけた。その気迫に一瞬押されたカンクロウは、舌打ちして睨み返した。「むかつくガキがもう1匹」言いながら肩にかけた紐を握りしめる。サスケは持っていた石を握りつぶし、言い放つ。

「うせろ」

「ふん。俺はお前みたいないい子ぶったガキが1番嫌いなんだよ」
「おいつカラスまで使う気が。止めときなつて」

テマリがいさめるも、カンクロウは背負っている大きな包みを地面に置いた。サスケもまた戦闘態勢にはいる。2人の緊張がピークに達した。

「止める、カンクロウ――里の面汚しめ」

落ち着いた、落ち着きすぎた声が2人の熱を冷ました。

サスケが慌てて振り向くと、赤毛の少年が腕を組んで立っていた。誰も彼の気配にまったく気づいていなかった。赤毛の少年はサクラたちと変わらない年に見えたが、雰囲気はずいぶんと大人びている。目元にはひどいクマがあり、大きなひょうたんを背負っていた。なんと不思議な少年だ。

サスケと向き合っていたカンクロウが、彼の名前を呼んだ。我愛羅^{があら}と。
カンクロウも連れのテマリも、自身より年下の我愛羅に対して強

気な態度は取れないようだ。どころか異常なほどに怯えを見せている。我愛羅は2人の様子を気にせず木の葉丸に謝っていた。礼儀正しい少年のようだ。特に怯える要素が見えない。サクラが首をかしげていると我愛羅と目があり、彼女は言葉を失った。

瞳の奥には諦めの色が見えた。

「……名はなんという？」

「えっ？ とと、サクラ。春野サクラ、です」

「うちはサスケに春野サクラか。覚えておこう」

いつの間にかサスケとは互いに名乗りあっていたらしい。我愛羅、砂漠の我愛羅と名乗った彼はカンクロウとテマリを引き連れて去って行った。ナルトが「なんで俺だけ」名前を聞かれなかったので落ち込んでいた。

サクラたちが下忍になってから1年。何かが始まるうとしていた。

第四十五劇「1年という歲月」（後書き）

名前表記について

人物の名前はカタカタで統一してたのですが、木の葉丸はカタカナにするとなんかイメージ違ったので漢字で通します。我愛羅^{ガアラ}についても同様。

サクラの髪の長さについて。

元は肩を越したぐらいのイメージでした。原作と違つかもしれませんが、ご容赦ください。

カンクロウをナンパ師にしてすみません。なんとかサクラを絡めようとしたらこうなりました。

それと拍手、いつもありがとうございます。ちゃんと読ませていただいております。なにやらサクラを気に入っていただけているようで、私の励みです。拍手にはお礼としてキャラの掛け合い、みたいなのを載せているのですが、必要ですか？ 必要ですか？ 教えていただけると助かります。 教

ちまちま進んですが、またよろしく願います。

第四十六劇「再会」

「やあ諸君、おはよう。今日は」

「人生という道にでも迷ったんですか？」

「あ、あははは。さすがサクラ。よく分かつてるね」

緑の光が冷たくカカシに注がれる。彼は乾いた笑い声でごまかした。

今日は任務のない日だというのにサクラたち7班は、カカシから呼び出された。慌ててサクラたちがいつもの集合場所についてから、3時間が経過している。サクラが怒るのも無理はない。もちろんナルトとサスケも怒ってはいたが、サクラの迫力に吞まれて何も言えないようだ。

「ま、それはさておき」

「おいとくなつてば」

「ごほん！ お前らを中忍選抜試験に推薦しといたから。ほい、これ志願書な」

カカシから渡された手のひらほどの紙を3人は見つめる。彼らの頭には、先日に出会った砂隠れ（風の国にある隠れ里。すながくれ）の忍び、我愛羅^{があら}たちが思い浮かんでいた。通常、他里の忍びが里に入ることは許されていない。我愛羅たちは「中忍試験を受けるために木の葉まで来た」と許可証をサクラたちに見せたのだ。

サスケとナルトの目が輝く。強いものと戦える喜び。火影への道が一步近づく喜び。

「とはいっても、強制じゃない。受ける受けないは個人のじゆ」

「やった！ カカシ先生、大好きだ」

「うわっちょ、こらナルト！ 離れなさい」

感激したナルトがカカシに飛びつく。カカシは苦笑しつつ抱きとめ、ナルトを引き剥がした。

「受けたいものだけその書類にサインして、5日後の午後3時まで
に学校の301号室に来ること。あ、でも受付開始は2時だからそ
のつもりでな」

カカシの用事は志願書を渡すことだったらしい。それだけ言うところ
どこかへ去って行った。3時間待たされて用事がたったの5分で終
わったことに苛立ちはあるものの、ナルトもサスケも試験を受けら
れる喜びが勝った。志願書に書かれた中忍試験の文字を、食い入る
ように見つめていた。

サクラは少年2人とは違い、無邪気に喜ばなかった。推薦者の欄
に書かれたカカシの名前を信じられずに眺めている。2人はさてお
き、自身に中忍試験に推薦してもらうほどの実力はない。彼女はそ
う思っていた。

しかし、任務中にサクラが立てた作戦は見事で、全体を把握し状
況にあわせて援護する能力は高い。彼女の指示・援護によって救わ
れたことのある7班のメンバーは、サクラの実力をきちんと評価し
て信頼をしていた。当の本人だけが己の実力を過小評価している。
任務ではサクラが後衛・サポート役に回ることが多いため、目に見
える活躍が彼女には少ないのも一因だろう。

まだ修行が順調ならよかったが、滝登りの修行もやっと20メー
トル登れるようになったところで、頂上はまだ遠い。上忍クラスで
も厳しい修行なのだが、そんなことを知らないサクラには厳しい現
実だった。

そっとため息をついた彼女を、サスケが眉間にしわを寄せてちら
と見た。

『また妙なことを考えているな』

1年という期間は、短いようで長い。その間ほとんど一緒にいたのだ。サクラが自身の実力を過小評価する傾向があるぐらい、サスケは嫌というほど知っていた。今までそのことに何度腹を立てたか覚えていないぐらいである。

自身を過小評価するために、サクラの修行は半端ないほど難易度が高い。難易度が高ければ当然クリアするのも時間がかかる。時間がかかればかかるほど、サクラは追い詰められたように修行へのめりこんでいく。もう少し休めと誰が言ったところで聞き入れることはない。だからこそサスケもナルトも彼女を助けるために修行を積む。するとそのことがまた彼女を追い詰め、という奇妙な循環構造の出来上がりだ。……サスケもため息をついた。

* * *

5日後、サクラたちはアカデミーに来ていた。

ナルトが懐かしそうに校舎を眺めている横で、サスケはむっつりと黙ったまま密かにサクラをうかがっていた。左手を胸の前で軽く握っているサクラは、笑顔を浮かべてナルトと会話している。サスケは息を吐いた。強制ではない試験をサクラが受けにやってきたのは、昨日の任務終わりに「サクラちゃん、また明日」とナルトに言われたからだろう。嬉しいなナルトに「試験を受けない」とは言えなかったのだ。

お人よしにもほどがある。

呆れつつ、サスケはこれで良かったとも思っていた。サクラは下忍で終わるにはもったいない実力者だ。もしかしたら試験中サクラ

と戦う可能性もあるが、己とまったく違う戦闘スタイルの彼女は真剣に戦ってみたい相手だった。純粹な戦闘では負けない自信があっても、彼女のように頭を使つての戦いではどうか分からない。

だが今の落ち込んだ姿はいただけない。あくまでサスケは、本気のサクラと戦いたいのだ。

「試験つてどんなことするんだろ。楽しみだなあ」

「ちよつとナルト。もう少し落ち着きなさい。みつともないでしょ」

「ふん、ガキが」

「あんだとサスケ！」

「すぐ怒らないの。サスケ君もナルトを煽らないでよ！ もうつ」

普段どおりに騒ぎつつ、第7班はアカデミー内へ入っていった。

「あれ？」

階段をいち早く駆け登つたナルトが首を傾げる。廊下がざわついていた。試験を受けに来たと思われる下忍が20人ほど、301のプレートがかかった部屋の前に集まっていた。

「お願いですから、そこを通してください」

「止めた方がいいんじゃない、僕たち」

「そうそう。そんな実力じゃ受かりっこないつて。これは俺たちの優しさだぜ。中忍試験は難関だからな」

「この試験を受けたばかりに忍びを辞めていくもの、再起不能になったものを俺たちはたくさん見てきた」

「中忍といたら部隊の隊長レベルだ。任務の失敗、部下の死亡。全部隊長の責任。それをこんなガキどもに勤まるわけがないだろ」

近寄ってみると、どうやら2人の男が教室の出入り口を塞いでい

た。木の葉の額当てをしていた2人の前には、これまた木の葉の下忍が2人。こちらは少年と少女だ。

緑色の全身タイツにオレンジ色のレッグウォーマーのようなものをつけたおかつぱ頭の少年と、薄ピンクのノースリーブに黒っぽいズボンをはいたお団子頭の少女が床にしりもちをついていた。無理やり通ろうとして男たちに殴られたようだ。頬が少し腫れている。

立ち往生している忍びたちは、同郷の者に対しても容赦ない2人に眉をしかめていた。

「どっちみち受からないものをふるいにかけて何が悪い」

「正論だな」

サスケが鼻で笑いながら男たちに声をかけた。茶番だと小さく呟いたのをサクラは聞いた。

「だが俺は、俺たちは通してもらう。そしてとつとこの結界を解いてもらおうか。3階に用があるんでな」

周りの忍びたちがまたざわついた。何言っただあいつ。サスケの言葉を理解できないものがほとんどだった。道を塞いでいた忍びたちの目が少し色を変える。数歩前に出たサスケは周りの反応を気にせず、サクラを振り返った。

「どうだサクラ。お前なら一番に気づいたはずだ。お前の分析力と幻術のノウハウは、俺たちの中で一番伸びているからな」

言い終わった後で、サスケは前に向き直る。サクラは驚きで瞳を大きく開いていたが、やがて柔らかく緩ませた。前を向いたサスケの耳が、少し赤かった。

ありがとう。

礼を言ってから、サクラは胸の前においていた左手をゆっくり下ろした。彼女の眼に迷いがなくなる。

「ええ、もちろん。だってここは2階だもの」

サクラの言葉でプレート周辺の空間がゆがんだように回り、201プレートに戻った。そう、ここは2階だったのだ。

「へえ、見破ったのか。でもそれだけじゃ、な」

道をふさいでいた忍びの片割れ——細い目の男——が突然サスケに回し蹴りを放った。サスケもまた応対するために蹴りを仕掛ける。しかし2人の足がぶつかることはなかった。緑の影が間に入って彼らの蹴りを受け止めたのだ。2人はすぐさま距離をとって離れる。

緑の影は、殴られて座り込んでいた、あのおかつぱの少年だった。先ほどの弱弱い姿からは想像もできない素早い動きで、それだけでなく簡単に2人の蹴りを素手で受け止めていたのだ。特に痛がっているそぶりはない。どころか、さきほどの殴られた痕すらない。

「おいリー。約束が違うじゃないか。下手に警戒されたくないと言ったのはお前だぞ」

「すみません。ですが」

チームメイトらしき長髪の少年に謝った彼、リー少年はちらとサクラを見た。リーの後ろではお団子頭の女の子がやれやれと肩をすくめている。彼女にも先ほどのケガはない。長髪少年の言葉から察するに、演技をしていたのだろう。

そう判断したサクラだったが、困ったようにリーを見返した。なぜサスケではなく自分が見られるのか理解不能だった。サクラが戸惑っている間にも、リーはサスケの横を通り過ぎて彼女へと近づい

ていく。

「僕の名前はロック・リーといいます。あなたのお名前は？」

「はあ。春野サクラ、ですけど」

「サクラさん、ですか。とても素敵なお名前ですね」

「ありがとうございます」

リーは噛み締めるようにサクラの名前を呟いた。サクラはよく分からない顔をしたまま名乗り、名前を褒められると嬉しげに微笑んだ。リーがほつぺたを少しピンク色に染める。サクラの隣にいたナルトがむつと顔をしかめ、サスケがイライラと腕を組んだ。

「僕とお付き合いしましょう！ 死ぬまであなたを守りますから」

親指を突き立て、ウィンクをしながらリーが言った。場の空気が凍りつく。

「はあ？」

サクラ……ではなく、ナルトとサスケが大声を出した。言われた本人はよく分かっているらしく、ぽかんとリーを見上げている。最初に我へと帰ったのはナルトだった。

「ダメダメダメダメ！ 絶対ダメだってばよ、このゲジ眉」

「げ、ゲジ眉っ？ なんなんですかあなたは。僕はサクラさんに聞いてるんです。邪魔をしないでくれますか」

ナルトがリーに詰め寄り、2人は何やら言い争いを始めた。この時ようやくサクラは言葉を理解し、顔を赤くさせていた。遅い。ため息をついたサスケがサクラの手を引いてその場を離れる。ナルト

とリーはまだ争っており、気づかない。

「さっさと行くぞ」

「え？ でもサスケ君」

「あああーっサスケ、抜け駆けしてんじゃねーぞ」

「そうですよ。ずるいです」

「ちっ」

「今舌打ちしやがったな、てめー」

「あの、とりあえず落ち着いて」

「サクラさん！ 先ほどのお返事を」

現在午後2時20分。志願書提出期限まであと40分。サクラたちが教室にたどり着くのは、まだのようだ。

第四十六劇「再会」(後書き)

話が進まない。ある程度省略してはいるんですが、中忍試験はみ
つちりやりたくて。しばらくこんな感じで進みます。

あ、もちろんタイトルの意味は彼にとっての、です。

第四十七劇「扉をくぐる」

「おい。そこのお前、名乗れ」

サスケに声をかけたのは、リーのチームメイトである長髪の少年だ。真つ白な目を見れば、彼が日向一族の人間だとすぐに知れる。微かに目を細めたサスケは、顔を背けた。うちはと日向は仲が悪い。うちはも元をたどれば日向から別れていったらしいのだが、同じ瞳術使いとして何か思うところがあるのかもしれない。

「名乗る義務はないな」

「何っ」

日向の少年が目つきを鋭くさせた。サクラは嘆くように息を吐き出す。どうして自分のチームメイトはこうもケンカ腰なのだろう。

険悪な空気に浸ってしまう前に、サスケとナルトの腕を引っ張る。

「おわ、サ、サクラっ」

「はいはい、行くわよ。すみません。私たちはもう行くんで」

前半はサスケとナルトに。後半は日向の少年に告げてその場を離れる。時間もあまりない。

* * *

時間があまりないというのに、7班はまだ、3階前のロビーにい

た。

「うちの名を知っていて言ってるのか？」

「もちろんです。あの天才と謳^{うた}われた一族に、僕がどれだけ通用するのか。試したい」

サスケがリーから勝負を挑まれたのだ。ナルトは「なんでまたサスケなんだよ。俺は？」と、落ち込んでいた。サクラが肩を落としているナルトをなぐさめる。

どうやらサスケは早く試験場に行きたいらしく、さっさと歩き出そうとしており、リーを相手にはしていなかった。だが、リーは言葉の最後に「それに」と付け足して、サクラを見た。サクラがきょとんと彼を見返せば、リーの顔がピンクに染まり、サスケの眉がツリ上がった。

「面白い。この名がどんなものか、思い知るか？ ゲジ眉」

「ええ、ぜひとも知りたいですね」

「時間もない。5分で終わらせる」

「できますか？ 君に」

あからさまな挑発にサスケが乗ることはなかったものの、2人の空気が一気に重たくなる。対峙し、にらみ合った2人は、壁時計の針が動くと同時に、床を蹴った。

殴りかかったサスケの腕は、空気に触れるだけ、リーはすでにそこにいなかった。彼の動きは速すぎてサクラには捉えられなかったが、サスケも同じだったのだろう。驚愕の声を出していた。

気づいたときには、リーはサスケの背後に立っていた。リーが回し蹴りを放つ。なんとか直前で気づいたサスケはしゃがんで避けたが、自然な流れでもう一撃放たれた蹴りは避けられなかった。間に合わない判断したサスケが両腕でガードする。リーが少し笑った。

「なっぐは」

「サスケ君っ」

ガードしたにもかかわらず、サスケの体が大きく飛ばされて床を転がった。彼の頬には蹴られた痕がしつかりとついている。サスケはもちろん、見ていたサクラやナルトも驚きで目をみはった。まるでガードをすり抜けたように見えたのだ。

悔しげに立ち上がったサスケの目が赤くなっていく。血継けっけい・げんかい限界の写輪眼だ。この目を使えばどんな術もどんなトリックも見抜ける。本気になったらしい。目つきも鋭さを増している。

リーは写輪眼に対して一瞬だけ驚いた顔をしたが、すぐに平静な表情に戻った。構えも余裕を持ったまま変わらない。うちを知っていたのだ。もちろん写輪眼についても知っているだろうに、恐れた様子はまるでない。そんな態度にサスケは苛立つ。

「舐めるな」

再びサスケが攻撃を仕掛けていく。が、いつのまにかリーの姿はサスケの目前にあった。――速すぎる。「ぐっ」勢いよく飛び出していたサスケに対処する方法はなく、真下から彼の顎に強烈な蹴りが入る。宙に身を投げ出したサスケをリーは容赦なく追いかけた。その動きをサスケは見ていたが、ダメージから回復しきれていない体は、言うことを聞かない。

リーがサスケの背後に回りこむ。影舞葉かげぶようと呼ばれる木の葉の追跡術だ。単体ではあまり意味を成さないが、体術のつなぎとなることにより威力を発揮する。

しゅると音がした。リーの腕に巻かれた包帯がサスケを覆うように動き……飛んできた風車によって壁に縫い付けられた。

「そこまでだ、リー！」

響いたのは低く威厳に満ちた声だった。誰もが驚いて声を振り返り、リー以外の目が、リーみたく丸くなってしまふ。そこにいたのは、赤い甲羅の亀だった。

亀といってもだいぶ大きい。甲羅だけで直径１メートルはありそうだ。目つきも鋭い。首には木の葉の額当てを巻きつけてある。その亀がしゃべった。

なぜ亀？ え、亀でも忍者になれるの？ それより亀ってしゃべるっけ？

着地したサスケを始め、７班のメンバーは、呆然としゃべる亀を見ていた。リーだけが顔に汗をかきながら焦り、亀の前に膝をつく。亀がリーを叱る。リーはぺこぺこ頭を下げる。その光景は、なかなかシユールだ。

「み、見ていらしたのですか」

「リー、今の技は禁じてだろうが」

「すみません。そのつい……でっでっでも！ 僕は裏の方を使うつもりは」

「言い訳するでない」

「っすみません」

「忍びが己の技をさらす危険性を、お前もよく知っているはずじゃ」

カチツ。時計が動いた音でサクラたちは我に返った。時刻は３時５０分。ゴールは目前だが、早いに越したことはない。３人は顔を見合わせて頷き、その場を立ち去った。背後からは「青春してるなあっ」という熱い声が聞こえたが、誰も振り向かなかった。

「リー！」

「ガイ先生！」

＊ ＊ ＊

「あれ、カカシ先生？」

301の教室前には見慣れた姿があった。担当上忍のカカシだ。彼はサクラを見て、目を細めた。

「そうか。サクラも来たか。これで正式に中忍試験の申し込みができるな」

「えっ？ あ、もしかして」

「はんつそういうことかよ」

「ふうん？」

瞬時に理解したサクラとサスケに対し、ナルトだけが分かっている。腕を組んで首をかしげている。カカシが苦笑いした。

「この試験は、元から3人スリーマンセル一組でしか受けられない」

「んん？ でもでも先生ってば、たしか受けるのは自由だって」

「ああ、言った。でも、もしもそのことを言っていたら、サクラはお前たちのことを考えて試験を受ける。たとえ志願する気はなくても、な。違うか？」

「……………」

サクラは何も言い返さない。ナルトがそつと彼女をうかがう。もしかして今日来たのも嫌々だったのではないか。不安げなナルトに気づいたサクラが、ナルトに向かって首を横に振る。ナルトは「はふっ」と間抜けな息を吐き出した。明るい緑色の瞳には、強い意思

があつた。たとえ最初は無理やりだったとしても、今は彼女自身の意思でここにいる。そのことが分かつて安心したのだ。

3人を眺めていた力カシ右目が柔らかく輝いた。

「だがお前たちは自らの意思でここに来た。サクラ、ナルト、サスケ。お前たちは俺の自慢のチームだ。行って来い」

力カシが扉の前を譲る。サクラたちはお互いの顔を見合つてから扉を開き、中へ入っていった。

「わっ」

入つてすぐ、ナルトがまず声を上げた。教室中の視線がナルトたちに注がれていたのだ。どうやら全員受験生らしいのだが、予想以上に人数が多い。さらには、2階にかかつていた幻術でここまでたどり着いていない者も数えれば、受験者は相当数に達するだろう。

——まあ、忍びの構成で下忍が1番多いのだから、当然ともいえた。301号室は黒板のある位置が最も低く、そこから教室の出入り口に向けて段々と高くなる構造をしており、アカデミーでは他学年との合同授業などで使われている広い教室だが、狭苦しく感じた。きちんと席に座ればまだ余裕はありそうだが、机に座ったり、各々がピリピリ張り詰めていたのもあつて、教室の空気が重いのだ。

受験者たちの視線がまた前に向いて、その重圧が少しマシになる子供か。そうあざ笑う視線もあつた。舐められたのだとサクラは気づいたが、怒りは感じない。たしかに教室内にいる受験者の中ではサクラたちが1番若かつたし、何よりも、今すぐ喧嘩を売りに行きそうなチームメイトを止めるのに必死だった。

どんな試験の内容かは知らないが、最初は舐められていた方がいると有利になる。小声で2人にそう説明してなんとか宥め、サクラがホッとしていると、

「相変わらず騒がしいな。お前らのところは」

聞きなれた声かけられる。サクラが振り向くと、淡い金色が横を駆け抜けていった。

「やあん、サスケくん。あたしたらあ、サスケ君が遅いから心配しちゃった」

「おっおい、山中」

振り向いた先にいたのは、つんつんした黒髪を1つにくくった目つきの悪い少年、奈良シカマルと、ポテチを食べ続けている目の細いぼつちやりした少年、秋道チョウジだった。隣を駆け抜けたのは彼らとチームメイトの山中イノだ。サスケに抱きついている。サスケからサクラに救難信号が送られていたが、目がハートになったイノを正気に戻すのはサクラでも無理だ。苦笑を返す。

——ゴメン、サスケ君。

サスケが心なし肩を下げた。

「よお、お前たちも受けに来たんだな」

そこにやって来たのは犬塚キバたちだ。フードを被ったキバの頭の上には白い子犬——黒っぽい耳は長いため垂れている——の赤丸がいた。赤丸はサクラを見つけると「あうん」なんとも可愛らしい声を出して、彼女の胸に飛び込んだ。いつものことなのか。サクラは慣れた様子で赤丸を抱きとめ、「久しぶり」と笑いかけている。そんなサクラへヒナタが笑顔で声をかけた。

「良かった。サクラちゃんたちも受けるんだね」

「ええ、お互いに頑張りましょ」

「ちょっとちょっと。あたしを仲間はずれにしようっての？ 混ぜなさいよ」

「わわわご、ごめんイノちゃん」

「仲間はずれって……そっちが勝手に」

ハート目から復活したイノが加われば、いつもの女子メンバー（＋犬）が揃い、なんともその一角だけ華々しい。険悪なムード漂う試験場には似合わない、のどかな空気である。

「さて、俺たちはどこまで残れますかね。なあ、うちはサスケ君？」

「随分と自身あり気だな、キバ」

「そりゃ俺たちはかなり修行したからな。お前らには負けねーぜ」

「うっせーてばよ。サスケならともかく、俺がお前らなんかに負けるか」

「はあ。めんどくせー奴ら」

「シカマル。さっきからため息ばかりだね。これ食べる？」

「遠慮しとく」

ひたすら黙り込んでいるシノを除き、他のメンバーは好き勝手に騒いでいた。

「ちょっと君たち。もう少し静かにした方がいいな」

メガネをかけた男が1人、近寄ってきた。白い前髪から覗く額当てには木の葉のマーク。男はメガネへ片手を触れさせながら、サクラたち同期9人を眺めている。シノがぼそつと呟く。俺は何もしやべっていない、と。

「君たちがルーキー9人だろ。可愛い顔してきやつきゃと騒いで。ここは遠足じゃないんだよ」

「誰よあんだ。偉そうに」

「僕は薬師カブト。そんなことよりもほら、周りを見てみなよ」

サクラたちが素直に周囲を見回すと、受験者たちがうるさそうに彼女たちを見ていた。ヒナタやイノなど数名がひるんでいる中、サクラは「たしかにうるさかったかも」と反省する。視線にひるんだからではなく、他人様^{ひと}に迷惑をかけてはという考えからだ。いつもと変わらないサクラにヒナタは尊敬の目を、イノは呆れた目を向けた。

「特に、君たちの後ろにつる雨隠れの下忍は、気の短い連中が多いから。君たちがどやされる前に、と思つてね。うん。でも懐かしいな。僕も初めて受ける時は君たちみたいに騒いでしたよ」

「ということは、カブトさんは2回目なんですか？」

「いや……恥ずかしいことにこれで7回目なんだ。この試験は年に2回しか行われないから、4年目かな」

「中忍試験ってそんなにハードル高いのかよ。ったく。つくづくメンドクセーな」

「あ、そうだ。可愛い後輩たちに、ちょっとだけ情報をあげようかな。この認識カードで」

言いながらカブトは何枚ものカードを取り出した。サイズは彼の手より少し大きいほどで、枚数は約200枚。カブトはカードについて説明した。チャクラで情報をカードに焼き付けているのだとか。試験に落ち続けているとはいえ、情報をしっかりと集めて次回へ繋いでいるらしい。

カブトは1枚のカードを見せてくれた。裏は全体がオレンジ色で濃い緑で縁取りされている。他は真ん中に『忍』の文字が書かれているだけだ。表は、というと反対に真っ白。情報を見るにはカブトのチャクラが必要で、他の人に見られないようになっていたようだ。

中々便利だな、とサクラはカードを凝視した。できれば自分も作りたい。カブトがその真っ白いカードに指をつけて数秒後、地図のよなものがカード上に浮かび上がる。地図は火の国を中心とした世界地図で、各国の上には棒グラフ。地図の右上には合計153という数字。サクラはぴんと来る。

「もしかして、今年の受験者数、ですか？」

「おつよく分かったね。その通り。今回の受験者数が右上の数字にある。今回は153人。そして参加国は6。それと棒グラフは国ごとの参加人数を表している」

サクラの言葉に一瞬驚きを見せてから、カブトは頷いて説明をした。木の葉が半分以上を占めていたのは、今年の試験場所が木の葉であるからだろう。

「君たちは、なぜわざわざ試験を他の里と合同で行うと思う？」

顔を上げて9人を順に見ていったカブトだったが、最後にサクラを見た。分かるかい？ そう聞かれているように思え、サクラはあごに手を当てて目を少し上に向けた。考えるときの癖だ。

「えっと国同士の友好を深めること。忍びのレベルを高めあうこと……表向きはそんな感じじゃないですか？」
「表向きは？」

カブトがメガネに触れる。角度が変わったため、サクラの位置からはメガネが反射し、彼の目は見えない。

「各国の忍びのレベルを見てお互いにけん制しあい、パワーバランスを保つ」

「正解。そうやって戦争を回避できているんだ。たぶんね」

反対を言えば、この試験で大した結果を出せなかった国は他国から狙われる可能性もあるが、とりあえず今のところは上手く機能しているシステムだ。サクラが納得している横で、首をこれでもかと倒しているナルトがいた。ナルトは自身以外が理解しているのを察したのか、必死に分かっているフリをしている。彼の演技にはチームメイトを始め何人か気づいたが、そつとしておいた。

そうこうしている間に試験管が現れ、試験が始まった。

第四十七劇「扉をくぐる」(後書き)

ちんたら進みすぎじゃないか。自分でも思いつつ、試験の話はあまり省略したくないため、これからさらにちんたらすると思います。

第四十八劇「第一の試験開始」

「俺が第一の試験官、森乃イビキだ。

まず始めに言っておく。試験管の許可なしに受験者同士の対戦はありえない。許可があつたとしても、相手を死に至らしめるような行為は許されない。俺様に逆らうような豚どもは、即失格だ。分かつたな」

森乃イビキ。そう名乗つた男は頭全体に布を巻いており、その布に額当てがついていた。顔には2本の大きな傷が斜めに走っている。身体は大きく、いかつい顔と相まってどっしりとした威圧感があつた。そんな彼の背後には数名の忍びがニヤつきながら立っている。彼らもまた試験管なのだろうか？ イビキに従っているようだが。

「ではこれから試験を開始する。志願書を提出したら代わりにこの番号札を受け取り、番号札の通りに席へつけ。全員が席に着いたところで筆記試験の用紙を配る」

1と書かれた番号札を見せながらイビキは説明していく。筆記試験という単語に、ナルトが悲鳴を上げた。彼は筆記試験が大の苦手なのだ。

とはいっても文句を言えるわけがない。とぼとぼ歩いて席に着くナルトを、サクラは不安そうに眺めた。3人スリーマンセル一組でしか受けられない試験なのだから、チーム戦だろうとは思うのだが。

なるべく近い席になりますように。

サクラの願いとは反対に、7班は全員がバラバラになつてしまった。しかもかなり離れている。他の同期メンバーも班員は別れている。

「この第一の試験には、いくつかルールがある。質問は一切受け付けんから、よく聞け」

黒板にチョークを突きつけて、イビキが低い声を出す。腹の底に響くような迫力ある声だ。

「第一のルール。まずお前たちにはそれぞれ10点が与えられている。筆記試験は全部で10問、各1点ずつ。この試験は減点式となっている。1つ間違えるごとに1点減点される。3つ間違えれば7点だ。

第二のルール。合否はチーム3人の合計点数で判定する。

第三のルール。試験中にカンニング、および、カンニングに準ずる行為を行ったと監視員にみなされた者は、その行為1回につき持ち点を2点減点させてもらう。5回カンニングを見咎められたものは、即失格とする」

監視員……教室の横にずらっと並んだ忍びたちをイビキは見た。彼らは手にボードと鉛筆を持ち、イスに腰掛けている。どおりで筆記試験にしては試験官の人数が多いわけである。

「つまりテストの終了を待たずして、退場するものが出るかもしれないということだ。

無様なカンニングを行ったものは自滅していくと心得ておけ」

「いつでもチェックしてやるぜ」

「仮にも中忍を目指すんだ。忍びなら、立派な忍びらしくすることだな。それから、チームの中で0点の者が1人でもいた場合は、そのチーム全員を不合格とする」

教室が少しざわついたが、イビキは「うるせえ」の一言で受験者

を静める。

「ちなみに、最後の問題は試験開始から45分後に出題する。試験時間は1時間だ。始めろっ」

慌てたように試験用紙をめくる音が教室のあちこちからした。その中でサクラはゆっくりと紙をめくり、まずは所属の里と名前を1番上に記入する。それからざっと問題を眺め、細い眉を真ん中に寄せた。

問題はとても難しかった。確実にナルトには……いや、この教室にいるものほとんどに解けないレベルかと思われた。自力で解けるものはサクラを始めとした数名で、その数はおそらく片手の指で足りるだろう。シカマルもやる気になれば解けるだろうが、彼がやる気を出した姿をサクラは想像できないので除外する。

鉛筆を持ったままサクラは考えこむ。最初から疑問だったが、やはりこの試験は何かおかしい。ただの学力テストならば、ほとんどのものが合格できるはずがない。

『忍びは裏の裏を読み』

カカシから最初に教わったことだ。きつとこの試験には『学力を調べる』以外の、本当の意図が存在するに違いない。サクラはイビキの語ったルールを最初から見直してみた。

まず第一のルール。減点方式。

随分変わった採点法だ。もしただの学力テストならば、このような面倒をしなくていい。普通に加算していく方が採点は楽なのだ。

それから第二のルール。

合否は3人の合計点で判断する。これは、忍びの行動が基本3人一組なので別段可笑しくはないだろう。が、プレーシャーにはなる第三のルール。

カンニングを見咎められた場合に2点減点され、5回発見されると即失格。これは筆記試験としては異例すぎる。通常はカンニングを1度でも行えば失格になるだろう。それが2点だけ減点されるという甘さ。これだけならカンニングを認めているとも考えられるが、監視員をたくさん配置してカンニングをしにくくしている、この矛盾。

最後のルール。チーム内に1人でも0点の者がいればチーム全員が不合格。第2のルールとあいまって、各々にすさまじいプレッシャーを与えている。

それらのルールとこの問題の難しさを考えれば、カンニングしなければ合格はできない。なのにカンニングを判定するためだけの監視員を大勢つけ、カンニング失敗のリスクをつける。なぜか。

減点方式。カンニングで2点減点。5回で失格。大勢の監視員。チーム戦。0点ならチーム全員失格。

『無様なカンニングを行ったものは』
『忍びなら、立派な忍びらしくすることだな』

サクラの中で点がつながっていく。

試験官は、受験者たちでは自力で問題が解けないのを承知しているはずだ。しかし解かずにいれば0点で、チームメイトを引きずり失格になる。だから受験者はカンニングをしなければならない。

そう。監視員に見つからないような、忍びらしい立派なカンニングを。

カンニングする、とはつまり、各自の情報収集能力のことだろう。これを見るのが目的に違いない。おそらくこの試験場の中には、答えを知っているものが数名いるはずだ。考えてサクラはそつと教室を眺める。1つの机に座っている人数と、埋まっている机の数を計算……明らかに3の倍数ではない受験者がいた。推理は間違っていないらしい。

試験の裏に気づいたサクラは、しかしまだ鉛筆を動かさなかった。カンニング前提の試験ならば、自分が正しい答えを書くと、他の受験者がカンニングできる対象を増やしてしまう。しばし悩んだが「まっいいか」小声で納得したサクラは鉛筆を動かし始めた。どうせ自分以外にも答えを知っている者がいるのだ。それが自分になるかその者になるかで、大した違いはないだろうと思ったのだ。

それより心配なのがナルトである。サスケならおそらくは試験の意図に気づくが、ナルトはそういった人の裏を読むのが苦手だ。かといってナルトとサクラの席は遠く、伝達手段はない。情報収集・伝達に関して、もっと考える必要がありそうだった。

まあ、たとえ伝達手段があっても、ナルトに『カンニングをしていない演技』ができるとは思えない。

最初の問題は暗号文だった。以前、似た問題を見たことがあった。その応用でサクラは難なく問題を解いていく。次の計算問題を解きながら、合格の判定基準がどこにあるのかを考えた。情報収集能力はたしかに忍びに必要な能力だ。もちろん情報の大事さをサクラもよく分かっている。でも、この試験に隠された意味はきつとそれだけではないはずだ。でなければ、10問目も最初から出題しておけばいい。

考える。その意味こそ、ナルトを合格させる唯一の活路なのだ。一向に答えが見つからぬままサクラは第9問を解き終えた。空白の第10問目を眺める。翡翠の目が見開かれた。

「っ？（もしかして）」

試験管が本当に問いたいののは、おそらくこの10問目。ならば可能性はある。しばらく考え込んでいたサクラは……何かを書き始めた。

* * *

あ、止まった。

イノはサクラの鉛筆が止まったのを見て安堵した。イノには試験の問題など1問も分からなかったもので、サクラだけが頼みだった。サクラがやけに悩んでいたのもしかして分からない？」かと心配していたが、どうやら杞憂らしい。

悪いけど、カンニングさせてもらうからね、サクラ。

少しの罪悪感を抱きつつも、背に腹は変えられない。イノは両手で円を描くような印を組んで、その印をサクラに向けた。瞬時にチャクラを練り上げる。

「（心転身の術）」

術が発動し、イノは机に身を伏せて眠った。……いや違う。イノはサクラの中にいた。心転身しんてんしんの術とは、対象者の中に術者の精神を入れて乗っ取ることのできる、山中家秘伝の術だ。今頃サクラの精神は眠りにについている。

サクラの中に入ったイノは、試験用紙を眺めた。ちゃんと答えの欄が埋まっていた。良かった。息を吐き出したイノだったが、10問目の欄を見て動きを止め、

「やられた」

思わず苦笑した。

が、すぐに慌てて答えを暗記し始めた。術の効果時間は短い。覚えた後は自分だけでなくチームメイトの分も書かなくてはならない。必死に答えを暗記しているイノに、もう罪悪感は見えない。

第四十八劇「第一の試験開始」(後書き)

推理する場面はかなり気を使います。ご都合主義になってないですか？ 変なトコあったら拍手でもいいので教えてくださいね。

イビキのおっちゃん出ました！ おっちゃん好きです！
でもほんとにちびちびしか進みません。あうちっ。

来週からは忙しくなるので更新がしばらくできない可能性が高いです(すみません><)。詳細は活報に載せるのでそちらをご覧ください。

誤字修正(11・09・15)試験管……(汗)。

第四十九劇「究極の選択をする」

まぶたをこすりながらサクラは上半身を起こした。唐突に眠たくなったのだ。原因は分かっているので気にせず周囲の様子を探る。

「5回ミスった。てめーは失格だ。こいつの連れも教室を出て行け、すぐにだ」

聞こえた声に目を向けずとも状況を察したサクラは、今どれくらい経ったのかを計算する。最初の思考時間と問題を解き終わるまで、それからイノが使ったであろう術の効果時間を足していく。……おそらく30分ぐらいだろう。10問目まではまだある。

暇だから寝てみようか。体力の温存にもなるし。

あくびを堪えながら彼女は本気で思った。

「23番、失格」

「27番、43番失格」

「いやだー」

睡魔と闘っている間にも、続々と失格を言い渡される受験者たち。中には暴れて抵抗したものもいるが、監視員たちにあっさり連行されていく。これでさらに受験者たちは追い詰められた。自分のカンニングがばれているのか、いないのか。プレッシャーの中でどれだけ落ち着いて正確にカンニングができるか。きつとそこも審査対象に違いない。

「いい加減にしろよ。俺がカンニングしたって証拠でもあるのかよ」
「んん？」

サクラが頑張っている受験者にエールを送っていると、たった今失格を言い渡された1人が立ち上がった。

「大体あんたら、これだけの人数ちゃんとチェックできて……げえほっ」

言葉は途中で遮られる。監視員の1人に首を押さえられているからだ。監視員の動きは速く、サクラの目には映らなかった。サスケなら見えたかもしれない。

「いいかい、ボウヤ。私たちはこの試験のために選抜された、中忍の中でもエリート。君のまばたき1つ見落としてはしないんだよ。言ってみれば、この強さが証拠だ」

わめいていた受験者はへたりこみ、監視員により教室から追い出された。

——監視員の人も大変だな。

大勢の受験者が顔色を真っ青にする中、サクラはのん気に考える。たしかに監視員は多い。しかしそれ以上に受験者はたくさんいる。各自に与えられた範囲の受験者を確認しているのだろうが、それでも1人のノルマはかなりいるはず。ふと、自分は誰に見られているのか気になった。

やっぱり列の横にいる人かな。

サクラは、鉛筆を持ってなにやら書き込んでいる若い男を見つめた。20前後、下手するともっと若く見える。この年で中忍とは、優秀なのだろう。男の目がサクラに向く。視線に気づかれたのだ。一瞬慌てたものき、考えてみると何も悪いことはしていない。「お

疲れ様です」の意味を込めて笑いかけた。

男が慌てて目線を逸らした。

仕事の邪魔をしてしまった。サクラは反省して前へ向き直る。

「59番、失格」

「38番、9番」

失格が13組目になった。

それ以後も番号が呼ばれていく。暇なので、退場していく人たちをなんとなく眺めながら、サクラは最後の問題について想像を膨らませた。普通の学力を見る問題ではないだろうけれど。

「よしっ今から第10問目を出題する」

18組目が失格になった時、イビキがようやく口を開いた。

「その前に1つ。最終問題についてちょっとしたルールを追加させてもらう。これは、絶望的なルールだ」

ルール。その一言に、残った受験者が身体を強張らせた。今まで散々苦しめられたルール。しかも絶望的、とは。

「まずお前らには、この10問目を受けるか受けないかを選んでもらう」

「選ぶって……もしも受けないを選んだらどうなるの？」

「受けない場合は、お前たちの持ち点がその場で0となり失格。もちろん、同伴2名も失格となる」

教室のあちこちから戸惑いや野次のようなものが飛ぶ。ルールがそれだけならば、全員が受けるに決まっている。だからまだあるの

だ、ルールは。

イビキは上がった声に一切反応せず、静かに言葉を続けた。

「さらに受けるを選び、問題に正解できなかった場合。その者については今後一切、中忍試験の受験資格を剥奪する」

教室が静まり返り、すぐにまたざわついた。1人の受験者が勢いよく立ち上がる。頭に子犬を乗せた少年、キバだ。

「んな馬鹿なルールがあるかよ。実際この場には何度も試験を受けた奴がいるはずだ」

「試験官は毎年変わる。試験の内容もだ。運が悪いんだよ、お前らは。今年は俺がルールだ。その代わり引き返す道も与えてるじゃねーか。自信のない奴は受けないを選んで、来年・再来年に受けなおせばいい。来年は俺じゃないといいがな」

イビキが声だけで笑うと、試験が始まってから1番の緊張が教室を支配した。誰もが顔を引き締めて必死に考え込んでいる中、サクラは笑顔になっていた。第一の試験を突破できた喜びからだ。

サクラは、今イビキが言った『最終問題を受けるか受けないか』が第10問目の問題である、と判断した。この究極の選択ともいえる2択こそが、イビキの問いたいことなのだと。

そもそも冷静に考えれば、一試験官に『中忍試験の受験資格を剥奪する』権利があるとは思えない。そんなことができるのは火影や里の上層部ぐらいではないだろうか。

「では始めよう。この第10問目。受けないものは手を上げる。番号確認後、ここから出てもらおう。同伴者もだ」

サスケは絶対手を上げない。彼は己に自信がある。サクラもまた

上げない。試験の意図を知っているから。問題はナルトだが……サクラはナルトならば大丈夫と信じていた。心は揺れるかもしれない。それでも彼が意思を曲げるとは思えない。だから第一の試験は突破したと、サクラは確信したのだ。

教室には沈黙が下りていた。皆、イビキの言葉について考えている。

「俺は、俺は、うつ受けない」

「50番失格。130番。111番。道連れ失格」

1人が手を上げると、釣られるように何人もが手を上げ始める。手を上げたものたちは一様に拳を握り締めていた。悔しいのだろう。苦しいのだろう。

今回の試験は、ほんとに性格が悪い。

たしかにイビキの言う通り、彼らにとっては運が悪かった。サクラは思つて、退場していく彼らの背を哀れんだ。だが同時に、彼らの覚悟が甘かったのだとも思つた。現実問題として、難易度の高い危険な任務を、受けない、なんてできるわけがない。どれだけ危険だろうと、受けなければならぬことはある。

教室を出て行った彼らには、まだ中忍は早い、ということだ。

「なめんじゃねーぞ！俺はぜつてえ逃げねー」

空気が張り詰めた教室の中に突如響いたのは、ナルトの声だった。彼は左手を机に叩きつけ、イビキへ指を突きつけた。

「受けてやる。もし一生下忍になったって、意地でも火影になつてやるから別にいいつてばよ。俺は、怖くなんかねーぞ！ふんっ」

——あの馬鹿。

サクラは額を押さえてばやくが、唇の端は持ち上がったまま。

言いたいことを叫んだナルトは腕を組んで堂々と座った。ナルトの大声にまったく動じなかったイビキが、口を開く。イビキの目は、真っ直ぐナルトに向けられていた。

「もう一度聞く。人生をかけた選択だ。辞めるなら今だぞ」

「真っ直ぐ、自分の言葉はまげねえ。俺の忍道だ」

ナルトの、あまりにも率直な言葉に影響されたのか。残った者たちから強張りが取れた。受験者たちの不安を消し取ってしまったナルトに、サクラは関心を通り越して呆れる。今までもナルトはいろんな常識をぶち壊してきたが、試験までぶち壊すとは思っても見なかった。

でもそれでこそ、サクラの知っている『うずまきナルト』だった。

「いい決意だ。では、ここに残った全員に………第一の試験、合格を申し渡す」

第四十九劇「究極の選択をする」(後書き)

試験はとりあえずあっさり目に終わります。この後、ヒビキの間劇挟もうかと悩んでるんですが、たぶん次は普通に第二試験を掲載するかと。

まあ、予定は未定ですが(苦笑)。

中忍試験受験資格について。

以前から、一試験官に受験資格剥奪の権利があるとは到底思えず、こゝ描写させていただきました。

第五十劇「5日間のサバイバル」

第二試験官、みたらし アンコに渡された紙を、サクラはじっと見つめていた。

用紙の頭にはデカデカとした文字で『同意書』とある。

「ここから先は死人も出るからさ。同意を取っておかないとあたしの責任になっちゃうのよね。あつははははは」

紺色にも見える黒髪を後ろで1つに結っている試験官が、笑いながら『同意書』について説明した。彼女が笑うたび、受験者から笑顔が消えていった。

つまりサクラが手にしているのは、『死亡同意書』とでもいうべきもので、自分が死んだとしてもそれは己の責任であり、他の誰かが責を負うものではない。といったことがつづられている。

この用紙にサインをして提出しなければ第二の試験は受けられないらしい。もちろん、班員の1名でもサインをしなければその班は試験を受けることができない。

サクラは用紙から顔を上げ、第二試験の舞台となる森を見た。立ち入り禁止区域に指定されている第44演習場、通称『死の森』である。

木の葉の里にはたくさんの演習場があるためサクラもすべて把握はできていないが、この森については少し知っていた。下忍になると練習のため演習場を借りることができるのだが、この演習場は少なくとも中忍以上からしか立ち入ることが許されていない。しかも立ち入る際にはやはり、『死亡同意書』へのサインが必要だとか。一体どれだけ危険なのだろう。

それらの情報だけで眉をしかめてしまいが、今日の前に実際ある

森は木々が生い茂り、奇妙な鳴き声らしきモノが聞こえてくる、誰が見ても不気味な森だった。たしかに危険が一杯ありそうだ。

第二の試験は、この森でサバイバルをするというものらしい。当然、ただのサバイバルではない。

アンコが地図を取り出して説明を始める。地図、とはいったものの、とても簡素なものだ。

「まずこの演習場は円の形をしていて、周りをフェンスが囲んである。入り口は錠のかかったゲートが44個。中心を割るように大きな川が流れ、森の中央には塔が建っている。ゲートから塔までは、大体10km。この限られた空間内で、あんたたちにはあるサバイバルプログラムをこなしてもらう。」

その内容は……何でもありの巻物争奪戦よ」

地図をあつさりしまったアンコが次に取り出したのは、天と地と書かれた2種類の巻物である。天の巻物は白、地は紺色だった。

「第一試験を突破したのは26チーム。その半分のチームには天の書。残り半分のチームには地の書を。1チームにつきどちらか1つを渡す。」

天地両方の書を持って、中央の塔まで3人で来る。それが合格条件よ。ただし期限は100時間。ちょうど5日間ね」

受験者たちの間で動揺が広がっていく。目線はアンコと、その背後にある不気味な森を交互に行き来する。

「失格条件は、期限内に巻物を塔まで持ってこれないこと。チームメイトを失う、再起不能者を出したチーム。それと補足だけど、巻物の中身は塔につくまで決して見ないこと。機密情報を扱う任務もあるから、その信頼度を測るためよ」

説明を終えて一息ついたアンコの、最後に言った言葉がサクラの胸に残った。

「それからこれは、あたしからのアドバイスね……死ぬな」

* * *

各班ごとにちらばった受験者たちは、周りを警戒したように見ながら、『同意書』を見つめていた。

あの第一試験を突破した面々だ。「受けない」という選択肢がないことを重々理解している。それでもまったく悩まない、ということとは難しいのだろう。筆が進まないものたちが多数いた。

そんな中において、カカシ隊第7班は全員がすでにサインを終えて集まっていた。

「なるほど。どの班がどちらの巻物を持っているか。誰が持っているか分からないというわけか」

サスケが同意書の提出場所を見ながら呟いた。提出場所は巻物の受け渡し場所でもあり、他からは見えないよう、カーテンが引かれた。

ナルトもサクラも、彼の言葉に視線をそちらに向ける。そんな2人の——いや、サスケもか——表情は普段よりも引き締まっていた。これから先は班員以外が本当の意味での敵であり、自分が殺されるだけでなく相手を殺してしまう可能性があることを、3人は理解していた。

「同意書と巻物の交換を始める」

カーテンで隠された小屋——といっても、屋根と机があるだけ——から1人の男が顔を出し、受験者たちに告げた。誰かが唾を飲んだ。

あちこちで書類を持った受験者たちが立ち上がる。サクラたちも例外ではない。

サクラたちが受け取ったのは天の書で、サスケが持つことになった。

「巻物を受け取ったものは担当のものについて所定のゲートにつくこと。30分後に第二試験をスタートする」

* * *

12とかかれたゲート前に、サクラたち第7班はいた。

ゲートは1班に1つのようで、サクラたち以外でこの場にいるのは監視員らしき忍びが1人いるだけだ。なので、3人は堂々と作戦会議をしていた。

「大きな方針としては2つ。

まず1つは始まってから速攻で巻物を奪ってゴールする。もう1つは水や食料・地形の把握に時間を費やす」

サクラの言葉を、ナルトもサスケも真剣な顔をして聞いている。

「時間が経つごとに試験の合格が厳しくなるから、そういう意味で

早くに巻物を奪えれば一番いいわね。でも、巻物は2種類。最初に戦った相手が持っていないければ体力やチャクラを消耗した分不利になるし、たとえ都合よく『地の書』が手に入ったとしても真っ直ぐにゴールへ向かえば狙われる確率が高くなる。

どちらにせよ、連戦は避けたいしね」

「メリットよりデメリットの方が大きい、か」

「でもさでもさ。先に奪ってゴールできた方が楽なんじゃ」

「そうね。この後の試験がどんなものか分からないけど、早くゴールできればその分だけ休むことができるからたしかに楽だとは思うん」。とりあえずもう1つの方針について話すわね」

少し納得が言っていない様子のナルトに、サクラは少しだけ困った顔をして話を続けた。ナルトの言い分ももつともではあったが、彼女自身としては安全策で行きたかった。

「まず最初に食料と水を確保できれば、他の班が休んだり食糧確保に追われている時間にこちらは行動ができるの。食料の確保は班員がバラける可能性が高い。そこを狙って奇襲をかけ、巻物を奪う。もちろん誰がもっているか分からないから『ハズレ』の可能性も高いけど、3対1の戦いなら戦闘時間も短くできるし、最終的には効率がいいと思う」

「なるほどな」

「で、どちらの方針で行くにせよ。注意するのは私たちがバラバラにならないこと。もしはぐれてしまった場合は、何か合図や合言葉のようなもので互いを確認する必要があるわ」

「え？　なんでだつてばよ」

「よく考えてみて。これは忍びの試験よ。仲間に変化して近づいてくる可能性もある」

ナルトが頭の後ろをかいた。長い合言葉は勘弁してくれってばよ。

と、困ったような笑顔つきで。

たしかに、長すぎると彼は覚えられないだろう。

「とりあえず、私としては最初に食料と水を確保する方針で行きたいんだけど、どうかな？」

チームメイトにサクラが問いかけると、2人はしばし黙り込んだ。おそらく彼らの本音は『速攻で巻物を奪ってゴールしたい』なのだろう。しかし、リスクが大きすぎる。彼らは基本ムチャをしたがるタイプだが、今はチーム戦。チームメイトの安全を優勢してくれるだろう。サクラはそう確信していた。

「ああ。依存はない」

「俺もそれでいいってだよ」

2人が頷いたことで方針が決まった。サクラは嬉しそうに笑い、合言葉を決めようか。といった先に、

「そろそろ時間だ」

監視の忍びに告げられ、顔を引き締めた3人は立ち上がる。命がけの試験が始まった。

第五十劇「5日間のサバイバル」(後書き)

まだ試験はじまってないとか(orz)

演習場について。

一般人が使うには危険なところもたくさんあると思われるので、忍びが申請を出さないと使うことができない。という独自設定をつけさせていただいています。

同意書について。

原作が手元にないため、中身に何が書かれていたか覚えてません。自分なりに分かりやすくまとめたつもりです。

間違っている点があればご指摘願います。

死の森の危険度について。

原作よりも一年間修行しているため、みんなが強くなっている点を加味。さらに中忍でも無傷で塔までたどり着くのは難しいとあったので、この場を借りて修行するには規制があるだろうと考えたからです。

第五十一劇「死の森」

始まりの合図から10秒ほど経ってからゆっくりゲートをくぐった力カシ隊第7班は、事前に方針を決めていたおかげか。特に焦りを見せず、冷静に周囲を警戒しながら話をしていた。

「合言葉なんだけど、どうする？」

作戦を考えるのは基本サクラの役目だが、決定は全員で行う。しかし合言葉に関してはナルトには決めかねるだろう（何せ今も『長いのは勘弁してくれ』と言わんばかりの顔をしている）。サクラにしても、ナルトに覚えやすく、かつ、他のチームに分からない合言葉、など簡単に思いつくものではない。

やや先頭を走っていたサスケは、ちらと後方を見た。怪訝に思ったサクラも同じ方向を窺ったが、特に何かがあるわけではなかった。

「サスケ君？　どうかした？」

「いや……っ」

3人の足が止まる。どこからか悲鳴が聞こえたのだ。

「さっそく始まったか」

冷静に呟いたサスケの隣で、ナルトが微かに顔を青くしていた。身体も強張っている。緊張することもある程度は大事だが、これは緊張しすぎだ。

声をかけようとしたサクラより先に「どうしたよ、ビビリ君？」とサスケがナルトを小ばかにするように笑った。青かったナルトの

顔が一瞬で赤に染まる。「びびってねーよ！」と拳を握って言い返したナルトは、いつもの彼に戻っていた。

「ふん、どうだな。そんなことより、行くぞ」

「そんなことってなんだてめえ。こら待てっての」

「ちよつとナルト。大声出さないの」

「ご、ごめんサクラちゃん」

木の枝を飛びように移動しながら、サクラは小さく笑った。素直じゃないなあと思ったのだ。肩越しに彼から睨まれたが、全然怖くはなかった。

「サクラ……ちつ。とりあえず、合言葉だが。1度しか言わない。

【忍歌、忍機、と問う】

その答えはこうだ。

【大勢の敵の騒ぎは忍びよし。静かな方に隠れ家もなし。忍には、時を知る事こそ大事なれ。敵の疲れと油断する時】だ」

その一言に笑っていたサクラも顔を引き締め、戸惑ったように髪を揺らした。覚えられなかったからではない。サスケが語った合言葉が長すぎる。ナルトは覚えられないだろう。実際、ナルトは手を合わせて「な、も1回」と、珍しくサスケに頭を下げている。

が、サスケは意に介さず、まず水の確保をしようと言い出した。そのこと事態に異論はない。しかし、

——サスケ君だってこの合言葉をナルトが覚えられないぐらい理解しているはず。だから、意味があるんだ。この長い合言葉に。

そう考えたサクラは、そうねとサスケに頷きを返した。ナルトは青い顔をしていたが。

「巻物は、俺が持つておく」

わざわざ懐から取り出したサスケは、チームメイトなら既に知っていることをわざわざ告げた。サクラはピンときた。

なるほど。それであんな長い合言葉を。

ようやくサクラが納得したその時、第7班を凄まじい突風が襲った。目を開けていられない。気を抜けば飛ばされそうなほどの風に對し、サクラは足裏へとチャクラを送り地面と吸着。いつでも動けるように膝を曲げ、クナイを構えた。

だが、敵の気配はしない。

「うおあっ」

「ナルト」

ナルトが風に飛ばされたのを視界に捉え、サクラは追いかけてようとしたが、動けなくなった。

風が吹き付けてきている方角に、ゆらりゆらりと揺れる黒い影が見えた。

「ふふっみーつけた」

その影がにたつと笑った瞬間、あれだけの突風がピタリとやみ、サクラは自分へと飛んでくるクナイを見た。

身体は、指1本動かなかった。

第五十一劇「死の森」(後書き)

きたーーっ。

第五十二劇「許せないこと」

「サクラっ」

一瞬の浮遊感、再び感じた風。

サクラは信じられない面持ちで目の前にある端正な顔を見た。

「サス」

「ばやばやするなっ死にたいのか！」

木の上で降ろされたサクラは、サスの強い声で落ち着きを取り戻した。

クナイはいつの間にか取り落としていたらしく、手は何も握っていなかった。そんなことにすら気づかなかった自分に恥じながら、サクラはまた新しいクナイを取り出し構える。敵らしき影とは今だ30mは離れていたが、逃げても追いつかれるだろうとサクラは悟った。それだけの力量さが、悔しいことに存在した。第一、

サクラはちらと隣で立つサスを見た。厳しい顔で影を見つめているサスの太ももには、深くはないが浅くもない傷がある。あの硬直から逃れるため、サスけ自らがクナイを足に突き刺したのだ。情けない。

悔しくて、サクラは敵へ戻した目を鋭くさせた。守りたい相手に守られ、あげくに怪我をさせてしまった。そんな自分への怒りを込めて相手を睨みつけ……何か違和感を感じた。

「サス君、あれって」

「うつひゃー！ 急に風が吹くからびっくりしたってばよ」

問いかけようと口を開くと、タイミングを計ったかのように場違いな明るい声が森に響く。サクラたちが顔だけ振り返ってみると、のん気な顔をして頭の後ろをかいているナルトがいた。近寄ってくるナルトに、しかし2人は警戒を解かなかった。

「待て。忍歌、忍機」

クナイを構えたサスケがナルトへ向き直り静かに問いかけた。サクラはナルトに背を向けたまま、あの影を見つめる。ゆらりゆらりと揺れている影は、やはりまったくこちらへ進んできていなかった。ダミー（幻術）だ。

だとすれば、サクラは黒い陰を警戒しているフリを続けつつ、いつでもその場を離れる準備をした。

「ああもーっわーってるってばよ！

【大勢の敵の騒ぎは忍びよし。静かな方に隠れ家もなし。忍には、時を知る事こそ大事なれ。敵の疲れと油断する時】だろ」

サスケとサクラの目があった。2人は小さく頷き、同時にナルトへクナイを投げた。

「どわっ！ いきなりひっでーってばよ2人とも」

2本のクナイを横に倒れこみながら避けたナルトは抗議をした。その様子を見てサスケは舌打ちをし、サクラは微かに眉を寄せた。

「今度は俺らの攻撃を避けるほどのやつか」
「ナルトはどこっ？」

ナルトは、ナルトに扮していた何者かは、にたつと笑った。最初に見た、あの笑いだ。

「ふふつばれてるのね。こんなに早くばれるなんて……参考までに、どうして分かったのか教えてくれるかしら？」

いまだにナルトの姿をしているのに、目の前にいる何者かはまったく違う生き物だった。

余裕の表れか。相手は構えも取らずそんな問いかけをしてくる。なぜサクラとサスケが見破れたかといえば、本物のナルトが合言葉を言えるはずがない。そもそも覚えていないのだから、という単純な話だ。ナルトにとっては大変不名誉だろうが、事実だから仕方がない。

そして覚えられないと分かっている長い合言葉にしたのは、盗み聞きしているものがあることに気づいたから。わざわざ巻物のありかを口にしたのもそういう理由だ。

「はんっ忍びが親切にそんなことを教えなくても思ってるのかよ」

サスケは相手の質問を鼻で笑った。敵に身内の情報を流すなど、愚か者のすることだ。

「それもそうね」

ナルトの姿をしたまま、そいつは楽しげに笑った。ぞくつと寒気がして、反射のようにサクラは手裏剣を投げた。

手裏剣は、1つとして当たることなく地面に突き刺さる。そこには誰もいない。

「どこを見ているの？」

「うぐっ」

耳元で声がしたかと思えば腹を衝撃が襲った。足で蹴られたようだが、まるで鉄の棒で殴られたかのごとくサクラは感じた。息もできぬまま、木の幹に叩きつけられる。サスケの叫び声が遠くから聞こえた。

深く笠を被った忍び——変化の術を解いたらしい——は、重力で落ちそうになったサクラの襟元を掴み、自らの方へと引き寄せる。唇から長い舌が顔を出し、サクラの頬を舐めた。

「気になってたのよね」

「けはっふ」

苦しい顔をしながら、サクラは相手の手首を掴み、力の入らない身体を動かしてなんとか離れようとした。このままでは足手まといになってしまう。実際サスケが身動き取れずにいるのが見える。しかし相手にとってはそんな抵抗などまったく意味はなかったらしい。サクラの足が宙に浮いた。

異様に赤い忍びの唇が、動く。

「あなた、私と同じなのね」

「なっにを？」

「でも私より上手く混じってる。一体どうやったのか、ぜひ教えて欲しいところね」

何を、言っているのか。

最初は理解できなかったサクラだが、すぐ目の前にある濁った瞳を見て翡翠の目を大きく開く。信じられないと、目だけで語っていた。

「まさかつ」

「あら。同業者がいるとは思っていなかったの？ それとも自分の術にそれだけ自信があるということかしら。ならますます教えて欲しいわね」

サクラの驚いた表情を楽しげに笑っていたソイツが、ふと怪訝な顔をした。

「どうしてそんな器を選んだのかしら。見たところその器は、平均以下もいいところ。それだけ高等な術を使ってまで入る価値があるとは思えないわ」

心の底から疑問に思っているのだろう。ソイツは、瞳の濁りとは違う綺麗な黒髪を揺らした。

だがその言葉は、決して口に出してはいけないものだった。

「君に、何が分かる？」

相変わらず、サクラの身体に力は入らなかった。たしかに、ソイツの言う通りなのだろう。この身体に、忍びとしての才能はない。先ほどから足を引っ張ってばかりなのは否定しようがなかった。

才能という名のセンスでサスケには勝てない。チャクラのスタミナでは、ナルトはおろかサスケにも、いや。同期の誰よりも劣る。

知っている。己に才能がないことを。誰よりも『春野サクラ』が知っている。

「でも、それでも『あの子』は、諦めなかった」

「ん？ あなた、一体誰のことを言っているの？」

諦めれば楽なのに。もう休んでいいよと言っても、『あの子』は

休まなかった。たくさん泣いても。たくさん悔しく思っても。たくさん嘆いても。最後にはいつだって立ち上がったのだ。

そんな『あの子』が――私は大好きで。

だから『あの子』を否定する言葉が、サクラには許せなかった。憎むと言う感情を持てないはずなのに、初めて知ってしまった。

濁った瞳が、恐怖するように揺れた。襟元を掴む手がゆるむ。サクラは逆にその手を掴もうと、

「サクラちゃんから離れろってばよ！」

伸ばした手は、なんとも目立つオレンジ色で遮られ、何もつかめずに終わった。啞然とした様子でサクラは呟く。

「なる、と？」

金色の髪を逆立たせた少年は、少しでも目立つオレンジ色で遮られ、何もつかめず、ナルトの頬や身体には細かい傷がたくさんあり、全身がとても汚れている中、青い瞳だけが磨かれたかのような輝きを保っていた。

合言葉などなくても分かる。彼がナルトだと。

ナルトは少し照れくさそうに笑ってから前に向き直り、こう言った。

「……その、ゴメン。合言葉は、忘れちゃったってばよ」

情けないはずのその言葉に、サクラはとても安堵した。

第五十二劇「許せないこと」(後書き)

さすが原作主人公！ かけーね。

しかし、ナルトをひいきしすぎてますかね。なんだかサスケの活躍が薄くなっている気がします。

とりあえず今回は、サクラへの愛を一杯詰めました。

第五十三劇「そして1人になる」

ナルトが来たことにより敵から離れられたものの、ぼけっとして
いる場合ではない。

「てめえはいつも遅いんだよ、ウスラトンカチが」

「へへっ言ってる」

言い争っているような2人の背後に迫っていた巨大な蛇へと、サ
クラは手裏剣を投げた。サスケもナルトも、その動きと同時にその
場を離れる。手裏剣は2人を掠めるように蛇の額へ刺さり、数秒後
に爆発した。起爆札だ。

サスケはその爆風を利用してサクラの左に着地し、ナルトは爆風
のあおりを受けてサクラの右に転がった。—— かつこ悪い。かつこ
悪いが、これがナルトだ。むしろ格好よく着地した方が心配してし
まう。

「あら。意外と戻ってくるのが早かったわね」

敵は死んだ蛇の上に立ち、言葉とは反対に驚いた様子なくサクラ
たちを眺めていた。

「うるせー！ 俺は火影になるんだ。こんなところで蛇に食われて
たまるかってんだ」

「そう？ それは残念ね。ちょうどいい餌になると思ってたのに」

挑発とも呼べない敵の返しに、ナルトは「ムキーン」と冗談では
なく猿そのものの声を出して怒っていた。心の底から。

慣れているチームメイトたちはそんな彼の様子を放っておき（どせしばらくすれば収まる）、打開策を考えていた。

逃亡は不可能だ。何より、この相手に背を向けるほうが危ない。だとすれば、

「やるしかない、か」

「ええ」

巻物を渡して見逃してくれるような相手ではない。たとえ勝利を掴み取るのが難しかろうと、戦うしか生き残るすべはないのだ。

サスケとサクラが頷いた頃、ナルトも落ち着いたらしく、顔を引き締めた。

「ふふふふ。少しは、楽しませてね」

敵は笑うと左の袖をまくった。左腕には刺青がされており、そこに自分の血を指でこすりつける。

「口寄せの術」

風が吹き荒れ、一瞬目をつむったその後には、巨大な蛇が姿を現していた。敵は蛇の上に乗し、笑っている。術である蛇を呼び寄せたのだ。おそらくナルトは口寄せの蛇に捕まっていたのだろう。

蛇は巨体から想像できない速さで身体を鞭のごとくしならせる。慌てて3人はバラバラに飛んだ。蛇の尾が、3人が先ほどまっていた木の枝をぶった切る。そう。折るのではなく、切るの方がより正確だ。

その様子を見ていたサクラが手裏剣を蛇に投げつけた。手裏剣は蛇に当たったものの、鱗に弾かれる。なんという硬さだろう。

「たあああああつ『影分身の術』百手手裏剣」

今度はナルトが影分身をし、一斉に手裏剣を投げる。百手手裏剣ひゃくて・しゅりけんとは、ただ単に大勢の影分身で手裏剣を投げるだけなのだが、影分身を使うことにより手裏剣の消耗を減らせる利点がある。

通常ならば手裏剣の消耗よりチャクラの消耗の方が欠点となるが、チャクラが多いナルトにとっては欠点も長所となる。特にこういったサバイバル（や、長期の任務）では、手裏剣などの消耗品を調達するのは不可能なので使い勝手はいい。

ちなみにこれはサクラが考えた戦法だったりする。

サクラの手裏剣が弾かれた様子を見ていたナルトの狙いは、蛇の腹だ。鱗のない腹に、ナルトの手裏剣が次々と刺さった。やはり腹が弱点らしい。

蛇が悲鳴を上げて暴れまわるも、その度に手裏剣が深く刺さるのだろう。新たな血飛沫を上げるだけだった。

敵は、さすがに暴れまわる蛇の上から跳び退ったが、そこに迫るのは

『火遁・鳳仙火の術』かとん・ほうせんかのじゅつ

いくつもの火の玉だ。1つの大きさは人の頭ほどだが、術者に操られた火の玉すべてを避けるのは難しい。

「なるほどね。……でもまだまだ甘いわ」

しかし敵は火の玉を笑いながら避ける。サスケがそれを見て手で何かを引っ張る動作をした。彼が握っているのは、透明なワイヤーだ。

敵を通り過ぎた火の玉から姿を現したのは手裏剣で、ワイヤーはその手裏剣につながっている。そしてワイヤーは、敵の周囲に張り

めぐられていた。サスケが笑う。

『火遁・豪火球の術』
かこん・いつかきゅうのじゆつ

サスケはワイヤーを口にくわえもう1つ術を使った。先ほどとは違い、火の数は1つしかないが、その大きさは人一人をすっぽりと多い尽くすほどもある。威力も高い。

巨大な火の玉は、サスケがくわえたワイヤーを辿って敵へと向かっていく。後ろには手裏剣。前には炎。上下左右にはワイヤー。逃げ場はない。

「くっ」

炎が敵を包み込む。包み込んだように見える。それでもサスケは、ナルトは、サクラは、気をゆるめなかった。立ち上る煙で敵の姿が消える。

「あなたがこの子たちの指揮官ね」

意外だったわ。

そう語る敵の声は、サクラの背後から聞こえた。煙が消えた場所には、何もなかった。

「サクラちゃん！」

ナルトが叫ぶも、サクラには返事ができなかった。口を手で塞がれていたからだ。

「こらあ、蛇やろう！ サクラちゃんから離れろってばよ」

「……うるさいボーヤは、少し黙っててくれるかしら」

騒ぐナルトに、再びどこからか現れた蛇が襲い掛かった。サスケはサクラたちの方を見ながらもナルトと蛇の対処に当たる。

「すばらしいチームワークだったわ。褒めてあげる」

これで静かになったと、サクラに向き直ったそいつの顔は、一部がはがれ、別の顔が下からのぞいていた。その顔が、歪んだ。サクラを掴んだ手に力が入る。

「でもね。チームワークなんて彼には……サスケ君には必要ないのよ」

「っ！」

「残念だわ。その術についてもっと知りたかったけれど、あなたは邪魔ね。死んで頂戴」

頭の骨がきしみ、音を立てた。

「だから離れろって、言っただろおおおお」

獣の咆哮が森に響く。

サクラが崩れ落ちた。敵が手を離して飛び退ったからだ。サクラから目を離れた敵は、驚いた様子でナルトを見ていた。ナルトは、離れた場所から睨みつけているだけで、特別何か攻撃をしたわけではない。それでもそこから離れなければならないプレッシャーを感じ取ったのだ。

普段の明るい青い瞳は赤黒い獣のものへと変貌し、小さな身体からは禍々しいチャクラが吹き出ていた。ナルトが膝を曲げた……かと思った頃には、その身体は敵の眼前にいた。淀んだ瞳が細められる。

「まさか君がそうだったなんてね」

「うっせー！ てめ、サクラちゃんに何しやがった」

ナルトはとても怒っていて、会話はあまり意味を成さない。しかし敵の忍びはナルトの受け答えに興味はないらしく、1つ頷いた。ナルトの凄まじいスピードによる猛攻をいなしながら、一言呟く。

「君も、邪魔ね」

「んがっ」

冷たく言い捨て、手をナルトの腹に突きつけた。それがただ殴ったのではないことは、ナルトから出ていた禍々しいチャクラが消えたことで分かる。

サクラは膝をつきながらその光景を見ていたが、ひどいめまいと吐き気で身体は上手く動かせなかった。頭を締め付けられた影響だろう。

それでも、なんとか握り締め続けていたクナイをナルトに投げる。吹き飛ばされたナルトが意識を失っていたからだ。あのままでは地面に落下してしまう。

視界はぐにやぐにやと安定せず、吐き気も止まっではいなかったが、身体は覚えこんだ動きそのままにクナイを投げ、ナルトの身体を傷つけることなく彼を木に縫い付けた。ナルトはぐったりとしている。大丈夫だとは思っただが、近づいて様子を見ないと分からない。

立て。立て。立て。

何度も言い聞かせてサクラはふらつきながらも立ち上がる。吐き気は引くどころか増したが、堪え、翡翠の目で敵を睨む。敵はナルトから目を離し、サクラを見ていた。

敵が身体を蛇のように木に巻きつけて、サクラへと襲いかかる。

その動きは、速い。今のサクラには到底避けられない。サクラは、今行える最善の方法を探す。

目前に迫った敵が大きな口を開き、

「ぐっあああ」

サスケの首に牙を立てた。

「え」

呆然とするサクラの前で、首を押さえたサスケが倒れこんだ。反射で手を伸ばし、サスケの身体を支えた時、サクラはようやく気づく。自分はまた庇われたのだと。

敵であるソイツは、ふふふと笑った。

「とりあえずの目的は達成、かしらね」

ぎゅっと抱きしめたその身体は熱い。かまれた箇所を見ると、見たことのない文様が浮き出ている。毒だろうか？ サスケの意識はすでになかったが、苦しそうなうめき声を上げている。

「そうねえ。あなたには特別に名前を教えてあげようかしら」

いいながら、音を立てて顔の皮をはいだソイツは、にたと笑った。

「私の名前はオロチ丸よ。また会いましょう」

第五十三劇「そして1人になる」(後書き)

3人のチームプレイ？　みたいなのが見たかったなあ。
という思いをぶつけてみました。

お気に入り400件突破！　いつもいつもありがとうございます。
拍手もにたにたしながら見ております。

これからもどうぞよろしく願います。

第五十四劇「私の意地」

「つとこんなものかな」

サクラは周囲を見渡して、緊張した面持ちで頷いた。周囲には、目に見えないものの、細い糸が張り巡らされている。今、彼女は罨を張っていた。

罨、とはいっても攻撃的なものではなく、感知用のものだ。攻撃用の罨を張れる時間の余裕はないが、今は身動きが取り辛いため奇襲だけは防ぎたかったのだ。

「……任務完了」

最後にそんな言葉をつむぎ、サクラは煙になった。

* * *

影分身が消えたことをサクラは感じ取り、ひとまず息を吐き出す。影分身は高等忍術ではあるが、3人で修行をする際にナルトから教わったのだ。今では3人とも使えるが、正直、これを戦略に組み込めるのはナルトだけだろう。

影分身は本体と分身にチャクラが均等に配分される。ナルトよりもはるかにスタミナのないサクラは、たった1体を出しただけでも息切れしてしまう。今は分身が消えたことですこしチャクラが戻ったものの、しんどいことに変わりはない。

なるべく使いたくなかった術だが、そんなことを言っていられる

余裕はない。息を整えたサクラは眠っている2人を見る。

「私が、守らなきゃ」

呟くサクラの目には決意があつたが、身体は限界なのだろう。座っているだけにもかかわらず、ふらついていた。最低限の睡眠はとつてはいたものの、緊張しつづけなければならぬ状況に1人残されている今、いくら睡眠をとっても疲れは取れるどころか蓄積するばかり。

ナルトの容態は落ち着いている。寝顔は健やかで、いつ起きてもおかしくない。サクラは、間抜けな顔をしているナルトを見て少しだけ頬を緩める。

「うつつ」

しかし聞こえたうめき声に顔は苦悶へと変わる。問題はもう1人、サスケの方だった。

サスケの頬に手を当てると、相変わらず熱が高い。額においた布は先ほど濡らしたにもかかわらず、ぬるくなっている。サクラは布を水筒の水で潤し、余分な水分を搾り取る。再びサスケの額に乗せると、彼の顔が少しだけ心地良さそうなものになる。

毒ではなさそうなのだが、対処法がサクラには分からない。できることはこうして布を濡らすことだけ。サクラは情けなく眉を吊り下げ、長い息を吐き出した。

その時である。サクラの手に、ぷつりとした感触が伝わってきたのは。

翡翠の目が険しくなった。意識を、手に繋げた糸に向ける。張っていた罫を誰かが切つたのだ。切れた糸は1本ではなく、3本。他の受験者である可能性が高い。

サクラは立ち上がり、意識のない2人を木の根元にあるくぼみに

運ぶ。糸がぷつぷつと切れていく。その存在は確実に近づいていた。急がなくては。

くぼみの周りには札のようなものが貼られてある。結界忍術の一種だ。

結界の中に2人を寝かせた後、サクラは札の1つに手を触れてチャクラを流し込む。すると札の中央、空白になっていた部分に『封』の文字が浮かび上がった。これで結界は発動された。

結界と言ってもアカデミーで習う簡単なもので、結界の中にいるものを外から認知し辛くする効果がある。あくまで認知し辛くするだけで、できなくなるわけではない。が、しないよりはましだ。

あと何よりもこの結界のよいところは……術者が死んでも効果が持続する点にある。持続時間は込めたチャクラ量で変わり、先ほど込めたチャクラ量があれば試験最終日まで持つだろう。

「はは、あんまり意味ない、だろうけ、どっ」

そこまで考えて立ち上がったサクラだったが、木の幹に身体をぶつけた。ただでさえぎりぎりな状態でチャクラを込めたのだから当然だ。

手足にはまったく力が入らない。それでも、サクラは歩き出した。結界から離れなければならない。

結界から、木から10メートルほど離れたサクラの足が止まる。

目の前に、立ちふさがっているものたちがいたのだ。

数は3。額には、音符のマーク。最近できたと言う忍び里、音隠れだ。

「おや、あなたお1人ですか？」

「つーかぼろぼろすぎじゃねー。こんな生ぬるい試験でよー」

「しょーがないじゃん。だってこのガキ、修行より髪が大事みたいだし」

包帯だらけの猫背な少年は、なにやら腕に不思議なものをつけている。手甲というには随分とゴツく、まるでスピーカのようなデザインをしている。

吊り目の少年は、にたにたと、何が楽しいのか笑っている。片手でクナイをいじっているが、手のひらに穴のようなものが見えた。甲高いキーキーとした声の少女は、サクラの風になびく髪を見てけけら笑う。腰には、隠密に向かないだろう鈴がついていた。

最初、ただの受験者達が襲ってきたのかと思っていたサクラだが、その考えを否定した。なぜならば、

『私の名前はオロチ丸よ。また会いましょう』

自ら正体を明かした彼が身に着けていた額当てには、音符が描かれていたからだ。

「あなたたちの目的は、サスケ君？」

落ち着いた声でサクラが問いかけると、自由気ままに言葉を発していた3人は口をつぐんだ。推理はあっているようだ。

「オロチ丸の命令？」

さらに問えば、3人の顔色が変わった。やはりグル、か。おそらく彼らだけでなく、音隠れそのものが。

オロチ丸の名前はあまりにも有名なので知っている。伝説の三忍の1人で、元・木の葉の忍び。今は抜け忍だ。そんな彼が音と関わっている。目的はなんだ？ サスケが目当てにしては、隠れ里と協力するのは大げさすぎる気がする。

木の葉の里に何かする気かもしれない。これはどうやら、簡単に

死ぬわけには行かないらしい。サスケを、ひいてはあの子を苦しめ続ける要因の1つが『オロチ丸』であることは間違いない。ならば、彼がしようとしていることを止める必要がある。

なんとしても生き延びて、里に、誰かに伝えなければ。

「……何やら、予定が狂ってしまったようですね」

「おいおい、どーすんだよ、ドス」

「ザク。なにびびってんのよ。殺すことに変わりはない」

少女がサクラにクナイを投げようとしたのを、ドスと呼ばれた包帯の少年が止めた。

「待ってください、キン。彼女からは色々と聞かなければならないようです。……他のチームメイトについても」

少女一（キンという名前らしい）は、動きを止め舌打ちした。この広い森の中を探索する面倒を考えたのだろう。

「さて、サスケ君の居場所を教えてください」

真っ向から話してくるのは、ドス。どうやら3人の中でリーダーの役目を果たしているらしい。サクラは、クナイを握り締めて、笑った。

「教えると、思う？」

ドスはサクラの応えに肩をすくめ、他2人はどこか嬉しそうな顔をした。

「なあ、いいよな。ドス。やっちゃっても」

「しゃべれる程度にお願いしますよ」

「わかってるわよそれぐらい」

ドスの許可と同時に、2人はサクラへ向かって走り出した。力の入らない足で地面を蹴ったサクラに、ドスは告げた。

「早く教えていただかないと、大変なことになりますよ?」

サクラは返事をしなかった。最後まで、自分が2人を守ると決めていた。

その時、とても強い風が吹いた。まるでサクラの背を押すように力強く、そして優しい風だった。風はやがて実態を帯び、サクラの前に姿を現す。

「木ノ葉の美しき碧い野獣、ロック・リー! 参上です!」

ぽかん。と、大きな口を開けた状態で、サクラはその名乗りを聞いた。

第五十四劇「私の意地」(後書き)

影分身について。

分身が消えると分身に配分されたチャクラがある程度本体に戻るということにしております。そうじゃなければ、いくらスタミナがあるナルトでもあれだけ何回も影分身を使うのは無理だという判断からです(影分身10つかってチャクラ10等分。さらにその10等分されたチャクラから影分身。というのはあまりにもあれなので)。

元々センスのあるサスケならば、影分身を使えるだろう。サクラもコントロールがいいので使えるだろう。というわけで、3人とも使えるようになりました。使えるだけです。

結界忍術について。

当小説オリジナルです。原作では難しいものしか出てきませんが、アカデミーで基本は習っているだろうと言う判断からです。術の名前募集中(思いつきませんでしたorz)

罾について。

周到に罾を張ることで、それはこの先で休んでいると告げていることでもあります(原作内でも説明ありましたね)。

が、それ以上に奇襲を防ぐのはメリツトがあるので、サクラは今回ムリしてでも罾を張りました。

リーきた！　きたよ！（興奮）

お待たせしました碧い野獣の登場です！　次回、彼の活躍？
をお楽しみに（って、展開考えてませんが↑おい）

第四十五劇「守りの連鎖」(前書き)

更新がいつもより遅くなりました。すみません。

第四十五劇「守りの連鎖」

緑色の全身タイツを身に纏った少年リーは、肩越しにサクラを振り返って笑顔を見せた。

「安心してください。僕があなたを守ります」

それだけ言うと、リーはすぐに前へ向き直る。彼の心境は『決まった！』の一言だ。自身の台詞を聞いて、衝撃を受けたように唇を噛み締めたサクラの様子には、残念ながら気づけなかった。

——あの時からずっとこうだ。

リーの背中を見ながら、サクラはクナイを握り締める。

『サクラっ！』

『逃げなさいっサクラぁ！』

両親の最後の姿が、目の前にいるリーと被る。サクラはそれがどうしようもなく悔しくて。どうしようもなく悲しくて。どうしようもなく苛立った。いつまでも両親にすがりついて、甘えている自分に。

「ごめん」

「え？ サクラさっ」

気がついた時、サクラは自身に向けてクナイを振り上げていた。ぶつぶつとした感触がクナイを通して手に伝わる。遠い日の会話がふっとサクラの頭に浮かんだ。

『お母さんね、夢だったの』
『ゆめ？』

そこにいるのは、まだ髪が短い頃のサクラと、サクラの髪を櫛で梳いている母親。母親は赤いリボンを手に取り、

『娘が生まれたら、こうやって髪の毛を整えて着飾るんだって意気込んでたのよ。でもサクラったら全然させてくれないんだもの。イノちゃんには感謝ね』

本当に嬉しそうな声で言うから、サクラは自分でリボンをつけられるようになって母親にしてもらっていた。

『おつ。母さんにリボンつけてもらったのか。すごく似合ってるぞ、サクラ』

その格好で父親を見送ると、父親もまた嬉しそうな顔で言うから、くすぐったく思いながら身だしなみに気をつけるようになった。

そんな、今思い返すには場違いな優しい思い出が、サクラの背中を押した。彼女は一步前に出てクナイを構える。

とても首元が涼しい。周囲には驚いている気配があるが、サクラは気にせずポーチから小さな丸薬を取り出して口に放り込む。お手製の兵糧丸だ。まだ試作段階だったので使いたくは無かったが、仕方ない。

がりつと噛めばなんとも表現しがたい苦味と渋みが舌を刺激する。同時に心臓がカツと熱くなり、血液が隅から隅まで行き渡る。

兵糧丸。任務中の栄養補給や、疲労回復に用いられる薬だ。体中の細胞を活性化させるため、一時的にチャクラを増大させることも可能だ。便利だが劇薬でもあるため、忍び以外への販売・譲渡・使用は通常認められておらず、忍びにしたところで1日に3度使うの

は危険とされている。

そんな劇薬を飲んだサクラは、ひとまず戦える状態になっていた。鋭い目で敵を睨み、頭を回転させている。手に入れたわずかな情報を整理。

「包帯の彼が右手につけているものには触らないように……いえ、距離をとってください。髪が尖っている彼に対しては、手のひらに注意を。あとは、鈴に気をつけて」

「あなたは……いえ。分かりました」

リーは驚いた様子だったが、サクラの声に耳を傾け頷く。彼としては自分一人で戦ってサクラを守りたかったので、残念な気持ちがあった。しかしそれ以上にリーは嬉しくも思っていた。見ているだけしかできなかった憧れの人と、一緒に戦えることが。

何よりも予想通りの、いや。予想以上に強いその心を垣間見れたことが、嬉しい。

「先ほどから予定が狂いっぱなしですね。さて、僕も行きますか」

包帯の彼、ドスがぶらぶらと両手を揺らしながらサクラたちへと一歩踏み出すと、固まっていた残り2人も動き出す。

まず最初に攻撃して来たのはキンだ。千本という針を投げってくる。ちりと鈴が鳴った。針には鈴がついている。サクラは千本をクナイで弾き返し、リーは状態を倒して避ける。

弾いた千本近くで、何かが光を反射した。

「なるほど」

鈴には糸がついており、これを引くことで鈴を操って音を出し、相手の注意を千本へと向ける。そういう仕掛けらしい。

すぐさま気づいたサクラは手裏剣を投げて、リーが避けた千本の糸を断ち切る。キンがちつと舌打ちした。そんな彼女に手裏剣を投げつつ、サクラは声を張った。

「後ろは任せてください」

「はいっ 願います」

糸の切れた鈴が転がって音を立てたが、その前にサクラが声をかけたことでリーは前方へと意識を集中させていた。前方には両手のひらをリーに向けている少年、ザクがいる。手のひらには見間違いではなくやはり穴が開いていたが、そこから血は流れていない。

「使わせてもらいます、ガイ先生！ はあああああっ」

なぜか担当上忍の名前を口に出したリーの姿が、サクラの前から消えた。サクラが再び彼の姿を捉えたのは、ザクのうめき声を聞いた時だった。いつのまにか、リーがザクの腹に膝を入れていたのだ。――速すぎる。

が、またその姿は掻き消え、ザクの身体が宙に浮かび上がったこととでしゃがんだ状態のリーが見えた。ザクを蹴り上げたらしい。リーの攻撃はそれだけで止まらない。ザクを追うように飛び上がったリーは、ザクの背後にいた。影舞踊と呼ばれる木の葉の追跡術だ。その動きを、サクラは1度だけ見た。中忍試験の会場に入る前の口ビーで見せたあの動きだ。

リーの両腕に巻かれた包帯が緩み、ザクに巻きついていく。そしてリーはそんなザクを掴んだ状態のまま逆さになって落下していく。

おもて・れんげ
『表蓮華』

地面のえぐれる音がし、土煙が舞う。すぐさま煙からサクラの方

へと戻ってきたのはリーだ。

土煙が晴れた後、そこには倒れているザクがいた。右腕がありえない方向に折れているが、生きてはいるのだろう。かすかにうめき声が聞こえる。意識は、なさそうだ。

ザクのそんな姿を見たチームメイトたちは、

「チツ」

と、忌々しげに舌打ちした。リーもサクラも、思わず眉を寄せる。どうやら彼らには『チームメイトを気遣う』という気持ちはないらしい。

敵とはいえ、見ていてあまり気分の良いものではない。もちろん、それについて何か言ったりすることもないが。

とりあえずこれで2対2になった。数の上で対等になれたが、対等でないことをサクラは理解していた。

まず隣にいるリーの呼吸が少しおかしい。先ほど使った術の影響かもしれない。あれだけの動きをするのだ。体に負担があるだろう。そしてサクラにしても、この状態がいつまで持つか分からない。

兵糧丸での回復は身体をだましているに過ぎず、あくまで一時的な回復だ。あとあと反動が来るだろう。

対する敵たちは、ほぼ無傷な上にスタミナも残っている。どちらが不利か。考えるまでもない。

「仕方ありませんね。キンはこのおかつば君をお願いします。彼なら殺してくれても構いませんので」

「了解」

説得、は殺気に満ちたキンの目を見れば不可能だと分かる。サクラは考える。せめて巻き込んでしまったリーだけでも守らなければ。だがいい案は思いつかない。焦りの気持ちだが、抑えようの無いほ

どに膨れ上がる。

「大丈夫ですよ、サクラさん」

「え？」

そんな時、リーが彼女に話しかけてきた。

「僕が死んでもあなたを守りますから」

なんの躊躇無く言い切ったリーに、サクラは嬉しさではなく、怒りを覚えた。死んでも、なんて。そんなこと、彼女は望んでいない。翡翠の目に力が戻る。珍しく怒りをあらわにした表情のまま、反論した。

「それは困ります」

「えっと、」

「だからあなたが死なない様に、私があなたを守ります」

ぼろつとこぼれた言葉が、サクラの頭の中に響いた。

ずっと守られるのが嫌だった。だから守られるとなんで、と思った。守られてばかりの自分が悔しくて、守られてしまうことが悲しくて。

でも、他のみんなだって、守られた時、悔しいんじゃないだろうか。悲しいんじゃないだろうか。自分がそう感じたように。

そう思うと、サクラはなんだかすごく軽い気持ちになれた。守られたっていいじゃないか。守られた分だけ、守り返せばいいんだ、と。サクラは微笑んで、

「サク」

「行きますよ」

地面を蹴った。このまま空を飛べそうな気分だった。

「リーさんは好きなように動いてください。私がサポートします」
「了解です」

リーは、言いたいことがあるだろうに口をつぐみ、ただ頷いた。

「こちらから攻めます！」

第四十五劇「守りの連鎖」（後書き）

兵糧丸について。

ここはゲームの世界じゃないので、飲んだらHP回復！とかはちよつとなと思つたので、一時的にスタミナを回復（もしくは増加）させるということにしました。

そしてそんな怪しい薬を普通に販売するのも問題なので、一般人には通常売ることが許されていないことに。

今回の話は、なんというか、書いた本人が納得いつていない話です。まあ、そんなこと言い出すと、あれもこれも納得いつてないんですが、んゝしっくりきてないといえますか。

たとえるならば、喉に魚の小骨が刺さって中々取れない、みたいな（どんなんだ）

まあ、リーの表蓮華を成功させたかった、というのは無事に書けたんですね。

あと返信。

>>娘さんをお嫁にゝの方へ

どうぞどうぞ。かまいませんよ？ でもね。ナルトにサスケにリーに、カカシに、しまいにはイノとヒナタがあなたを試すかと思えます。覚悟がおりなら、私に言えることは1つです。

背後に気をつけて！（え

第四十六劇「幼馴染」

真っ直ぐな人だな。

リーの動きを見ながらサクラはそんなことを思った。

言葉だけでなく、戦い方にまで気性がにじみ出ているようだ。接近戦を得意としている彼の動きは少しナルトと似ており、フォローする側からすると非常にやりやすい。

とはいえ、ナルトは良い意味でも悪い意味でも『意外性ナンバー1』であるため、ナルトともまた全然違うのだが、素直な戦い方と言う点ではそっくりだ。忍びとしてそれはどうかとも思うが、サクラはこういう戦い方は嫌いではない。

嫌いではないものの、現状においては不利だった。初めて組むサクラでも動きが読めるということは、敵にとっても条件が同じだからだ。

「脇ががら空きですよ」

「しまつ、サクラさん！」

「おっと。行かせないよ。あんたはあたしが殺すんだから」

ドスがそんなリーの間をついて後方に控えるサクラへと向かってきた。慌てるリーにキンが千本を投げて動きを阻害する。フオローは期待できない。

サクラは、まったく驚いた様子なくドスにクナイと手裏剣を投擲する。ドスはそれらを右手につけた手甲のようなもので弾いたが、その際、手裏剣が不可思議に振動したのをサクラは目にする。

——振動。空気の揺れ？　ということとは、やはりあの手甲は。

「こんなもの僕には効きませんよ？」

「そうかしら？」

そのまま突っ込んでくるドスに対し、サクラは余裕の表情で返す。いくつか振動のせいで狙いが外れてしまったが、ドスによって弾かれたクナイはサクラの思った場所に刺さっていた。

地面にまかれた起爆札に。

それはサクラがリーの影に隠れて作った起爆札の結界罫で、中心に張った札に衝撃を与えることにより発動する。

ドスが木の葉に隠された起爆札に気づき反転しようとしたが、遅かった。彼はもうすでに地面を蹴った後なのだ。空中で身動き取れない彼のすぐ下で、起爆札が爆発する。

風が起こり、短くなったサクラの髪を揺らした。巻き添えを食らわないように威力は控えめにしていたが、あの距離なら無事ではないだろう。

思いつつ追い討ちをかけようとしたサクラは、目を鋭くさせた。手に持ったクナイを動かして飛んできた千本を弾く。煙が震えた。

「ドス！」

「ぐっこれは、油断、しましたね」

もみ合いになっていたリーと距離をとったキンの隣に、ドスが降り立つ。服が赤黒く染まっており、あの手甲にはヒビが見える。ロボロな様子ではあるものの、致命傷ではない。正直今のでしとめられなかったのは厳しい。同じ方法は通じない上に、次から油断はないだろう。

今後のことを考えるなら生きたまま捕獲がベスト（下っ端である」とと推察されるので大した情報は持っていないだろうが）で、最低でもここで息の根を止めておくべきだ。しかし、

「はあっすみません、サクラさん」

「いえ」

サクラは隣に戻ってきたリーの様子を見る。呼吸は落ち着いているものの、最初に見せたあの速度は出せていない。サクラ自身にしたところで、そろそろ兵糧丸の効果が切れるところだ。妥協しなければならぬ。

「キン、1度退きますよ」

「ちっ分かった」

指示を出したドスに、キンはサクラたちを睨みながら気絶しているザクを背負った。その際、わき腹を庇う仕草があった。リーにやられたのだろう。

ドスは去り際にサクラを見た。顔は包帯だらけで片目しか見えないが、その目が妖しく輝くのをサクラは正面から見返す。

「今回は痛み分けということで、行かせてもらいます」

サクラは返事をしなかった。しかしドスも返事を期待していたわけではないのだろう。それだけを言うと言を背を向けて去って行った。

「ふう、なんとかまりましたね。サクラさん……サクラさん？」

彼らの姿が見えなくなってからリーはサクラを振り返り、異変に気づいた。サクラは顔を俯かせ、ただそこに立っている。

訝しげにリーがもう1度サクラを呼びながら近づくとその身体は傾き、地面に倒れこんだ。

「サクラさんっ？」

リーの声が虚しくその場に響いた。

* * *

「おなか減ったなあ。ねえねえ、食べていい？」

「チョウジ！ さっき食べたばかりでしょ」

「え〜〜〜」

「え〜〜〜、じゃないわよ！ そんなにお菓子持つてくる余裕あるならクナイの1本でも持つてきなさいっての」

サクラたちが戦っている頃、イノたち10班はさきほどから同じ光景を繰り返していた。同じ光景、すなわち、現在シカマルの目の前で行われているやり取りだ。すぐお菓子を食べようとするチョウジに、イノがまるで母親のように叱っている。緊張感のカケラもそこには存在しない。

シカマルはそんな2人の様子を眺めるだけで止める気はないようだ。そもそも中忍試験に受かる気も彼にはないので、このまま失格でいいや、と考えている。

正直なところを言えば、受ける気すら彼にはなかった。だが、担当上忍の猿飛アスマにそんな心境を読まれていたらしく、アスマはイノの前でこう言った。

『ちなみに、3人で申し込まないと受けられないからな』

受ける気満々なイノに引っぱられ、シカマルは参加することになったのだった。くそ、アスマの奴。今度将棋する時は覚えてろ。

そんな経緯を思い返していたシカマルは、あくびをしようとして、止めた。眠たげな目が鋭くなる。

イノとチョウジはまだ言い争っている。シカマルは腰をかがめてソレを確認した。わずかな木漏れ日に反射するソレ、糸だ。

——罨か？

シカマルは糸の先を目で追いかけていくが、罨が仕掛けられている様子はない。しかしどう考えてもこの糸は人工的に張られている。感知結界か。

「ってシカマル！ 何して」

「しっ」

「これは……糸、だね」

ようやく落ち着いた2人がシカマルに気づいて駆け寄ってくる。そしてその糸を見て、先ほどとは打って変わった真剣な表情になった。

イノが先ほどのシカマル同様、糸の先を追っていく。水色の彼女の目が、驚きに染まっていた。チョウジが様子のおかしいイノに気づいた。

「イノ？ どうし」

「これって……まさかっ」

「おい、イノっ？ 待て、ったくよ」

「え、待ってよ」

イノは2人の声を聞かず、走り出した。糸の先へと向かって。彼女には見覚えがあったのだ。この、几帳面とも言える糸の張り方に。

「イノっどうしたんだよ」

「似てるのよ！」

追いついたシカマルの問いかけに、イノは焦りを隠さずに言った。チョウジが「似てるって？」と首をかしげる横で、シカマルは察したらしい。

「似てるッたつて、糸だぜ？ 他の奴かもしんねえだろ。とりあえず落ち着け」

「でもっ」

「はあ……もしもこの糸を張ったのがサクラだったとして、この張り方を見るに何かあった可能性はたしかに高い。でもよ、そんなところへ無防備に突っ込んでいったつて、状況を悪化させるだけだぜ。だからとりあえず落ち着け」

静かな口調で言われ、イノは黙り込み、速度を落とした。普段、イノはこんな無茶をしない。サクラやヒナタのことになると、すぐ熱くなるのだ。

もつとも、シカマルはそれをイノの短所だとは思っていない。むしろ長所だろう。

「かつ勘違いしないでよね。あたしは別にサクラが心配だったんじゃない。サスケ君が」

「あゝはいはい。分かってるよ。なあ、チョウジ」

「うん。だってイノは優しいもんね」

「んぐっ」

イノはチームメイトを睨んだが、さすが幼馴染。まったく視線を気にしている様子はない。悔しそうな顔をしたイノは再び前を向いて、

「ごめん……その、ありがとう」

自分の我がままに、文句1つ言わず付き合ってくれるチームメイトに、小さく感謝した。

第四十六劇「幼馴染」(後書き)

イノはつんでれだと思う、舞傘です。

起爆札(の罫)について。

原作内でそんな描写があったような……なかつとしても、まあできそうだな、ということ。

起爆札の原理が分かりませんが、通常はチャクラを込めてから何秒後かに爆発する、という解釈をしております。何秒後か、というのは種類があるとし、よく使われるのは10秒と30秒のもの。短い方が計算上使い勝手が良さそうです。

サクラの戦略では起爆札をたくさん使いますから、他にも種類を持ち歩いている、ことにしています。

後々描写できたらいいな。

とりあえず戦闘はこれにて終わり。微妙に原作と違ってきておりますが、はてさて。どうなることやら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4138r/>

君は私で私は君で

2011年11月14日08時13分発行